

---

**.hack// × SAO -繋がり、続く物語-**

ムラキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

hack / xSAO - 繋がり、続く物語 -

### 【Nコード】

N5378M

### 【作者名】

ムラキ

### 【あらすじ】

ALLOに新たにアインクラッドが出現して早一年半、ALLOでもたくさんのお出会いと別れを体験したキリト達はギルド フェアリーダンス を作り、他のプレイヤーやギルドと協力し、すでにアインクラッドの中間に位置する50層の都市、アルゲートの開放にまで至っていた。

そしてこの日、久しぶりの大型アップデートで50層代解放が実装され、第50層のボスMob攻略のためにフェアリーダンスの面々は集まっていた。

これから起こることも知らずに……

\*この作品は・hackノ/シリーズとソードアート・オンラインのクロスオーバー作品です。時間軸的にはマザーロザリオの話から半年くらいたった8月ごろです。原作を読んでなかったりプレイしていないとわからないこと、ネタバレになることがあります。

できるだけ原作の設定に沿っていますが、年度が・hackノ/と話しを繋げるためにかなりずれていたり、いくつか本作オリジナルのスキルや仕様があるのでご注意ください。

あと、この作品が初めてのものなので、ご都合主義や無理やりな設定等、至らないところが多々あると思いますが、改善できるところは進めていくうちにしていきたいと思いますので、よろしくお願います。

12/20

一応修正&加筆終わりましたので、一覽に復帰させます。

Prologue - 始まりの足音 -

その空間は黒で埋め尽くされていた。遙か太古から存在するそこは、その他の、黒に近い闇や影でさえ存在することを許さず、一片でも異物があればたちまち呑み込み、塗りつぶしてしまふ……訪れるもの全てに絶望感を抱かせるような場所。

もつとも、この空間に入ることができたものは今まで誰もいない、いや、いなかったのだが……

そんな所に、今一つの光が少女と共に浮かんでいる。その光は、光というにはあまりにも儂げで、今にも消えてしまふような幻のような存在感が無い。

しかし、その光をまるで赤子でも抱きかかえるかのように優しく、力強くしっかりと包み込んでいる少女の顔には焦燥や諦めの色は微塵もなく、ただ自分の為すべきことをしているという確信に満ちた穏やかながらも決然とした表情を浮かべている。

もし彼女を見る者がいれば、まずはじめに浮かべる印象は敬虔なシスターか聖母、いや、もしくは……

「さすがアウラ、 電腦世界に顕現せし女神」

いつのまにそこにいたのか、一人の男が立っていた。

そこそこがっしりした体格、能面のように無表情な顔に、目だけが狂気か、それとも純粋な切望なのか判別のつかない強い光を湛えている。

その男は白衣をなびかせ、時間や距離の概念すらあやふやなこの

場所で、一歩一歩、歩くような速さで彼がアウラと呼んだ人（？）の元へと近づいていく。

「この空間で単独世界を存在させているのは神のみぞ振るえる奇蹟といったところか……」

「……………」

何の反応も見せず、彫刻のようにピクリとも動かないアウラの前まで辿り着いた白衣の男は、徐にポケットに手を入れる。

そして、次にその男が手を出すと、いくつかの小さな光の珠がフワフワと飛出し、少女の周りをまるで衛星のように浮かんだ。

さらに、その光は連鎖するように新たな光を生み出し、まるで少女と彼女が守る光を守護するかのよう輝きだす。

「これで、何とか持たせられるか……あとは任せる」

白衣の男は虚空に誰かいるかのように呟いた後、少女、アウラを持つ光へと手を伸ばし……

## 大型アップデート

- アイスクラッド第24層 パナレーゼ -

パナレーゼは全体が広大な湖で覆われた、蒼一色の世界。リアルと同じ夏のキツイ日差しが湖面に反射して眩しく煌めいている。湖の中ほどには人口の島を中心にくつもの小島を橋でつないで成り立っているこの層の主街区がある。

そして、その群島の北の端にある巨大な大樹がシンボルの普段は人気の無い小島に、数人の人影があった。

「……………それじゃ、また来るね」

燦々と降り注ぐ日差しは大樹の織り成す木陰により遮られているものの、リアルと同じ茹だる様な猛暑。それを一瞬忘れさせてくれる涼しい風が湖から時折吹く中、アスナは黙祷を終え瞑っていた目を開き、最後に静かに別れの言葉を呟き、花束を大樹の前に建てられた小さい石碑の前に置いた。

その石碑には『至上の剣士、Y u k i、ここに眠る』と書かれている。

ユウキの死後、誰ともなしにお墓を建てないかという話が持ち上がった。彼女は最後にここで生き、ここで死んだから……

当時は掲示板などで賛否両論の嵐が飛び交ったが、彼女の残していったものが多くのプレイヤー達の心に残っていたらしく、結局小さいものがひっそりと建てられることになった。

「それじゃ、あたし達も……」

アスナの後ろに立って待っていたリーファ、シリカにリズベツトも、次々に手に持った花束を供える。

この場の雰囲気を感じてか、いつも元気に飛び回っているシリカの使い魔のピナも、今はシリカの肩に留まって静かにしている。

(墓、か……)

そして最後に肩にユイを乗せながら花束を置いたキリトは、ユウキの墓を見ながら、ふとある男の言葉が頭の中をよぎった。

『SAOは、ゲームであって遊びではない』

SAO、かつてのインクラッドをデスクゲームにした狂気の天才科学者、茅場晶彦。彼がなぜSAOをデスクゲームにしたか、その理由をキリトはまだ知ることはできていない。

ここにあるユウキの墓は、所詮現実に紺野木綿季の眠る本物がある虚構だ。<sup>フェイク</sup>

しかし、彼女を彼女足らしめていた魂はもう現実にも、勿論ここにもない。

(なら、ここもあちらも同じじゃないのか?)

茅場は、もしかするとそれを、リアルとデジタルな仮想空間には大して違いがない、どちらも現実であることを証明したかったのではないか……、そんなSAOから帰還した後何度も抱かされた想いをキリトは胸中で噛みしめた。

「じゃあ、行くうか」

キリトが振り返って言うと、後ろに立っているアスナ達は無言で頷き、羽を展開して雲ひとつない蒼空へと飛び立った。

-----

第50層 アルゲート 転送ゲート前

(やっぱり昔とは大違いだな……)

パナレーゼから転送したキリトは、その場に立ち、なんとなく賑やかな雑踏が溢れるゲート前の光景を見渡す。

S A O時代から、東京の某電気街のような雑多な雰囲気漂い活気があったアルゲート。それでも、あの時はやはりみんなどこか切羽詰まった感じがしていた。

それが今では明るく楽しいな雰囲気場で満たされている。

(つと、こんなこと言ったら、またアスナにジジくさいってつっこまれそうだな……)

胸の中で苦笑しながら、そんなとりとめもないことを考えていると、広場の一角から声が上がった。

「あつ、キリトさんにみなさん、お久しぶりです」



そこにいたのはキリト達のギルド フェアリーダンス のギルメ  
ンであるSAO時代から旧知の音楽妖精族サーシャだった。

「どうも！今日もいいネタいただきますね」

「よろしく願います」

続いて、ギルドに半ば幽霊部員的に所属している水妖精族のシン  
カーに、SAO時代の彼が作ったギルド アイנקラッド解放軍  
の元部下でALOでは火妖精族のユリエールが軽い挨拶の言葉を口  
にする。

ちなみに二人は帰還後結婚し、VRワールドの情報などを掲載し  
ている MMOトウモロロー を運営しており、公私共にパートナー  
として仲睦まじくしているらしい。

この3人が加わったおかげで魔法面の火力が乏しかったキリト達  
のギルド フェアリーダンス はかなり戦闘面でバランスが良くな  
り（さすがに以前までのような属性ソードスキルを絡めた物理攻撃  
オンリーだと、攻略が厳しくなってきたので）、今ではなくてはな  
らない存在だ。

と言うものの、3人ともリアルは忙しいので、偶にしかパーティ  
ーは組めないが……

「久しぶり〜、アスナちゃん！」

「あ、アリシャさん、それにサクヤさんとユージンさんも。今日  
はよろしく願います」

アスナは何やら話していた3人、シルフの領主サクヤと、ケット・  
シーの領主のアリシャ・ルー、そしてサラマンダーの將軍ユージー

ン（このメンツだと言葉を交えているだけで数々の策謀が渦巻いているように見える……）に挨拶を返す。

サクヤの傍らには、世界樹攻略戦の折に彼女にスカウトされ、シルフ領主館のスタッフとしてスイルベーンに常駐しているレコンが腰巾着（いや、秘書と言ったほうがいいか？）よろしく立っている。

「こちらこそ、よろしく願いますね」

「いっしょにガンバロ〜ね〜！」

「うむ……」

そんな賑やかな会話をしていると、街へと続く道からクラインとエギルが走って来た。

「おっ、やっと来たな……」

クラインは腰の刀をガチャガチャ鳴らして、エギルはその敵ついでを意外に俊敏に動かしながら、息を切らせてゲート前に辿り着いた。

「ぜえっ、はあっ……いやあ、すまん、またせた！」

「まったくだ、かなり待たされたぞ」

クラインの隣で同じく息を切らせながらエギルが愚痴る。

「もう、遅いですよクラインさん！みなさん、とっくの昔に集合していますよ……！」

キリトの横でふわふわ浮いているナビピクシーのユイも、頬をふくらませてぶんぶん擬音が聞こえそうな表情で言うと、クラインは申し訳なさそうに苦笑いで返す。

「わりイわりイ。長期休暇の前で仕事が立て込んでしまっ、夜勤が長引いちまってよう。会社から直で来たんだ」

「まあそう怒るなよ、ユイ。いくらみんなが集まれる日を楽しみにしてたからって」

そう、今日は数ヶ月ぶりの大型アップデートによる50層台解放で、フェアリーダンスのメンバー全員が集まり他のギルドやソコの腕自慢達と共に50層のボスを倒しに行くというギルドにとて一大イベントの日なのである。最近は一リアルが何かと忙しい日々が続き、こうやってメンバーのほぼ全員が集まったのはギルドを結成した半年前から数えるほどしかなかった。

ちなみに一緒に遅れてきたエギルは、キリト達とクラインがエギルの店 ダイシー・カフェ からダイブすることになっていたの、来るのが遅れたクラインを待っていたのだ。

「あれ、スリーピングナイトのやつらはやっぱこれねえのか？それに、シノンの奴とクリスハイトの野郎もいねえし……」

クラインが辺りを見渡しながら口にした疑問に、アスナが残念そうに答える。

「クリスハイトはできれば来るって言ってたけど、たぶん無理みたいね。シノンは午前中はバイトだけど、午後からはこれるって。スリーピングナイトのみんなは本当は午前中に一緒にお墓詣りにもいく予定だったんだけど、急に病院の検査とか用事が入ってダメになっちゃって……。でも、午後からの方は大丈夫って言ってたわ」

ちなみに討伐メンバーが集まる本番は午後だが、久しぶりにフェ

アリーダンスのメンバーでボスの偵察がたら冒険しようということになり、こうして午前中から集まっている。

さらにユージーン、サクヤ、アリシャ・ルーの各種族の領主や將軍という豪華ゲストメンバーは一応各勢力の代表ということで今回の偵察に参加している。

アインクラッドが現れる以前のALOでは、他種族PK推奨や世界樹攻略の報酬が1種族だけ滞空制限なしというもので、基本部隊間の関係は対立だったが、アインクラッドが現れてからはその攻略の為に様々な種族がパーティーを組んだり、ギルドを作っている。

その風潮の為、こうして各種族のお偉方が機会があることに交流目的で集まっている。今回の偵察もその一環というわけだ。

「まあクラインも来だし、とりあえず時間もないことだから、サクッと行くか」

キリトがゲートの方に進むと、そろってゾロゾロと街の外へと続く門へと向かった。

.....

そんなこんなで出発したキリト達フェアリーダンス(+数名)は今回のアップデートがされるまでの間に踏破しマッピングされた迷宮区を最短距離でボス部屋へと向かった。

すでに攻略が完了している森をキリト達は危なげなくサクサク進

んでいる。

「そついえばキリトよお、例の噂知ってるか？」

リザード系Mobの群れを葬った後、ダンジョンにいくつか点在する安全地帯の内の一つで小休憩を取っている時にクラインがキリトに唐突に訊ねた。

キリトは手頃な高さに剥き出ている幹に座って飲んでいた体を動かした後にピッタリのアスナ特製ドリンクからいったん口を離して答えた。

「例の噂？って、このアインクラッドを含めてALOには噂なんていくらでもあるし、どれのことかわかんないだろ」

呆れた感じで聞き返すと、クラインが当前と言わんばかりに答える。

「今一番ホットな噂つつたら、例の幽霊話しに決まってるだろ」

「あつ、それってもしかして白い女の子の幽霊の話し？」

ここで近くに座っていたリズベットが話しに入ってきた。

「確か、ダンジョンにフツと現れては消えるってやつでしょ？でもそれってよくあるただの画像の処理ミスって聞いたけど」

それ系の話しは、確かにここではよく耳にする。

ネットの中で怪談話なんて思うかもしれないが、逆にネットの中だからこそ削除残しやバグで時々ありえないものがそこにいたりすることがある。もともと茅場の作った完璧なプログラムSeedに

ゲーム製作者が後から付け加えたものがエラーを起こしたためというのがほとんどだ。

しかし、それらはすぐに自動管理システム カーディナル が自己修復してしまう。なので、めったにお目にかかれるものではなく、見れたら逆にラッキーでそういうスポットをまとめたサイトもいくつかあるほどだ。

「それがよ、今回オレが聞いたのは違うみたいなんだよ」

ここでクラインは少し真剣そうな表情になり、さらに話しを続けた。

「こりゃあオレのダチの知り合いが聞いたって話なんだけどよ……」  
「って、またずいぶんと胡散臭そうな話しだな」

キリトがツツコムと、クラインが苦笑いで返す。

「まあんでだ、そいつが5人でパーティー組んで47層の思い出の丘に、使い魔を復活させるプネウマの花を採りに行ったらしいんだけどよ」

「思い出の、丘、ですか……」

思い出の丘の話が出たところで、尻尾をフニヤリと垂らしながら、シリカも水色のふわふわした羽毛に包まれたピナをギュツと抱きしめて話しを聞きだしたようだ。

ちなみに、ここALOでは他にも（魔法等）使い魔を復活させる術はあるが奔雑な手順が必要で、即座に使い魔を復活させる効力を持つプネウマの花は、今でも相当な需要がある。

「そいつらの平均レベルは60以上はあったし、腕もそこそこでま

あ普通に迷宮区を攻略できたんだよ。んで、さっそく花を探ろうと思ったら、いつもは白いはずのその花がなんと真っ赤な花の蕾だったってえわけよ」

周りにいたリーファやレコン達も集まってきて、クラインの話しを聞いているのに気付いたが、意外と興味深い話だったのでキリトは注意を話しに戻した。

「後から調べたら、その花はリコリスつつう花だったらしいんだけどよ……まあそれはおいといて、とりあえず特殊イベントかと思っ  
て摘んでみようとしたら、なんといきなり花が大きくなって……蕾  
が開いて中から赤いドレスを着た女の子が現れたんだってよ！」

「ひっ!？」

クラインのオーバーなアクションに気圧されたレコンが引き攣った声を上げた。

「そんでそいつがそのパーティーのメンバー全員を見渡した後、首を横に振ってノイズがかった声で何か呟いた後消えちまったらしいんで、その後そこには普通のプネウマの花だけが残っていたらしいぜ」

盛り上げまくった雰囲気に対しての不完全燃焼なオチに、その場にいた全員が首を傾げたが、一人シンカーだけは何か思い出したかのような表情をした後、手をサツと横に振り薄紫に光るメニユーウインドウを展開し、あるスクショをその場にいる全員に見えるように呼び出した。

そして、そこに映っていたのは……

「ほ、ほんとだ。赤い服の女の子……だ？」

シリカが疑問符を浮かべたのは、そのスクショの画像が荒れ放題で、赤い服を着た子供くらいの背の人影が何かの上に立っているのを判別するくらいしかできないからだ。

「実は、MMOトウモロの方にも現場にいてスクショを撮った方から情報の提供がありました。しかし、何分画質が悪いので取り上げようか迷っていたんです。ただのバグか……あるいはキリトさんから聞いたカーディナルの自動クエスト生成システムが働いてるのか……」

「えっ、また都市崩壊レベルの危機ですか……！？」

シンカーの口にした言葉でエクスカリバーイベントであわや大惨事になりかけたことを思い出したのか、シリカが不安げな表情を浮かべる。

「けどよ、そしたらまたあのアース神族が絡んでくるつつうことか？」

「あなたはただまたあの女の人に会いたいただけでしょ。デレデレして顔が気持ち悪くなってるわよ」

「なっ、別にそんなんじゃないやねえぜ！」

リズベットの指摘通り少々顔がキモチワルクなっていたクラインが躍起になって反論しているのを笑いながら見ていたキリトだったが、ふと肩に止まっているユイを見てギョツとした。

ユイはシンカーの展開しているスクショを一心不乱に見ているのだが、その姿がまるで今にも消えてしまうのではないかとキリトに危惧を抱かせるほど、怖い感じだったのだ。



「ユイ、だ、大丈夫か……?」

キリトが恐る恐る、まるで壊れ物でも扱つかのようにユイに問いかけると、ユイはまるで夢から覚めたかのようにハツ、という表情をした後、すぐにいつもの元気ハツラツとした感じに戻った。

「あ、はい、パパ。ちょっと知っているような気がしたんで、驚いちゃっただけです」

「知ってるって?」

ユイは暇なときはネットサーフィンをしているので、その時のことかと思ったキリトだったが、ユイはキリトの考えを察したのか首を横に振る。

「たぶん、ずっと昔、SAOより前の……」

「えっ……?」

その独り言のように呟かれた言葉にキリトは驚いて反応したが、ここでユージーンの出発の号令がかかった。

「あ、パパ、みんな行っちゃいますよ!」

ユイは言いながらキリトの肩から飛び立ち、先を進むアスナの肩に止まった。

何か大事なことをはぐらかされてしまったようなモヤモヤしたものをキリトは抱えながら、先を行っているみんなの元へと駆け出した。

- - - - -

その後、一行はそうかからないうちにボスの部屋の前にたどり着いた。

いつものことだが、ボスの部屋付近はかなり精緻に作りこまれており、ナーヴギアより一段落ちるアミュスフィアにも関わらず（まあ最近はずがに慣れてきたが……）かなりのクオリティを実現している。

「このボスはいつものごとくSAO時代のデータが役にたたない以上、はつきり言って未知数だ」

ボスの部屋へと続く以前は封印<sup>シール</sup>されていた巨大な門の前で装備の最終チェックと補助スペル（バフ）をかけながら、みんなと最後の確認をしていたキリトはニヤツと笑って続けた。

「まあ今回は午後の本番に向けての偵察のみのつもりだけど、もし勝てそうだったらそのまま倒しちゃってもいいかな」

キリトの強気の発言に全員が「おー！」「」とやる気満々で答えた。みんなの返事を合図にキリトは一步踏み出し、それに反応して重たそうな扉がぎしぎしと開いていく。

そしてその瞬間、異変が起こった。

ポーンッ……………

何かを弾くような音が前触れなく鳴り響く。

「八長調……ラ音？」

音のスペシャリストである音楽妖精族のサーシャが呟く。

しかし、そのサーシャもこの突如鳴り響いた音、八長調ラ音が始まりの意味を持つ音だということまでは知らなかった。

ビリ、ビリビリ、ブーン！

そして謎の音を契機にノイズの嵐が巻き起こり、五感の内の視覚と聴覚が飲み込まれ、同時にもの凄い揺れがキリト達を襲った！

「おい、どうなってんだ、こりゃ！？」

「くらくらするー！」

「なにごとだ！？」

わずかにみんなの慌てた声が聞こえるが、キリトはキリトで隣にいたアスナの手をつかむことぐらいしかできない。

「キリトくん、これって！？」

「わ、わかんないけど、なんかやばそうだ、わわわわあ！？」

キリトが全部言いきる前に、今度はその場にあつたものや風景からテクスチャがどんどん剥がれていき、ポリゴンや数字の羅列が剥き出しになっていく。

それは、あたかもこの世界が仮初のものであることを暴かれているような光景。

そんなことをその場にいた全員がシンクロでもしたかのように脳

裏に浮かべているうちに、とうとう足元の地面だった場所が崩れ落ちて、あっという間にその下に現れた虚空に全員そろって落ちていった。

キリトは上も下もわからない闇に意識を吞まれそうになりながら、なんとかアスナの手だけは離さないよう必死に握りしめ……そして思考が途切れた。

## 大型アップデート（後書き）

冒頭のユウキの墓は今作オリジナルです。

SAOでもお墓（に見立てたもの）はあったようですし、G・U・C ELLの碧を思い出したので、加えてみました。

あとALOではフィールドの敵やボスがSAO時代といくつか違った仕様になっているみたいなので（27層で50層のボスのはずの二頭四腕のモンスターがでてきたりとか。まあSAOと同じだったら元SAOプレイヤーが有利過ぎますもんね）ボスは未知数ということにしています。

とりあえず読んでみてくれた方、ありがとうございます。

感想、誤字脱字、設定がおかしい等気付かれたことがありましたら感想に書いて頂けるとありがたいです。

気を失って倒れ伏していたキリトが最初に感じたのは、頬に当たるヒンヤリとした感触だった。

「いつつ……いつたい何が起こったんだ？」

左手をヒンヤリの元である冷たい石畳に付け何とか起き上がり、まだくらくらしてはつきりしない意識を覚醒させるために頬を叩くと手を顔に持ってこようとしたキリトだったが、その時やつと、いまだに右手をつないだまま気絶しているアスナに気がついた。

「アスナ！おいっ、大丈夫か！？目を開けてくれ！！」

キリトが必死に揺すって呼びかけると、アスナが身じろぎをし、まぶたをゆっくりと開いた。

「んっ、んー……あれ、キリトくん？ここは……私たち、どうなったんだっけ？」

「よかった、ほんとはよかった……」

涙目になりながらアスナの温かい手をぎゅっと握って無事を喜ぶキリト。

「いてて、いったい何だったんだ、ありゃあ？」

「うーっ、まだ頭がクラクラする……」

「ここはどこなんだ……？」

アスナの無事が確認でき、ようやく余裕ができると、ちよつと周

りでは他のみんなが起き上ってくるところだった。とりあえず全員そろって無事なようだ。

ほっと胸をなでおろすと同時に、キリトはすぐ思考を切り替えてまわりの状況を確認し始める。

ここはどうかやら大きな湖か海に架かる橋の上らしい。いや、潮の香りがしないし、ほぼ一定の間隔で吹き付けてくる穏やかな風の匂いがパナレーゼと似ているからたぶん湖だろう。

夕焼けか朝日かどちらかわからないが、遙か遠くの水平線から半分出ている太陽の光が水面に反射して、幻想的な風景を作りあげている。

そのまま視線を少し下にずらすと、橋の先に何やら大きな建物が建っているのが見える。後ろも振り返ってみたが、石畳でできた橋はキリトたちが倒れていたちょっと先で不自然に終わっていた。

そして一番重要なのが、周りを見る限り、ここはあの扉の向こう側のボス部屋ではない……どこか記憶を探っても見覚えのある風景ではないので、アインクラッドやALOの中ですらないようだ……と、キリトは結論付けた。

「エギル、ALOの運営からなにか仕様の変更とか聞いてないか？」  
「いや、俺は何も聞いてねえが……」

この中で唯一運営側とパイプのあるエギルが言葉を濁す。

キリトは言いようもない不安を抱きながら、ふと視界の端にメニユーウィンドウを操作しているシリカとリズベットが顔を真っ青にしてがくがくと震えているのが目に入った。

「お、おいっ、どうしたんだ二人とも、大丈夫か？」

声をかけられて二人がびくつと反応すると、リスがぎこちなくキリトの方に顔を向け、恐る恐る尋ねる。

「ねっ、ねえ、キリト……ロ、ロログアウトできる？」

「……は、どういう……？」

その問いにはピナをギュッと抱きしめたシリカが不安げに尻尾を揺らしながら答えた。

「その、あたしたちのメニューウィンドウこ、壊れちゃったみたいで、ログアウトボタンがないんですけど……」

一瞬全員の体がぴきつと硬直した。だれもが二人が言っていることの意味がすぐにはわからなかった。否、理解するのを拒否しようとした。

しかし次の瞬間、全員が一斉にメニューを開いて確認し始めた。

「うっ、嘘だろ、おい!？」

「そっ、そんなばかな……？」

「ウソッ、ウソでしょっ!？」

キリトも左手を真横にさつと動かしてメニューを開き確認してみたが、確かにそこには本来あるべきはずのログアウトのボタンがない……

一瞬4年前のあの時感じた絶望感がキリトの頭を占めそうになるが、なんとか自制し他に手掛かりがないか探してみる。

すると、ある項目に気がついた……と、同時にシンカーが叫んだ。



「み、みなさんっ、クエストログを見てください！何か更新されています！」

全員が慌ててクエストログに指を滑らせ、一斉にそれを読み始める。

そこには短く、『グリーマ・レーヴ大聖堂へ向かえ』とだけ書かれていた。

「グリーマ・レーヴ大聖堂って……？」

「ほら、あの建物じゃないかな？」

困惑ぎみに呟くシリカに、アリシャが答えて橋の一方を指差す。そこには先ほど目に入った大きな建物が見えた。

とりあえず今は前に進むしかない、全員で橋の端にある建物の前までやって来た。

「それにしても、すごいですね……」

今だ不安をぬぐい切れていない状況ながらも、サクヤが感嘆の声をあげた。それにはその場にいた全員が同感だったらしく、巨大な聖堂の前に立ち止まり、その荘厳さに動けずにいた。

作りは尖塔群を伴った石造建築で派手さは無くシンプルだが、何千年も前からそこに建っていくつもの歴史を見てきた重厚さが醸し出され、見るものを圧倒する。

「この聖堂、どこかで見たような……？」

キリトがふと後ろを見ると、そこではシンカーが何かを思い出そうとうんうん唸っていた。

「よし、開けるぞ」

しかしキリトがシンカーに声をかけようとした直後、ユージーンが古そうな大きな扉を開こうと前にでたのを寸前でサクヤが手で制したのでできなかった。

「待つてください、中から話し声が聞こえます」

そう言われてキリトは前に出て扉に静かに近づき耳を付ける。それにいらってみんなゆっくりと近づき、耳をすませると……

.....

聖堂内はいたってシンプルだ。長椅子がいくつも並べられ、奥には何もない祭壇と、この教会唯一の光源であるステンドグラスが太陽の光を受けて輝き、静謐な空間を温かい光で満たしている。

唯一珍しいものと言えば、天井にぶら下がってまるでその場だけ無重力であるかのように一定の間隔で静かに揺れ続けている巨大な振り子たちだろう。

かつんっ、かつんっ、こつん……かつんっ、かつんっ、こつん……

そして、そんな聖堂内を先ほどから、少女がその場を忙しく行

ったり来たりして、大理石を踏む足音を響かせている。

その落ち着きのない行動をその少女の目の前にいる女性が諫めた。

「まったく、ちょっとは落ち着きなさいな」

腰まである少しウェーブがかかった見事なプラチナブロンドの髪を指ですきながら、その女性は呆れた表情で少女をたしなめる。

「……って、こんな風に焦ってるのも、全て母さんのせいじゃないですか！？ だいたい母さんは無責任なんです。なんであんなことをしたんですか！」

こちらも腰まであるシルバーブロンドの髪を聖堂のステンドグラスから差し込んだ光を受けて煌めかせながら、新雪のように白い肌をした顔を今は怒りで赤く染めながら言い返した。

「まあ、なんて言い方をするの？ 本来あれらはあなたが管理運用すべきものでしょう？ それなのに埃をかぶってほったらかしになってたから、私が有効活用しようと思って……」

どんな男だろうが虜にしてしまうような、妖艶さを含んだ声でオペラでも歌うように言葉を並べる女性だったが、少女には逆効果だったらしく、頭から湯気でも出そうなくらい顔を真っ赤にしてさらに糾弾する。

「それで間違えてばらまいてしまったわけですか……まったく、なんてことかしら！」

「だいたい母さんは私が生まれる前から行き当たりばつたりの行動で、みんながどれだけ迷惑を被っていることか……」

少女が息を切らせながら言い切り、最後に大きく溜息をつきながら肩を落とした。

「あつ、あの時はああするしかないと思って……もう、昔のことを蒸し返すなんて！この粘着質な性格はきつと父親のハロルドに似たのね。母さん悲しいわ。こんな子に育てた覚えはないのに……」

「と、父さんは粘着質なんかじゃありません！た、ただ……そう、一途だっただけです！それに、母さんに育ててもらった覚えもありません！だいたい母さんがしたことといったら、私を生まれてこれないように縛ったり、やつと不完全ながらも生まれることができたと思ったら、今度は八相をけしかけて私の体をばらばらにしたりしただけじゃないですか……！」

「獅子は子を千尋の谷に突き落とすというじゃない。私はあなたを強く賢い子にするためにあえて酷いことをしたんですよ……たぶん？」

唇に指を当てながら首を小さく傾げ、自分でもその言い訳にあまり自信が持てないような疑問形で答えると、少女はもうなんと突っ込んでいいのかわからないという表情をした。

「それで何人ものプレイヤーを意識不明にした上にネットワーククライシスまで起こしたんですか……いったいどんな教育方針ですか！？」

その娘の必死の言葉に笑みが零れそうになるのを堪えながら、母親は次はどんな風にして火に油を注ごうかしらと思案していたが、ふと、何かに気付いたのか扉の方を見た。

釣られて少女も扉の方を見て首を傾げた後、扉へと歩み寄って行った……

.....  
話しが途切れたと同時に、横からつんつんと突かれてキリトがふり向くと、困惑しきった表情のアスナが小声で話しかけてきた。

「いったい、何の話なんだろう?」

「さあ、さっぱりだ。とりあえずなんか言い争ってるみたいだけど.....」

キリトが肩をすくめ、さらに何か聞こえないかまた耳をすませようとする.....

「そんなに気になるのならそんなところでコソコソ聞いていないで、入って事情を聞いてみてはどうかね?これはイベントなのだから、接触しない限り進行しはないが?」

「えっ!?!」

突然後ろの方から声をかけられ振り返ると、そこにはいるはずがない、しかし見覚えのある姿があった。

線の細い鋭角な顔立ち、秀でた額の上に鉄灰色の髪に、金属的な瞳。赤いサーコートを着て、左手には剣を収めてある巨大な純白の十字の盾を装備している。

そう、その人物は.....

「ヒッ、ヒースクリフツ!?!」

「えええっ!?!?って、どわぁー!?!?!」

と、「ここでキリトのびっくりした声にさらにまわりがびっくりして、さらにさらになぜか急に開いた扉に体を預けていた全員が、将棋倒しになって扉の内側に雪崩れ込んでしまう。

「いてててっ……あれ？なんだ、真っ暗……？」

体を後ろにいたみんなに踏みつぶされ、身動きをほとんどとることのできないキリトは不思議そうに呟いた。  
すると隣にいたはずのアスナの

「キ、キリトくん、早くそこから出て!!」

という慌てた声が後ろからしてきた。そして暗い中そこに二本の白い足らしきものが震えてるのを見て、ああ、もしかして……って……なんて無駄に早い思考を巡らせていると……

「きい、きゃー……!!」

という悲鳴とともに、キリトは顔面に見事な蹴りを喰らい、その中から蹴り飛ばされた。

「ひでぶっ!？」

変な声をあげてしまったキリトは、鼻にクリーンヒットした現実だったら鼻血だらだら間違いなしな威力の蹴りの痛みをこらえながら、なんとか背中に乗っかっている誰かの体を跳ね除け前を見た。

そこには胸に無限を表すの形をしたゴールドのアクセサリにオーロラのように色を刻一刻と変えるスカーフを付けた白いシンブル

なドレスを着ている女の子が尻もちをつきながら顔を真っ赤にしていた。

そしてその後ろには先ほどの会話からするとその子の母親である女性が立っている。こちらは女の子と対称的で黒を基調にした喪服ともとれるドレスを着たスラリとしている美人だ。

そんなふう悠長にキリトが観察していると、女の子が普段はかわいだろう顔を怒りで真っ赤にして歪めながら、震える体をがばつと立ち上がらせた。

(やばっ、謝らないと……)

遙か昔にこれと同じようなことがあったような……と、デジャビュを感じたキリトだったが、彼女の表情を見てすぐに謝罪の言葉を口にしようとしたその瞬間、先ほどノイズが来る前に聞いたポーンッ……、という音がまた響いたかと思うと、三つの蒼い玉がふわふわと目の前に漂ってきた。

それらが蒼い炎に包まれ膨れ上がると、中に胎児のように体を丸めた人影が浮かび上がる。そして人影を包んでいる蒼炎が卵の殻が破れるかのように弾け飛び、中にいた奴らはまるで重力などないかのようにふわつと浮かび上がり、そして静かに着地した。

向かって右側に現れたのは全身を碧色にペイントした大柄で蛮族風な衣装を着ている茶髪をオールバックにしている白目の戦士。左側に出てきたのは継ぎ接ぎだらけの黒ずんだ銀と青を基調にした騎士鎧を着て、背中には翼らしきものが生えている銀髪を伸ばし放題の騎士。そして最後にその真ん中に立っただのは毒々しい蛍光オレンジの檻褌服に身を包み、水色の髪にギロリとした三白眼の華奢な体格の少年だった。

3人に共通しているのはその眼や表情には生気がなく体もぼろぼろのつぎはぎだらけでところどころグラフィックが欠けていて、まるで壊れた人形か亡霊のようなところだ。

頭上にHPバーがあるので、唯のNPCでないというのはわかるが、元より彼らが放っている異様で圧倒的な存在感が、彼らをNPCだとは到底思わせない。

そして全員がすくつと立ち上がったたり、徐に虚空からエフェクトを迸らせながら武器を取り出した。

両側の二人の男は禍々しい意匠をした片手剣。真ん中の少年は歪んだ鉈のような双剣を逆手に構えて両手をクロスさせたかと思うと、刃が鈍い金属音をともなつて分かれ、三つ又の爪のような刃を形成した。

「ア %様&」

「何=」

「しゃく\$!」

そしてそんなキリトの思考と分析も、次の瞬間意味不明な叫び声と共に襲いかかってきたそいつらのために中断させられた。



襲い来る敵に最初に反応したのは、キリトとその隣にいたアスナとユージーンだった。キリトに向かって迫る凶刃に、エフェクトを迸らせながら目にもとまらぬ速さで抜刀し応戦する。

キリトは剣を下段から切り上げながら、長年の経験で相手の攻撃を上手くパリイできればすでに後ろで構えているであろうクライン達が追撃してくれるという確信を持っていた。

そしてキリト達は完璧に相手の攻撃に合わせることができ、なおかつ後ろでは予想通りクライン達が起き上って臨戦態勢に入っていた。が……

バキインッ！

「なっ!?!」

しかし、キリト達の攻撃は、『Immortal Object (不死属性)』という無慈悲なメッセージと共に、いとも簡単に弾き返されてしまう。

「こいつら、いったい!?!」

キリト達に驚く暇も与えず、体勢を全く崩していない不死身の敵は休むことなく追撃してくる。

「くっ!?!」

キリトは朱色の服を着た双剣士の強烈な一撃を急いで取り出した

もう一振りの剣、エクスカリバーでなんとか受け流し、その勢いで後方に体を流して後ろで構えていたクラインと辛くもスイツチする。

「つと！」

その直後、双剣士の後ろから飛出し、クラインをスルリと避けて切りかかってきた銀髪の男の一撃をキリトは紙一重で屈んで避ける。銀髪の騎士ははずした勢いのままさらに一回転し、威力の増した追撃をキリトに加えようとする。

「キリトくん、下がって！」

「カズ兄、どいて！」

銀髪の男の後ろからアスナが、そして後ろからした声に反応してさらに身を低くしたキリトを飛びこえてリーファが正面から挟み撃ちするように切りかかる、が……！？

「きゃっ！？」

「うっ！？」

キリトの頭上を何か長いものがもの凄い風圧を伴いながら勢いよく通り過ぎ、アスナとリーファを吹き飛ばした。

「アスナ、リーファ！？」

「おっとお！」

「大丈夫ですか？」

リーファとアスナは壁に激突する前に何とかアリシャとサクヤによってキャッチされた。

受け止められた二人は意識が無いようで、さらに頭の上にピヨコらしき物体が3、4羽飛んでいる。異常ステータスである気絶、俗に言うピヨリ状態だ。

しかし、ALLOには気絶状態はあるものの、ピヨコが飛ぶピヨリ状態なんてものは存在しない。

(やっぱり、ここは……)

キリトの脳裏にとある推測に対する確証を得たことによる混乱と、気絶しているアスナ達の元へと今すぐ駆け寄りたい衝動が湧き上がるが、何とか抑えて、前を見る。

そこには、教会の長椅子をもぎ取って振り回している蛮族風の男が弁慶よろしく仁王立ちしていた。

(固定オブジェクトを武器にする!?)

普通建物やそれに付属する物等は破壊することはできない。それを無視して、あまつさえも武器にする……。

キリトの脳裏に不安が過るが、相手は逡巡する暇すら与えるつもりはないのか、さらに追撃を加える。

「愚オオオオオオ！」

蛮族風の男が、遠心力を最大限に利用して長椅子をキリトに向かって投擲した！

「はあああああ！」

「おおおお！」

ズウウウンツ！！

キリトと物凄い速さで迫る長椅子の間に割り込んだエギルとユージーンが各々の獲物、斧と大剣による二人掛りで受け止め何とか往なす。

「蛾アアアアアアアツ！」

「故オオオオオオオツ！」

弾かれた長椅子が床に当たり砕け散る中、必殺の一撃を弾かれ長椅子を放ったままの恰好で硬直した蛮族風の男の後ろから今度は双剣士と銀髪の剣士が奇声を上げながら同じく衝撃で動けないユージーンとエギルに襲いかかる。

「させるか！」

「やらせるかよっ！」

「なめないで欲しいね！」

「防ぎます！」

キリト、クライン、アリシャとサクヤが迎撃に飛び出し、四人掛かりで応戦する。キリトとクラインで双剣士の少年を、アリシャとサクヤで銀髪の剣士を抑えにかかる。

しかし、状況はさらに悪化する……

「なっ！？魔法が、使えない……？」

先ほどから呪文を詠唱していたユリエールが、唱え終わっても何も起こらずに呆然としている。

「ピナもダメみたいですよ!？」

ユリエールの魔法より詠唱が短い補助魔法が使えなかったシリカは彼女の使い魔ピナと共に参戦しようとしたが、今まで数多くの場面で助けてくれたピナはもどかしげに宙を舞っているだけだ。

「ついでに、ソードスキルも使えないみたいっ、だ、よ!」

続いてリズが、アリシヤ達に加勢すべくスキルのモーションをとりながら銀髪の剣士に躍りかかるが、いつもはシステムアシストが働き光に包まれるはずの武器が何の反応も示さず、唯の槌の一撃はいとも簡単に弾き返され、リズベットはたたらを踏みながら叫んだ。

「くっ、ここは撤退すべきですかね……でも、例えさっきの場所に戻ってもログアウトできなければ意味がないし……!それにしても、やはりこの聖堂、どこかで……?」

シンカーは見た目は冷静さを保っているものの、内心混乱しているのか一人問答を繰り返している。

「ぐっ!?!?」

「のわッ!?!?」

その間も止まない猛攻の最中、双剣士の回転攻撃を喰らい、床を強く踏みしめるもかなりの距離を吹き飛ばされたキリトとクライン。

(なんだ……?)

接近戦で完全にこちらを圧倒していた相手が、わざわざ距離をとる行動にキリトの脳裏に嫌な予感が過る。

そして、その予感はその予感に剣をしまい、右手を突き出したことで襲いかかってきたプレッシャーで確信へと変わった。

「うオオオオ！」

キリトは硬直が解けた瞬間、足にありつた力の力を籠め解放。弾丸のように真つ直ぐ相手に向かって飛び、一気に間合いを詰める。

「らアッ！」

そして、双剣士の手から何かが発せられたと感じ取った瞬間、キリトはそれに合わせて左手に持っていたエクスキャリバーを突進の勢いを掛け合わせて渾身の力で振りぬき……

そして、エクスキャリバーは粉々に砕け散った。

「は……………？」

その光景、仲間と苦勞して手に入れたALO最強武器、エクスキャリバーがまるで氷で作った剣が粉々に砕けるかのようにポリゴンを舞い散らせる様をキリトは一瞬放心したように眺める。

そして、そんな大きな隙を敵が逃すわけもなく、感情が欠落しているかのように無表情な双剣士はユツタリと、しかし一切無駄がない滑らかな動きで双剣をエフェクトと共に取り出し、キリトに切り掛かり……

「バカやるッ！」

悪態を尽きながらキリトと双剣士の間飛び込んだクラインは、何とか敵の攻撃を一人で凌ぐ。

「ボウツとしてんじゃねえぞ、キリの字！」

「わ、わりイ……！」

キリトは何とか気を持ち直し、新たに別の剣、当分使うことはないだろうと思っていた予備の剣を取り出し装備して、何とかまた戦線に加わる。

しかし、キリト達の知りうる限りの最強の剣が砕かれた光景は、敗北という文字を必死に抗っているその場にいる全員の心へと浸蝕させるのには充分すぎた。

唯一人、動けずにただ佇んでいたサーシャを除いては……

彼女は先ほどからずっと、この絶望的な状況を作っている張本人である白い服の女の子をじっと見ていた。

（なんだか違和感がある……？ そうだ、表情が怒りとか憎しみだけじゃなくて……）

そして後ろにいる母親らしき人が「はあ……」とため息をつきながらあきれた表情で顔を真っ赤にしている自分の娘を見てるのが目に入り、サーシャは単純だがもっとも効果的だと思われる方法を探っていた。

「キリトさん……！」

「なっ、なんですか、サーシャさん!？」

その真剣な声に、クラインと並んで二人掛りで双剣士を抑えていたキリトは、目まぐるしく振るわれる双剣をいなし、弾きながら反射的に答えた。

「早くその子に謝ってください！」

「……は？」

「だから、たぶんその子は死ぬほど恥ずかしかったからこんなことをしてると思っんです！なので、早く謝ってください！まだ謝ってないでしょう！？」

「そっ、そういえば……」

（確かに、謝ろうとした直後に攻撃されて、そのあとはなし崩しの戦闘になったから……よし、それなら一か八か！）

キリトは手に持つ二振りの剣を床に突き刺し、そして……

「ごめん、ほんつとつにごめん！悪気はなかったんだ。何でもするから許してくれ！！」

と、戦闘中にもかかわらずキリトはいきなりその場でジャンピング土下座をくりだした！

「おっ、おい、キリト！？」

必死に双剣士の連撃を食い止めていたクラインがキリトの突飛な行動に驚いて横を見た瞬間、その致命的な隙を突いて双剣士はクラインを罅迫り合いをしていた刀ごと吹っ飛ばした。

「ぐへっ！？」



クラインは軽く数メートルの距離を飛び、壁に叩きつけられ嫌な音をたて、そのままその場へ崩れ落ち動かなくなる。

「キリトくん!？」

「カズ兄!？」

ここでピヨツて壁に寄りかからされていたアスナとリーファが目を見ましたが、その時初めに目に入ったのは、漆黒の双剣が土下座中のキリトの無防備な背中に振り下ろされ、突き刺さるうとしていく絶望的な光景だった。

そして……

キィィィィンッ!!

その刃は寸でのところで受け止められた。

「はぁ……、もういいでしょう?。」

溜息と共に静かで落ち着いた声が聖堂内に響く。双剣が当たる瞬間、キリトと双剣士の間一人の少年が青いリングの中から姿を現し、その強力な一撃を同じく双剣で軽々と食い止めたのだ。

無表情だったオレンジ色の双剣士の少年の顔に微妙に苛立ちの表情が浮かび、さらに攻撃を繰り返したが、その追撃を新たに現れた紫がかつた黒髪の少年は片手で楽々と防ぎながら、土下座を続けているキリトを見下ろして呆れたような表情を作った。

「まったく、君はとんでもないバカだね。戦ってる最中に土下座を

する奴なんて始めてみたよ……」

「いや、まあ俺もこんなことしたのは初めてなんだけど……」

キリトはまだ土下座の姿勢を崩さず苦笑しながら答える。

「アウラ、もういいだろう？というか、スカートの中に顔突っ込まれたくらいでやりすぎ……」

「にっ、兄さんにはわからないんです、この屈辱が!!」

「いや、そりゃまあ僕は男だからわからないけど……でもやっぱりそれだけのために三葬騎士を呼び出すのはどうかと思うし、データドレインもさすがにねえ？」

「そっ、それは……」

口ごもる少女に対し、今まで苦笑いを浮かべながら傍観していた女性が、

「まあそれに何でもするって言っていることだし、丁度いいじゃない  
「い

と、援護した。

「そっ、それもそうですね……」

やっと納得したのか少女はうなずいて、絶賛土下座中のキリトに向かって落ち着きはらった声で言った。

「それでは、私ができる頼みごとをしてくれたら許します」

「本当か！？ありがとうございます！」

ここでやっとキリトは土下座の姿勢を崩した。

「ではまず初めに自己紹介を。私はアウラ、この世界で女神をやつてます。そしてこちらが私の母のモルガナ、それと先ほどそちらの方を助けたのが兄のクビアです」

自己紹介を始めた白い服の少女は、さっきの慌てぶりからは考えられないほど静かで落ち着いた声で語り始めた。

しかし、自分で女神と自称するとは……確かに綺麗な外見だけど、あんまり神々しいものは感じないような……？

そんな考えを全く顔に出さず、キリトも彼女の自己紹介に答えた。

「俺はキリト。俺たちはフェアリーダンスっていうギルドのメンバー+ゲストで、アインクラッドの50層を攻略中にここへ飛ばされてきたんだ」

「アインクラッド？それは何ですか？」

アウラの半ば予想していた答えに、キリトは内心やはりと思いがら話しを続けた。

「えっ、それじゃあここはアインクラッドじゃないのか？」

「はい、ここはThe Worldというネットゲームの中です。ちなみにこのエリアは隠されし禁断の聖域といます。ここはモンスターも出ない隠し観光スポット的なエリアなので、普段プレイヤーは入ってこないんですが……」

「The World……って、あの、The Worldか

「？」

キリトはその名称がかつて空前絶後の規模を誇ったとあるネットゲームが冠していたものであることに、さらに疑問が湧き上がる。

しかし、そこでこいつなら絶対何か知っているだろう男が一番後ろに佇んでいるのを思い出した。

「ちょっと状況を整理したいから、みんなで話し合いたいんだけど、いいかな？」

「わかりました。私たちも何をどう頼むか決めておきます」

.....

「さあ、この状況を説明してもらおうか、ヒースクリフ。いや、茅場晶彦」

聖堂を出てからすぐに、キリトはあの双剣士にやられてピヨッているクラインを担いでいたのを放り出し、鞘に収まっている剣をいつでも抜けるように柄に手をかけながら、今まで後ろで何も言わず傍観していたヒースクリフに問いかけた。

みんなもいつでも動けるように武器をとっている。

「まず最初に、あなたがなぜここにいるのかと、今俺たちがおかれ  
てる状況はいつたいなんなのかな」

茅場は臨戦態勢にあるキリトたちの緊張もどく吹く風というように、あいかわらずの無表情でくだらない質問だと言わんばかりに答える。

「それはもう私が姿を現した時点でおおよその見当はついているんだろっ、キリト君？私が自分にしたことは彼女から聞いているのだからっ？」

その通りだった。キリトは須郷との戦いで茅場の助けを借りたことで彼がネット上に未だに存在する可能性を知り、神代さんという茅場の協力者から、茅場が自分の脳をスキヤニングすることで死と引き換えに自分の分身をネット上に作り上げようとしていたことを聞くことで、彼がネット上で生きているのを確信していた。

「まああんなのことだから、俺たちがアインクラッドを攻略していたら何かしてくると思っただけ。けど、この状況がいつたい何なのかはさっぱりだ」

そうやってキリトが肩をすくめると、茅場はキリトをじっと見た後少し悩む様子をみせたが、また直ぐにいつもの無機質な表情に戻った。

「ふむ、まああまり勿体ぶってもしょうがない。今君たちがいるこの世界は、21世紀初頭に開始されたかつてプレイヤー数千万人以上という世界最大規模を誇ったMMORPGネットゲームThe Worldを元に行っている世界だ」

( やっぱりそうか…… )

キリトが胸の内を納得していると、後ろから声が上がった。

「で、なんでんなVRゲームじゃねえ昔のネットゲの世界に俺たちがいんだよ？」

「ここでどうやら意識を回復させたらしいクラインがふらふらしながら起き上り、その場に胡坐をかいてポジションを飲みながら話に割り込んできた。

「そうですよ！だいたいログアウトできないっていうのもいいじゃないですか？まさか、またデスゲームとかじゃないですよね…」

不安そうな顔をしながら心配そうにシリカも問いただす。

「まあまあたまえ。まず最初に私が君たちをこの世界に招待した理由は今のところは言えない。それはプレイしていればおのずとわかるだろう。それとログアウトのことだが、わたしはこのイベントをノンストップでクリアしてもらいたいからこのような仕様にしたのだ。最後に、先ほどから心配しているデスペナルティはこのゲームに限っては無い」

このゲームがデスゲームでないことに、全員がとりあえずほっと溜息をつく。

しかしここで、今まで腕を組んで黙って話を聞いていたユーージーンが口をはさんだ。

「しかし一度もログアウトしないでプレイするとしたらクエストの内容にもよるがかなりの時間が必要になってくるはずだ。ずっと口グインしっぱなしというのは非現実的だと思うが？

「だいたい、またこのような事件が公になったらせつかく以前起きたVRMMOを利用した一連の凶悪事件による悪いイメージを払拭でき、さらに医療器具やその他多方面でも世間から注目を浴び、また軌道にかけているフルダイブシステムの発展の邪魔をすることになる。それは貴様も本意じゃないだろ？」

ユージーンの問いに対し「そうだそうだ！」という声が周りから上がってくる。

すると茅場はニヤツと笑って、不敵そうに答えた。

「なるほど、確かに一里ある。しかしもし、プレイ時間が現実の時間で1時間くらいしかかからなかったとしたらどうだね？」

「なに？」

眉をひそめたユージーンに対して、茅場は軽いノリで答えた。

「このシステムは私がまだ生きていたころには完成していなかったのだが、ネットの中に身を投じることによりなんとか実用できるレベルまでにこぎつけたのだよ」

「システム？」

リズベットがオウム返しに訊ねる。

「そう、今はまだ名前もないが、簡単に言うとこのシステムはネット上での過ごす時間を現実の時間の数千倍にすることができるとだよ。まだ試作段階である程度の時間しか延ばせないが、完成すれば人類は永遠に近い時を手に行けるかもしれないな。まあ今はそんなことはどうでもいいんだがね……ん、どうかしたかね？」

「……………」

全員が茅場の説明に対する驚きで、開いた口がふさがらなかった。そんな凄いシステムを作っていたなんて、天才の名は伊達じゃない……い……

キリトは昔から憧れていた人のさらなる発明に、嬉しいようなやるせないような微妙な心境になった。

「まあこれで君たちの懸念は晴れただろう？どうだろうか、このイベントをやってみる気はないかね？」

「というより、やらないと帰れないんですよね？」

アスナが溜息をつきながら諦めたように、かつて彼女が所属していたギルドの団長だった男に訊ねた。

「いや、とりあえず期限をこちらの時間で1ヶ月に設定してあるから、待っていればいずれ強制的にログアウトされる。まあその場合、二度とこのイベントはできないがね」

ここでキリトは肩をがくつと落としてため息交じりに言った。

「つまり、あなたは俺たちに新しいシステムのモニターをしてもらうためにこんなことをしたってことか？」

「今のところはそういう考えでもいいだろう」

とまた無表情に戻って茅場はキリトの問いに答えた。

そして最後に……」

「まああまり難しく考えず、楽しんでくれたまえ。それとこれから君たちはこのゲームに一時的にコンバートする形になる。容姿は変わらないが、ジョブ、スキル、ステータス、そして装備やアイテム等は一部を除きThe World仕様になる。レベル、操作性はALOと同じだが、それ以外はマニュアルとチュートリアルで確認しておいてくれたまえ。

それでは諸君、最後にこの言葉を君たちに贈ろう。Welcome

to The World」



「あつ、おいちよつと！まだ話は……」

キリトが慌てて茅場を止めようと手を伸ばすが、すでに遅く茅場はいくつもの青いリングに包まれて消えてしまった。

少しの間静寂が続いたのち、リーファが最初に口を開いた。

「これってつまり、ただのイベントってこと？」

「ただの、じゃなくてスペシャルなイベントだろうが……まあどうやら危険はないようだし、今度は店を長期間空けなくて済みそうだぜ」

今まで口をはさまず黙って聞いていたエギルがやれやれと溜息まじりの声で言った。

「どつりで懐かしいと思つたら、やっぱりここはThe Worldでしたか……それにしても、彼の話が全部信じられるわけではありませんが、もし本当ならすごいことですよ、これは！」

続けてシンカーが興奮した様子でまくしたてる。

「何にせよ、とりあえず彼女たちの話を聞いてみるのはどうでしょうか？先ほどからお待ちみたいですし」

サクヤが扉の方を指さすと、扉の隙間から覗いていた三つの目が慌てて引っ込んで行くのが見えた。

「まあそうだな……よし！とりあえず話しを聞こうぜ」

ポーションで完全回復したクラインが声をあげ立ち上がり、キリ

ト達は扉に向かった。

.....

「それで、そちらの話はまとまりましたか？」

「ああ、とりあえずあんたたちの頼みごとがなんだか教えてくれ」

キリトが答えると、白い服の少女（確かアウラという名前だ）が語り始めた。

「そもそも始まりは、私の愚かで考えなしな母さんが……」

「こら、母親のことを愚かとか考えなしとか言うんじゃないやありません  
！」

モルガナがぶんぶんと怒りながら我が子をたしなめると、

「……そもそもことの始まりは、アホでマヌケな駄目母さんがしで  
かしたことにより始まりました」

はあ……、とモルガナがため息をつく横でクビアがクククと笑いをこらえてるのを無視して、アウラは話しを続けた。

「その前に、この世界の歴史に付いて少し教えますね」

そう言いながら、アウラは薄青色に淡く輝くメニューウィンドウを操作し、キリト達の目の前に巨大なモニターを展開した。

約30分後……

『こうして、The Worldと現実の平和は取り戻されたのだ  
った……』

映画風のナレーションが締めくくり、モニターがブラックアウトする。

キリト達が見せられたのは、どうやらThe World内のイベントかPVらしく、hackersと呼ばれるプレイヤー達が運営やらゲーム製作者の残した謎を解いていくというものだった。おまけに、実写のドラマとタイアップしているのか、入院している『意識不明者』等の姿までも出てきた。

(意識不明者ってのは、シャレになんないけどな……)

実際ネットゲームで2年ほど同じような状況になっていたキリト達SAO帰還組にとっては、そこだけ現実味を持った話だった。

そんなキリト達の胸中を知るはずもないアウラは、モニターを消した後話し出す。

「このようにして数多くの困難を乗り越えましたが、平和な世に過ぎた力はまた災いを呼ぶ。そう思い私はみなのを回収し、いざという時のために保管しておくことにしたのです。しかし、それをあろうことか母さんがばら撒いてしまったんです！」

アウラが言い切りながら『犯人は、お前だ！』的なノリで母親をビシッと指差すと、モルガナは少しいじけたように言い訳をしはじめた。

「だつてえ、こんな素晴らしい力をほつたらかしにしくなんてもつたないじゃなあ。それにわざとじゃないのよ。それなのにこの子はねちねちと、まったく……」

妖艶さを含んだ魅惑的な声なのに妙にくねくねした言い方をして台無しな雰囲気という言葉で言い訳する母親に対して、娘であるアウラはブチッ！という音が聞こえそうな表情をして畳み掛けた。

「私だつて母さんにこんなこと言いたくありません！でも、いつもいつもいつもこんな調子じゃ、こうなっちゃうのは仕方ないじゃない！」

「いや、あの、できれば親子仲良くした方が……」

怒りでだんだん丁寧な言葉使いから素になってきて、剣呑な雰囲気を作り出し始めたアウラを何とかしようとサーシャが恐る恐る言う、傍観していたクビアが助け船を出してくれた。

「そつだよ。母さんとアウラが言い合つてると日が暮れちゃうし、そろそろ本題に入ったら？」

「そ、そうですね。私としたことが、すみません……」

ちよつとへこむアウラをしり目に、となりでモルガナがそうよそつよつというように頷いていたが、全員スルーした。

「それであなたたちをお願いというのは、母さんがばらまいてしまった力を回収してほしいんです」

（まあ話しの流れからそういうことになるだろうと思っていたけど……）

「でも俺たちだけっていうのはちよつと。まだこの世界のこともよ

く知らないしな……」

キリトの発言に対し、アウラは予想してたと言わんばかりに笑みを浮かべた。

「それは大丈夫です。あなたたちには騎士団に協力してもらいます」  
「騎士団？」

「はい。薄明の騎士団という名前で、件の力の所有者だった者達とその仲間で構成されたギルドです。彼らはこの世界のことは熟知していますから、十分力になるでしょう。すでに彼らにも回収の依頼をしていますから、あなたたちは彼らをサポートしてくればいいです」

騎士団か……とりあえずさっきの3人みたいに話しが通じなさそうな奴らじゃなければいいんだけど……、なんて思ってるのをおくびにも出さずにキリトは答えた。

「それならなんとかなりそうだな」

「ではみなさん、準備はよろしいですか？」

「へ？」

「外に出てください。丁度迎えが来ました」

そう言われてアウラに促されるままに聖堂の外の橋の上に出てみると……

「なんだこりゃーっ!？」

「おつきいー!」

「丸焼きにしたら食い応えありそうだな……」

そこには巨大なクジラらしきものが、空から橋のほうへと降りて

来ていた。

「これがデータ潜航艦グランホエール、騎士団の母艦です」

アウラが少し誇らしげそつに胸を張って言い放った。

データ潜航艦グランホエール - 01 -

「さよ¥な+」

「たっ(や@:」

「ま:\*おノ!」

グランホエールのタラップを上がっていく途中、あの三人の強敵が橋の上でハンカチを振りながら見送りをしてくれているのが見えた。彼らはとある事情で不完全に作られたらしく、あのようなツギハギだらけの格好をしてる上にAIにも不備があり、今はいろいろ不足しているデータを目下勉強中だそうなのだが……

(あのホラー映画にでも出てそうな姿でハンカチを振るって、いったいどんな教育方針をとってるんだ?)

そんなどうでもいいことを考えながらも、キリトは先ほどアウラ達と最後に交わした会話を頭の中で反芻していた。

-----

「私と兄さん、それと母さんで、引き続き力がどこにどのどのような形であり、どういう影響を与えているのかを調べます。まとめ次第随時グランホエールのキャプテンにデータを送りますんで、とりあえず船で待機しててください。それと……」

アウラがさつと手を横に振ると、キリトのメニューウィンドウが勝手に展開され、中から刀身が砕けて柄だけになったエクスキャリ

バーが現れる。

普通は戦闘中に破壊された武器はその場でポリゴンの欠片となって砕けるのが通例なのだが、なぜだか柄だけ残っていたので一応取っておいたのだ。

その柄がアウラのもとへ飛んでいき、彼女の目の前で浮かぶ。それをアウラはさっと一撫ですると柄が光に包まれて……

「な、治った……？」

なんと、柄に光り輝く刀身が現れ、剣を包んでいた光が消えるとそこにはエクスキャリバーが元の姿であったのだ。

「さ、さすがにあれはやりすぎでしたし……それに、こちらにコンバートする際元のデータは保存されなければならないので、緊急措置です！」

剣をキリトに放り投げ、感謝感激雨あられといった表情をしているキリトをチラリと見た後、アウラはすぐに踵を返してすたすたと足早に大聖堂の中へと戻ろうとしたが、何か思いついたのかふと立ち止まり、また振り返る。

「それとこれは忠告ですが、グランホエールにいる騎士団とクルーは……まあ基本いい人たちなんですが、同時にかなり変わってる人もいるので気をつけてください」

それだけ付け加えると、アウラはさっさと中に戻ってしまった。そしてアウラの隣にいたクビアもその場を離れる前にキリト達に声をかけてきた。



「すまないね、あれでも精一杯取り繕ってるつもりなんだよ。とりあえず調べるのがひと段落ついたら僕も手伝いに行くから、それまではグランホエールのみんなに色々教えてもらっとくといいよ」

そう言うくとクビアはばいばいっと手を振って同じく聖堂の中に消えていった。

そしてモルガナはというと、早くもキリト達に対する興味が失せたのか一言だけ、

「それじゃ、がんばってね」

と言って中に入ってしまった。

(いや、あなた(あなた)がこの厄介事を引き起こした張本人なんじゃ……)と、その場にいた全員の心の中に同じツッコミの文句が浮かんだが、まあ言っても無駄だろうとあきらめた。

(さて、鬼が出るか蛇が出るか……)

頭の中の思考を最後にそう締めくくったキリトはタラップを昇り切り、自動で開いた扉の中に躊躇わず入って行った。

.....

薄暗い通路を少し歩くと、大きな空間に出た。そこはメインホールらしく、中央には大型スクリーンとその近くに何十人も集まってミーティングできるくらいのスペースと壇がある。また、たくさんの扉や通路、エスカレーターやエレベーターがあり、まさにこの船

の中心らしい。

「あー忙しーブヒ、忙しーブヒッ！」

そしてそこには、鬼や蛇の代わりに小ブタ(?)らしきものが何匹か二本足で走り回っているという奇妙な光景が広がっていた。

「ブツ、ブタ!?なんでブタが二本足で走ってんだ……?」

キリトが入口の前で立ちつくしていると、次に入ってきたクラインが一瞬呆然とした後呟いた。

そしてその瞬間!

「ブタって言うなブヒーツ!!」

という声とともに、横から何か黒い物体がクラインの頭にクリーンヒットした。

「うぎゃああー!?!」

テンプレな叫び声とともにクラインは吹っ飛び、近くの開いていた扉の中に頭から突っ込んでいった。がしゃーんという何かの派手に崩れ落ちる音と共にクラインの呻き声が微かに聞こえてくる。

(あれじゃ受け身とれないだろうなあ。ていうかクライン、今日はよく飛ぶな……)

そんなことをキリトが考えていると、さっきの黒い物体改め黒い服を着たブタらしきものが空中でぐるりと一回転して見事に着地し、その場で毒づき始めた。

「まったく、おれ達のことをブタ呼ばわりするなんて失礼な奴ブヒ！おれ達はれっきとしたグランディだブヒ！！ん？そういえばお前たち、誰ブヒ？どうやって入ってきたんだブヒ？」

「ここでやっとキリト達の存在に疑問を持ったのか、その豚（もといグランディ？）はマスコットキャラよろしく首をかわいくかしげながら呆然としているキリトに訊ねてきた。」

「そうかブヒ、お前たちがキャプテンがアウラ様がよこしたと言っていた新しい奴隷かブヒ……いいブヒか？これからお前たちには馬車馬のように働いてもらうブヒ。怠けるんじゃないブヒよ……っただからべたべた触るなブヒ！」

デス ランディ（クラインに飛び蹴りを喰らわせたグランディ）は集まってきた他のランディ達と共に女性陣にもみくちゃにされながら叫んだ。アスナ達はいたくグランディ達を気に入ったらしく、キリトが今までの経緯を説明してる最中ずっとグランディ達と戯れていた……というか一方的にいじっていた。

「わぁ、かわいいw」

「ふかふかしてる」

「これは何とも言えない触りごこちですね……」

サーシャ、シリカとサクヤはデス ランディがもがきながら叫んでも、全く離そうとしない。

「あ、あんまり触られると困るブヒ。これでも一様俺は男ブヒ」  
「てれてるてれてるw」  
「肉球プニプニしてるう」

その隣では学生服にゴーグルという妙な組み合わせの装備をしているグランディがアスナとリーファに触わられて微妙に恥ずかしそうにもじもじしている。

「こっ、怖いブヒー。助けてブヒー！」  
「よいではないかあ、よいではないか」

その向こうでは気の弱そうなグランディがアリシヤにほっぺをひっぱられたりして滅茶苦茶にもてあそばれている。

「よくきたな、おまえたち。ブブ漬を食っていくがいいブヒ」  
「ブブ漬って？」  
「ようするに帰ってことですよ。ほら、リズ、そっちに行きましたよー！」

その後ろでは丸眼鏡をかけたいかにもインテリですみたくないなグランディが、リズベットとユリエールを素早くかわしてる。

（ユリエールさん、いつもはクールな感じなのに、今は目が本気でなんか怖いような……）

この状態がかれこれ10分は続いている。これじゃ埒が明かないし、そろそろ止めてやるかとキリトが声をかけようとしたら……

「やめろブヒ！俺の仲間に出すなブヒー！」

いつのまに現れたのか、新たなグランディがスクリーンの前の壇上で仁王立ちしている。

そしてそのグランディはなんとキリトがSAO時代によく着ていたのに似ている黒を基調にした服を着ている。さらに両手に二振りの剣を持ち、本物よりかなり小さいがそれらはまぎれもなくキリトがSAO時代に愛用し、最後まで共に戦い抜いたエリシユデータとダークリパルサーだった。

「し、新船長！遅いブヒよお」

「新キャプテン！？助かったブヒィ〜」

「なんとかしてブヒ〜；；；」

「ふ、やっとお出ましかブヒ………というか早くこの状況を何とかするのが新リーダーとしての役目だと私は思うのだがブヒ？」

グランディ達は口々にその新たに現れたグランディに向かって救いの手（というか蹄）を求める叫びをあげた。

すると、そのグランディは、いきなり剣を舞台に突き立て両手をばっ！と広げるて言い放った。

「そいつらをやるんなら、俺をやれブヒーッ！！」

「……………」

全員の動きが完全に停止した。数秒間無音の状態が続き、そして次の瞬間……

「この変態がーブヒッ！！」

今まで女性陣に完璧につかまっていたはずのグランディ達が一斉

に壇上の上のグランディに飛び蹴りを喰らわせた。

「一瞬でもあんたを信じた俺がバカだったブヒッ、このすけこまし  
」！  
」

「俺の感動を返せブヒ！」

「ひどいブヒよ、キャプテン」

「まあわかりきったことだが、あきれてもものも言えないブヒ……」

4匹の蹄の雨をかくぐりながら、キリトに似たグランディは叫び返している。

「うるさいブヒ！大体お前ら嫌がってるように見せかけて本当は楽しんでただろ、このむつつりスケベ共がブヒ！特にそのツンデレ野郎ブヒ！！」

壇上は一瞬にして戦場になり大騒ぎだ。逆にアスナ達はというと、いきなりの出来事に呆然としてしまっている。

（はぁ……、仕方ないな……）

キリトは心の中で呟きながらクライン、ユージーンとエギルを道連れに、蹄の嵐の中に突っ込んで行った。

## データ潜航艦グランホエール・02

「自己紹介がまだだったなブヒ、俺はキリ ランディ。見ての通りそのキリトとかいう奴を元にしたグランディだブヒ。今はこの船の船長を任されてるブヒ。言いたいことや聞きたいことはいろいろあるだろうが、とりあえずまず最初にチュートリアルをしてやるから聞けブヒ。いいブヒな？」

キャプテンと呼ばれていたグランディがぼろぼろになりながらもなんとか壇上に立って言い放った。

「ああ、それで頼む」

キリトもまたグランディたちの血で血を争う戦いを止めるために傷だらけ（蹄の跡だらけ）で満身創痍の体をポーションで回復させながら苦笑して答えた。後ろの方ではクライン、ユージーンとエギルも全員疲れ切った様子で床に座りながらポーションをがぶ飲みしている。

「よしブヒ。まず最初にこの世界には店やギルドホームがあるタウンと、モンスター達がいるフィールドやダンジョンがあるブヒ。タウンはお前たちの世界アインクラッドやA.L.Oで言う街や都市のことブヒ。そして今この船が浮かんでいる空間は……」

ここでキリトはキリ ランディが妙なことを言ったのに気づいた。

「いや、ちょっとまってキリ ランディ……おまえまるで俺たちの世界のことを知ってるみたいじゃないか？」

キリ ランディはフツと笑った。

「いやなに、先ほどデータの海を潜航していたら、ネットスラム付近に妙なデータが流れているのを見つけたからサルベージしたブヒで、とりあえず調べたらおまえたらのことなどが出てきたから、アウラ様に連絡しようとした矢先に彼女からおまえらを迎えにこいと連絡が来たので、迎えに行きがてらさっきまで報告してたブヒ」

妙なデータのくだりからキリトは大変なことを忘れていたことに気付いた。そしてアスナも隣で愕然としながら、キリトに尋ねる。

「ね、ねえ、キリトくん。そういえば、ユイちゃんって今どこにいるのかな……」

「……キリ ランディ、そのデータを見せてくれないか？」

「いいブヒよ。でもさっき逃げたそうとしたから檻の中だがブヒ」

そう言っただけでキリ ランディが手元で何かすると、フツと少し大きめの鳥籠が現れた。

そしてその中には……

「ユイっ!?!」

.....

「わぁーん！パパ、ママ、逢いたかったですー!!」

よほど怖い目に遭ったのか、ユイは先ほどからアスナに抱きついて泣きっぱなしだ。どうやら怪我をしてるわけではなさそうだが、



驚いたのはユイの姿と格好だ。

一緒にいた時点ではA.L.O.のナビピクシーサイズだったのに、今は子供サイズになっている。勿論ユイは自身の意思で姿やサイズを変えることはできるが、しかし服装が今まで着てるのを見たことのない魔法使いが着るような乳白色のローブにとんがり帽子、そしてところどころにアクセントとして何かの紋様が随所に描かれているものになっているので、たぶんグランディ達を変えたのだろう。

「おい、キリ ランディ、おまえ、ユイに何をした？」

鋭い視線をキリ ランディにぶつけながら、キリトは静かにたずねた。

「な、何ってただデータの海を彷徨っていたから助けてやってただけだブヒ……」

キリ ランディはキリトの剣幕に慌てた様子で弁解し始めた。

「まあその後ちょっとデータを調べさせてもらったのと、素材が良かったからグランディにしてやるうとただけブヒ。それでオペ室に連れて行って改造しようとしたら、途中で暴れて逃げ出した……つて、剣を抜くなブヒ!？」

改造のくだりでキリトはエフェクトを进らせながら剣を抜刀し、キリ ランディの目の前に刃先を突きつけた。

「だ、だいたいお前ら人のことと言えるのブヒか？さっきの様子じゃおまえらその子のこと忘れてただろブヒ……」

最初は負い目が少しはあったのか小さくなっていたキリ ランディだったが、最後の言葉で反撃してきた。

「いや、それは……」

キリトはすぐに反論しようと思ったが、アスナに抱かれて涙ぐんでいるユイを見て一息間をおき……そして剣を鞘に納めた。

「いや、確かにそうだ……。いくら色々なことが一度に起こって混乱していたからといって、ユイのことを忘れるなんて俺は最低だ。それにおまえらが助けてくれなければユイはどうなっていたかわからない。キリ ランディ、それに他のグランディ達も、本当にありがとう」

そう言って、キリトは深く頭を垂れた。

キリ ランディはそれに少し驚いた様子を見せた後、フツと笑った。

「やはりオレの元になった奴な事だけはあるブヒ」

「いや、でも俺はおまえみたいにそんな変な性格してないと思うぞ。特に女の子に弄ばれたいとか……」

「何言ってるブヒ。その子のデータのログで見ただけど、うちのカイトやハセヲぐらいモテモテのハーレム状態じゃないかブヒ。頭の中では夢は酒池肉林と考えてるくせにブヒ」

その言葉に女性陣がじとーとした目でキリトを見る。

「キリトさん、あたしたちをそういう目で見てたんですか？」

「さいてえー」

「キリトくんってそんなこと考えてたんだ……」

「まさかカズ兄が義理の妹に対してそんな感情を持っていたなんて……」

女性陣の凍るような視線を一身に受けたキリトは、慌てて弁解し始める。

「い、いやそんなわけないだろ！」

雲行きがどんどん悪くなっていくのを何とかしようとして、キリトがあたふたしていると……

「まあ冗談は置いておくブヒ」

「つて、冗談かよっ！？」

キリトはわざと盛大にツツコムと同時に少しホツとしたが……

「でも、そんなに強く否定したつてことはキリトさん、もしかして？」

なんてサーシャが余計なツツコミをしてきたのでまたまずい流れになったのをなんとかするために必死で、キリト ランディが最後にぼそつと呟いた、

「それにその子のことを忘れてても仕方がないブヒ……」

という言葉の意図をキリトは聞くことができなかった。

「まあキリトくんの弁明は後でゆっくり聞くとして、とりあえずこれでみんな揃ったことだし、本当によかった……」

最初の方に不穏な言葉を付け加えながらも、キリトの横に立っていたアスナが泣きやんだユイを抱きかかえて安心したようにほっと息をついた。みんなもそれに同意するように頷く。

しかし、ここで聞き覚えのある声がどこからともなく聞こえてきた。

「みんな、確かに僕の存在感は薄いというか、いてもいなくても同じようなもんだけど……せめてサクヤさんかリーファちゃんだけでも気づいて欲しかったなーなんて、ははは……」

それまで誰も気づいていなかったのだが、ユイが閉じ込められていた鳥籠の影にもう一つ大きめな檻が現れていた。

そこには……

「「あつ、レコン……」」

狭い檻の中にどよおーんとした空気を垂れ流しながら丸まって座っているレコンがいた。

データ潜航艦グランホエール・02・（後書き）

原作ではフェアリーダンス編以降全く出番のないレコンさん。この二次小説ではちょっと重要なポジションにいます。でも本編では今のところ出番はほぼないです（笑）

あとグランディの語尾をブヒで統一していますが、いつか直します  
たぶん……

## 今までの登場人物紹介（前書き）

これは今まででてきたキャラの紹介&今後の方針です。

なのでまだ今までの話しを読んでない人はできれば先に読んでから見てください。

ちょっとネタばれがあるので。

あとwiki見た方が詳しく書いてあるところもあるのでもっと詳しく知りたい人はそちらも見てください。

## 今までの登場人物紹介

ソードアート・オンラインからの登場人物

- 1：今作内でのジョブ
- 2：登場した話し
- 3：特徴
- 4：キリトとの関係
- 5：今作でのこれから

- S A O -

キリト（桐ヶ谷和人）

- 1：二刀流ノデュアルエッジ
- 2：主人公なので皆勤賞。
- 3：S A O 主人公。実力とモテ度はS A O 最強クラス。アスナとは恋仲。現実では普通のパソオタ？
- 5：今作では主にツッコミと事態收拾役。もちろん戦闘とイベントでも暴れますw

アスナ（結城明日奈）

- 1：斬刀士ノブレイド（レイピア）
- 2：ヒロインなのでほとんど登場。
- 3：S A O メインヒロイン。実力、容姿、料理の腕共にS A O 最強クラス。
- 4：恋仲
- 5：今作ではキリトと夫婦漫才を繰り広げる（かも？）

ユイ

- 1：呪療士ノハーヴェスト
- 2：2巻のサイドストーリー「朝霧の少女」で初登場。その後フェ

アリーダンス編ではナビピクシーとして活躍

3：超スペックのAI。もともとプレイヤーのメンタルケア目的に作られたので人の心には敏感。

4：親子？

5：序盤は完璧に忘れられていたが、これからは大活躍するかも。

ヒースクリフ（茅場晶彦）

1：?????

2：アインクラッド編全般とフェアリーダンス編の最後にちよこつと登場

3：SAOを作り、1万人ものプレイヤーを閉じ込めた天才。SAOでは攻略組最大ギルド、血盟騎士団のギルドリーダーとしてログインしていた。

4：キリトとはSAO内で2度戦い、1勝1敗。キリトに倒された後脳を過度にスキヤニングし死亡したが、それによりネット上に分身を作ること成功しフェアリー・ダンス編ではキリトを助けた。

5：今作ではほぼ裏方にまわりあれこれいじりまわす模様。

クライン

1：撃剣士ノブランドイツシュ（刀）

2：アインクラッド編本編とサイドストーリー共にちよくちよく出てる。

3：攻略組ギルド風林火山のリーダー。ちよつとお調子者だがいいやつでみんなをまとめるのが得意。リーダーの素質も十分。

4：SAOでの数少ない仲間（友達？）。

5：今作でももちろん活躍もするけど、主にやられ役になるかも……

エギル（アンドリユー・ギルバート・ミルズ）

1：重槍士ノパルチザン

2：アインクラッド編とフェアリーダンス編共に登場



3：SAOでキリトがよく利用していた故買屋を営む商人プレイヤー。業突く張りな商人に見えるが、実際は売上のほとんどを中層プレイヤーの育成に注いでいた。リアルでは喫茶店を経営しており、結婚もしている。アフリカ系アメリカ人にして生粋の江戸っ子。

4：仲間

5：今作でも商売魂を見せてくれるかも。

シリカ（綾野珪子）

1：双剣士ノツインソード

2：アインクラッド編2巻の短編のヒロイン

3：SAOでは珍しいビーストテイマーな上、年齢が低くかわいかったのでアイドルの用に扱われていた。

4：自分の慢心から使い魔ピナ（フェザーリドラ）を死なせてしまったが、キリトに復活アイテム入手を手伝ってもらい無事復活させた。キリトにはそれ以来恋心（というよりどちらかというとな上に對する尊敬？）を抱いている。

5：今作ではピナと共にイベントを盛り上げてくれるかな。

リズベット（篠崎里香）

1：鎌闘士ノフリッカー

2：アインクラッド編2巻の短編のヒロイン

3：SAOに閉じ込められるまではいたって普通の真面目な子で、SAO内でも努力して立派な鍛冶屋を営んでいた。

4：キリトの剣を打つ為の材料収集時にパーティーを組み、その時に色々あり惚れるが、親友のアスナのキリトに対する気持ちを知りSAOをクリアするまでは身を引くことに。現在キリトに対しては微妙な感じ。

5：今作では新たな関係が生まれるかも。

サーシャ

- 1：呪療士ノハーヴェスト
- 2：アインクラッド編2巻の短編、ALO編フェアリ・ダンスでアインクラッド新実装時にエキストラで登場。
- 3：リアルでは大学生で学校の先生を目指していた。真面目で性格も良い。
- 4：第1層はじまりの町で幼いプレイヤー達の世話をしていた時、キリト達がユイの親を捜索中に知り合う。
- 5：現実の生活が落ち着き、ゲームに戻ってきた彼女は今作では天然、世話焼き+ときたま鋭い洞察力を発揮するかも。

## シンカー

- 1：魔導士ノウォーロック
- 2：アインクラッド編2巻の短編、ALO編フェアリ・ダンスでアインクラッド解放記念パーティーと新実装時にちよつと登場。
- 3：リアルではMMOトウデイという日本最大のネットゲーム情報総合サイトを運営していた。  
ギルドアインクラッド解放戦線のリーダー。
- 4：組織の肥大化で上手く管理ができなくなっていた時に副リーダーに嵌められ、絶体絶命のところをキリト達に助けられた。
- 5：今作では便利な解説役を主にやってもらうことになる気がする。

## ユリエール

- 1：銃戦士ノスチームガンナー
- 2：アインクラッド編2巻の短編、ALO編で新アインクラッド実装時にちよつと登場。
- 3：シンカーの部下で、軍服が似合うクールビューティー。
- 4：キリト達にシンカーを助けてくれるよう依頼する。
- 5：今作では以外な一面（まあ原作ではあんま出番なくて詳しく書かれていないけど…）が見れるかも。

- フェアリー・ダンス -

リーファ（桐ヶ谷直葉）

1：斬刀士ノブレイド（竹刀）

2：フェアリーダンス編全般

3：剣道少女。明るく活発。恋に悩む少女。

4：桐ヶ谷和人の義妹。和人がネットゲームにハマってから疎遠になっっていた。

しかし和人がSAOにログイン中親から従兄と教えられ、もう会えないかもしれないと疎遠になっていたことを後悔し、もっとよくキリトのことを知りたくなりVRMMO、ALOをプレイし始める。キリトがALOに初めてログインした時リーファがサラマンダーの集団に追い詰められていたところを助けたことにより知り合い、お互いの素性に気づかないまま一緒に世界樹を目指していた。

リーファはゲーム内で共闘するキリトに惹かれる一方、現実でも堰を切ったように兄・和人への恋心を自覚した。キリトが兄であると知った後はショックで大変だったが、その後なんとか折り合いをつけられ今はまだ恋心を抱きながらも兄妹として接している。

5：今作でも微妙な距離感でじらされるかな。

レコン（長田伸一）

1：錬装士ノマルチウエポン（魔典、双剣）

2：フェアリーダンス編全般

3：オタク。戦闘能力は皆無に等しいものの、隠密行動が得意で根性も結構ある。

4：桐ヶ谷直葉と同級生で、VRMMOのことを聞かれALOのことを教えた。リーファには好意がある様で、リーファと一緒にいたキリトに微妙にライバル心を燃やしていた。

5：今作では持ち前の知識を使いリーファにいいところ見せたさになんばって以外と活躍するかも。たぶん……

サクヤ

- 1：妖扇士ノダンスマカブル
- 2：フェアリーダンス編全般
- 3：シルフの領主。和服美人。何期も領主を務めている。実力もかなりのもの。
- 4：シルフとケットシーの会談時にサラマンダーに奇襲を受けたところをキリトに救われた。
- その後キリトが世界樹に挑んだ時に大軍を率いて助けに来た。
- 5：今作では原作と同じくまとめ&収め役かな。あとバトル&謎解き面でも活躍する予定。

アリシャ・ルー

- 1：拳術士ノグループ
- 2：フェアリーダンス編全般
- 3：ケットシーの領主。獣耳美少女。明るく掴みどころのない感じ。サクヤと同じく何期も領主を務めている。
- 4：キリトが世界樹に挑んだ時にもサクヤ達シルフ軍と共にケットシー達を率いて助けに来た。
- 5：今作ではとりあえず天真爛漫な感じでイベントをおおいに盛り上げてもらいます。

ユージーン

- 1：撃剣士ノブランディッシュ
- 2：フェアリーダンス編
- 3：サラマンダーの将軍。その実力はAL0最強といわれている。レジエンダリーウエポンである魔剣グラムを持つ。
- 4：キリトとはケットシーとシルフの会談奇襲時に戦って負けている。

5：今作では冷静な武人としてバトル&謎解き面で活躍してもらおうつもり。ときどきボケもあり？

.hack//からの登場人物

- .hack// -

アウラ ????

The Worldの女神。全作通してThe Worldに振り回されっぱなしの苦勞人。

今作では母親のモルガナと兄のクビアに振り回されるも、結構幸せそう。

モルガナ ????

アウラの母親。原作ではアウラを生まないように必死に努力していたが、最終的に消滅した。

今作ではなぜか存在するモルガナだが、その性格は読んでもらえば分かるようにだめ人間。

- .hack//xxxxx -

クビア 双剣士ノツインソード

原作ではアウラの失敗作としてハロルドに見捨てられたので、反存在のカイトを取り込み完全な存在になるうとしていた。

今作ではアウラの兄として、アウラをからかいながらも優しく見守っている。

アウラとモルガナの親子喧嘩の調停役もしている。

- .hack//G.U. -

三葬騎士（葬炎・葬海・葬天） 双剣士ノツインソード・斬刀士ノ

ブレイド・斬刀士ノブレイド

アウラがThe Worldを守るためカイト、オルカ、バルムンクを模して作ったAI。

しかし時間がない中で作ったので不完全なものになってしまった。

今作でもアウラの騎士として陰ながら見守っている。時折奇怪な言

動と行動をとるのは原作と変わらず。

なお、S A Oの短編集アーリー・アンド・レイトにて面白い絡み所を見つけたので、後にちよこつと書くかも。

## 今までの登場人物紹介（後書き）

これからもちよくちよく更新していくのでよろしくお願いします。  
あと誤字脱字、おかしい文やツツコミ、感想等ありましたらコメントしてください。

## 騎士団員登場

「まあ色々あったが、これでやっと話しを進められるプロ」

キリ ランディは溜息をつきながら疲れたように話しを続けた。

「どうせ僕なんか……」

「もう、いい加減元氣出しなさいよ!」

後ろの方では未だに忘れ去られていたことに対していじけているレコンと、そんな彼に対して開き直って叱咤激励をはじめたリーファのことは完全に無視するようだ……。

その後のグランディの説明によると、この世界にはいくつかのルートタウンと呼ばれるショップやアリーナなどの施設がある都市が存在して、そこからゲートで3つのワードを組み合わせることににより様々なフィールドに行けるらしい。階層やフィールドに制限があるアインクラッドと違って、The Worldでは無数にある単語を組み合わせてほとんど無限に近い数のフィールドを作ることができる。

それ以外はほぼSAOやALOと違いはなく、ファンタジー系のネットゲラしい作りになっているようだ。

ステータスはどちらかというとSAO寄りで、LvアップごとにSTR（筋力）、INT（知力）、WIS（知識）、DEX（器用さ）、AGI（敏捷性）、VIT（生命力）を若干上げることができ、それらの数値で戦闘時の物理攻撃、防御と呪紋攻撃、防御値等が決まる。

戦闘面はあまりのレベル差だと勝負にならないが（Lv・100



V S L V・1とか)、ある程度ならプレイヤーの技術や戦略で補える、レベル重視のS A Oと、スキル至上であるA L Oの中間のような仕様になっている。

ちなみに、C H R (魅力値) やL U K (幸運) 等の隠しステであるそうだが、それは追及すると場が荒れそうなので軽く流された。

そして説明は大詰めになった。

「最後に一番大事なこと、ジョブのことだブヒ」

話が続いている最中も、まったく立ち直る気配のないレコンに対し少し暴走気味になってきたリーファをなだめていたサクヤが、この話題に反応した。

「そういえば、ジョブはこのゲームの仕様に合わせるんですけどね。どのような種類があるのですか？」

雰囲気を変えようと興味津津といった感じでサクヤが聞くと、グランドイが待つてましたと言わんばかりに答えた。

「よくぞ訊いてくれたブヒ！」

そうやってキリ グランドイは手元にウィンドウを展開し、何やら入力した。すると、壇上のスクリーンにいくつかのシルエットと、その下に説明文と思われるものが現れた。

「見てもらえば分かるように、この世界には12種類のジョブがあり、前衛、後衛とその両方をこなすものに分けられるブヒ」

スクリーン上に表示されているのは、前衛で敵を直接叩く撃剣士ノブランドイツシユ、重槍士ノパルチザン、二刀流ノデュアルエツジ、拳術士ノグラップラー。

中盤を支える双剣士ノツインソード、斬刀士ノブレイド、鎌闘士ノフリツカー、妖扇士ノダンスマカブル。

そして後衛で味方をサポートしたり距離をとって攻撃する魔導士ノウォーロック、呪療士ノハーヴェスト、銃戦士ノスチームガンナー。

最後にいくつかのジョブを使うことができる玄人向けの錬装士ノマルチウエポンと書かれている。

「ちなみにジョブはこのマシン、ジョブ分けヘルメットをかぶって決めるブヒ。」

グランディはパネルを操作して、突起やらねじが大量に飛び出しているごついヘルメットを取り出した。

「こいつはプレイヤーに一番合っているジョブを自動で選択してくれるブヒ。それと、あとの細かいジョブの仕様については使っている本人達に訊くのが一番早いブヒね……お、噂をすればなんとやらブヒ」

キリ ランディはそう言って無数にある通路の内の一つの方に顔を向けた。みんなもつられてそちらを見ると、中から話し声が聞こえてきた。

「いやあ、今日も疲れたなあ。ねえ昴ちゃん、これからお茶なんて

どう？もちろん司ちゃんも一緒にさ」

「こらぁーっ！貴様、昴様になれなれしくするな！！いけませんよ昴様、こんな万年色ボケ男になんかついていつては。それよりどうですか、これから私と一緒に今後の騎士団の方針について語るの……？」

「うるさいよ銀漢。鬱陶しい」

「そうですよ、銀漢。いくら本当のこととはいえ、失礼です。ちゃんとクーンさんに謝罪しなさい。あと私はこれから報告書をまとめなければいけないので、すみませんがどちらもまたの機会に」

「昴様……」

「ていうか、昴ちゃんもけっこうキツイこと言ってるような……」

「私もこのような態度は良くないと思いますが、さすがに任務中にあれだけ女の子を口説こうとされると、このようになってしまいません……」

「あれ、もしかして昴ちゃん、焼きもちやいてる？」

「んなわけあるくウぁー！！クーン、貴様とはどうやらここで決着をつけねばならんようだな！だいたい、貴様には想い人がいるだろうが！」

「銀漢は堅いな。別に好きな子がいるからって、他の女の子とお茶しちやいけないわけじゃないだろ？」

「もう、やるんならボクの視界に入らないところでやってよ」

「はぁ……、私は先に部屋に戻りますから、ほどほどにしてくださいね……あら、あの方たちは？」

ここでようやく彼らはホールに姿を現し、先頭を歩いていた少女が真っ先にキリト達に気づいたようだ。

最初に入ってきた少女は、白いドレスを着て背中と頭に小さな羽が生えているしっかりとしてそうな女の子。その後ろに続いてきたのは、濃い緑と白を基調にした落ち着いた感じの服を着た物静かそ

うな少年。

さらに二人の男、一人は身軽そうな黄色を基調にした服を着てのばした青髪を後ろで束ねた陽気そうな青年で、もう一人は赤い服の上に白銀の騎士鎧をまとい、顔全体をすっぽりと覆っている兜に付いた二本の角が特徴のないかにも硬そうな男だ。

「最初に戻ってきたのは昴、司、クーンに銀漢ブヒね。じゃああと説明にいる奴らはっと……待ってるのも面倒だし呼びよせるかブヒ」

そう呟いたキリ ランディはまた手元のウィンドウを操作した。すると突然壇上に多数の青いリングが現れ、そしてその中から人影が現れ始める。

「おつしゃー！かかってきなさい！！つてあれ、ここどこ？」

「あん、何だこいつら？おい、グランディ、いったいなんなんだよ、いきなり呼び出して？」

「ていうか俺、今戦闘中だったんだが……」

「なんてことやー！？あとちょっとでさらなる値切り交渉成立できたのに……あんたあ、どないしてくれんねん！？」

「はあ……、手短にお願いね。あの人のせいで今こっちは大忙しなんだから。」

「ふむ、これは面白い面々がそろっているな。実に興味深い……」

次々に現れる全員が好き勝手言ってるのに対し、慣れてるのか疲れてるのかキリ ランディは単刀直入に言った。

「お前たちにやってほしいことがあるブヒ」

「まあこんなもんブヒかね」

最後の一人が青いリングから現れ切ると、キリ ランディは満足したようにうなずいてこちらを振り向いた。

「それで、俺たちは何で急に呼び出されたんだよ？それにこの人たちは？」

ファンタジーRPG風の服装の中で、唯一学生服にゴーグルという明らかに浮いてる格好の少年がキリ ランディに訊ねた。

その問いに対し、キリ ランディは現れた全員に現状を軽く説明した。

その説明が終わると、腕を組んでしかめ面をしながら黙って聞いていた銀髪で黒衣の目つきが鋭い少年が一番に口を開いた。

「で、こいつら役に立つのかよ？聞いた感じじゃ、The Worldは素人なんだろう？ただでさえあのおばさんのせいで大変だったのに、このくそ忙しい時に余計なお荷物はごめんだぜ」

ぴきつと場の空気が凍った。そしてそんな空気の中、全身金色という2つの意味で直視しづらい姿のPCが勇敢にもしゃべりだした。

「まあまあ良き目の人よ、今は猫の手も借りたいときである。ここはひとつ彼らの力も有り難く借りようではないか！」

(勇敢というより鈍感なのか……)

しかし彼の言葉で場の空気がある意味変わったので、キリ ランディはすかさず話しを進めた。

「それじゃあ全員挨拶ついでに、どのジョブか説明するブヒ。よし、まずはジョブがブレイドの奴からブヒ」

「おう！」

「はあ……、了解や」

「……ん？」

ここで二つの声が上がった。

一番初めに来たグループの一人である銀漢と、もう一人は後から来た茶髪をポニーテールにして、黄色を基調にした服に胸当や肩当てなどの最低限の鎧のみを付けている身軽そうな元気はつらつとした女の子だ。

「ちょっとグランディ、なんでブレイドだけ二人おるんや？」

彼女の質問にキリ ランディはしごく簡潔に答えた。

「いや、ブレイドは需要ありそうだから多めに呼んだブヒ」

「ていうことはなんや、あんたはうちの何週間もかけて交渉を重ねた大事な商談をすっぱかさせた理由が、ただブレイドの需要がありそうってだけって言うんかいな？ だいたいブレイドなんて騎士団の中にぎょうさんおるやん。なんでうちなん？」

怒りがふんだんに混じった声にもかかわらず、能天気ランディは答えた。

「そんなの適当だブヒ……ってわあー、何するブヒ！？ 危ないじゃないかブヒ！ レイチェル！？」

レイチェルは適当、と聞いた瞬間俺の目でもやっと追えるくらいの速さで抜刀し、グランディに向かってもの凄いスピードで剣を投

擲したのだ。目の前に刺さった剣を見て尻もちをついてしまった格蘭ディはさすがにやばいと思ったのか、慌ててしゃべりだした。

「わかった、わかったブヒ！船の精製所で特別にこの前欲しがったものを作るから、それで手打ちにしてくれブヒ！！」

それを聞いた瞬間、レイチエルは今までの恐ろしい雰囲気をごろつと変え、にこにこ顔になった。

「それやったらいいわ。ほな、それじゃさつそく自己紹介に移りましょか。うちはレイチエルいます。ニユーク兎丸と組んで芸人やりながらサイドビジネスで色んな商売してます。それで……」

ここでへたり込んでいた格蘭ディが立ちあがり、足元にささった剣を引き抜き、レイチエルに向かって放った。レイチエルはそれをパシッとキャッチして構えをとった。

「ジョブはブレイドやってます！」

レイチエルが構えを解いて剣を鞘にしまったのを見て銀漢がうおっほん！と咳払いをして続こうとした。

「それでは次は私の自己紹介に……」

しかしそれは格蘭ディの声に阻まれた。

「今がレイチエルで、もう一方のツノの方は銀漢ブヒ。ほら、さつさと次にいくブヒ。次はブランディッシュブヒ」

「って、私にもまともな自己紹介させるおっ！！」

銀漢の叫びがむなしく響く中、次から次へと騎士団員達は自己紹介をしていった。

ブランディッシュはブラックローズという白髪で褐色の肌にイバラの模様が体に刻まれ、鎧は胸と腰回りだけという軽装な少女。

ウォーロックは朔という道化師みtainな服装の気の強そうな女の子。

ハーヴェストは一番先のグループにいた司一（女の子らしい）で、パルチザンは先ほどの金ぴかアーマーのしゃべり方がかなり変なびるし3。

ツインソードはどことなく葬炎をまともにして少し幼くしたような姿をした一（本人談では二人とも元がいるらしい）シューゴという少年。

グラップラーは犬耳と尻尾一（本人は狼、ワーウルフと言っていたが）をつけたスタイル抜群な凰花。続いてフリツカーは日本神話の神様が着るような白を基調にした生成の服を着て、小鹿のような小さい角を生やしたことなくつかみどころのない感じの少年櫛。

ダンスマカブルは赤銅肌をした筋骨隆々の体格、剃髪して修行僧のような衣を片方の肩からかけているヨガをやってそうな八咫。

スチームガンナーは一番初めのパーティーにいた青年クーン。そしてマルチウエポンが、先ほど場を氷つかせたハセヲその人で、最後にデュアルエッジが学生服というこの場にそぐわない服を着ているのにもかかわらず、どこか落ち着いた雰囲気と貫録のあるトキオという少年だ。

全員が簡単に説明を終えると、キリト達はそれぞれのジョブになるか例のマシンを被せられて決められた。

結果……



デュアルエッジはキリト。  
ブレイドはアスナとリーファ。  
ブランドイツシユはクラインとユージーン。  
パルチザンはエギル。  
ツインソードはシリカ。  
フリツカーはリスベツト。  
ダンスマカブルはサクヤ。  
グラップラーにはアリシャ・ルー  
スチームガンナーはユリエール。  
ウオーロックはシンカー。  
ハーヴェストはサーシャとユイ（ユイも今回はナビとしてではなくプレイヤーとして参加）  
マルチウェポンはレコン。

という具合になった。

## 訓練開始！

ただっ広い白い部屋、その端の方でキリトは両手に一本づつ持った剣をゆったりと構えていた。そして目の前に新たなのがポップした瞬間、頭の中にくつかのスキルが自動的に浮かび、キリトはその中の内の一つを素早く選択する。

ツイン・バクスラッシュ！

両手の剣を袈裟斬りに振った後、間髪入れず逆袈裟に斬り上げるスキル見事に当たり、的はポリゴンの欠片へと碎け散る。

間を置かずに次の標的、2つの的が離れた位置に現れる。キリトは左手の剣をしまい、代わりに呪符を手に持つ。

「はっ！」

気合いの掛け声と共に一方的には呪符を投げ、間髪いれずにもう一方の的へと一気に踏み込みゼロ距離まで飛ぶ。

「らぁッ！」

キリトの剣が的を真横に断ち切ったと同時に、呪符から打ち出された雷光がもう一方の的を撃ち抜いた。

「ふうっ……」

「まあ、ざっとこんなもんかな。でも、やっぱりすごいね……」

感心したようにパチパチパチと手を打ち鳴らして拍手をしたトキオはメニューを操作して全ての的を片付け始める。キリトもいつも

の癖で剣を左右に振った後、背中に持っていたいき剣を収めた。

今キリトたちは場所をだっぴろい部屋（多目的ルームらしい）に移し、そこでバラけて詳しいジヨブの説明を受けている。そしてキリトには正面に立っているトキオがデュアルエッジ、つまり二刀流の基本的なレクチャーをしてくれて、今丁度終わったところだった。

ちなみに武器はグランディが用意してくれたもので、キリト達の過去のデータをユイから受け取っているらしく、キリト好みの重量のあるしっくりとくる良い剣を用意してくれていた。

「だけど、このスキルの選択肢が自動的に頭の中に浮かんでくるのは便利だよなあ」

キリトが構えを取り、その場で二刀流スキル、**疾風双刀** を発動させながら呟く。

そう、ここ - The World - では、戦闘時のスキルなどは頭の中、つまりは意識内で選択肢が現れ、その技名を発声することで発動するのだ。

「まあ、普通最初の頃は違和感あるはずなんだけど、キリトさんは呑み込みが早いなあ。というか、二刀流もオレよりも上手いかも…」

メニュー画面を操作して的確の残骸を片付け終えたトキオが、キリトの方を見て苦笑する。

「キリトでいいよ、俺もトキオって呼ばせてもらっからさ。まあでも、トキオもただもんじゃなないよな……」

ファンタジー系のネットゲで、現実にあるような制服を着ている見た目の不自然さに反し、トキオから感じられる強さはあのデスゲームの中の最高峰にいた者達、攻略組と同等かそれ以上のものだった。

「トキオの元は中学生だったんだろ？ いったいどんな修羅場をくぐったんだ？」

そんな質問に対して、トキオは苦笑いをしながら答えた。

「いやあ、オレはちょっとした特殊体質でそれをある人に利用されて、とある事件に巻き込まれたんだけど……まあその話しはまたおおいするよ。それよりオレたちは一通り終わったから、他のみんなの様子を見ない？」

「そうだな、そうするか……あ、それとさ、二刀流って戦闘中はデフォルトで二本剣を持ってなくちゃいけないのか？」

キリトの質問にトキオは首をかしげながら答える。

「いや、先つきやつたみたいに、アイテムとか使うときは片手を空けておくけど……スキルは二刀でしか出せないよ？」

「でも、こっちでは通常攻撃も充分強いんだろ？」

「まあ、キリト達は基本値高いし、動きもいいから大丈夫だと思うけど……でも、二刀流なのになんで1本で戦いたいんだ？」

その問いに、キリトは俯いて少し考える素振りを見せたが、すぐに顔を上げた。

「いや、やっぱり普通に剣二本で戦うわ。郷に入れば郷に従えっていうしな。じゃ、他のみんなの様子見に行こうぜ」



「うぎやあああああ!?!」

シンカーは攻撃呪紋の嵐を喰らうことになった。

「ちょっと、うちがわざわざ説明してるのに、なによそ見してるんや!こんなことちゃっちゃと終わらせて、早くエン様のところに戻らなきゃいけないっちゅうのに……ほら、なにぐずぐずしてんの!はよう立って、さっさと終わらすんや!」

爆炎呪紋によってウェルダンに焼かれたシンカーは、ぷすんと煙を吐きながら動く様子がない……

「あちゃー、朔はエンデュランスラブだからなあ。まあ基本ミィーハで、最近はバルムンクにも気があるみたいだけど……」

頭をかきながらそんなことをトキオは言い、さらにキリトを先導して次のペアに向かった。

「あのお、僕の記憶が正しければハセヲさんが活躍するまではThe Worldでは錬装士は器用貧乏と言われてマイナーな部類にあったと思うけど、なんでハセヲさんは錬装士をえらんだんですか?」

「な、なんでんなことお前にそんなこと話さなくちゃならねんだよ!?!だいたいこんなくそめんどくせえこと、俺は本当はやりたくねえんだよ。だから、とつとと終わらせるぞ!」

レコンの問いに対して苛立ちながら答えるハセヲ。しかし根は律儀なのか、どうやら途中で放り出したりはしないようだ。

そして、次は誰を見に行こうかと視線を巡らせていると……

「うおッ!?!」

後ろから突如した攻撃の気配にキリトは慌てて前に飛びながら振り返る。

「ゴメンゴメンツ、キリト!」

そこにいたのは、ケット・シーの領主でありA・L・O内でも中々の実力者、アリシャ・ルーだった。

そして、そのルーが今、目を引き寄せられるような火花散る接戦を演じていた。

「キミ、凰花だっけ? なかなか強いね……それに犬耳と尻尾でケットシーの猫耳のボクとは一応かぶらないし、仲良くなれそうだよ」

ルーは強力な上段蹴りを放ちながら、まるで談笑している最中かのように言う。

「これは犬耳ではなく狼なんだがな……それにきみだって、かなりのっ、使い手っ、じゃないかつ!」

ルーの蹴りを軽く体を引いて避けた騎士団員の凰花はそのまま突っ込んで右ストレート! と見せかけて足払いをしかけるが、アリシャはそれをなんなく躲し、反撃に移っている。

端から見ても、高レベルの攻防だ。

「凰花はこの騎士団の中でも接近戦トツプクラスなんだけど、あのアリシヤ・ルーって子もそうとうやるな……」

感心したように呟いたトキオはさらに別のペアに目を向ける。

「ブランディッシュはまあたいしてあんたたちのプレイしてたゲームのと変わんないから、とりあえず教えることはこれ以上はあんまないわね。あ、そっちのあんたの方はあとで刀を使ってる砂嵐三十郎を紹介するから、色々教えてもらおうといいわ」

こちらでは大剣使いのブラックローズがユージーンとクラインに対してレクチャーしている。

「どうやら話すことはもうないようだな。ではブラックローズよ、少し手合わせしようではないか」

ここでいままで黙って説明を聞いていたユージーンが開口一番挑戦状をたたきつけた。

「おいおい、別に今そんなことしなくてもいいだろ……つつか、さつきあんだけぼろぼろになって、まだ動き足りねェんですか？」

クラインが敬語モドキで呆れたようにツツコムと、ユージーンは至って真面目な顔をした。

「クライン、お前ほどの実力者ならばわかるだろう。ブラックローズは強い。……というより、この船に現れた者のほとんどがかなりの使い手だと感じなかったか？」

「まあ確かにここはコアゲーマーの集会場か？ってえぐれーツェー奴が集まってるけどよォ……」



クラインが顎に手をやりながら同意する。

「ならば戦ってみたいと思うのは当然だろう。將軍という職種柄普段は好き勝手に戦えないから最近少しなまっているし……。久しぶりにキリトとやった時ぐらい楽しめそうだ」

「いや、わたしはまだやるって言ってないし……」

心底うれしそうな顔をしてくくくと笑うユージーンに対し、完全にスルーされてげんなりしているブラックローズ。

「はあ……、仕方がないわねえ。女の子を誘う文句としてはいただけないけど……。まあ強そうって言われて悪い気はしないし、いっちょやりますかあ！」

気を取り直したのか大剣を下段に構えるブラックローズにならってユージーンも正面に構える。付き合いきれないとばかりにクラインは溜め息をつきながら二人から離れた後、一応審判役を買って出たのか片手を真上に挙げて、スタートの合図を取る。

そしてクラインが腕を振り下ろし、二人の戦いが始まるのをキリト達が見守っているといきなり背後で、

ドーーーーーンッ!!

「ぎゃーーーーっ!?!」

耳が割れそうになるくらい大きな爆発音とこちらにきてからよく聞く叫び声にキリトが振り返ると、少し離れたところに大きなクレーターができていた。そしてその中心には煤けた兜が一つ転がっている。

「あれって……」

キリトが呟くと、隣のトキオは溜め息をつきながらこの惨状の犯人に問いかけた。

「シューゴ、またダミー掴まされたの？だから言ったじゃん。ちゃんと確かめてからでないと使っちゃだめだって。ただでさえあの人のトラップは極悪なんだから……」

シリカが尻もちをつきピナを抱きしめて震えている横で、シリカにレクチャーしていたらしい双剣士のシューゴがばつの悪そうな顔をしている。

「いやー、こんどこそ本物の腕輪と思ったからつい使っちゃったw まあでも銀漢だから大丈夫ですよ。あの人タフだし、それに例のトラップって妙なもの多いけど、持続時間短いじゃん」

そう言いながらシューゴは話しに出てきた腕輪だったと思われる黒いボロクズを右腕から剥ぎ取っている。銀漢の騎士団の中での扱われ方ともかく、どうやら彼は無事なようだ。しかし、本体はどこにいるんだ？

「どこって、そこにいるじゃん？」

そこ？と、キリトが疑問符を浮かべていると、主を失ったはずの兜が急に持ち上がり浮き始めた。

「きゃーっ！おばけ!？」

ゆらゆらとゆれる兜を見たシリカが耳と尻尾をピンツ！と緊張したように尖らせ、腕の中のピナをさらにぎゅーっつと締め付ける。それにとっとう我慢できなくなったのか、ピナは火炎弾を吐き出してしまい、その火炎弾は運悪く宙に浮く兜に直撃した。

「ぐうおは!？」

兜は叫び声をあげると吹っ飛んでいった。

(ん？中身がないはずの兜が声をあげた？)

「やっぱり、今回ののは透明化か……」

「透明って、じゃあ銀漢は？」

「うん、見えないだけであそこにいるね。まああの人のトラップにしてみたら軽いほうだしラッキーだったな。もっと上げつないのあ  
るし……」

「これでラッキーって……まあ確かに実害はなさそうだけど。それにしても、トラップとダミーってなに？」

爆発音を聞きつけ、斬るといふより叩きつけて攻撃をするためのハンマーの様な形をした鎌を持って駆けつけて来ていたリズベットがシューゴに訊ねた。

「ああ、聞いてなかった？君達に探してもらおう物にはいくつかダミーがあつて、それには必ずトラップが仕掛けられてるんだ。本来なら外敵から本物を守るためにあるんだけど、あの人がばら撒いた拍子に設定が妙な具合に変わっちゃったみたいなんだ。おかげで苦労してるよ……」

これには同意見だったのか、この騒ぎに集まってきた騎士団の面

々から溜め息が漏れた。

## 緊急事態発生

シューゴの誤爆騒動の被害者である銀漢（未だに透明）がグランディ達に担架で運ばれる間、広間は少し騒然としていたが、よくあることなのか騎士団の面々はすぐさまフェアリーダンスのメンバーの指導に戻った。

その後30分が経過し、ひと段落ついたので一休みしようとした矢先、唐突に事は起きた。

「緊急、緊急！カイトのパーティがスケイスを発見した模様ブヒ！手すきの騎士団員はすぐに応援に行くブヒ！！」

突然広場に響いた声はキリ ランディのものだった。

「何！スケイスだと！？」

一番最初に反応したハセヲはすぐさま転送ゲートがある通路の方に走り出した。そして他の騎士団員達も慌ただしく動き始める。

「トキオ、これは？」

キリトの問いかけに対し、トキオはフェアリーダンスのメンバーを一か所に集めて説明し始めた。

「急ぐから手短かに説明する。今モルガナがバラ撒いた力の内の一つを捜索班が見つけたらしいんだ。だけど、その見つかったスケイスは半端なく強くて好戦的だから結構まずいってわけ。カイトが本物の腕輪さえ持つてれば安心なんだけど、今もってるのはアウラが新

しく作った簡易版だから……くそっ！腕輪が先に見つかってれば……」

「ようはさっきシューゴさんが使おうとした腕輪の本物がないと勝ち目がないってことですか？」

シューゴが腕輪を使うのを間近で見ていたシリカが訊ねた。

「そうなんだ。今カイトやシューゴが持つてる腕輪でも足止めくらいはできるけど、やっぱり本物じゃないと回収することはできない。それが、もつと回収しやすい八相だったら何とかできたのに、よりにもよってスケイスだなんて……」

「その八相ってというのは？」

「まあ詳しい説明は後ですけど、ようは力の塊が8つの形に別々の特性を持つて生まれたもので、スケイスはその中でも攻撃面に特化してる。あと八相には各々使役する人がいて、スケイスを使役していたのはハセヲだったんだ」

「それでハセヲくんはスケイスって聞いて、目の色変えて飛び出していつちやったのね……」

アスナが納得するように頷く。

「そうなんだけど、いくら碑文使い、あ、碑文使いは八相を使役する人のことね。スケイスの碑文使いのハセヲが行っても、腕輪の力で弱体化した後じゃないとなんとでもできないし、どうするかなあ……」

頭を抱えてしまったトキオに対し、今まで黙って聞いていたリーファが口を開いた。

「じゃあ腕輪を探してくるしかないじゃん？どこか検討はついてな

いの？」

「今まで騎士団の連中が必死になって探してたんだろ？それでも見つからないってことは……」

クラインが珍しく後ろ向きな発言をする。

「でもまあ確かに今の状況を聞いた限りでは最悪ですね……ここは回収はあきらめて、カイトさんとやらのパーティーが撤退するのを助けに行ったほうがいいんじゃないですか？」

（シンカーまで……だけど確かに、まだ来て間もない俺達にできることなんてあるのか？）

キリトも含めた他のメンバーも後ろ向きな考えを持ち始めた……その時！

「あるわよ」

適当な感じの音が部屋に響いたかと思うと、メインホールにあつたのと同じくらいの大きさのウィンドウがその場に展開された。そしてそこに映っていたのは……

「その声は……」

「ハロ、モルガナよ！みんな、まだ生きてた？あら、元気なさそうね、どうしたの？」

この場にそぐわない能天気な声を出しているモルガナにキリトは思わずツッコもつとしたが……

「って、元はと言えばみんなあんなのせいだろうがあー！ー！！」

トキオがキリトよりも早く、盛大なツツコミを入れた。

「あんたが適当なせいで、どれだけオレたちがどれだけ苦労してると思ってるんだよ！」

色々溜まっていたのか、悲痛な声をしている。

「あらトキオ、せっかく大人っぽく振舞ってたのに、それじゃ地がでまくりよ。せっかくツツコミキャラからも抜け出せて、頼れるリーダーっぷりを発揮してたのにw」

わなわな震えるトキオに対しにやにやするモルガナ。そしてトキオがさらなるツツコミを入れようとした瞬間、図っていたかのように（いや、絶対にわざとだ……）モルガナが先にしゃべりだす。

「あ、そうそう、カイトの腕輪のある位置の検討がついたから連絡しに来たの、すっかり忘れてたわw今位置情報送るから、あとはよろしく〜」

そう言い残してスクリーンはブラックアウトした。

トキオは未だに怒り心頭でわなわな震えていたが、なんとか心を落ち着けられたのかさつと手元を操りメニューを操作した。そして目当てのものを見つけたのだらう、また頭を抱えだす。

一瞬考えこんだが、すぐにトキオはキリト達の方に顔を向けてきた。

「キリト、それにみんな……来て間もなく、しかも基本的なレクチャーしかしてない状況ですまないんだけど、みんなの力が必要なんだ。頼む、力を貸してくれ！」



トキオによると、どうやら腕輪があるかもしれない場所はあるらしい。その内のどれかには確実にあるらしいが、どれが本物かはまったくわからないのだそうだ。

今現在腕輪の探索部隊は1組しかなく、新たに数パーティー作る人的余裕は今はないそうだ。

「ま、やるっきゃないだろ！」

そう言ってクラインがキリトの肩を叩く。

「ここはいつちよ働きますか！」

「これもイベント進行のためだしな……」

「そうね、ここはやるべきでしょう！」

みんな口々に協力に同意していく。

「乗りかかった船だしな……」

キリトはみんなが賛成なのを確認した後、トキオの方を見ていった。

「俺達はいつでもいいぜ。トキオ、指示をくれ」

.....

The Worldでのパーティーの人数制限はないそうだが、

あまり大所帯だと動きにくいいため、フォーマンセルが基本で多くても5人1組らしい。今通常任務やスキースの対応に追われていて、大多数の団員達が出てしまっているので、とりあえず1チームにつき1、2人団員を入れることになった。

第1パーティーがキリト（デュアルエッジ）、アスナ（ブレイド）、ユイ（ウォーロック）、そして団員からは櫛（フリッカー）。

第2パーティーはリーファ（ブレイド）、レコン（マルチウエボン）、サクヤ（ダンスマカブル）、アリシャ・ルー（グラップラー）で団員から昴（パルチザン）とミレイユ（ハーヴェスト）。

第3パーティーはシンカー（ウォーロック）、ユリエール（スチムガンナー）、エギル（パルチザン）で、団員からはエルク（ハーヴェスト）とミア（ブレイド）。

最後の第4パーティーはシリカ（ツインソード兼ビーストテイマー）、リズベット（フリッカー）で団員からはメトロノーム（特ツインソード）、凰花（グラップラー）と月長石（ツインソード）が加わることになった。

残りのクライン（ブランディッシュ）、ユージーン（ブランディッシュ）、サーシャ（ハーヴェスト）はスキースと戦っているレイドパーティーの助っ人に行くことになった。

すでに現場へと向かったトキオの代わりに場を仕切っていたキリランディは全員を見回して、高らかに号令をかけた。

「よし、それじゃ行動開始だブヒー!!」

大いなる 黄昏の 付喪神

「しっかし広いなあ」

そう言ながら、キリトはただっ広い草原を手をかざして見渡す。緑色の絨毯の上を、心地よい風が時々吹いて波のようにさざめいている。天気は雲ひとつない快晴で、こんな時でなければピクニックにでも行きたくなる陽気だ。いや、それより木陰で昼寝とか……

「このフィールドはThe Worldの中でもすごい環境ですね。でも今は急がなくてはいけないので、堪能するのはまた今度ということだ」

キリトの隣に立っている小さな角の生えた少年櫛はおどけたように言うと、何やら笛を取り出し、ピーツ！と軽く一吹きする。

しばらくすると、彼方からドタドタドタツ！と土煙を上げながら、カバと牛を足して2で割ったような微妙な姿をした生物が2匹駆け寄ってきた。

「わー、かわいいですう！」

櫛の側で立ち止まった妙な生き物にユイが駆け寄る。

（かわいい……のか、あれ？）

「彼らはプチグソと呼ばれる種族の大人達です。右のナルシスト風

の彼がクソキゾクで、左のパンクっぽいのがクソザロツカーです」

ボンジュール！や、さつさと乗りやがれ！など個性的な挨拶をそこそこにすませ、櫂とユイがクソキゾク、キリトとアスナがクソロツカーに跨り、クソキゾクを駆る櫂を先頭に出発した。

外見とは裏腹に以外に乗り心地は良く、あまり動物に乗りなれていないキリトやアスナでも快適に馬（？）上の旅を楽しめる。

「あの黄色い円の近くに行くとは普通はモンスターとエンカウントしちゃうんですけど、今は彼らに乗っているので大丈夫なんです」

櫂が指差した黄色い円をいくつもやり過ごし走ること20分、乗っているだけなので疲れることはないがただ走っているだけなのでこれからどうするのかとキリトが櫂に聞こうとしたちちょうどその時、目の前に大きな古城が見えてきた。その城は見るからに強いボスMobがいますよ的な外観だったが、一番目を引かれたのは城の中央からそびえている天まで届くと言わんばかりの巨大な塔だ。

城の目の前まで着き、キリトたちを運んでくれたクソロツカーとクソキゾクが走り去っていくのをアスナとユイが手を振って見送った後、城をじっと観察していた櫂がキリトたちの方を振り返り、ニコツと笑って話を切り出した。

「これが今回の目的である腕輪の反応があつた城です。中では強制的にエンカウントさせられるので、ここからは気を引き締めてくださいね」

おどけながらも少し真剣な感じで忠告する櫂。

そんな櫂に、キリトは軽いノリで返した。

「戦闘は望むところだぜ。実戦で動きやスキルの感じとかをチェックしたかったしな」

「あんまりはしゃぎすぎないでね、キリトくん。調子に乗ると、また痛い目見ちゃうよ」

「そうですね。パパはいつもは格好いいけど、ときどき間の抜けたことしますし」

アスナとユイにいつもの調子でたしなめられ、苦笑いしながらキリトは先頭に立って城の門をくぐって中へと入って行った。

- - - - -

城の中に入ると、蝋燭の灯りが反射して大理石の床が冷たく光る、大きな広間に出た。城内はその蝋燭の明かりだけが光源なので薄暗く、城というよりは幽霊屋敷みたいだ。

こつこつという雰囲気が大の苦手なアスナはユイの手をしっかりと握りながらキリトの後ろを若干しがみつくようにしてついてきている。

「ここはモンスター達が巣くう城という設定ですから、こんな感じなんです」

「その言い方だと、他にも別な感じの城があるのか？」

「はい、そりゃあもう色んな種類がありますよ。まあでもそれはおいおい見る機会があるでしょうし、今は目の前に集中してください。ほら、見えてきましたよ」

広間の丁度中心くらいの位置にフィールドで見かけた黄色い円が浮いている。

「この城の敵はそこまで強力なモンスターは出ないですから、とりあえずはお手並み拝見しますね」

そう言っつて櫂はキリトに道を譲る。

そして、そう言われてしまったらキリトも引き下がれない。

「よし、いつちょ暴れるか！」

キリトはエフェクトと共に剣を抜き取り構え、黄色く輝いている円に静かに歩み寄る。

シャーーン！

硝子が碎けるかのような軽快な音が鳴り響き、黄色い魔法陣が掻き消えてキリトの目の前に3体のアンデット風のモンスターが現れる。

視線を向けると、黄色いカーソルが自動的に合って敵の名称、ポーンアーミー とHPバーが3本視界の左上に現れる。

「フッ！」

そして、相手がアクティブになる前に、キリトは一気に間合いを詰めて真ん中にいる敵の懐へと潜り込む。

「ラァッ！」

下段に構えた左手の剣をキリトは一気に振り上げた。刃が骨だけの体に食い込み、鋭い振りが銀色の線を描く。

一撃でHPバーの半分以上が削られたポーンアーミーは、口をカクカクさせて声なき声で叫ぶ。

(おっ?)

予想以上の手応えに少し驚きながらも、キリトは手を休めず追撃に右手の剣で敵の体を真横に断ち斬る。

口を開いたまま体を硬直させたポーンアーミーは、あっという間にポリゴンとなり碎け散る。

その時になってようやくカーソルが赤に変わり、キリトを敵と認識した残り2匹のポーンアーミーがキリトに切り掛かろうとしたが……

「遅い！」

キリトは両方に一太刀づつ喰らわせ、HPバーが半分を切ったのを視界の端でちらりと確認する。

「喰らえッ！ 双刀・鬼輪牙 ！！！」

SPを消費して繰り出される範囲系二刀流スキルが2匹のポーンアーミーが一片にヒットし、壁まで吹き飛ばし叩きつける。

そして、崩れ落ちた先で2体の敵はポリゴンの欠片となって爆散した。

「ふう……」

「お見事です」

パチパチパチと子供のようににはしゃいで拍手をしている櫛が駆け寄ってくる。

「ま、ザッとこんなもんかな」

「もっつ、あんまり調子に乗ったらダメだよ、キリトくん」

櫛に称賛に満更でもないかのように照れているキリトをアスナが少し呆れた様子で窺める。

「櫛さん、あれってなんですか？」

アスナの隣でキリトの戦いを見ていたユイが指差した先には青色をした見るからに宝箱っぽいものが置かれていた。

「ああ、あれは戦闘時に時々手に入るトレジャーボックスですね」

「おっ、ラッキーじゃん」

キリトが一瞬宝箱に歩み寄ろうとしたが、すぐにその動きを止めて櫛を振り返った。

「そういや、トレジャーボックスなんだから、もちろんトラップ付きって可能性もあるんだろ？」

「はい。でも、この金の針を使えば解除できるので、使ってください」

櫛がメニューウィンドウを操作すると、キリトの目の前にトレードウィンドウが現れ、金の針がプレゼントされたというテキストが流れた。

「いや、タダで貰っていいのか？」

「はい。普通に戦闘していれば結構手に入るので、どうぞ」

「んじゃ、遠慮なく……」

キリトが金の針を実体化して青い宝箱の鍵穴に差し込むと、宝箱



の色が青から木の地の色に変わった。

そして、キリトが宝箱に手をかけたと同時に……

「あ、でも、時々金の針でも解除できない2重トラップがあるんで、注意してくださいね」

「えっ……?」

言われて振り返ったキリトだったが、すでに遅く宝箱が開き、そして……

.....

「へー、やりますね。トキオさんから聞いた通りの実力です 環  
伐式閃 ！！！」

櫂は楽しそうに言いながら対峙しているゴーレム型モンスターを  
巨大な鎌で横薙ぎにして胴を断つ。

「いやあ、それほどでも ツイン・バクリボルバー ！！！」

キリトも強く踏み込んで、目の前に現れたゴブリン系のモンスター  
一達に一気に接近し、炎を纏いながら高速回転するスキルで敵数体を  
一気に切り刻む。

「そうねえ、キリトくんは、強いよねえ！」

アスナもさらに出てきたウルフ種モンスターの群れに高速の突き

を喰らわせ一瞬にして塵に変えていく。

「運はないけど……」

「僕もちゃんと忠告してませんでしたけど、まさか宝くじで100k当たるくらいの確率に初見で引つかかるなんて、思ってたかったもので」

文句を言いながらもやれやれといったジェスチャーをしているアスナと、言外に運のなさを可笑しがっている櫛に言いたい放題言われているキリトはムスツとしていた。

「ぐっ、運のないのは認めるけどさ……まあ、俺はすでにキレイな嫁さんとカワイイ娘がいるから、リアルラックにこれ以上何も求めないさ！」

燃え残ったゴブリンを叩き切りながらサラッとキリトが言った言葉にアスナは一瞬にして顔をボツと赤く染め、しかし迫りくるMorbに言い返す言葉を考える余裕がなく、何とも複雑な表情をしながら新たに現れた機械系Morbへとその感情をぶつけるかのように切り掛かる。

キリトはキリトで、自分が言ったこっぴどかしい発言に同じく若干顔を赤くしながら、アスナに続く。

そんな二人を櫛は生暖かい目で見ながら、呪紋を一心不乱に唱えているユイの前に陣取った。

宝箱はやはりというかなんというか、夕チの悪い2重トラップだった。宝箱が開いた直後、瞬く間に四方の扉や通路に鉄の柵が落ちてきて通れなくなり、さらに追い打ちをかけるように宝箱があった場所には黒い魔方陣のような物が浮かび上がり、そこからモンスターが現在進行形でじゃんじゃん湧き出てきている。

「このトラップはパーティーメンバーに合わせて変わるので……、今回あの魔方陣を壊すには、ハーヴェストの特殊な呪紋が必要ですね。というわけでユイさん、よろしくお願いします」

「はい！まかせてください！」

ユイは目をつぶり、杖を両手でしっかりと持って集中している。今のところキリトたちの役目は詠唱中の無防備なユイを守ることなのだが……

「こりゃ、数が多すぎるな……」

あの運営側の悪意をヒシヒシと感じさせられた旧ALOの世界樹攻略戦ほどではないにしろ、ウンザリするようなMobの大群だ……

「そうね、一体一体はわたし達の敵じゃないけど……」

「まあ詠唱にはそこまで時間はかかりませんし、これなら大丈夫でしょう」

櫂の能天気な声を聞きながら、キリトとアスナはさらに湧いてくるモンスターの群れに突っ込んで行った。

.....

「ふー、なんとかしのげたわね」

アスナがレイピアを鞘に入れながら溜息をつく。

その横で呪紋の詠唱を成功させたユイもほっとした表情をしている。

「いやー、でもみなさんなかなかいい腕前してますね」

「まあ、俺たちもダテに鍛えてないからな」

キリトはそう答えながら、こそそとアイテム欄をチェックしていた。そんな怪しい行動に気付いたアスナは、隠すひまもなくメニューをのぞいてきた。

「ゴブリンの生肉、サソリ坦克の爪に……ヘビグソの尻尾!？」

「いや、アスナ、これは……」

アスナがじとーっとした目でキリトを見ると、櫻が余計な口を挟んだ。

「おや、これはなかなかのゲテモノ食材ですねw」

「いや、SAOやALOでもそうだったけど、こういうゲテモノな感じの食材が案外いけたりするんだよ!」

「そんなこと言って、誰に料理させる気なのかしら?」

「そりゃあネットでもリアルでも料理の天才アスナさんに頼みたいかなーっと……ってはい、無理ですね」

「ムリです」

一言で切り捨てると、アスナはすぐにキリトの手を使ってメニューを操作し、全ての食材を消去してしまった。

「あーっ、もつたいな……くないです、はい」

「もー、パパもそのいけそうならなんでもありっていうのは治した方がいいと思います」

キリトが心底残念そうに振る舞っていると、ユイが父親の情けない姿を見てため息をつきながら、あきれかえっている。

それを聞いてさらにがっくりとした感じを体全体で現したキリトに、櫛が明るく話しかけてきた。

「まあ騎士団にもああいう面白い食材を集めたりしている人達の集まりがあるので、こんど紹介しますよ」

そんなこんなでキリトたちはさらに先に進んで行った。

それ以降は特にトラップといったものはなく、通常の戦闘だけだった。そしてただの戦闘でキリトたちがどうにかなるわけもなく……

蒼天大車輪 ！！

櫛が空中で鎌を振り回して空中の敵を撃ち落とし、

アニスラツシュ ！！

アスナが敵を細切れにし、

獄炎双竜刃 ！！

キリトが炎を纏わせた高速の剣戟をくりだし相手を灰にした。そしてキリト達のうち誰かが少しでも傷つくと、

ラウリプス ！！

ユイがHPを回復してくれ、まさに言うことなしだ。

しかしそんな快進撃も長くは続かなかった。

-----

「行き止まり？」

今までも枝分かれした道は結構あったが、妖精のオーブ（レア度は中の上で結構貴重なものらしい）と言うアイテムを使っていたのですぐにマップが表示され、正しい道がわかった。

しかしマップを見てもどうやらここは完全な行き止まりらしい。

「いえいえ、そんなことはないですよ。ほら、あれを見てください」

櫂が指差す方向を見ると奥の方にリフトらしきものがあった。

もっと近くで見ようとキリトが歩き始めると、何かむにゅりとしたものを踏んでしまった。

「ピギャー……ッ」

それは面妖な悲鳴を上げると、スタコラサッサと逃げ去って行く。

「なんだ、あれ？」

キリトが闇に慣れた目をさらに凝らすと、リフトの近くにも何か丸っこいものが頭の上を薄く光らせながらチョココマ力走っていた。

「あれはチムチムですね」

「チムチム？」

「へえ、かわいいです」

アスナとユイがしゃがんで手を差し出して、猫にするようにおいでおいでとすると、何匹か固まっていたのがこちらによちよち歩いて来て、二人にじゃれついてきた。

そんな和やかな雰囲気の中、そろりそろりとチムチム達の後ろからこっそり忍び寄っていた櫂は、いきなりそれらの内の1匹をふん捕まえた。

慌てたチムチム達は、ピーピー鳴きながら櫂の周りに群がって、必死に捕まった仲間を助けようとしている。

「ちょっと、ちょっと、何してるの櫂くん！？早く放してあげなよ！」

櫂のあまりにもいきなりな行動に、アスナはびっくりして慌てて問いただした。

「いやあ、実はチムチムの頭の上に点いている光の玉はこの世界にあるギミックを動かすことができるエネルギー源なんです。これがないとそのリフトも動かせないのです……」

そう言いながら、櫂はチムチムの頭の上の光る球をそっと取った。

「こっやって取るんです」

その後光る球を失ったチムチムを群れに帰してやると、一斉に逃

げ出してしまった。

「でもどうやって採るんですか？もうチムチムさん達に警戒されちゃってますよ……」

確かに、先ほど俺が踏んだのに加えて、櫂の行動で完璧にチムチム達に避けられている。

「手やチムチム取り網などの道具を使って捕まえるのもいいですし、ハセヲさんなんかは蹴りつけて玉を落としてますね」

「けっ、蹴り……」

そのあまりにもむごい仕打ちにアスナは絶句した。

「まあ玉が手に入ればいいので手段は問わないんですが、やっぱり蹴るのは……と思うながらんばって捕まえましょう」

そう言つと櫂は大鎌をしまい、大きめの虫取り網（チムチム取り網？）を4本取り出しキリトたちに放つてよこした。

チムチムは外見通りすばしっこく結構捕まえるのに時間がかかったが、ほどなく必要な数をそろえられた。

「ふー、大漁大漁！」

「いやー、たくさん獲りましたね」

「ちよつと楽しかったです」

「虫取り網って小さい頃田舎で使って以来だけど、やっぱりおもしろいわね」



最初はチムチムを捕まえるのに少し躊躇していたアスナとユイだったが、慣れればチムチム達と遊んでいるように感じたようだ（まあチムチム達にとってみたら大迷惑だらうけど……）

そんな感じでのほほんとしていると、不意に辺りが暗くなった。元から暗かったが、今はまるで暗闇の中で数少ない明かりを一気に消されたかのようで、闇に慣れた目でも何も見ることができない。そして続けざまにおどろおどろしい……というか恐ろしいんだけどどこか間の抜けているBGMが部屋に響きわたる。

「あー、これはちょっとまずいですね……」

いままでどんな状況でも動じず飄々としていた櫂の聲が、微妙にげんなりした感じを含んでいた。

「櫂、いったい……?」

キリトがさらに言葉を紡ごうとしたその時、暗がりからぬうつと巨大な影が現れた。

「チムチムウ〜〜〜!!」

それは部屋の天井に頭が付きそうなくらい巨大で、蝙蝠みたいな羽が背中(?)から生えてる漆黒のチムチムだった!

「これはデビルチムチムです。チムチム達を捕まえているとごくごく稀に出てくる激レアチムチムですね」

デビルと名がつくくらいだから凶悪なのだろうが、表情や姿に愛

嬌があつて、コケティッシュになっている……

「えーっと、レアってことはラッキー、てわけじゃないのよね……」

アスナが嫌な予感……と言わんばかりに櫂に尋ねた。

「まあ数あるチムチムの中で当たりたくない類ナンバー1ですね。しかもダンジョンの中で会うとはこれまたやっかいな……」

「ダンジョンの中だとなにかまずいんですか？」

ユイが心配そうに尋ねると、櫂はまた元の飄々とした感じに戻った。

「いえ、そんなにえげつないわけではないですし、ある意味最終的にはショートカットできていいんですが」

「ショートカット？ワープでもさせてくれるの？」

「いえ、ボクたちが今目指してるのはここよりさらに上の階の王の間なんです、このチムチムは虐げられたチムチム達のためにプレイヤーに復讐する、というのを名目にいたずらすることが大好きで、ダンジョンにいる場合目的地と逆の方向に行かせようとするんです」

「逆？ってことは上じゃなくて……」

キリトが下を見て、それに全員がつかられて床を見る。

するとその瞬間、フツと足の裏に感じていた感触がなくなり、部屋の床が消え去って大きな穴が開いていた……

「はっ？ってうわーーーーー！？」

「きゃーーーーー！？」

「ひゃーーーーー！？」

キリトたちはどしどし進むことまできないまま、真つ逆を歩くと入  
へと落ちていった……

「いたたた……あつ、キリトくん、大丈夫!？」

「ははは、なんとか……」

キリトはアスナとユイをかばって下敷きになるように地面に落ちたため、かなりのダメージを受けていた。体中が軋むような鈍い痛みを感じながらも、HPは半分ほどしか削られておらず、無事だった。

まあもしこれが現実だったら例え生きてはいても骨折やら痛みでまともに動けない（ついでに体の描写も16禁になるくらいエグくなる）だろうが、ここはゲーム内（全年齢対象）なので、体に目立つた外傷はなくすぐに痺れが引いていき、ほどなくすると体を動かせる程度になった。

「パパ、すぐに回復しますね!」

ユイはキリトの上から急いで降りて回復呪紋を唱える。

緑色のやわらかい光に包まれ、キリトのHPゲージの欠けていた部分が瞬く間に埋まっていくと同時に、体を支配していた鈍い痛みが掻き消え、意識が完全にクリアになる。

「それで、ここはいつたいたいなんだ、櫛?」

キリトはいち早く起き上がって辺りを調べていた櫛に尋ねた。

キリトたちが落ちたところは少し広めの地中を掘って作られたトンネルのようなところだ。高さは5mぐらいで立ち上がったも充分余裕があり、逆に横幅は人が4、5人に通れるくらいのゆとりしかなく、モンスターと遭遇した場合少し厄介かもしれない。

キリトの問いに櫂はいつものように飄々とした感じのまま笑顔で答えた。

「どうやらここはトラップパークらしいです」

櫂の話によると、落とし穴は序の口でここはチムチム特製のトラップパークで、名前通りトラップ満載の場所だそうだ。あの巨大チムチムはいままで捕まえられ玉を奪われたチムチム達の怨みが集まってきたものらしい。それでも本来なら温厚なチムチムの怨みがあそこまででなくなるはずなのだそうだが……

「どうやらいちいち捕まえるのをめんどくさがってハセヲさんみたいに蹴りを入れる人が増えてから、あのチムチムは巨大化し始めたみたいですね」

(なんつうはた迷惑な……)

まあ今文句言ってもしょうがない……というわけで、時間もなしキリトたちは急いで出発することにした。

.....

30分後……

「うっひゃー……っ！」

数多のトラップをくぐり抜けそろそろゴールか……というかまだ

終わらないのかこれ？と思っていると、それを察したのか緩めの傾斜の坂を下っている最中に『まだまだああああ！』と、ツッコムかのように巨大な岩が転がってきた。

全速力で坂を駆け下りるキリト達の後ろからゴゴゴツ！と凄い音をたてながら巨大な岩が猛追してきている。

「なんなのもー！ー！？」

「さっきからこんなのばかりですう〜！」

アスナとユイも俺の前で叫び声をあげながら飛ぶように走っている。

「あつ、あそこが出口みたいですね。みなさん、もう少しですよ」

そんな中一人俺達の先頭にたって走っている櫛は飄々とした感じをまったく崩していない。

「通路を出たら左右に散ってくださいね。この先は崖になっていますから」

櫛はかなり重要なことをさらつと言ながらスピードを殺し、通路を抜けそのまま左の方に転がる。

「よし、アスナとユイは右に、俺は左に避ける！！」

「わかったわ！」

「了解です！」

岩との距離はまだ結構ある……出口まであと少し、いける！と、キリトが確信した瞬間、目の前でユイが転んでしまった。

「あつ!？」

アスナが急いで止まろうとするが、全速力で下っていたため急には止まらない。

「アスナ、ユイを頼む！」

キリトはそう言ってユイを拾い上げ、出口に向かって放り投げた。アスナはキリトの言葉を瞬時に理解してくれ、出口ぎりぎりの所で待っていてくれた。ユイをキャッチするとそのまま右の方に逃げる。

「キリトくんっ、早く！」

(くっ、間に合うか?)

岩はすでに俺のすぐ後ろにまで迫っている。

(だめだ、これじゃ曲がる為に一瞬止まって勢いを殺してる内に潰される……)

キリトが頭をフル回転させてなんとか打開策を叩き出そうとするが、出口は目の前。

だめか!?!とキリトが覚悟を決めたその瞬間、出口の左側から腕が出てきた。

「キリトさん、つかまってください！」

キリトは無我夢中でその手を掴んだ!

手を出してくれた櫂はそのままキリトを左にぶん回す。

「サンキュぐはっ……!?!」

キリトはぶん回されながらも礼を言おうとしたのだが、勢い余って壁に激突してしまい無理やり中断された上に舌をおもいつきり噛んでしまった。

「キ、キリトくん!大丈夫!?!」

「パパーっ!しっかりしてください!」

「あはは、少し勢い付きすぎちゃいましたねw」

そんな言葉と岩がガラガラ落ちて行く音を聞きながら、キリトは大の字になって少しのびていることにした……

「しかし、よくもまああんなにベタなトラップばかり仕掛けたもんだ……」

キリトが呆れ半分感心半分で言うと、アスナがしみじみと話しました。

「でもああいうのって、物語の中で出てくる分にはよくあるって感じで今さら特に驚かないけど、実際受けてみると結構大変だったね」

たしかに、迫る壁（槍袂付き）や大量の矢が飛んできたりとか、水攻めにされそうになったりとかいかにもという感じのベタなトラップばかりだったけど、どれも実際に体験してみると、結構新鮮に感じられた。

「まあアトラクションみたいで、楽しかったっちゃー楽しかったか



な

キリトがおどけた感じでいうと、みんな苦笑した。

「さて、キリトさんも回復したことですし、最後のトラップに引っ掛かりましたようか」

「あれ、まだトラップあるんですか？それに、引っ掛かる……？」

ユイが疑問符を浮かべると、櫂がニコニコ顔で答えた。

「最後のはトラップというより王の間、つまり僕たちの目的地に一直線で行けるギミックがあるんです。

もともと温厚なチムチムなので、こちらが痛い目を見れば気が晴れて、最後にはいい風に働いてくれるんですよ」

「なるほど、だから大変だけどショートカットってわけか」

「はい。それはそうとみなさん、下に何か見えませんか？」

下？とキリトたちが崖に近づいて見降ろしてみるが、真っ暗で何も見えない。

「おい、櫂、なんにも見えないぜ？」

そう言っつてキリトが後ろを振り返ろうとした瞬間、後ろからポンッとして背中を押された……

「は？ってまたこれかよー！？」

「きゃー！？」

「ひゃー！？」

またまた転落コース……

「あ、出てきましたね、よかった」

「どうやらキリトたちを突き落とした張本人も続いて飛び降りたよ  
うだ。」

「みなさん、あれに向かってください」

よく見ると、遙か下の方に薄く光るネットみたいなものが見える。  
キリトたちはとりあえず言われた通りに空中を泳ぎながら、なん  
とかそのネットの上の位置まできた。

「それではみなさん、飛びますよ」

「いや、飛ぶって、俺たちすでに飛んでて今は絶賛落下中っていう  
か……っあ、もしかして……」

「あれって……」

「トランポリンですか？」

3人で言葉をつないだと同時に、そのネットに触れた。

もの凄い衝撃を覚悟していたキリトだったが、あれほどの高さか  
ら落ちてきたのに衝突の痛みは全くなく、今までしていた風鳴り音  
がなくなり逆に静かになったくらいだった。

「これなら大丈夫か？」と一瞬思ったが直ぐに後悔した。

「これはジェットコースターという頂上に達した状態であって……」

「あれ、なんだか大丈夫そって、うぎゃー！？」

「きゃー！？」

「ひゃっ……」

ものすごい勢いでキリトたちは飛び上がり、ぐんぐん上昇していく。

凄まじい圧力に歯を喰いしばって耐える。

キリトとアスナはまだなんとか悲鳴を上げる元気があったが、どうやらユイはダウンしたらしい。

ロケットによって宇宙に上がるのってこんな感じなんだろうなー、なんて思いながら、キリトはとりあえず意識のないユイを自分の方に引き寄せ左手で抱え、残った右手をアスナに差し出した。

アスナがその手を握ったのを確認して、とりあえず目的地に着くまで待つことにした。

「ぶはっ！」

「きゃっ!？」

「……………」

飛び続けたキリトたちはようやく長い縦穴から抜け出し、塔らしき建物の広間にたどり着いた。

感覚的には何時間も飛んでたようだったが、実際は5分くらいしかたっていない。

「いかがでしたか、空の旅は？」

櫛が何事もなかったかのように穴から飛び出してきてストーンツ！と着地し、開口一番尋ねてきた。

「け〜や〜き〜くん!!」

「あれ、もしかして怒ってます?」

櫛がとぼけた様子で聞き返すと、アスナはへたり込んでいた体を起こした。

「あ、た、り、ま、え、で、しょ!飛ぶなら飛ぶって先に言っよ!」

「まあまあ、アスナ、そんなに怒るなよ。あんな特大トランプリンなんて普通ないし、ある意味これもいい経験だったろ?」

キリトが怒り心頭のアスナをなだめていると、櫛が少し申し訳なさそうに言葉を返す。

「いやあ、すみませんでした。でも実はあの岩に追いかけれ終わ  
った時点ではまだチムチムの気が済んでいなかったの、しかたな  
くキリトさん達にさらに驚いてもらったわけですw」

「なるほど……ん？でも、もし俺たちが落ちてもチムチムが納得し  
なかつたら、あのネットは出てこなかつたんだろ？その場合どうな  
つてたんだ？」

「……………まあそんなことより、ついに目的地も目前ですよ」

(まさかあのまま永遠に落ち続けてたんじゃ……………)

さすがのキリトもさらに言及しようとしたが、そんな考えは隣で  
絶賛説教モード中だったはずのアスナの驚いた声を聞いた瞬間吹っ  
飛んでしまった。

「キ、キリトくん、外見て！」

「ん？……な、なんだこりゃ!？」

キリトが外に目を向けると、そこはとんでもない高さだった。

上は吸い込まれそうな闇色の宇宙に描かれた満天の星空、下には  
雲がところどころ広がり隙間からいくつもの島や海が見え、さらに  
地平線から太陽が昇ってくるのが見える。

「ここはもう大気圏を超えた高さなんですよ。どうです？絶景でし  
よ」

キリトとアスナはこの景色に呆然としてしまい、しばし言葉がで  
なかつた。

写真や映像で見たことはあるが、実際一(仮想世界だが)見てみ  
るとこんなにも綺麗なのか……

もちろんキリトもA.L.Oで空を飛んだことはある。しかしこんなに高いところから地上を見下ろしたことはない。

キリトはもっと近くで見ようと塔の淵に近づこうとした……が、櫂のいつの間にか取りだした鎌の先を服の後ろに引っ掛けられ、無理やり止められた。

「ぐへっ！？げほっ、げほっ……何すんるだよ、櫂！？」

キリトが少しええきながら櫂のほうを見ると、首を絞めた張本人は苦笑いしながら説明した。

「あんまり近づくと、落ちちゃいますよ」

キリトを引きとめた櫂は入れ替わりで前に出ると、メニューウインドウを開きユイと同じくらいの大さのある立方体の金属製の塊を取りだし、それを床に滑らせる。

そしてそれが淵の近くに行った瞬間、もの凄い速さで外に吸い出され、真っ赤に燃えながら地上へと落下していった……

「ねっ？」

（あっ、危なかった……）

とりあえずキリト達はユイが起きるまでの間、淵から十分に距離をとって外の景色を眺めることにした。

.....

ユイが少したってから起きてきたので、とりあえず小休憩を兼ね

た作戦会議をすることにした。

「このさきの扉の向こうに腕輪が変化したボスがいるはずですよ。それを倒せば腕輪ゲットです」

櫛がぶはーっとドリンクを一気に飲みきった後、気楽そうに言うてきた。

「簡単そうに言うけど、やっぱり強いんだろ？」

「そりゃあもちろん。それになにか特殊な能力がついていると考え  
ていいでしょう。あ、それとこれを……」

そう言うつて櫛はメニューを操作し、シューゴが付いていたのと同じような腕輪をキリトたちに手渡す。

「これは？」

「前回話しに出てきた腕輪の簡易版のヴァリエーションの内のひとつです。これを身に着けていれば数回だけデータトレインの効力から身を守ることができます」

「データトレイン？」

「この腕輪のオリジナルの能力の一つで、相手のデータを改変し弱体化したりプロテクトを外すことができます。もしなんの防御策もない一般PCがデータトレインを受けてしまうと、それだけで大変なことになってしまいますから」

「大変なことって、例えばどんなことですか？」

「……それはとりあえず言わないでおきます。まあ何回も受けなければ大丈夫なので、そこだけ覚えておいてください」

櫛が言葉を濁したのに対して一抹の不安を抱いたキリトだったが、あまり時間が無い以上櫛の言葉を信じるしかないと割り切った。

その後他のパーティーに連絡を取ろうとしたが、取り込み中らしく繋がらなかったため、とりあえず進むことになった。

櫂を先頭に最後の階段を昇り切り、扉を開けるとそこは屋上に作られた闘技場のような場所だった。広さはかなりあり、だいたい感覚的には野球場くらいある。

そしてその中央に人影がぼつんと立っていた。それは全身が影のように黒く、その姿形はキリトたちが聖堂で対峙した葬炎や、グラシホエールにいたシューゴにシルエットが似ている。

「これはまた、少しやっかいですね……」

櫂が呟いたと同時に、その影はゆっくりとキリトたちの方へと顔を向けてきた。

全身真っ黒で、目があるかどうかさえわからないが、そいつが放つ視線はNPCでは到底出せないような鋭く研がれたナイフを喉元に突きつけられたような、百戦錬磨のキリトをもぞくつと戦慄させるものだった。

キリトたちも相手の出方をうかがって動けずにいたので、お互い少しの間睨みあう形になったが、その静寂もすぐに破られた。

「グオオオオオオオオ！！」

そいつはいきなりものすごい雄たけびを上げると、体がぶくぶく膨れあがりどんどん巨大化していった！

ターゲットを合わせると視界の左上に3本の長いHPバーと、名



称 黒炎の守護者 が表示される。

「ベースはやはり蒼炎の守護者のアバター形態ですか……」

櫂はまた呟くと、キリトたちの方を振り返った。

「どうやら僕たちがあたりを引いたみたいです。では作戦通りキリトさんとボクで前衛を務めますので、アスナさんはキリトさんのサポートを。ユイさんは後衛でバックアップをお願いします」

一瞬、キリトはやっぱり櫂一人で大丈夫なのか？と、尋ねようと思ったがすぐにやめた。

表面上は今までの飄々とした櫂だが、発する気配が全くの別物、今までキリトが戦ってきた強敵達と遜色つかないものになっている。

敵じゃなくてよかった……という気持ちと手合わせしてみたい、という気持ちがキリトの脳裏を一瞬よぎったが、動き出した目の前の敵の動きによりそんな思考はすぐにかき消えた。

そして激闘が始まった。

「アスナ、片方頼む！」

二つの巨大な輪が漆黒の炎を纏わせながらももの凄いスピードで回転しながら飛来してくる。

キリトはその輪に正面から突っ込んでいき、両手の剣を斜めに構える。

ギヤギギギイツ！！

二本の剣をレールのようにして上を滑らせいなし、輪の方向をそらす。

見事に輪の描く軌道を明後日の方向に変えることはできたが、輪に触れた剣の刃の部分が両方とも黒い炎に浸蝕されぼろと崩れ去ってしまう。

キリトはすぐに残った柄を投げ捨て、走りながらメニューウィンドウを操作し新たな剣を装備する。

しかしそれより早く、もう一つの輪がキリトの眼前に迫る！

「ヤアツ！」

ガキインツ！！

それを横からアスナが両手で持った片手剣で思いっきり叩きつけた！

強引に方向を変えられた輪は地面に突き刺さる。

輪は未だにギヤリギヤリツと回転しているが、かなり深く突き刺さっているので当分抜けないだろう。

しかし、アスナの剣の刀身もキリトのと同様ぼろぼろになって崩れ落ちてしまった。

「アスナ、下がってユイを頼む！俺は櫂を援護しに行く！！」  
「わかったわ！」

そう言ってキリトは前へ、アスナは後ろに駆けていった。

戦闘開始してからキリトは櫂と一緒に前線で粘っていたが、HPバーを1本削りきった瞬間、黒炎の守護者の後ろで飾りのように浮いていた二つの輪が突如黒炎を発しながら回転だし、キリトを強襲。剣で辛くも防いだキリトだったが、その勢いでユイのいる後方まで吹き飛ばされてしまった。

その後、その二つの炎輪に邪魔されて足止めを食っていたが、アスナの援護もありなんとかキリトは孤軍奮闘している櫂のいる敵の目の前、最前線まで戻ってこれたのだ。

「櫂、大丈夫か？」

キリトは聞きながら敵の二振りの巨大な剣から繰り出される攻撃を半分自分に引きつけ、櫂の負担を減らす。

「あつ、キリトさん、お早いお帰りで」

櫂はそう言いながらも敵の猛攻をまるで舞踊でもするかのようにふわりと避けている。

一撃喰らうだけでもがつつりHPを持っていかれ、おまけに炎傷と腐食効果まである攻撃を紙一重で避け、隙あらばすかさず反撃し

ている。

「まあ、ホント言うと結構きつかったんですけどね」

櫛の身のこなしは達人級と言っても過言ではない。

しかし、どれだけ避けても敵の攻撃は少しづつかすっていたらしく、ダメージは確実に溜まっているようだ。武器はどこどこ崩れかけ、いつもの飄々とした表情からは少し疲れが見え隠れしている。

「というわけで一旦下がって装備の変更をしたりするので、3分ほど頼みますね」

「3分か……まあ、なんとかなる、か、なっ！」

キリトは短く答えを返し、メニューウィンドウの装備品の武器欄をスクロールして、一気にありったけの武器を選択して、上へと放り出す！

メニューウィンドウのアイテム欄から飛びだした夥しい数の剣は、重力に従って雨のように降り敵とキリトの周りを埋め尽くす。

キリトは刀身がぼろぼろになった剣を放り捨て、地面から新たに二本の剣を抜き取り構えた。

「そんじゃ、ちょっと付き合ってもらっぜッ！」

キリトは気合の声を上げ、黒炎を従えている強大な敵へと一人立ち向かっていった。

後方でユイは一人雑魚M o bの大群に囲まれ波状攻撃を受けながら、辛くも善戦していた。

「リウクルズ！」

広範囲の水属性の攻撃が敵を押し流していく。

しかし敵はあまりダメージを受けた様子はなく、ふらつきながらも直ぐに起き上ってまたユイへと向かう。

「やっぱり、無詠唱じゃきついです……」

そう言いながら、ユイは新たに短い詠唱を始めた。

このゲームの呪紋の使用は、詠唱と無詠唱で別れる。無詠唱はその呪紋を言えば直ぐに発動するもので、前線のジョブも使うことができる。しかしその威力は弱く、牽制や攪乱くらいにしかない。逆に詠唱すると、かなり隙はできるがその分強力な呪紋になり、使い手であるPCのステータスや相手との属性の相性によっては敵を瞬殺することもできる。

また、詠唱は省略することもできるので、敵の強さなどで色々と変えることも可能だ。

ユイの実力なら、本来は少し長めの詠唱をすれば眼前の敵を一掃できるのだが、いかんせん敵の攻撃が後を絶たず、短い詠唱しかできずジリ貧状態になっていた。

「ふーっ、結構大変です……あつ、ママ！」

「ユイちゃん、大丈夫？」

アスナはユイの周り群がっている敵に光速の突きを喰らわせ、一

気に蹴散らす。

「ユイちゃん、さっそくで悪いんだけど、アプバクス（炎耐性UP）とアプアンダ（闇耐性UP）、それとアプドウ（スピードUP）がもう切れてるから、またみんなにかけて。その間も、またしっかり守るから！」

「はいです！」

そこにキリトに前線を任せた櫛が敵を蹴散らしつつメニューウィンドウをもの凄いい速さで操作するという離れ業をしながらユイたちの元へと駆けてきた。

「すみません、ユイさん。ついでに僕がい今までしていたグランホエールの工房とのアクセスもお願いします。さすがにあの敵相手だと片手間にやるのは少々骨なもので」

敵の攻撃が武器腐食効果（それも防ぎようのないくらいもの凄く強力な）を持つと分かった後、櫛はすぐにグランホエールのグランデイ達と連絡を取り、工房から直接武器をキリト達のアイテム欄に転送して貰うよう手はずを整えたのだ。

「わかりました、任せてください！」

櫛はユイに権限を譲渡して装備を整えると、休む間もなくすぐにキリトのいる前線に戻って行った。

「そちらはどうですか、グランデイさん？」

ユイが補助<sup>バフ</sup>や回復呪紋を無詠唱でテキパキかけながら、モニター越しに工房で武器をせっせと錬成しているグランデイ達に話しかけ

た。

「見ての通り、大忙しだブヒ！特にキリトの武器消費量が半端なくて、生産が追いつかないブヒ！！」

文句をいいながらも機械を操る手は休めていない。

グランディ達にも今回の敵が生半可のものではないとわかっているのだろう。

「もう少しだと思つので、がんばりましょう！」

「まあ、善処するブヒ……」

.....

キーンッ！

ボワッ！！

「くっ、次！」

キリトは避け切れず剣で防御してしまつた敵の攻撃により、またぼろぼろになつた柄だけの剣を捨て、半歩下がって追撃の一刀を避けながら新たに地面に突き刺さっている剣を掴む。

櫂が下がってから約2分、キリトは一人で敵の攻撃を捌きながらも隙を見て少しづつ反撃していた。

周りに刺してある剣はこの短い間の攻防ですでに残り半分以下になり、辺りには柄だけになつた剣の残骸があちこちに転がっている。しかしこれだけの剣を消費した甲斐あつて致命傷は受けず、残り2

本のうち、1本を1割ほど削ることに成功している。

しかし、いくら致命傷は避けているといってもカスツただけでもかなりのダメージを喰らい、さらに一瞬の気の緩みが即命取りとなる緊張感が精神的疲労を雪ダルマ方式で積み上げ、看過できないところまで溜まってきていた。

ユイが後ろから時々回復魔法をかけてくれていたが焼け石に水で、さつきからHPバーがレッドゾーンとイエローゾーンをいつたりきたりして、キリトの気力と体力をもガリガリ削っていく。

まるで数時間かのように錯覚した1分がさらに過ぎた時、櫂が前線に復帰してきた。

「お待たせしました、キリトさん」

体力を全快して装備も新調し、さつきよりはずいぶんましになっている。

しかし、やはりすぐには激戦の影響は抜けきらないのか飄々としている中にまだ疲れが見え隠れするのをキリトは見逃さなかった。

「なんだ、もう帰ってきたのか。こっちはそろそろ一人で片付けようかと思っただころだぜ」

キリトが手を休めないで調子よく言うと、櫂が珍しく笑顔でわななく苦笑した。

「そうですね。でもまあ本当にあと少しだと思っただころでもうひと踏ん張りしましょう」

言いながら、櫂は 蒼天大車輪 !と叫び、縦回転の大鎌系スキ





## ドレインアーク

虚ろに響いた技のコール名を空中で後方に逃れようとしている最中に聞いたキリトは、まるでアバターにあるはずのない心臓を氷の手で鷲掴みにされたかのような悪寒が全身を駆け巡るのを感じた。

今までにもVRワールドで死を覚悟させられるような攻撃を喰らったことは何度もある。

しかし、これはHPを削るだけではなく、まるでこの攻撃事態が死に直結しているような、現実世界でナイフを首に、頭に銃を突き付けられ死の恐怖に襲われたかのような感覚。

そして、砲身から放たれた黒い塊、聖堂で葬炎が放った何かに数十倍の悪意を流し込んだかのようなそれは、真っ直ぐキリトを追尾し、目の前に迫り……

「ハアッ！」

キリトと黒い球体の間に櫂が割って入り手にした大鎌を振り、その球体を力強い叫びと共に、真っ二つに切り裂く。

「櫂！」

キリトの口からでた櫂を呼ぶ声は、感謝だったのか安堵から来たのか当の本人にもわからない。ただ、どちらにしてもそれが早計だったことをキリトは次の瞬間知る。

ボワッ！！！

「ぐっ！」

「櫂！？」

何と、櫂が切り裂いた球体が黒炎となり、爆ぜて四方八方に飛び散ったのだ。

爆風に煽られ、体勢を崩すキリト。そして、四つん這いになりながらも何とか踏みとどまったキリトの上に飛び散った火の粉が降りかかり……

「なつ、ステータスが！？」

視界の右上にあるHPバーの横に示されていた炎、闇耐性等のバフが一瞬で掻き消え、代わりに炎傷や属性耐性低下等のデバフアイコンがずらりと並ぶ。それと同時に、体にバッドステータス状態時特有の倦怠感や鈍い痛みに加えて、半分まで減っていたHPバーが恐ろしい速さで削れていく。

さらに、櫂から貫つた透き通るように輝く腕輪が四分の一ほど真っ黒に染まっていた。これが意味することは……

（あれが、データドレインなのか？）

キリトは意外なまでに冷静な頭で淡々と事実を処理する。今まで感じたことのないような、システムすら超越したような圧倒的な力を受けて心が麻痺しているのだ。

そして、だからこそ、キリトは容易にそこら中に燃え散り辺り一帯が黒い火の海になっている中心、爆心地で櫂が黒い炎に憑りつかれながら倒れ伏しているのを見つけられた。

「櫂、大丈夫か！？」

「キリトさん、今のがデータドレインの派生技、ドレインアークです。お渡しした腕輪は後2回は持つと思います。それ以上は

……」

倒れ伏している櫂が顔だけ何とか動かしてキリトの方に向け、擦れるような声で話す。

キリトは思うように動かない体を引きずるように何とか動かして櫂の元へと向かおうとしたが……

「グオオオオオ！」

禍々しい叫びを上げながら、技後硬直から解放された黒炎の守護者が目の前まで迫ってきていた。

(ま、まじかよ……!?)

そして、黒炎の守護者の凶刃が櫂に振り下ろされようとしたその時……!

「ヤアアアツ！」

遙か後方からありつたけの力を込めるかのような雄叫びが響き、次の瞬間、敵の双剣と櫂の間に、閃光が割り込んだ。

キイイイイインツ!

巨大な双剣と、閃光の先端に銀の軌跡を描いていたレイピアの剣先が絶妙なタイミングで衝突し、金属と金属がぶつかり合う澄んだ音を奏でる。

「アスナツ!?’

その閃光と見まがう突進を見せたアスナは、黒炎の守護者の重量感溢れる一撃を突撃時の勢いと寸分違わぬ正確さで相手の双剣を突くことにより、辛くもパライに成功する。

リuParam !

そして、その僅かな隙を待っていたかのように遙か後方からユイの声がし、キリトと櫂に暖かい青色の光が降り注ぎ瞬く間に異常ステータスが回復していく。

「ユイ、助かった!」

「ありがとうございます」

キリトと立ち上がった櫂は一言づつ振り返らずに叫び、アスナに加勢する。

「オオオオオッ!」

「ヤアアアアッ!」

バッドステータス時の倦怠感が消えると同時に噴き出しそうになった恐怖心を吹き飛ばすかのように、キリトは雄叫びをあげ、櫂と共に駆け出す。

キリトと櫂は走っている最中にユイがかけてくれた回復呪紋やバフの内の一つ アプドウ のおかげで軽くなった体を駆り、大技の直後で鈍い動きを強いられている敵に斬りかかる。

炎にやられたのは何もキリト達だけではない。雑魚Mobも巻き込まれてほぼ全滅、厄介だった二つの炎輪も今は砲身に使われた反動が全く動く様子がない。

今がチャンスとばかりに3人は畳みかけ、見る見るうちに1割ほど減っていく敵のHPバー。

未だにフィールドに広がる黒炎の効果か、キリト達のHPも徐々に削れていくが、ユイの呪紋で何とか持っている。

「ここで、削り切りましょう!」

「オシツ!」

「まかせてツ!」

櫂の声に気合を込めた叫びを返したキリトとアスナは、怒涛の攻撃を繰り出した。

.....

「これで終わりだ! 旋風滅双刀!」

「いきますよっ、天葬蓮華!」

ドーンッ!!

キリトと櫂の最後の一撃が激しくエフェクトを輝かせながら決まった。

もの凄い音をたてながら敵の巨体が倒れていく。どうやらなんとか倒せたようだ。

「ふーっ、やっと終わったか」

「大変だったわね」

「もうへとへとです」

キリトたちがその場にへたり込みそうになりながら勝利の余韻に浸っている中、一人櫛だけがメニューを忙しく操作している。

「おかしいですね……敵を倒したことにより出現した腕輪の反応が小さすぎます。これではまるで……」

櫛がさらに言葉を紡ごうとしたが、キリトはその先をすぐには聞くことはできなかつた。

なぜなら目の前で倒れ、崩壊したはずの敵が核である腕輪を中心にどンドン復元していたからだ！

「さっ、再生した！？」

「なにそれ！？」

「反則ですー！！」

思わぬ事態にもかかわらず、キリトはすぐにアスナとユイの前に立ち両手に剣を構えて警戒する。すると、先ほどまでメニューを操作していた櫛が顔を上げた。

「わかりました、この敵は腕輪の一部を元に構成されているんです」「腕輪の一部？」

「はい。つまりなぜ腕輪の反応が複数したかということ、どれも本物だったからです」

「それで、どうすればこいつを倒せるの？」

「リーファさん達他のパーティーが向かった先の腕輪のボス達と同時に倒せば大丈夫なはずですよ。」

「ユイさん、至急みなさんと通信を開いてください」

「はいですー！」

そうこうしている内に着実に敵は元の形を取り戻しつつあるがその再生速度はかなり遅く、厄介だった炎輪も地に伏したままで、完全に復元するのにはかなり時間がかかりそうだ。

「どうやら再生するのは時間がかかるみたいですね……再生が完了する前にまた叩いて……」

「そして他のみんなとタイミングを合わせてこいつを倒すと」

「はい、それも調べた結果によると誤差1秒以内で倒さないとダメみたいですね」

(誤差1秒……)

「まあ、やるしかないか……よし、少し危険だけど、ユイは中距離で援護と他のパーティーとのタイミングの調整、櫂とアスナは俺と一緒に前衛を頼む。これで一気に片付ける！」

「わかったわ！」

「がんばります！」

「了解です」

そして、キリト達の戦いは最後の局面に入った。



腕輪探索―ボス戦（キリト編） - 02 - （後書き）

呪紋の詠唱と無詠唱は、自分が考えたオリジナルルールです。

これがあればウォーロックとかハーヴェストもさらに活躍できると思いましたので、付け加えました。

あと、今回キリトが剣をばら撒いた時の風景はオーチャアの無限の○製か、ソウルオーターのミフ○を思い出してくれればいいと思います（笑）

ちなみに、アイテムポーチとグランディ工房を繋げるというのは特殊クエスト用の特別援護で、通常は使うことは勿論できません。

## V S スケイス - 01 - (前書き)

今回は前回のキリト達の戦いから場面を移してカイト達の戦いになります。

- 萌え立つ 過越しの 碧野 -

そこは普通に入れば初心者向けらしく、ただっ広い草原が広がるだけの平凡なフィールドだ。

しかし、今はところどころテクスチャが剥がされ、剥き出しのデータの羅列がフィールドの風景を虫食いのように侵食している。

空にはいつもの晴れのフィールドらしい爽快な青空は無く、代わりに青いデータの海のような空間が広がっている。

そして、フィールドの中央では、激しい戦闘の光が煌めいては消えていた。<sup>エフェクト</sup>

「みんなっ、データドレインが来る！後ろに下がって！！」

スケイスオリジンの持つ赤い十字型の杖に光が集まっていく中、両手に握っていた双剣をしまいながらカイトが急いでみんなに指示を出す。

全員がすぐに反応してカイトとシューゴ以外の団員が安全圏まで下がる。

そして退避がぎりぎりすむかすまないかの瞬間、スケイスはデータドレインを放ってきた。

幾何学模様の帯を纏った巨大な黒い球体が、真っ直ぐカイト達に向かう！

「シューゴ、いくよ！！」

「任せてください、カイトさん！！」

カイトとシューゴは並んで腕輪を付けた腕を前に突き出し叫んだ。

データプロテクティングウォール

D P W  
!!

カイトとシューゴの腕輪が展開し巨大な壁を作る。

そして、衝突！

球体と壁がせめぎ合い、ものすごい衝撃波を生み、対消滅した。

「くっ！」

「うわぁー！ツ！？」

爆風で吹っ飛ばされ後退させられたカイトとシューゴと入れ替わる形で全員が前に出る。

「次、スケイスアバターXethの拡散ビームが来る。クーンと彩花のガンナーチーム及びホタル、朔、ガスパーのウォーロックチームは迎撃したまえ」

扇をタクトのように振りながら八咫がテキパキ指示を出す。

「黙示録の獣（ハセヲビーストver）は引き続きなつめ、レイチエルとニユーク兎丸で対処。周りから湧き出ている雑魚Mobはガルドニア、砂嵐三十郎とシラバスに加えてカイトとシューゴもウイルス浸蝕度を減らす為に防衛線に加わりたまえ。それとあれらは…」

八咫が雑魚敵と獣の後ろで圧倒的な存在感を放っている今回の回

収対象である3体のスケイス、スケイスオリジン、スケイスアバター1stとスケイスアバターXthを扇で指した。

「ブラックローズとレナ、ハセヲと揺光、トキオでなんとか持ちこたえ、ハーヴェストチームは援護と回復を後方で継続」

「で、オレ等<sup>ヲ</sup>はどおすりゃいいんだ？」

声をかけられた八咫が後ろを振り返ると、そこには応援に駆け付けたクライン、ユージーンとサーシャの姿があった。

「サーシャ君はハーヴェストチームに合流、後の2人は三十郎達の援護に回ってくれたまえ」

「つつしや、いつちよ派手に暴れるか！」

「何もしないで唯見ているのも退屈だしな」

「が、がんばりますね！」

三者三様の答えを返し、戦線に加わっていく。

そして、それを見送った八咫は覚悟を決めるように呟く。

「そして、後は彼らを待つだけだ……」

-----

すでに戦闘が始まってから2時間以上経過していたが、状況はかなり劣勢だ。

緊急召集だったので騎士団員達はベストメンバーを集められなかった上にパーティーの編成も急造……しかしそこは百戦錬磨の猛者揃い、パーティー内の意思の疎通はかなり高度な部類な上に、パーティー関の連携も円滑で攻略部隊として充分機能していた。

部外者であるクライン達も、そこは長年VRMMOで経験を積んできただけあって、騎士団員と遜色つかない活躍をしている。

通常のボスクラスなら、数匹まとめてでもなんなく倒せただろう。

しかし、相手はスケイス、それも3体と獣+倒しても倒しても湧いてくる雑魚Mobによる波状攻撃により、戦線を維持するために全員がスケイス達に向かっていけてない。

さらに度重なる敵のデータドレインを防ぐ為に腕輪（簡易版のため、出力は弱いがウィルス浸蝕度も低い）を多用したことにより、カイトとシューゴの体はノイズまみれになってきている。

雑魚敵を倒して少しは浸蝕度を下げているものの、限界に近い。

そしてこの状況を打破することができる唯一の希望であるキリト達からの知らせはまだない……

戦闘が続く中、この不安要素がだらけの状況は、確実に騎士団のHPと共に体力と精神をも削っていった。

「ああもう、うざりたい！」

彩花が悪態をつきながら、両手に下げた一对の小型紋章砲を構える。

紋章砲とは、かつて神を討つ為にエルフ達を作ったと謂われている古代兵器で、彩夏のもつそれは現在の技術で小型化したものという設定の、激レア武器だ。

SPを消費して放つ特殊攻撃で巨大なビームの奔流を作り出し、

スケイスの放つ拡散ビームを薙ぎ払い、次々と空に閃光を咲かせる。

「取りこぼしは任せな！ 烈球繰弾 ！！！」

彩花の隣に立つクーンが片目を瞑りながら、ライフルのような形状をした銃で彩花が撃ち漏らしたビームを連射してピンポイントで撃ち落としていく。

先ほどからスケイスXethは前に出てくる様子はないが、代わりに遠距離砲撃を雨、いや、スコールのように浴びせてきている。

「まだまだイキマスヨ！ オルレイザス ！！！」

怪しい片言の日本語で喋るウォーロックのホタルが詠唱した光の束が、いくつかのビームと相殺する。

「いい加減しつこいわぁ！ オルザンローム ！！！」

その隣に立つ道化師のような恰好をした朔が作りだした巨大な竜巻が防壁となり、後方にいるハーヴェストチームの一带だけ砲撃の嵐から免れた台風の目のようになる。

「ふえーん、もうぎりぎりだぞ。 オルパクドーン ！！！」

ガスパーも泣き言をいいながらもせつせと詠唱し、巨大な爆発を引き起こしてビームを次々と誘爆させていく。

5人共必死になって砲撃を食い止めている。しかし……

「くっ！ 防ぎきれない！？ 司、ミストラル、援護を頼む！！！」

「了解だよ〜^^」

「もう、しょうがないなあ……」

とうとうハーヴェストチームからも援護にまわってもらわなくてはならない状態になってきている。

「だ、大丈夫ですか……？」

途中参加のサーシャが無詠唱のバフを前線にいる味方にかけてながら、遠慮がちに尋ねる。

「ミストラルおねーちゃんたちがぬけてもまだなんとかがんばれるとおもうけど……」

その問いに、必死に司達が抜けた穴を埋めようと連続詠唱をしながら朔の双子の妹、望が呟く。

「これ以上戦いが長引くと、SPもアイテムも尽きちゃうね……」

カズが疲労しきった顔で残り少ない匠の気魂をハーヴェストチームで残った自分と望、そしてアトリに使い、SPを回復させながら溜め息交じりに言った。

「それでも、今は精一杯頑張りましょう、みなさん！」

そんな暗くなり気味の雰囲気のアトリは空元気の声を上げてなんとか鼓舞しようとしたが、その声も次々に起こる爆音に掻き消されていった。



.....

「ウガアアアアアッ!!」

黙示録の獣が3本の尻尾の内1本をニューク兎丸に叩きつける。

「うおっ!?クツ!やっぱりこのネタじゃダメか!」

「あかんわあ。もうネタが尽きてもうた……」

「あのお、やっぱりこれって意味ないんじゃないですか?」

ニューク兎丸とレイチエルがやってることに対し最初から懐疑的ななつめが呟いた。

そう、彼らはこの状況下で漫才をやっていたのだ(笑)

普通ならこんな状況で漫才って……と思うだろう。しかし一応効果はあるのだ。

黙示録の獣は知能が低く、簡単に命令を忘れて本能のままに行動するので、面白いものを見せていれば自然と集中して動きも止まる(んなアホな……)

事実、八咫の指示があって開戦からずっと漫才をやっているが、時々やってくる雑魚敵(これにはなつめが対処)以外は戦闘はまったく行われていない。

しかしどうやら漫才にも飽きてきたらしく、時々尻尾でツッコミを入れてくるようになってる。

この均衡が保っていられるのも長くはないらしい。

そして……

「おっしや、ならばは伝説のダジャレ100連発いくぜっ！ってどわーっ！？」

「あ、ニユーク……って、どひゃーあっ！？」

「レイチエルさん、ニユークさん……」

どうやらもう完全に飽きたらしい獣は、尻尾でニユークとレイチエルを吹っ飛ばしてしまった。

ニユークとレイチエルが空の星になり、なつめの呟きが空しく消える中、獣は今度はなつめにタゲをあわせた。

「あっ、ちよつとまずいかも……」

一人取り残されたなつめは少し怯えてガクガク震えながらも、愛剣であるスパイラルエッジ改をエフェクトとともに取り出し構える。

「グルルルルウ……」

対する獣は低く唸りながら、何も持たず大上段に構えを取ったかと思うと、一気に振り抜いた！

「ガアアアアアッ！！」

獣の上の空間に亀裂が走り、そこから大量の武器が現れ、そこら中に降りそそぐ。

そして獣はそのうちの大剣二本を無造作に引き抜き両手に持ち、三本の尻尾に器用に双剣を巻き込み、いざなつめに向かおうとした。

しかし、その後目にした異様な光景に獣の動きが固まった。



そして雑魚敵の大群や本命のスケイス達を相手にしているパーティーも……

## VS スケイス - 01 - (後書き)

データプロテクティングウォールは自分が考えたオリジナル技です。データドレインって、ゲーム内だと喰らうしかなかったけど、なんか防ぐ方法がないと腕輪の加護がない一般プレイヤーとかを助けられないだろと思って、このスキルを考えました。

「こいつぁーかなりきついぜ…… 叢雲！」

溜息をつきながら戦場を駆け抜けている右目に眼帯をして、無精ひげを生やした浪人風の砂嵐三十郎が、ナイフ型モンスターの一群に紫電を纏わせた斬撃を浴びせて塵に変える。

だが、スキル発動後の硬直を狙い澄ましていた剣士型Mobの刃が間髪入れずに三十郎の背後へと迫る。

「ラァッ！」

しかし、その一撃はギリギリのところまで割り込んだクラインの刀によって弾き飛ばされる。

剣士は態勢を崩して後ろから追撃を加えようと迫っていた数匹のMobを巻き込み攻勢を削ぐ。

「はぁぁッ！」

スキル硬直から解放された三十郎は、これを好機とばかりにこんがらがっている敵を叩き伏せる。

「すまねえ」

「イイってことよ」

三十郎が律儀に頭を下げたのを見てクラインが少し照れながら鼻の頭を搔く。

「次が来るよ！」

しかし、そんな緩んだ空気も離れたところで宇宙人の様なMobと戦っていたカイトの声で一瞬にして吹き飛ばす。

すぐ近くで、大量のゴーレム系Mobがポップしていた。

「まかせろ！」

クライン達はすぐさま対応しようと駆けだそうとしたが、すでにロングの目の覚めるような金髪を流れるように舞わせたガルデニアが、掛け声を上げながら片手で槍を駆使してダメージを与えながら一気にハウスゴーレムの大群に突っ込み、切り込んでいた。

リパルスケイジ　！！

ガルデニアの両手槍スキルがハウスゴーレムにクリティカルヒットするも、防御力の高いゴーレム系のモンスター達のHPを削り切ることができず囲まれてしまう。だが、ガルデニアの目的は敵に囲まれること、つまり相手の懐に潜り込むことにあった。

ガルデニアの槍に新たに緑色の光が宿る。

体の動きがノロいゴーレムが攻撃に転じるより先に、ガルデニアの音が響く。

「喰らえっ！ ジュワイプアウト　！！」

自分に群がってきた土属性を持つハウスゴーレムに弱点の木属性の力を宿した槍を横薙ぎにすることで、一瞬にして全ての敵を断ち切る！

敵がポリゴンの欠片となって散っていった場で少し息を整えてい

たガルデニアだったが、すぐに新たにゾンビ系モンスターの群れが、近くで現れ始める。

「まだまだっ！次！！」

疲れた体に活を入れ、ガルデニアは次の敵に向かって駆けていった。

「可憐だ……」

クラインの茫然としてガルデニアを見つめる様子を三十郎はフツと気障に笑い、今にもアドレスを聞きにガルデニアの元へと走りだしたそうなクラインの肩を叩いて、新たにポップし始めたMobの元へと駆けだした。

「ゴブゴブー！！」

「うわぁー、ちよつとタンマー！？」

ゴブリンの大群が残虐な笑みを浮かべながら、纏めてある後ろ髪をぴょんぴょん跳ねあげながら逃げまわるシラバスを追いたてている。

しかし後ろから追いかけているので、ゴブリン達はシラバスの表情に気付いていなかった。

「ゴオブゴブゴブー！！ゴブツ………？」

シラバスが逃げている途中で宝箱を落としていったのだ。

光り物に目がないゴブリン達は早速箱のまわりに群がって親分格





ところ変わって最前線。

「くっ、レナ、挟み撃ちにするわよ！」

「はいっ、ブラックローズ先輩！」

ブラックローズの掛け声に答えながら、スケイスオリジンをブラックルーズと挟む形になるようレナは移動する。

「いくわよーっ、ガンズマキシマ！」

「くらえーっ、ライオマキシマ！」

はたから見れば姉妹のようにそっくりな二人、ブラックルーズとレナの下段と上段を組み合わせた大技がオリジンにクリティカルヒットした！……かに見えたが、

「なんですとあー！？」

「きゃっ！？」

なんとスケイスオリジンは、対角にあつた二人の剣を真紅の十字架状の杖の端と端で受け止めたのだ。弾かれた反動で動きが止まった二人をオリジンは反撃とばかりに杖を横薙ぎに振り抜き吹き飛ばす。

「くう………！」

二人とも剣でガードしたがかなりのHPを持っていかれてしまった。

すぐさま回復したものの、アイテムの残りももう少ない……。レナの顔に不安がよぎる。

しかしその不安を吹き飛ばすかのようにブラックルーズが叫ぶ！

「まだまだあーっ！こんなんじゃあたしたちを倒せないわよっ、ス  
ケイス！！ほら、レナもボーツとしてないで、シャキツとするシャ  
キツと！！」

その声に少し気力が戻ったのか、レナは元気に答えた。

「はいっ！よーっし、お兄ちゃん達が戻ってくる前に、ぼこぼこに  
しちゃいましょう！！」

そして二人はスケイスに再度切りかかっていった。

「ハアアアアッ！」

ユージーンの巨軀から放たれる気合いとともに、下段から斬り上  
げられた大剣が相対するスケイス1stの大鎌をパライシ、一瞬の  
硬直を生ませる。

「ウオラアアアア！　ワギリランゼツセン　！！」

その隙を逃さず、大鎌を装備したハセヲが切り込み連続で鎌を振  
り抜き切り無数のカマイタチを生んだ。

そしてその後ろに潜んでいた揺光が前に飛び出す！

「喰らいなッ！　旋風滅双刃　！！」

双剣から繰り出す連撃がスケイス1stに降りかかる。

そして止めとばかりに1stの後ろに回り込んでいたトキオが両

手に持った二振りの剣を振りかぶった。

「いけえッ！ 連牙・昇旋風 ！！」

全員の攻撃が1点に重なり、1stは閃光に包まれ大爆発、そしてあたりに煙がたちこめる。

「やった……？」

揺光が期待半分疑い半分で呟く。

「はッ！あの程度で俺のスキースがやられるわけねえだろうが」

そしてハセヲの言う通り煙が晴れると、そこにはほとんど無傷のスキースが立っていた。

「はあ、まあそうだよな……」

トキオがため息をつきながら剣を構える。

「まあ、これくらい歯ごたえがないとやりがいがない」

ユージーンも長時間の戦闘の疲れを全く見せず、剛毅な顔をニヤリと歪め、大剣を肩に乗せるように構える。

それにならって揺光も双剣を構え、ハセヲも一旦大鎌をしまい、新たにエフェクトと共に小回りの利く双剣を取りだし装備する。

そして、また終わりの見えない戦闘が再開した。

「よし、少しはましになったかな……」

カイトは最後のゴブリンを倒してから呟いた。

近くにいた相当な数の敵の群れを倒したので、侵食値もだいたい半分くらいになっている。

「くらえーっ！雷神独楽！！」

少し遠くの場所ではちょうどシューゴも最後のリザード系モンスターを倒したところだった。

見た感じだとシューゴもかなりの数をこなしたらしく、ノイズがほとんど治まっている。

「あっ、カイトさん！」

カイトに気づいたシューゴが駆け寄る。

「お疲れ。ここも結構きついけど、そろそろ前線に戻らないと。いくらブラックローズ達でも、スケイス相手だからぎりぎりだろうし……」

カイトはクライン達に向かって叫んだ。

「というわけで、僕達は前線に戻るから後は頼んだよ、みんな！」

そう言っただけで、ブラックローズ達がいる前線に向かう最短コースを敵を蹴散らしながら突き進んでいった。

「あつ、待つてくださいよ〜それじゃあよろしくお願いしますっ、先輩方と、後新人さんも！」

シューゴもそれに習って叫ぶと同時にカイトの後を追い、共に新たに現れた敵群を突破し、前線へと駆けていった。

そしてさらに1時間が経過した……

「ぐっ!?!」

これまで幾多のモンスター相手に紙一重の攻防を繰り返していたガルデニア、しかしその体をとうとう夥しい数の剣士型Mobの刃に捉えられ、体を串刺しにされた。

「う……!!」

何とか槍を握る手に力を籠めようとするガルデニアだったが、もう槍を手放さないので精いっぱい、身動きが取れない。

そして、どんどんイエローからレッドゾーンに減っていくHP……

「ウオオオオツ、ガルデニアさああああん! 焔火 ！！」

「くそツ、 雷華 ！！」

敵の包囲網を蹴散らし、掻い潜って駆け付けたクラインと三十郎は敵の真つただ中に飛び込み、攻撃を喰らいながらも紫電と炎を纏いながら捨て身のスキルで敵を蹴散らす。

「うおっ……!?!」  
「クツ……!?!」

なんとかその場の敵は全て倒せた二人だったが、その後同時に自身の意思とは関係なく膝をついてしまう。

刀について気力で倒れこむのを防いでいるが、手放した瞬間その心は完全に折れてしまうだろう。

「すまない、三十郎、クライン……」

敵の刃から解放されたガルデニアはアイテムポーチにあった最後の回復アイテム 完治の水 を三十郎とクラインに使い、力尽きその場に倒れこんでしまう。

「ガルデニアさんッ!?!」

クラインが慌ててガルデニアを抱き支える。

回復されたHPゲージはグリーンゾーンに戻ったものの、削りきられ摩耗した精神はぼろぼろのままだ。

そして、無慈悲にも近くで新たなMobの出現を示すエフェクトが発し始めていた。

それを見た三十郎は一瞬で決断を下し、クラインに語りだす。

「クライン、あんたはガルデニアを連れて一時後退してくれ」

「なっ!?!それじゃ、アンタはどうするつもりだよ?まさか、一人で犠牲に……」

「意識のないガルデニアを守りながら、戦えるのか?」

「うッ……」

三十郎の言葉に、クラインは言葉を詰まらせ、腕の中にいるガル

デニアを見る。

「なあに、心配するな。シラバスにも助太刀してもらうさ」

「つて、そんな無茶な!？」

植物系と機械系モンスターの2つの敵の群れを同時に相手にし、きりきりまいのシラバスは聞こえていたのか「むりむり!」とジェスチャーで示したが、クラインの腕の中でぐったりしているガルデニアを見てその動きが止まる。

そして頭を抱えて一瞬悩んだが、すぐに返事をよこした。

「あーもうツ! わかった。こうなったら残りのトラップ全部使う勢いでいくから、何とか持ちこたえとくよ。でも、あんまり長くは持たないと思うけど……」

「ま、そういう訳だ」

三十郎の漢気溢れる態度に、クラインは返答する代わりに拳を突き出す。

それに対して、三十郎も拳をこつんと突き返す。

「すぐに戻ってくる! だから、死ぬんじゃねえぞ!」

「オウツ! これが終わったら、美味しい酒でも飲み交わそうや!」

三十郎の最後の言葉を聞いたクラインは走り始め、後ろから響き始めた雄叫びと剣劇を振り切るようにガルデニアを抱きかかえながら後衛がいる位置まで今だせる精一杯のスピードで駆けて行った。



「あちゃー、このままじゃあこつちも持たないなあ」

X t hの砲撃が一旦やんだのでやっと一息つけたクーンはおどけた調子で言ったが、体は言葉通りにふらふらになりながらもなんとか立っている状態だ。

すでに彩花、朔とホタルらX t hのビーム迎撃チームは疲労の為後方で休んで（倒れて）おり、今ちょうど戻ってきたクラインに抱きかかえられたガルデニアもそこに横たえられた。

ウォーロックチームで動けるのはもはやガスパーのみ（そのガスパーもすでにへろへろ状態）で、ハーヴェストチームから迎撃にまわった司とミストラルのおかげでなんとか耐えてはいるが、二人共疲労の色は濃く、力尽きるのも時間の問題だ。

ハーヴェストチームに残った望、カズ、アトリとサーシャも手持ちのアイテムはほぼ全て使いきり、なんとかSPを自然回復させながら援護しているが、もう完全に需要に追い付いていない。

獣と戦っているナツメも善戦はしていたが、さすがに息切れしてきたのか先ほどから徐々に押されてきている。

今はまだ戻ってきたニユークとレイチエルの援護のおかげで、危うい均衡を保っているが、いつ崩されてもおかしくない……

「うわつと!?!」

髪を数本切られながらも、揺光がすんでのところでスケイス1 s tの大鎌を屈んで避ける。

しかし、すかさず後ろに控えていたスケイスオリジンの十字架が

揺光に向かって振り下ろされる！

「うおー！ー！」

「はッ！」

「とりゃー！ー！」

その間にブラックローズ、レナとトキオが入りなんとか弾き返そうとするが、逆にまとめて弾き飛ばされてしまう。

1stが追撃に大鎌を倒れているトキオ達へと振り下ろそうとする。

「ラアアッ！」

大鎌の一振りにはは駆け付けたユージーンの大剣により辛くも弾かれ、3人は難を逃れる。

しかし、一旦下がった1stをまるで待っていたかのように、三体のスケイスが一齐に構えをとる。

「まッ、まずい！？」

カイトとシューゴはすかさず腕輪を前に突き出し防壁を展開すると、同時にスケイス達からデータドレイン×3が放出された！

「うおおおおおー！ー！ー！」

ハセヲと起き上ってきたトキオがカイトとシューゴの背を支え、さらに二人の背中をユージーンが支えてなんとか耐える！

二つの力の塊りが激しくせめぎ合い、そして弾け飛んだ！！

ズドオー！ー！ー！ー！ー！ンッ！！

大爆発が起き、一瞬にして一帯が煙で埋め尽くされる。

もうもうとたちこめる煙が晴れると、そこには倒れ伏すカイト達の姿。そしてカイトとシューゴの右手に付けてあった腕輪は黒く変色しボロボロズのようになっており、さらに体中が覆い隠れるぐらいノイズが走っている。

「くっ……」

カイトは何とか体を起こそうとするが、緩慢にしか動けない。

特に右腕は腕輪を付けていた部分が発する激しい痛みで、一瞬でも気を抜いたら意識が吹き飛びそうだ。

なんとか頭だけ動かして周りを見るが、そこには仲間たちがゴミ屑のように転がっている姿と、スケイス達がこちらに向かってくる絶望的な状況しか見ることができなかった。

後ろの方から三十郎達が持ち場を放棄して駆けつけてくるのが見えだが、どう考えても間に合わない……

「まだっ……まだ、諦めるもんか!!」

カイトはガンガンと痛みを訴える頭を少しでも明瞭にするために叫び、最後の力を振り絞って立ち上がった。

そしてふらふらとしていうことを聞かない体に活を入れ、なんとか双剣を構えてスケイス達に特攻しようとした、その瞬間!

「おしっ、出れた!っつて、高ッ!??」

突如上から声がしたかと思うと、遙か上空で空間が裂け、そこからデータで見たキリトという異邦の剣士が自分と同じくらい傷だらけの上にぼろぼろな格好で現れた。

そしてその手には朝日のように燦然と輝く 薄明の腕輪 が握られている！

「おっ、あんたがカイトだな？とりあえず、受け取れーっ！」

そう叫ぶとキリトはもの凄い速さで腕輪をカイトめがけて放り投げた！

カイトは反射的に双剣を手放して右腕を真っ直ぐ上に突き出す。慌ててこちらに向かってくるスケイス達だが、すでに腕輪はカイトの腕に装備された。

カイトは右腕をスケイス達の方に向け、腕輪を展開させる。花弁が開いたような状態になった後、溜めを作る時間も惜しんでカイトはあらん限りの声で叫んだ！

ドレインハート ！！

放たれた力の奔流は、スケイス達に直撃し、そしてあたりが閃光に包まれた……

## VSスケイス - 終局 -

少し時を遡り、キリト達VS腕輪の化身場面に戻る。

「ラアッ！」

キリトは右手に持った剣で腕輪の化身の双剣による攻撃を弾き返す。

今まで通りなら、追撃にきているもう一方の剣を左手の剣で弾いていたが、今回はいつもは捨てているだけの、右手に残っている刀身が粉々に崩れ落ちた剣の柄を投げつけた！

ガキインツ！

ほんの少し敵の剣の軌道を変え、敵の剣に宿る黒い炎の熱を肌にしりしりと感じながらギリギリかわし切り、さらに左手の剣を温存することに成功した。そして攻撃の後に起こるコンマ数秒の硬直のため、敵は動けない。

これでトドメだ！っと思いきリトが前進しようとしたその瞬間、最後の最後に背中にゾクリとしたものを感じた。

あの二つの炎輪が後ろから迫ってきている！

キリトは一瞬振り返りそうになる、が、恐怖を信頼でねじ伏せ、さらにもう一步敵の懐へ向かって踏み込む。

ギヤリリリリイッ！！

それと同時に、後ろで櫂とアスナが炎輪を叩き落とした音がキリ

トの耳朵を打つ。

何とか後ろに後退しようとする腕輪の化身。

「させませんっ！」

ドドドオオオンッ！！

しかしそこでユイが重ねがけして放った爆炎系の呪文が、敵の退路を阻んだ。

「今ですっ！パパ！！」

「ハアアー……！」

ユイの声を聞いた瞬間、キリトは最後の一步を踏みこむと同時に、敵の腹部に左手に持った剣を突き立てた！

「グウオオオオオオッ！？」

ものすごい断末魔の悲鳴をあげながら、腕輪の化身は崩れ去っていく。

そして、大量のポリゴンの欠片となり、爆散していった……

「……やった、の、か……？」

キリトは数秒間残心とも呼べない、敵に最後のひと刺を与えた姿勢のままで柄だけになった剣を持っていたが、何とか体を少しづつ解して動かし櫂の方を見ると、ちょうどメニューを開いて見ているところだった。

キリトの視線に気づいたのか、櫂は顔をあげて、にっこりと笑った。そして、メニューウィンドウを操作して手に光り輝く腕輪を取

り出した。

「成功です。完全に倒し切りました」

アスナとユイはどっと疲れが出たのか、へたり込んでしまう。

キリトは一応警戒を解かず立ち続けたていたが、アスナ達がいなかったら多分自身もその場にぶっ倒れていただろう。

「さて、後はこの腕輪を届けばいいんですけど……」

櫛が言葉を濁したのを見て、キリトの脳裏に嫌な予感が走る。

それはアスナとユイも同じだったらしい。

「どうかしたんですか？」

ユイが心配そうに訊ねると、櫛はいつもの飄々とした顔に少し苦渋の色を浮かばせた。

「みなさんにはこちらの戦闘に集中して貰う為に言っただけなんです、実は今グランホエールはクビアゴモラから攻撃を受けているんです」

「おっ、襲われてる！？」

アスナが驚きの声を上げる。

「クビアゴモラって、あのクビアと関係があるのか？」

キリトが訊ねると、櫛は首を横に振った。

「いえ、キリトさん達が大使堂で会ったクビアとはほとんど関係あ

りません。まあそれは置いて、問題はグランホエール内でスケアイスのいるフィールドを隔離していたワイズマンが、ほとんど手が離せない状況になってしまっていることです」

櫂の話しによると、本来なら腕輪を運ぶ人の周りにも小さい境界を張り、それをカイト達が戦っているフィールドの結果に繋げてから入るという方法がとられるはずだったのだが、今はそれをできる状況ではないらしい。

「仕方ないですね、僕の空間切断能力で行くしかないでしょう」

新たにウィンドウが現れたと思うと、そこにメガネをかけた生真面目そうな青年の顔が映っていた。

「僕的能力に少し調整を加えれば、ちょっとやさつとじゃ抜け出せない複雑な切り口を作れます。そうすれば、少しはスケイス達を逃がす危険も少なくなるでしょう」

「じゃあ僕が調整をするんで、キリトさん、これをお願いします」

メニューを操作した櫂は、腕輪を取り出してキリトに手渡した。

櫂に自分で言ったほうが確実じゃないのかと軽口をたたこうかと一瞬思ったキリトだったが、櫂の飄々とした表情の中に自分に対する信頼を見たので、黙って受け取ることにした。

そしてキリトはアスナとユイの方を振り返った。

「それじゃ、ちょっと行ってくるわ」

そして今に至る。



「おい、大丈夫か？」

後方から駆けつけた誰かが地面からキリトを芋掘りよろしく引っかく。

「ごほつ、ごほつ！？はあ、助かった……ありがとう、あんたは？」  
「俺は砂嵐三十郎っていうもんだ。これからよろしくな！」

そう言っつて砂嵐三十郎は手を差し出した。  
キリトはその手につかまり、何とか起き上がる。

「よう、キリト。オメエも無事だったか」

「おっ、クライン、久しぶりだな。なかなか男前になってるぞ」

ボロボロの姿で大の字になっているクラインを見て、キリトはニヤリと笑う。

「うるへえ、オメエも大して変わんねえだろうが」

クラインは同じくらい、いや、それ以上に酷い格好のキリトを仰ぎ見ながら、苦笑いする。

「しかし、空から現れるとは粹な登場の仕方じゃあねえか」

三十郎が笑いながらキリトの肩を乱暴に叩いた。

「いや、あれは俺の意思じゃないし……っっていうか、櫂のやつこうなることがわかって俺にやらせたのか？……まあ、それはいいや。」

それより、結局なにがどうなったんだ？」

無事結界内部に入れたキリトだったが、封鎖しているところにむりやり転送したので、かなり見当違いなもの凄く高いところに現れてしまったらしい。なんとかカイトに腕輪を投げたがその後力尽き、受け身を取ることもできず頭から地面に突っ込んでしまったのまでは覚えていた。

「どうやら今回捕獲できたのはスケイスオリジンと黙示録の獣だけのようだ……」

駆けつけた八咫が先ほどは気付かなかった、落ちている小さい人形のようなものを拾い上げて言った。

後ろの方では何かが鎖に繋がれて暴れているのが見える。

「ふむ、残念ながらそのようだ。やはり、キリトを転送した時に作った空間の切れ目を利用されたな……」

八咫の横にウィンドウが現れ、そこにワイズマンの顔が映し出されて言った。

そして後ろから続々と後衛にいたウォーロックチームが駆けつけてくる。

「早く応急処置をしないと……急いでください、みなさん！」

「わかったぞ〜」

「急いでグランホエルにつれて帰るぞ！」

みんな忙しくしている中、その場に倒れ伏しているハセヲ達もなんとか起き上ってきた。

「くそっ、また逃がしちゃった!!」

「あいててて」

「疲れた〜動けない……」

「おにいちゃん!大丈夫!??って、寝てるだけ……」

ブラックローズの子供バージョンのような姿をした子が、一人だけむにやむにや言って動かないシューゴを呆れながらゆすっている。そんな感じでみんな大慌てながらも、やっと事態が収束に向かっているのではどこか安心した表情をしている。

しかし、そんな和やかな雰囲気もブラックローズの一言で吹き飛んだ。

「た、大変!カイトのウイルス浸蝕値が100%になってる!!」

その一言に俺以外の全員がぴたりと動きを止める。

だれも何も話さないの、事情の呑み込めないキリトが軽いノリで尋ねた。

「浸蝕率って、腕輪を使うと増えるやつだろ?100%になるとなにかまずいのか?」

「ま、まずいつてもんじゃないよ……」

トキオが倒れ伏しながらも全員を代表して答える。

「とっ、とりあえず……」

トキオは先ほどまで「動けない〜」と呻いていたのにもかかわらずもの凄い俊敏さで起き上った。

「撤収だー!ー!ー!」

トキオが叫ぶと同時にみんな泡を食ったように行動し始めた。動けるものは傷ついて動けないものを担いだり引きずったりしながら、蜘蛛の子を散らしたように逃げ始める。

あのユージーン將軍もハーヴェスト達の只ならぬ剣幕に押されて、怪我人を運ぶのを手伝っている。

「いったい、何がどうなってやがるんだ？」

キリトのそばでへたり込んでいたクラインが立ち上がり、みんなの慌てように茫然としている。

そして同じくその動きに取り残されてしまったキリトはというと、疲れて上手く働かない頭でぼーっと立ちつくしながら「どうするかな？」と考えていた。

すると、後ろから肩をツンツンと突つかれた。キリトが振り返ってみると、そこにはさきほど腕輪を投げ渡したカイトが立っていた。

「あれ、もう大丈夫なのか？」

キリトはいぶかしんで、目の前に立つ双剣士の少年を見る。

腕輪を渡した時に見たカイトの姿は遠目で見ても自分と同じくらいぼろぼろだったが、今は傷一つなくおまけに元気そうににこやかに笑っている。

「いやあ、君がさっき腕輪を投げってくれたキリト君かい？」

そう言って右手をキリトに差し出す。

「ああ、そうだった、自己紹介まだだったな……俺はキリト、これ

から世話になるな」

と言ってキリトも手を出して握手をしようとした瞬間……

「って、やめんかーい！！」

ブラックローズが横から見事な飛び蹴りをカイトに喰らわせた！？  
錐揉みしながら吹っ飛んでいったカイトは、先ほどのキリト同様  
地面に頭から突き刺さる。

「え、えええー！？な、なにやってんだよ……えーつと？」

「あ、私はブラックローズ……ってさっきグランホエルで自己紹介したじゃない！って、そんなことはどうでもいいから、あんた早く逃げなさい！！」

「はい？……いったい何言ってる？」

「あんた、こいつの右手が光ってるの見えなかったの！？あいつは今あんたに握手した瞬間、データドレインしようとしてたのよ！！」

「……いや、意味がわからないんだが？」

「だーからっ！カイトは浸蝕値100%になると、いつもの優し  
いけどちよつと天然な感じから、腹黒でちよつとアホになっちゃう  
の！！」

「だからって、いきなり攻撃されそうになるなんて……」

「あんたさつきカイトのこと呼び捨てにしてたでしょ。あいつはそ  
ういう細かいことでいちいちチャモン付けてこっちに何か仕掛け  
てくるのー！」

なんだそりゃ……とキリトが思っていると、蹴り飛ばされ地面に  
突き刺さっていたはずのカイトがいつのまにかブラックローズの後  
ろに背後霊のごとく佇んでいてその場にいたキリト、クラインとブ  
ラックローズをビクツとさせる。

「いきなりひどいなあ、ブラックローズ……そんなにあの時のことをキリト君ら新しく来た人達にも見て欲しいの？あ、ちょうどこの前起きた時に編集しといたムービーがあるけど、見る？」

薄く青色に輝くメニューウィンドウを操作して何かを表示しようとしながら発せられたその言葉に、ブラックローズがピキッ、っと硬直する。

「あつ、あんたまさか、まだあれをとってあったの……？あーもうっ、だからやなのよぉー！」

ブラックローズの悲痛な叫び声が響く中、キリトとクラインはなぜみんなが逃げ出したかの理由の鱗片が見えたような気がする。同時に、その場をブラックローズに預け、早々に立ち去ることにした。

V S スケイス - 終局 - (後書き)

カイトはゲーム版のキャラも好きなんですけど、4コマver.の腹黒であほな感じのも書きたかったのでデータドレインの反動として出してみました。

幕間 - 世界の狭間で -

そこは、一面真っ白な空間。あまりにも真っ白なので、広いのか狭いのか、どこまで続いているのかさえわからないくらいだ。

何もなければ焦点をどこに合わせていいのかわからず目がおかしくなりそうな光景だが、幸いなことに点々と物が置かれている。ある場所には天蓋付きのベット。その近くにはいくつも無造作に転がっている空の鳥籠と、たくさん散らばった羽。さらにその向こうには一つの椅子と、周りにうず高く積み重ねられている本の山。他にも色々なものが不規則に存在している。

ここを訪れたことがあるものは両手で数えられるほどしかない。そして、その全員がこの世界に深く関わった者達だった。創造主、勇者とその相棒、光と闇の王、探索者と死の恐怖等々……そして、この空間において今現在ただ一人存在する人物も、例外なくこの世界の根本に触れている。

多数のモニターやウィンドウが展開されている場所、そこでは茅場が椅子に座って、目の前に展開しているキーボードを駆使してモニターに映る場面を次々と切り替えていた。

キーボードを叩くカチャカチャという音がただ淡々と響く中、唐突に別の音が挿入される。

「ずいぶんと熱心じゃないか？」

後ろから声をかけられた茅場が首を最低限の角度に曲げて振り返ると、そこには色つきのサングラスをし、左腕に筒を下げた青髪の男が立っていた。

茅場は急な来訪者にまったく驚かず、すぐにモニターに目を戻し



ながら答えた。

「ああ、君か、オーヴァン……もう少して終わるから、コーヒーでも飲んで待っていてくれ」

茅場はそう言うとキーボードを操作し、その場に椅子、テーブルとコーヒーセットとお茶請けを出した。

オーヴァンはよく来ているのか、勝手知ったる風に座り、直ぐにくつろぎ始める。

ほどなくして茅場がモニターの前から立ちテーブルの席につく。

「それにしても、ずいぶん楽しそうに観察していたようだが？」

オーヴァンがコーヒーを一口飲んでから訊ねた。

「いや、さすがキリト君達というべきか、実に良いサンプルがとれるよ」

いつも無表情な茅場の顔に、幾分か歓喜の色が見え隠れする。

「しかし、なぜ今さらキーボードなんか使っているんだ？おまえはもうそんなものを使わなくてもいいだろう？」

オーヴァンがどうでもいいような顔をしながら聞いた。

「なに、単なる気まぐれだ」

茅場は特に表情を変えずに簡潔に答える。

「それにしても、君がわざわざ私の顔を見るためだけにここに来た

とはあまり考えられないが、今日は一体何の用かね？」

「消え去る運命にあったこの世界を解き放ってくれた恩人の顔を見に来ることが、そんなに不自然かい？」

オーヴァンが少しおどけた感じで逆に問う。

「私はただ自分の都合の為にこの世界が必要だったただけであって、特に礼を言われることでもないさ。それに、この世界は私にとっても原点だからね」

答えた茅場の顔にふと過去を懐かしむような表情が出たが、すぐに消えてしまった。

「まあいい……俺が今日聞きたかったのは、俺達裏の事情を知る者はこのイベントに参加していいかということだ。というより、君は参加するのかい、茅場？」

「ふっ、私の持論は『横から見るだけのゲームほどつまらないものはない』……なのだが、今回は残念ながら、基本的には仕掛け人として立ちまわるつもりだ。君の場合は余計なことをしゃべらなければ存分に楽しんできてもいいだろう。もちろん、そこにいる君たちもだ」

オーヴァンが振り返ると、そこにはいつのまにかクビア、ヘルバ、リヨースが立っており、さらにいくつかのモニターが展開されていた。

「もちろん、こんなに面白いイベントは見逃せないわ」

ヘルバが楽しそうにほほ笑みながら言った。

「ふんっ！こんな危険なイベントを管理するこっちの身にもなってみろ！！」

リヨースが腕を組み、カリカリしながら言い放つ。

「あら、せつかくもとの役職に戻れたんだからいいじゃないの。それとも、今回は自分も遊ぶ側にいきたいとか？」

「ばっ、馬鹿を言うな！？私はこの仕事に誇りを持っている！」

「まあまあ。とりあえず僕たちも、一般PCか特殊PC程度の振る舞いをするなら、このイベントに参加してもいいということではないですか、茅場さん？」

犬猿の中のヘルバとリヨースのいつもの喧嘩を収めるためにクビアがまとめて言った。

「まあそういうことだ」

茅場はあいかわらずの無表情で簡潔に答えた。

「ふっ、じゃあ俺は俺で好きにやらせてもらおうとするかな」

「あんまりからかってやるなよ」

茅場の声を背中で聞きながら、オーヴァンは青いリングに包まれ消えていった。

「それじゃあ私も色々と準備しないとね」

「くそっ、尻拭いさせられるこっちの身にもなってみろ！」

「あら、それが管理者のお仕事でしょ？」

「貴様！」

言い争いながらヘルバとリヨースも消えていく。

展開されていたモニターも次々と消え、最後に残ったクビアも去ろうとしたが、ふと立ち止まって茅場の方を振り返り訊ねた。

「そう言えば、あなたの考えているあれは成功できそうですか？」

クビアの顔は探るようであり、期待するようであり、そしてなにより楽しんでる表情だった。

そんな質問に茅場は一言で答えた。

「経過は順調だ」

## グランホエールに戻って

「こオらアー！まちなさーい！！」

前が見えないくらい大量のアイテムを抱えて歩いてきたキリトの前をもの凄い速さで何かが走り去って行く。

あわや荷物を落としそうになったのを何とかバランスを取って回避し、後ろを振り返ると、のらりくらりと逃げるカイトとそれを鬼の形相で追いかけるブラックローズの姿が目に入った。

「はあ、また逃げ出したのかあ」

一緒に荷物運びをしていたガスパーが立ち止まって溜め息交じりに呟いた。

「あの嚴重な警備をか？いったいどうやって……」

「カイトがああなるとアズ○バンやインペ○ダウンも真っ青だぞお。どんな嚴重なセキュリティも簡単に突破しちゃうんだぞお」

ガスパーはそう言うと、すたすたとまた進み始めた。

(なんだかもう、慣れ切ってる感じだな……)

キリトがやっとの思いで船に戻ると、そこには惨状が広がっていた。

船の内装は黒く焦げていたり砕けていたりでボロボロ、何人が傷ついてホールの床に寝かされて治療を受けている。ネットの中のヴ

アーチャルのはずなのに、そこには現実で起きた事故現場を見るようにひしひしとした緊張感と嫌な感じが立ち込めていた。

そう感じた瞬間、胸の奥から何かがこみ上げかけたが、顔を一叩きして追い払う。

「こりゃひどいな……」

「あつ、キリトくん！」

キリトがどうすればいいかわからず呆然としてしていると、先に戻っていたアスナが駆けつけ状況を説明してくれた。

クビアゴモラによる被害は尋常ではなかったらしい。船はスケイス戦の為にほとんど非戦闘員だけで、なんとか残っていた団員達が時間稼ぎをしている間にほかの任務で各地に散っていた団員がスケイス戦に加わろうとしていたところを呼び出し、辛くも撃退したものの、船は大ダメージを負ってしまったそうだ。

説明を聞いた後、キリトはすぐにみんなの手伝いに行こうとした……が、その後ろから何かをずるずる引きずる音が聞こえてきたので、振り返ってしまった。

「ほら、ちゃんと立って歩きなさい！」

「はぁ〜い」

そこには縄でぐるぐる巻きにされているのにご機嫌な様子のカイトを引っ張るブラックローズがいた。

「あ、キリト！ちようどよかった。悪いんだけど、こいつを運ぶの手伝ってくれない？」

ブラックローズはキリト達に気付くと、駆け寄ってきてアスナに「ちよっと借りるわね」と断りを入れて、有無を言わさぬ勢いでキリトに縄を手渡す。

「ふっふーん！あんたが歩かないならこっちにも考えがあるわよ！」

そう言ってブラックローズはメニュー画面を開き、長い木の棒を取り出し、それをカイトの背中にくりつけ、棒でぶら下げられるようにする。

「ほら、そっち持って！」

ブラックローズの迫力に押されたキリトは、言われるがままに棒の片方を持った。

「そんじゃ、行くわよ！」

キリトは流されるままに、カイトを原始人が捕まえた獲物のように運んでいった。

「さあ、ここでウイルス浸蝕が治るまで大人しくしてもらおうわよ！」

ブラックローズはよくSFで見るようなビームで構成された格子の牢屋に入れたカイトに向かってどろどろと宣言する。

「それじゃ、俺は他の手伝いに行くから……」

(何か余計なこと聞くと藪蛇になりそうだし、今はさっさとここを立ち去るが吉だな)

「うん、ありがとね」

そしてキリトは出口へと向かったのだが……

「あれ、どこに行くんだい、キリト君？」

その言葉に振り返ったキリトは驚愕した。

なんと先ほど閉じ込めたはずのキイトが、牢から抜け出してブラックローズの後ろに立っていたのだ。

「あつ、あんたまた!？」

「ふっふっふっ。あまい、ブラックローズ、あますぎるよ。どうせならもつと嚴重なところに入れないと、脱獄のし甲斐がないよ」

そしてキイトはにこにこ笑いながらキリトの方に近づき、唐突に尋ねた。

「そう言えば、キリト君は以前プレイしていたネットゲで主役級の働きをしてたんだって？」

「いや、まあ確かにそうとも言えなくはないけど……って、それがどうかしたのか？」

「うん、ただ単にね……」

そう言っただけキイトはいきなり右手をキリトに向ける!

「僕以外に主役の器の人がいると、困るんだよね!」

(やばい、まさかデータドレイン!?)



いつものキリトなら、こんな大ぶりのモーションによって撃ち出される攻撃など簡単に避けられるだろう。が、今は戦闘による疲労で体が全く思うように動かない……のに加えて、もうなんかめんどくさくなってきたな。つうか疲れたし、早く寝たい……なんて某ファンタジー小説の主人公みたいな思考が脳を占め始めていた。

そしてカイトの腕輪が光りだして……

ばきやん！

「ふぎやつ！？」

「だからやめんかい！」

ブラックローズがいつものまにか手にしたテニスラケットを後ろからカイトの頭目がけて振り下ろしていた！

小気味よい音を響かせ、見事にクリーンヒットしたラケット。

カイトは網を突き破って首にラケットが引っ掛かった状態で、ばたと前のめりに倒れる。

「たつくもお！あんたにはホント世話焼かされるわ……」

ブラックローズはそう言いながらカイトをズリズリと引きずり出す。

「でも、あんま嫌そうには見えないけど……」

キリトがぼそつと言うと、ブラックローズがきつ！とキリトを睨む。

「なんか言った？」

「いや、なんでそんなにカイトの世話焼くのかなって」

キリトのストレートな質問に、ブラックローズは一瞬固まってしどろもどろしはじめた。

「そりゃー、まあ、あれよ……つまりー、その……」

「僕のが好きだからでしょ？」

いつの間に気が付いたのか、カイトがうつ伏せのまま引きずられながら、ブラックローズの代わりに答えた。

「なっ！何言って！？ていうかあんた、起きてんなら自分で歩きなさい……！」

顔を真っ赤にさせながらブラックローズは牢屋の前までカイトを引きずって中に放り込むと、備え付けのメニューを開き、扉や柵を何重にも出して閉めた上に、鍵（南京錠から電子ロックまでありとあらゆる種類）をいくつもかける。

「ふーっ、ひとまずこれで安心でしょ。それじゃキリト、また後でね！」

そう言っって少し頬を赤く染めたブラックローズは、慌ただしくその場を立ち去ってしまった。

（なんかわかりやすい娘だな……）

そんなことを考えながら、キリトはホールに戻って他の手伝いをするためにその場を後にした。

## 新しい生活の幕開け

ピリリリリリリッ！ピリリリリリッ！  
バシッ！

けたたましい音で鳴る目覚ましを止めてキリトがベットから起きると、そこは見慣れぬ部屋だった。

ぼんやりしながらも、昨日ボス戦や襲撃の被害の後始末が終わった後、用意された部屋ですぐに眠ってしまったのを思い出す。

昨日は疲労と眠気でちゃんと見ていなかったが、良く見てみると内装や家具のセンスも良く、なかなか小奇麗で居心地のいい部屋だ。

そんなことをはつきりしない頭でぼーっとしながらベッドに座って考えていると、扉がノックされた。

「どーぞ」

キリトは特に考えもせず反射的に答えると、横開きに開いたドアの向こうからアスナが入ってきた。

「おはよう、キリトくん。それでこれなんだけど……ってちょっと、その格好!？」

アスナが驚いたのを見て、はじめてキリトは自分がパンツ一丁の姿だということに気付く。

昨日着ていた服は戦闘でぼろぼろになってしまった上に、代えの服はすべてホームのアイテムボックスの中にあるので（まさか必要になるとは思わなかったし）とりあえず昨日はパンツ以外全部脱いで寝ていた……

「別にいいじゃん、一緒に住んでた時にさんざん見慣れてるだろ？」

キリトはからかい半分でそう言うと、アスナは顔を真っ赤にして手に持っていた袋を投げてよこす。

「はいこれ！トキオくんがキリトくんに渡してくれって！！」

キリトが中をのぞくと、服が一式入っていた。

それはぱつと見キリトが今まで着ていた服と同じもののように見えたが、ちょっとデザインが違っている。ところどころにこの世界の紋様（確かこの紋様は闇を司っていた）などが入っていて、どこかカイト達が着ている服と似た雰囲気だ。

「昨日の戦闘で装備はぼろぼろになっただろうから、徹夜でグラウンデイ達が仕立ててくれたんだって」

（へえ、こりゃいいな……）

よく見るとアスナの服も、いつものものとは少しデザインが違っている。

「アスナも、その服すごく似合ってるよ。この服はとりあえずシャワー浴びたら着てみる。サンキュな」

最近になってやっとテンパらずに言えるようになったセリフに対し、少し照れているアスナに礼を言って立ちあがろうとしたキリトだったが、ふと思いついてさらに一言言ってみた。

「一緒に入る？」

一瞬、ポカンとしたアスナだったが、すぐに言葉の意味を理解したのか、見る見るうちに顔をドラゴンのフレアブレスを喰らったかのように真っ赤にしていく。

「もっつ、キリトくん!!」

.....

「それじゃあ、これから昨日できなかったこの依頼板について説明するね」

トキオはホールの一角にある巨大な掲示板の前に集まったフェアリーダンスの面々に説明し始めた。

「この依頼板には、この世界のPC達からの依頼やイベント、それにアウラ達からの情報により力があると推測される場所などが書かれているんだ。この中からやりたいものを選んで進行していく感じ。逆に自分が何か依頼したい場合も、ここに載せる」

ここでさらにトキオはメニューを開き操作した。

すると、メッセージが届いたというインフォが全員に一齐に流れ、メールボックスの中の新着メッセージが来ていた。開けてみると、そこには『トキオからメンバーアドレスを受け取りました。アドレスを登録しますか?』と書かれていた。

「メンバーアドレスを持っていると、好きな時に相手と連絡が取れ

るし、いろいろと便利だから登録しといてね。他の騎士団のアドレスも、どんどん貰っておくといいよ。

それじゃ、とりあえず今日はこれで解散！これから依頼をこなすのもいいし、昨日の疲れが抜けてなかったらゆっくり休んでもいいよ」

そう言ってトキオは急ぎの用があるのか、その場からさっさと立ち去ってしまった。

## クエスト開始！

「さてと、どうするかな……」

キリトはトキオの説明が終わった後、その場に立ちつくし、これからどうするか迷っていた。

本当はアスナと一緒に、疲労困憊で倒れたまま、未だに病室で寝込んでいるユイの看病をしようと思っていたのだが、アスナに止められてしまったのだ。

「だってキリトくん、昨日の戦闘では櫛君と同じくらいハードな戦いしてたでしょ。今日くらいゆっくり休まなくちゃ」

「いや、ただ休んでるだけじゃ逆に暇だし」

「それなら何か簡単なクエストにチャレンジするとか、とりあえずユイちゃんの場合は私に任せてもらって大丈夫だから」

そう言っアスナはユイが眠っている病室に向かって行ってしまった。

どうやら昨日の激戦による不調は、アスナには完全にばれていたらしい。

そんなわけで、さて、どうしようか……と、キリトが考えていると、近くで肩にピナを止まらせているシリカとプチグソを抱いている騎士団員の少女（確かホタル）が話していることがふと耳に入ってきた。

「それじゃあ、あたしのピナもそれに参加できるんですか？」

「もちろんデス。このレースはモンスターやそれに準ずるものであれば何でも参加オーケーデス。」

でも人を乗せられくらい大きくないとダメなんですが、それはこのレシピに書いてある材料を集めて、食べさせれば大丈夫です」

悩んでてもしょうがないと結論したキリトは、とりあえず何の話しか聞いてみることにした。

「なあシリカ、今話してたのって、なんかのクエスト？」

シリカとホタルがキリトの方を振り向き、最初から説明してくれた。

「明日第10回、The World Monsterレースが開催されるんデス。それにワタシもでるんですが、シリカさんも参加したいとのコトデ」

少し胡散臭い英語なまりの片言日本語でしゃべりながらホタルがシリカの方を向くと、今度はシリカが後を継いで話します。

「昨日一緒に船でお仕事してる時に、ピナを見せたら誘われたんです。あつ、そうだ！キリトさんも参加しませんか？」

「へえ、それって俺でも参加できるの？」

ホタルの方を見ると、彼女はもちろんとうなずいた。

「キリトさんはモンスターを連れているわけではないようデスガ、これからフィールドに出て比較的慣れやすい、ラッキーアニマルを捕まえてくれば大丈夫です。」

「これがその大会の案内です」

シリカがメニューを操作して紙を1枚取り出し、キリトに手渡す。



それを流し読みしていると、ふと賞品欄に書いてある物の内の一つが目に入る。

それは、『AIのどんな怪我や病気もたちどころに治せる秘薬』という代物だ。

他の賞品が月の石や豪華なドレス、最高級ブラシなど一貫性のな上に微妙なものばかりの内の一つなので、いかにも胡散臭そうなアイテムだが、もしこれが本物だったらユイの調子も治せるかも……

「よしっ、じゃあ俺も出させてくれ」

キリトの答えにホタルはにこやかに頷く。

「わかりマシタ。手順はまず、ラッキーアニマルを捕まえた後、あの料理を食べさせておつきくシマス」

「ある料理？」

「ハイ！それはカノジョたちが作ってくれマス」

そう言っつてホタルは壇上の方を見ると、急にホール全体の明かりが消え真っ暗になる。

そして壇上の上からスポットライトがいくつも照らされ、それらが真ん中に集中すると、そこには2人の少女が立っていた。

その二人は、アウラにそっくりな顔と姿をしていた。違う点と言えば、二人ともアウラより少し幼い点と、一人は髪飾りに赤い花を挿している赤い服を着た元氣そうな子で、もう一人は白に青みがかった服を着て、むすっとした表情をしているところだ。

「やつほーっ！リコリスですー！！」

「ゼファイです……」

「二人合わせて、アウラシスターズです」

リコリスと名乗った少女は元気よく、ゼフィという少女はやらされてる感とやる気のなさを隠しもせずに壇上でポーズを決めていたのだが……

「こらーっ！またお前たちかブヒー！勝手に明かりを消すなって、何回言えば分かるブヒー！おかげで大惨事ブヒー！」

再び明かりが点くと、デス ランディのまわりでは大量の荷物がばら撒かれており、ちょうど近くを歩いていたらしいリズベットと包帯まみれのクラインが荷物の山に埋もれていた。

どうやらクラインはリズを暗闇の中とっさにかばったらしく、荷物から守るようにリズに覆いかぶさっていた。

「ちよっ、クライン、早くどいてよ！」

「どけって言われても、今動いちまったら……って言うか、重傷の俺が身を挺してかばったのに、開口一番それかよ！」

「まっ、まあ確かにかばってくれたのには感謝するけど……って、どこ触ってんのよ!？」

「ぐへっ!？」

リズの鍛冶場で鍛えられた腕で思いつきり殴られたクラインは、荷物と共に天井高く吹っ飛んでいった。

「あっ、ゴメン!？」

他でも似たようなことがそこらで起こっている中、この惨事の原因の少女2人が何事もなかったかのようにすたすたとキリト達の方に歩み寄る。

「それで、あなたがた二人がモンスター巨大化エキス欲しいんですか？」

キリト達の前に立つと、すぐに赤い少女（リコリスだったかな）が訊ねてきた。

「あつ、ああ……（エキス？）」

「はい！」

「それじゃホタルがさつき見せてたレシピの材料を集めてきて、さらに私たちの依頼も受けてくれれば作ってあげてもいいわ」

今度は白に青みがかった服を着た少女（こっちは確かゼフィ）が言ってきた。

「んっ、何かしなくちゃいけないのか？」

キリトが特に考えず、反射的に訊ねる。

すると……

「当たり前だろうが」

バシンッ！

「うお！？」

もの凄い風切り音と共に、赤い物体が今までキリトの頭があった場所を通過する。

「チッ！」

いつのまにか赤い物体、グローブをはめているゼフィが、悔しそうに女の子にあるまじき感じで舌打ちをする。

「この世にただで何かが手に入るわけないだろうが、このネットゲ中ヤンキー毒者が」

キリトはツツコミと言う名の紙一重でギリギリ回避できた当たつたら気絶必死の驚異のアップーと、自分がなぜネットゲ中毒者というレッテルを貼られているのか（まあ概ね事実だけど……）について言及するのは藪蛇になりそうなのでやめておき、その依頼とやらが何なのか聞いてみることにした。

「なに、簡単なことだ。お前たちが出るレースの優勝賞品の内ある物を私たちにくれればいい」

「優勝賞品？」

キリトがそう訊ねると、ホタルがそれに答えた。

「ハイ。このレースはかなり大きな規模の物なので、上位3位まではかなり豪華な賞品が色々貰えるんデス。そのかわり、それ以下の人は参加賞の粗品のみデスガ……」

「それじゃあ、もしあたしたちの内誰も優勝できなかつたらどうすればいいんですか？」

シリカがもつともな疑問を口にすると、リコリスが楽しそうに答えた。

「その場合は、ペナルティとして楽しい罰ゲームを公開処刑風に執り行います」

(いやっ、 って……何気に恐ろしいことをさらっと言っているよ  
うな……)

しかしキリトは、一瞬リコリスから感じたいたずらっ子オーラを  
無視して即諾した。

「まあ、要は優勝すればいいってことだろ？」

(ユイの為にも、負けるつもりはさらさらないし、これくらいのス  
リルがないと張り合いもないしな)

「話しは決まりデスネ！それじゃあ早速食材集めと、ラッキア二  
マル捕獲に行きまショウ！」

「「おー！」」

「きゅるる！」

「ブヒー！」

3人と2匹の掛け声がある場上がった。

## マク・アヌを訊ねて

サーバー 水の都マク・アヌ

「ここがマク・アヌか。綺麗なところだな」

転送ゲートがある巨大な建物の門から出たキリトの目に入ったのは、きらきらと朝日を照り返して煌めく運河と、その上に架っている向かい側の街へとつながる巨大な橋だった。

そのすぐ近くにある噴水が中央にある広場には、人ごみでにぎわう出店らしきものがたくさん出ている。そして橋を越えた先はいい意味で古い感じがする街並みで、なんだか来るものをほっとさせるような空気に包まれている。

なんとなくだが、アインクラッドの始まりの街と雰囲気似ている。

「あそこの広場がマーケットになっていて、今回の材料も多分ほぼ全て入手可能デス」

イベントに参加することを決めたキリト達は、ホタルに連れられてマク・アヌにやってきていた。

ここはいくつもあるルートタウンの中心的存在で、かなりの人（全員A.I.）がいて凄く賑やかだ。

「何もたまたしてるの？早く来ないと置いてくよ……」

同じく大会に出るので一緒に買い出しに来た司は、そう言い残し、眼下の光景に見入っているキリト達を置いてさっさと階段を下りて

行ってしまった。

色々と目を引くものがあり遅れがちだったキリトとシリカはホタルに先導されながら慌てて司の後を追う。

「この区画は主にギルドが出している店が多いデス」

階段を下りてすぐにある広場では、マーケットの半分を占めるスペースに、ケストレルや月の樹、レイブンなどたくさんの方の名を冠した看板が掲げられている。

そしてその一角に、こじんまりとした、しかし結構な数の客が集まっている店があった。

「あつ、あそこデス！」

ホタルが指差したのがたまたまキリトの目に入っていたその店だった。

看板には、カナード と書かれていて、さらにその下に『初心者から熟練者まで満足すること間違いなしのお店』と付け加えられている。

「なあ、もうちょっとまかんねえか？」

ちょうどカウンターでは腰に外見が派手に禍々しすぎて逆に安っぽく見える片手剣を差し、青いトマトのような顔をした男が店の前で粘っている。どうやら値切り交渉をしているらしい。

そして、その相手をしているのは……

「ふんつ、そりゃあ無理な相談だ。これ以上はびた一文まけられねえ」

SAOで一流の（ぼったくり）商人として、下は初心者から上は中堅どころはおるか攻略組にまで一目置かれていたエギルだった。

「てめー、下手に出てりゃ調子にのりやがって！俺をどこのギルドのもんだか知ってるのか！？泣く子も黙る、ケストレルだぜ！！」

トマト頭はどうやら交渉を諦めて、脅しに出たようだ。

しかし、ALOのアルゲートに出した店でも阿漕な商売を成立させている上に、リアルでもカフェを経営しているまさに百戦錬磨のエギル相手には分が悪すぎた。

「ふんっ、おめーのいるギルドのことは知らねえが、こんなことでギルドの名前を出すような奴にろくなやつはいねえのは確かだな」

エギルの剣幕にトマト頭がたじろぎ、青い顔がさらに青ざめたように見えた。ここですかさず、エギルがメニューウィンドウをそろばんを弾くように操作する。

「ま、それでもこちとら商売人だ。この値段なら、売ってやらなくもないぜ」

トマト頭はおずおずと画面をのぞき、こくこくと首を縦に振る。

そいつが逃げるように走り去っていくのを見送った後、キリトたちは店の前に立った。

「おっ、いらっしやい……ってなんだ、キリトかよ」

エギルはそのいかつい顔から出るとは想像できないような、どこか愛嬌すらある営業スマイルを出しかけたが、キリトたちだとわかると直ぐに引っ込めた。



「ほんと、エギルはどこに行ってもやっつけていけるよ。あんな風にならねたら、大抵の奴は押されちゃうぜ」

キリトが感心半分おちよくり半分で言うと、エギルはニヤツとする。

「まあ、商売は相手を呑んじまえば、後はこっちのもんだからな」

その後、エギルは自分がスケイス戦で重傷を負ったシラバスの代わりに、ガスパーと店番をしていることを説明した。

「ほんとおに助かってるぞお〜」

ちょうど列が途切れたので、ガスパーがみんなにドリンクと、この店名物のどんぐりバーガーなるものを持ってきてくれた。

「いつも初心者にはオイラが、熟練者や厄介者にはシラバスが対応してたから、ちょっと困ってたんだぞお〜。エギル、本当にありがとうだぞお〜」

ガスパーがしきりに頭を下げ、エギルは苦笑いをして少し照れている。

そんな様子を見られてるのを感じたのか、エギルは慌ててキリトに話を振った。

「そついやあ、お前も今日は何か買いに来たのか？」

「あつ、そつそつ」

キリトがイベントのことを話し、ホテルが欲しいもののリストを

エギルに渡す。

エギルはモニターを慣れた手つきで手早く操作し、次々と物を出していった。

「ほい、じゃあ料金はこれだ」

最初にシリカがお金を払う。

そして次にキリトが買おうとしたのだが……

「あれ、ユルドが0だ？」

金を払おうとしたのだが、ユルドの残高を示すところが0になっている。

「おい、キリト。言っとくがこの世界じゃALLOの通貨は使えないぜ」

「あっ！」

そうだ、確かにコンバートしたわけだから、それは当たり前のことだった。よく見ると、通貨の単位がユルドからGPに変わっている。

(ん？でも、ならなんで……)

「なんでシリカはGPもってるんだ？」

その疑問にシリカは驚いたように答えた。

「え、だって昨日の腕輪探索の時にたくさんモンスターを倒したから、結構貰えましたよ」

「なっ、なに〜!?!」

シリカが説明してくれたところによると、パーティーを組んだ場合普通のドロップアイテムなどは均等に配られるが、レアなものやGPはパーティーのリーダーが一気に受け取るらしい。

普通は戻った後、パーティー内で山分けするらしいが……

「擘め〜! あいつ黙ってたな!!」

キリトは怒りにわなわな震えていたが、ふと後ろからざわめき音が聞こえてくる。

振り返ると、そこには10人くらいのガラの悪そうなチンピラを引き連れた3人の男女のパーティーがこちらに近づいてきていた。

キリトは一瞬怒りを忘れ、なんか一昔前の漫画の不良軍団みたいだな……なんて感想を彼らに抱いていると、ガスパーがうめき声をあげた。

「げっ、あれはケストレルのボルドー一味だぞお〜」

ガスパーはこっちに来ないで欲しそうな顔をしていたが、どうやらあちらのお目当てはこの店だったらしい。

真っ直ぐこちらにぞろぞろとやってくると、一番先頭にいた女(ガスパーの話によるとボルドー)が真っ先に口を開いた。

「よお、ガスパー! 今日こそはみかじめ代をいただくか」

結構凄みのある声で話したボルドーに、ガスパーはたじたじになっている。

まさにいじめっ子といじめられっ子、チンピラとカツアゲされかかっている少年の構図だ。

「そ、そんなあゝ、いつもはそんなこと言ってこないじゃないかあゝ」

その問いにボルドーが一瞬狼狽えるもすぐに答えようとしたが、先に後ろの金魚のフンの内の一人がしゃしゃり出てしゃべりだした。

「うつせえ！いつもはシラバスに色々と弱み握られてて、手がだせねーんだよ！！」

そう言い終わった瞬間、その男はボルドーに鞘に入ったままの剣でぶん殴られた。

「っ痛！何するんですか、ボルドーさん！？」

「ネギ丸、アホかお前は！余計なことぺらぺらしゃべってんじやないよ！！」

咳払いをしたボルドーは話しの矛先を変えてきた。

「それに、さっきうちの下のもんがここの店で脅されたって話しも来てるんだけどよ」

（それってもしかして……）

「さっきのトマト頭のことか？」

エギルがそう言つと、ボルドーはきつ！とエギルの方を睨んだ。厳つい顔をした巨漢のエギルに気おくれしてないところを見るに、ボルドーもそこそこの実力はあるようだ。

「ほう、それじゃあんたが騎士団の新入りってやつかい。ずいぶん  
と、うちのもんをかわいがってくれたそうじゃないかい？」

「いや、普通に商売したただけなんだが……」

（まあ確かに、エギルのあの対応の仕方は反則的だから、文句を言  
いたくなるのはわからなくもないけどな……）

「というより、ただ単に騎士団に嫌がらせしたいだけでしょ。それ  
で下部ギルドのカナードにちょっかいを出すって……本当にそうい  
う未練がましくてせこいところは昔から変わってないね、君は」

ここでキリトたちの後ろで、どんぐりバーガーをむしゃむしゃ食  
べながら事の推移を傍観していた司が前に出てきた。

「ん、だれだあ、舐めた口叩いてんのは？……って、お前、司じゃ  
ねえか！？」

「やつほお〜」

完全にふざけている司に、ボルドーが何か言い返そうとしたが、  
先にさっきの男（確かネギ丸）がまたしゃべりだした。

「うつせえ！別にボルドーさんは黄昏の騎士団時代に、騎士団のみ  
んなと喧嘩別れしたこと何か、全然気にしてねえぞ！」

この発言に当然のごとくボルドーからツツコミの剣の一撃が来る  
と思われたが、それより先に後ろからツツコミと言う名の張り手が  
飛んできてネギ丸を吹っ飛ばす。

頭からもろに地面に叩きつけられ、びたーっん！という音を立て  
てもの凄く痛そうにその場で少しもがいた後、何とかネギ丸は起き  
上がり自分をはり倒した男に食って掛かる。

「いつてえー！？何すんだよ、グリーン！？」

「……………」

グリーンと呼ばれた色黒の巨漢は、何も答えない。

「いや、ナイスツツコミだ、グリーン。ついでにそいつを後ろに下がらせときな」

無表情のまま頷いたグリーンはすぐさまわめくネギ丸の足を持って、ずるずると後ろに引きずっていく。

その光景にボルドーは少し溜息をついた後、司たちに同情の目で見られていることに気付いたのか、すぐに話しを元に戻した。

「つつーわけだから、オトシマエはきつちり付けてもらっからな」

「どうするんだ、ガスパーにエギル？なんなら助太刀してもいいぜ」

見た感じ後ろのチンピラ達は雑魚だし、ボルドーもそこそこの腕はあるらしいが、エギルでも何とかできるレベルだろう。

しかしここで上手くやれば、店を守る。ガスパーが感激する。お礼に食材ただでゲット、ということが可能になる（かも？）

……などということを考えていたキリトだったが、その発言で、初めてキリトとシリカ、そしてホタルの存在に気付いたのか、ボルドーはじーっとキリト達を見る。そして、唐突にわなわな震え始めた。

「気にいらねえな……………」

「ん？」

キリトが疑問符を浮かべていると、ボルドーはキリトにずいっと近寄り、まくしたてた。

「あたしはね、黒い服着て女侍らせてるやつが、だいつっきらいなんだよねえ！」

(な、なんだそりゃ?)

「これで銀髪だったら、完全にアウトだね」

司の言葉がとどめだったのか、ボルドーはゆらりと鬨気を発しながら腰に手をやり、エフェクトと共に剣を抜く。それに後ろの奴らが続き、各々の得物を取り出す。

カウンターから店の前に出てきたエギルや、司とキリトもそれに応じてエフェクトを迸らせながら武器を取り出し、構えをとる。

そしてボルドー達が襲いかかろうとした瞬間！

「そこまでだ、お前たち！」

急に目の前に転送時に出る青いリングが出現し、その中から緑の服を着た恰幅のいい髭面のおっさんが現れた。

「ボルドー、貴様何度言えばわかる！ルートタウン内での戦闘行為はデュエル以外禁止だと言っているだろう!!」

ボルドーは一瞬殺気をその男に向けたが、直ぐに剣をしまい、司の方を向いた。

「おい、そう言えばホタルとあんたも明日の大会にはでるんだろ？アタシ達も明日それに参加するんだけどよ……」

ボルドーはニヤツとして言い放った。

「背中には気をつけな」

完璧な小悪党の捨てゼリフを言い終えると、直ぐに踵を返して立ち去ってしまった。

「助かったぞお、ありがとうございます」

ガスパーが涙目になりながら先ほど現れた男に礼を言っている。

「ふんっ、私は自分の職務を全うしただけだ。それより、あんまり無茶はするなよ」

そう言っリヨースは来た時と同様青いリングの中に消えていった。

.....

とりあえず、キリトは金は後で榨からきっちりもらうということ  
でツケにしておいて貰った。

さらに、ガスパーはレース時に使うと思われる呪符類や回復、異常状態解除アイテムに加えて、耐熱&寒マントとサングラス機能も付いたゴーグルを格安で（しかもこれもツケで）売ってくれた。

「何から何まで悪いな、ガスパー」

「ありがとうございます、ガスパーさん」

「きゅるるるー！」



2人と1匹がそれぞれ感謝の言葉を述べると、ガスパーは顔を若干赤らめて、照れ臭そうに笑った。

「このゲームは二人とも初心者なんだから、当然のことをしたただけだぞ。レース、応援してるからがんばるんだぞ」

「はいっ！」

「キュウルルッ！」

「おうッ！優勝したらなんか奢るから、楽しみにしててくれよ」

その言葉を別れの文句に、名残惜しみながらキリト達はカナードを後にした。

(しかし、明日のイベントは中々大変そうだな……)

キリトはそんなことを考えながら、ラッキアニマルを探しにみんなでフィールドに行くために、ゲートのある建物に向かった。



ゼフィに言われ、キリトたちは集めてきた材料を全て渡す。

「えーっと、……うん！全部あるね。これならばうちり3人分作れます」

リコリスが横から、ゼフィが材料を呼び出したテーブルの上に並べたのをチェックした。

「3人分？俺とシリカで二人分だよな？」

「何言ってるんですか、ホタルの分もここからとるように言われませんでしたよ？」

キリトがホタルの方を振り返ると、ホタルは一瞬うるたえたような表情をしたが、直ぐに慌てて弁解し始めた。

「そつ、それは授業料デス！けつして優勝できるか不安だったカラトカ、リコリスさん達の依頼を達成できなさそうだからとかそんな理由じゃアリマセン！」

「ホタルさん、思考がダダ漏れです……」

「まあ3人の内誰かが優勝すればいいわけだから、そこはそんなに気にしなくていいだろ」

ホタルがソウデスソウデスとうなずくのを見て、ゼフィが話しを続けた。

「話しがまとまったようだから、とりあえず作る前にこの料理の注意点を話しておく」

「注意点？」

「まず最初に、この料理の効き目はきつかり2時間しかもたない。レースは最短でも1時間半くらいかかるから、のんびりはできない

わよ」

「結構ぎりぎりなんです……」

シリカが少し不安げに相槌を打ったのに対し、キリトがフォローを入れた。

「まあでも俺たちは優勝しなくちゃいけないわけだから、最短を指すのは当たり前ってことでそれも問題ないな」

「ハイ！狙うは優勝のみデス！！」

ホタルが気合いが入った声で言うと、今度はリコリスが話し始める。

「まあ確かにそうね。じゃあ次は一番重要なことだから、しっかり聞いてね」

リコリスの真剣な表情に、つい身構えてしまうキリトとシリカ。

「それは、これを食べさせるときはパートナーの体をしっかり固定して動かないようにすること」

「へっ？」「」

キリトとシリカが疑問符を浮かべていると、二人はホタルの腕の中にいるプチグソの様子がおかしいことに気付いた。

よく見ると、ガタガタ震えて逃げ出そうともがいている。

それをホタルがあやしているのだが、その内容が……

「プチグソさん、我慢するのデス！がんばって上位に入賞して例の物を確保すると誓ったじゃないデスカ！虎穴に入らずんば虎兇を得ずデスヨー！」

キリトはどこからツツコムべきかと悩んだが、すでにゼフィとリコリスはコックスタイルの服に着替えて、メニューウィンドウから呼び出した豪勢なダイニングキッチンの前で準備を終えていた。

「それじゃ、これからリコリスさんとゼフィさんの3分クッキングを始めま〜す」

「活目しろ」

リコリスとゼフィがいつもの調子で宣言して、そして調理が始まった……のだが、

「それじゃ、まず最初に、こちらに今日の依頼者であるキリトさん達が用意していただいた材料を持ってきます」

リコリスが材料を巨大なボールに入れて手に持ち、そして続いて奥に引っ込んでいたゼフィが持ってきたものは……

「それでは、続いてこちらに用意したミキサーに」

そう、ゼフィが持ってきたのはこれまた巨大なミキサーだった。

「材料を全てぶち込みま〜す」

リコリスはダイニングキッチン備え付けの調理器具には目も向けずに、言ったままに材料をミキサーに放り込む。

ゼフィの「スイッチ・オン」という淡々とした言葉と共に開始されたもの凄い回転によりホールに騒音が響き続けること約1分、止まったミキサーの中にはなんととも言い難い色をした液体がぼこぼこ泡立っていた。

「はいっ、これで完成です！」  
「……………」

キリトとシリカは何も言えず、唯一聞こえるのはホタルの腕の中から逃げ出そうと激しくもがいているプチグソの悲痛な鳴き声だけ。

とりあえず、それは料理とっていいのか？とか毒じゃないのか？など色々ツッコみどころ満天の状況にキリトが出した答えはとうとう……

「まあ、なるようになるか……………」

自分が飲むわけではないキリトは早々に思考を打ち切った。

……………

そんなわけで、キリトはレース開始3分前になんとかはっしばに例のエキスを飲んでもらい（まあ多少強引な方法をとったが…………）大きくなったはっしばに跨って始まるのを待っていた。

その隣では同じく巨大化したピナに乗った茜色のマントを纏ったシリカと、プチグソが巨大化した姿であるロングホーンに跨ったホタルが白いマントを羽織って待機している。

他の参加者達もマントや防寒具等を着込んで真剣な表情をしており、それだけでこの大会の過酷さを物語っている。

それでも、だからこそ賞品の薬が本物である可能性も上がるのだが…………

そしてスタート1分前、キリトたちの前に巨大な画面が現れ、そこに葬天と似た姿をした男（多分オリジナル？）が映し出されてしゃべりだした。

「それでは、これから第10回The Worldモンスターレースを開催する。全員、正々堂々と勝負するように！」

待機所のゲートが開かれ出場者が前に進み出ると、そこには両脇に観客で埋め尽くされた巨大な観客席が、そして目の前にはスタートの文字が書かれたこれまた巨大な電子ボードが浮いている。

「レディース&ジェントルメーション！ようこそ第10回The Worldモンスターレースへ！司会を務めるのは、おなじみニューヨーク兎丸とオ、」

「相方のレイチェルです！」

「よろしく〜！！！」

わあーっ！という大歓声が湧きおこり、他に何も聞こえない状態になるが、ニューヨークが指揮者のようにぱつと両手をあげて閉じると場はぴたりと静かになる。

「それじゃあ、大会のルールをちやちやつと30秒で説明するぜ！ルールは簡単、3つあるチェックポイントを通過して、このスタート地点に戻ってこれた奴が勝ちだ！」

移動する方法は問わないが、空にも地上にもモンスターやトラップがうじゃうじゃあるから、楽なコースはないぜ！」

ニューヨークがびしつとポーズを決めると、今度はレイチェルが前に出る。

「説明は以上や。そこで最後に、この大会の主催者は、最近管理者に復帰したりヨースと、バルムンク」

観客席に設置された巨大なモニターに、先ほど待機所でモニターに映った翼の生えた2枚目剣士と、マク・アヌで会ったいかついおっさんの姿が映し出された。

「そこでこの警備を担当しているのは碧依と紅依の騎士団とその他有志」

画面が切り替わり、昴と槍を持った厳しそうな鋭い目つきをしたお固そうな美人な女性の姿が映し出される。

「それとご覧のスポンサーの提供で開催されます」

その後取ってつけたようにギルドの名前とマスターの顔がずらりと流れていった。

「それでは、カウントダウン開始するぜ！」

ニユークがそう言うと、スタートと書かれているボードに数字の10が現れる。

キリトは首にかけてあったゴーグル兼サングラスを付け、時を待つ。

どんどん減っていく数字。

そして……



「3、2、1、スタートオオオ！」

ドォォォォン！

というものの凄い音を合図に、一斉に選手たちがスタートした。

…と、同時に、

ボォォォンッ！！

というさらに巨大な音が爆風と閃光がその場にいた選手と観客たちの五感を塗りつぶした……。

## モンスターレース、スタート！

「なっ、なんだぁー、今の爆発はぁ！？」

ニユークが爆発とともに起きた閃光で見えなくなった目をこすり、なんとか視力を回復させると……

「な、なんじゃこりやぁぁぁ！？、モンスターレース！全員一斉に飛び出して行きました……っ、思ったら、すでに脱落者続出！？」

スタート地点では爆発により半死の選手が多数、そして爆心地より離れたところにいた選手も閃光に目をやられ、なぜかスタート地点のすぐ近くに掘られていた落とし穴にパートナー共々落ちていた。

「おーっと、これはどうやらボルドー率いるケストレルチームの妨害のようだ！」

「ほんまにえげつないマネするわぁ、あのギルドは」

解説席の下にマイクを持ったまま避難していたレイチエルが顔を出す。

「ちなみにこの大会での対戦相手に対する妨害はもちろんオツケーだぜ！」

「あんたさっきそれ言わなかったじゃない」

「……まあ、そんな細かいことは気にしないで、レースの実況に戻るぜえ！」

「よくないわっ！？」

.....

「おらおらおらっ！ま〜ちやがねえ、このやるおー！！」

もの凄い形相のチンピラ軍団が大声でわめきたてながらキリトの後ろから迫ってきている。

「待てっって言われて、止まる、バカ、が、いるかあ！」

ガスパーが見繕ってくれたサングラス機能付きのゴーグルをしていて難を逃れたキリトは、今度はケストレルの連中に因縁をつけられていた。

乗馬はSAOで1回だけしたきりのキリトは、もの凄い速さで走るはっしばにしがみつくながら精いっぱいいな今、気の利いた返事が返せないでいた。

というか、言葉を紡ごうとするたびにはっしばの揺れる体に舌を噛みそうになり、途切れ途切れに声を出すのがやつとの状態だ。

しかし、どうやらキリトが懸命に返した返事がお気に召さなかったのか、今度は罵詈雑言の代わりに矢や銃弾、呪紋や爆弾、その他よく分からない物が雨あられと降り注ぐ。

はっしばはそれを華麗に避けたが、まわりにいた何名かの参加者が不運にも巻き込まれる。

ある者は爆発して吹っ飛び、槍がぶつかりもんどりうつて落ちるもの、網にかかって身動きが取れなくなったもの、またある者は明らかにおかしな行動をとり始めたり（さっきのよくわからない物は混乱付与のアイテムか何かだったらしい）して、当たればもれなく

再起不能なものばかりだ……

「俺たちも飛べたらなあ……」

キリトが空を見上げると、遙か上空をロングホーンとピナ達飛行組が悠々と飛んでいるのが見える。

開始早々空に飛び立ったシリカ達は一時爆風に煽られたものの、すぐに立ち直って蒼空に点となっている。

「それは馬である私には無理な相談だな。それに空が安全だというわけでもなさそうだ」

はっしばは小さい時からまったくかわらない、子供のような声色なのに大人びた口調で答えながら、ひよひよいと降ってきた槍のスコールを避けていく。

そしていつまでも続くと思われていた怒涛の攻撃が突然止んだ。

「んっ、なんだ？」

いぶかしんでキリトが後ろを振り向くと、そこには予想外の惨劇が繰り広げられていた。

- - - - -

「おーっつと、先頭グループに何かあったようだあ！」

「それじゃ、中継のオーヴァンさんに状況を伝えてもらいましょ。」

オーヴァンさん！」

ここで会場の巨大モニターに赤い丸サングラスをかけ、マイクを持った青髪の男が映った。かなり高い高度にいるらしく、後ろの直ぐ近くに雲が浮かんでいる。

「こちらオーヴァンだ。今私は飛行中のザワン・シンの上から中継をしている。ちなみにカメラマンは月の樹のギルドマスターである櫂」

ここでカメラがぐるりと回転し、画面いっぱいに櫂のニコニコ顔が映る。

「アシスタントはケストレルのマスターのガビだ」

こんどはオーヴァンの隣にいる獣人タイプの男にカメラが向けられた。

「どアップに映ったガビはがはははっ、と笑いながら胸を張って言い放つ。」

「おうっ、ガビだぞー！」

観客全員がこのある意味豪華だが中継には向いてない顔ぶれに、人選間違ってるね？と思ったが、誰も口にしない。あの3人の行動は理解しようとする事自体無意味だし、陰口を叩こうものなら、どんなことになるのかはつきりしているからだ。

「今、ちょうど第一のイベントゾーンに先頭集団が突入した。これはなかなか見ものだな」

櫂がザワン・シンのごつごつした背中を歩いて首のところまでたどり着き、カメラを下に向けた。

.....

「ぎゃーっ、助けてくれー!!」

「ジーザス!? ヘッ、ヘルプ!!」

「いやっ、ちよっ、たんまあー! やっ、やめてくれー!!」

「きゃあ! なにこれーっ!?!」

キリトが後ろを振り返ると、そこは地獄絵図だった。

いつのまにかフィールドが草原から荒野に切りかわっており、その地面から無数の触手が参加者に襲いかかっていた。ある者は足を絡まれ宙ぶらりんになれ、あるものは全身を縛られ身動きが取れず、その他色々な形で捕まっている。

さらになぜか上からは、遙か上空を飛んでいたはずの飛行タイプの参加者たちが急降下して来ていた。

「なっ、なんだあれ!?!」

逃げるように地上に向かってきている参加者達の背後から、巨大な飛行船が何隻も追いかけてきている。その船の周りには、大きくなったはっしばのゆうに倍の大きさはあるであろう機械っぽいグラウンディが何十、いや、何百体も飛んでいた。

「おおっ、あれは飛空船団に量産型メカ・グランディ。まさかあんな

な大がかりなものを出してくるとは……」

はっしばが驚き半分感心半分の声を上げる。

「飛空船団に、メカグランディ!?」

( 上は軍団、後ろは触手。ここは…… )

「逃げるが勝ちだな」

「同感だ。スピードを上げるが、大丈夫か?」

「もちろん。馬上にも慣れたし、これならもう戦うこともできる」

持ち前のゲーム順応能力ですでに馬に乗ることも慣れたキリトは後ろ向きに乗って、迫りくる触手を両手に持ったグランディ特製の片手剣としてぎりぎり機能するまでのサイズに大きくした斬馬刀で豪快に薙ぎ払いながら自信たっぷりに言い放つ。

そのキリトの様子にはっしばは少し考え込んだ後、呟く。

「それなら、あれもなんとかして貰おうかな」

「あれ?」

キリトがどれだと聞こうとした瞬間、それは飛空船の部隊の一部から投下された。

それは最初は小さな芥子粒のようだったが、地上に近づいていくにつれ見る見るうちに大きくなっていき……

ドスーーーーーンッ!!

もの凄い轟音と衝撃波を生みながら、それは地面に降り立った。もうもつと立ちこめた砂煙が収まると、そこには体をとこるところ包帯で巻かれた、赤黒い肌の巨人がしゃがみこんでいた。

「きよつ、巨神兵？」

キリトは顎を外れんばかりに開きながら、ついつい前世紀の有名な某アニメ映画に出てきた古代兵器のことを思い出して口にした。

「安心しろ、口からビームは吐かない。それに、どちらかということあれは某漫画の巨人に似て……」

はっしばが冷静に的確な返答をしているうちに、着地の衝撃で座り込んでいた巨神兵のような巨人がすくっと立ちあがり、キリトたち参加者の方を凝視する。

そしてその巨体から想像できないほどのスムーズさでクラウチングスタートの構えをとったかと思うと、もの凄いスピードでキリト達の方に向かって走ってきた！

「走るのが速い！」

言い終わると同時に、はっしばはさらにスピードをアップした。

「あんなのどうすりゃいいんだ！？んっ？はっしば、今おまえ、あいつら……」

キリトが嫌な予感に冷や汗をかいていると、先ほど巨神兵を落とした船団から続々と何かが投下されてきている……

「おっ、おい、まさか……」

そう、それらは全て今地上を猛スピードでこちらに向かって走っているのと同じものだった……



「とりあえず……」

キリトは後ろから迫ってきている触手に、小回りの利かない斬馬刀をしまい牽制のスロージングナイフナイフを休むことなく投げ続けながら叫んだ。

「走れえー！」

触手に捕まった参加者たちが巨人達に気付き、悲痛な叫び声を上げているのを背中越しに聞きながら、キリトとはっしはは全速力で遁走していった。

## モンスターレース、スタート！（後書き）

今回出てきた飛空船団は、hackノ無印のボーナスイベントで行けた巨人を曳航している船団が元です。

当時はあれと戦えるのかと楽しみにしていたんですが、結局近くで見ただけでした……

## モンスターレース中盤

「見る、人がゴミのようだ！」

吹きさす風に首に巻いた白いマフラーをはためかせながら、オーヴァンは触手につかまっていた参加者が飛空船団とメカグランディ、そして巨人に蹴散らされているのを見て、はははっ！と愉快そうに笑っている。

だが、ガビと櫂があまりにもスルーするので笑い声はどんどん尻すぼみになっていく。

笑うのを完全にやめたオーヴァンは咳払いをひとつするとカメラに向かってしゃべり始める。

「まあ冗談は置いておいてだ、飛空船団と謎の触手に襲われた中盤グループはほぼ瓦解、後方にいた者たちは迂回ルートを通らざるおえないこの状況で、そろそろ第1チェックポイントを通過しそうなのはこいつらだ」

会場のモニターが切り替わり、地図と参加者の現在位置、そしてトップ争いをしている数名の様子がアップで映し出された。

「まずトップに行くのは司とボルドーとその手下2名、その後方におなじみのホタルが迫っている。

さらにその少し後ろに、今回が初参戦のキリトとシリカを先頭にケストレルの残存部隊と上空から難を逃れてきたの等他数名が中間グループを作っているな……」

「おうっ、あいつらなかなかがんばってるじゃないか！」

がははっ！と笑いながらガビは何やらメニューを操作しだした。

「褒美にもつとおもしろくしてやるぞ！」

そして無慈悲にも参加者たちに第2の試練が降りかかった。

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

「おつ、あれが第1のチェックポイント見たいですぜ！」

ねぎ丸は司に呪符を投げつけながらボルドーに向かって叫んだ。

「それじゃ、そろそろ司には退場願おうかね！」

ボルドーは呪符から起こった爆風に煽られバランスを崩した司に横から体当たりして、接触すると同時に刀剣スキル 流影閃 を放つ。

上段から勢いよく振り下ろされた剣はスキルの発するエフェクトを引きずりながら司の体へと向かい……

ガキインツ！

「そんな鈍らじゃ、雑魚1匹も倒せないと思うけど」

司は全くあわてた様子を全く見せず、杖で剣を受け止め、弾いてボルドーを押し返す。

「ふんつ、薄明の守護者がいないあんたなんて、雑魚と変わんねえだろうが！」

さらにボルドーは司を挟んで反対側にいるグリーンと挟み撃ちをし  
ようと再度体勢を傾けたが……

ズツドオーーーーン！

ものすごい轟音と共に叩きつけられた突風と衝撃波に4人とモプ  
チグソの背中から落ちそうになりながら（ねぎ丸はほぼ落ちていた  
が、足が手綱に引っ掛かり引きずられながらも一応セーフ）何事か  
と前を向いた。

「な、なんだ、ありゃアツ!?!」

そこはさつきまではチエックポイントである旗がぽつんと立って  
いるだけのただっ広い荒野が続いていたはずだった。

しかし、今は旗がはためいている後ろに、巨大な山脈がそびえて  
いた。

.....

「キリトさん達ももう通過したみたいですし、そろそろいいかしら、  
お姉さま？」

その少女は自身の背後から召喚している触手で、多数の参加者を  
捕まえて人形遊びでもするかのように弄びながら、瞳の色が左右で  
違うオッドアイで、迫りくる巨人の大群を見ていた。

少女はアウラとよく似た雰囲気で、リコリスやゼフィと同じくら  
いの年格好、服はグレー系で統一されている。

そしてちょうど顔の高さにウィンドが展開されており、そこにはゼフィとリコリスが丸いテーブルの周りに並べられた椅子に座って、まったりとしている姿が映し出されている。

「お疲れさま、モルティ。もういいわよ」

「ご苦労。早く帰ってこい、お茶にする」

二人の短い労いの言葉を締めくくりに通信は切れた。

「はあ……」

いつものことだが、上の姉二人の遊びに巻き込まれると大変だ。

あの二人は遊びを思いついたり、いじりがいのありそうなおもちゃを見つけた度に、自分を引きずり込んで実行役に仕立ててはことをおおごとにして楽しんでいる。

今回ののはレースの妨害という比較的軽めなものだったけど、いつもはもっともつと苦労させられている。

まあ本当に嫌だったらほっといて逃げてしまえばいいのだし、こんなことで悩めること自体が幸せの証であるとも言えなくはない。

(それに、それほどつまらないというわけでもないし……)

そんなあの二人の姉には絶対言えないような(言ったらあの二人は必ず調子に乗るか、からかう)思いを口の中で飴玉を転がすように少し味わった。

そしてその後少し苦笑いを浮かべ、彼女は最後の仕上げに捕まえていた参加者たちを巨人の大群の方に放り投げ青いリングと共に消えていった。

度重なる爆撃による熱と硝煙、そして緑の濃い匂いが混ざり合っ  
て息苦しくなっている森を二人と二匹があたりを警戒しながら慎重  
に歩を進めていた。

「ふーっ、何とかまけたかな」  
「見たいですね……」

途中で合流したシリカがピナから降りながらキリトの疲れの混じ  
った声に相槌を打つ。

キリトも一息入れるために、はっしばの上から飛び降りて警戒を  
解かないまでも少し気を緩めた。

走るのが異常に速い巨人の大群に地上から、そして空からは執拗  
にミサイルなどを撃ち込んできた飛空船団と編隊を組んで襲いくる  
メカ・グランディから散々逃げ回っていたので（あの触手はいつの  
間にか消えていた）気を張りっぱなしだった。もし森の中に逃げ込  
み、木で敵の視界とミサイルを防ぐことに成功してなかったらどう  
なっていたかわからない……

こういうことには慣れてるといえば慣れているキリトだったが（  
あの大きさのモンスターの大量はエクスカリバー入手イベントの  
前にリーファとアスナ3人で偵察に入ったダンジョン内にわんさか  
いた邪神で体験している）空から降り続けるミサイルの嵐のおまけ  
までつくと、さすがに今までの経験の範疇を超えていた。

「まあ、それでこそゲームって気もするけどな……」

未だゲームのジャンルとしては若いVRMMOは、これからさらなる未知の体験をさせてくれることをキリトは予感していた。

「何か言いましたか？」

キリトの心中から漏れた言葉は呟くように小さかったが、耳に入ったらしく横を歩いているシリカが訪ねる。

「いや、ただの独り言」

「そうですね。それにしても、他の人は誰もいなくなっちゃいましたね。ホタルさんともはぐれちゃったし……」

シリカがあたりを見回しながら少し心細そうに呟いた。

確かに執念深く絡んできたケストレルのやつらも、あの大混戦の中で散り散りになり、何人抜けられたか定かではない。上を飛んでたやつらも何人も撃ち落されているのを目撃している。まあ弾が当たった瞬間パラシュート付きのネットに包まれて身動きが取れなくなっていただけなので危険はないみたいだったが。

しかし、捕まって地面に落ちた参加者とパートナーが巨人に入れられたまま連れ去られていたが、あの光景はなんだか……いや、これ以上考えるのはやめとこう……

思考がやや想像したくない方向に行きだしそうだったので、キリトは考えるのを一旦止めてシリカの不安を解くことにした。

「ホタルはああ見えて結構したたかだし、このレースも初めてじゃないだろうから大丈夫なはずだ。他の奴らはあの混乱だったから、コースを外れたやつがほとんど見ていいだろ。俺たちはラッキーなことにはぼまっすぐこれたから……っほら、もうすぐ森が開ける！」



第1チェックポイントは目と鼻の先だ。

「しかしデカいな……」

はっしばから降りたキリトが見上げると、そこには頂上が雲に隠れて見えないほど大きな山がそびえ立っていた。いや、その隣にもいくつもの山が連なっているから山脈と言った方が正しいか。

キリト達は森を抜けるとすぐに見えたチェックポイントと、その後ろに見えた絶望的なまでにデカい山に圧倒させられてしまった。

呆けること数秒、すぐに急いで第1チェックポイントまで行きながら、これからどうするかとシリカやはっしば（一応ピナも）と作戦会議を始めた。

話すこと10分……

「それじゃあこの薄ませたやつを飲ませればまた巨大化できるんだ？」

キリトがシリカから渡された小瓶を見ながら尋ねた。

「はい。ピナがどうしても飲んでくれそうになかったんでリコリスさん達に相談したら、薄めたら味もましになるからって教えてくれたんです。そのかわり、効果は短くなってしまうんで何回か飲ませないとだめですけど」

「それならそうと最初から言ってくればいいものを……」

薄めていない原液を飲んだはっしばは、味を思い出したのか苦い顔をした。

「ごめんなさい。本当はキリトさん達にも言おうと思ったんだけど、ゼフィさんが『あいつには絶対に言うなよ。聞きに来ないやつが悪い』って、言われちゃって……」

シリカが申し訳なさそうにしよぼんとしてしまったので、はっしばがばつが悪そうにして話を切り替える。

「それでこれからの行動は自転車のレースで言うと私がエース、ピナがアシストということだな。

最初に私が飲んだエキスをあれして元のサイズに戻り、その後ピナに二人と私を乗せて全速力で山を越えてもらう。そしてその後私がまた巨大化してゴールまで走りきる」

「ああ、これが優勝するのに一番の手だと思う。もう先頭集団とは結構離されちゃってるから、ピナとはっしばが協力しても追い付くかどうかぎりぎりだし、確実とは言えないけど……」

キリトが歯切れの悪そうに言うと、シリカがその不安を払うかのように明るく声を上げる。

「それじゃがんばって早く追い付きましょう！」

「キュルルッ!!」

シリカの掛け声にピナが元気よく答えた。

「それじゃ頼むぞ、はっしば……」

「お願いします」

はっしばは無言で頷くと、ちょっと遠くの岩陰まで走り去っていった。

「大丈夫かな？」

シリカがピナのことを撫でてやりながら心配そうにこちらに聞いてきた。

「まあまだ短い付き合いだけど、あいつなら大丈夫だろ。それより、ピナは行けそう？」

「はい、さっき追加を飲ませたんで大丈夫です」

当のピナはぶるぶる震えて羽を落ち着かないようにパタパタさせている。

「戻ったぞ」

そう言われても初めはどこで言われているのかは気づかなかった。しかし足元の方を見ると……

「おっ、ちゃんと小さくなってるな」

「ふんっ、当たり前だ。」

はっしばが小さい体をぶるんと揺らすとキリトに向かって飛びかかったと思ったら、肩の上に乗ってきた。

「それより早く出発するぞ。私たちはだいぶ出遅れてるみたいだからな」

「よし、それじゃあシリカとピナ、後は頼む」  
「はい！」

そう言っつてシリカと俺とはっしばはピナの上に乗った。  
シリカには座る鞍があるが、あいにくタンDEMシートはないので、  
キリトはシリカに後ろから掴まることになる。

「それじゃあ、しっかり掴んでください！」

シリカが少し緊張して裏返った声で言ったのに対し、キリトはちよつと悩んで、とりあえず肩を掴む。

「フルスピードで行くんですから、そんなんじゃ確実に落ちますよ！」

そう言われてはしかたないので、キリトは肩においた手をシリカの腹のほうに回してぎゅつと掴んで、ぴったりと密着した。呆れるほど緻密に再現された感覚が、シリカの体温やら髪からほのかに漂ういい香りやらをキリトの脳へと届ける。

(な、なんか後ろに乗るのって結構恥ずかしいんだな……)

普段はバイクなどで後ろに人を乗せることはあつても、誰かの後ろに乗ったことがほとんどないキリトにとって、新鮮さと気恥ずかしさが交ぜになって何とも言えない心境になっている。

「そ、それじゃ行きます！お願い、ピナ！！！」

キリト同様かなり緊張した様子で顔を真っ赤にして、ケットシー特有の耳と尻尾をソワソワさせながら、シリカはピナに命令を下す。

それに答えてピナは翼をはためかせ、1匹と妙な空気を孕んだままの二人を乗せて矢のように頂上を目指して飛びたった。

.....

キリト達が飛び立ってから約10分ほど経過した頃、一つの人影がフラッグの前までたどり着いた。

その参加者はボロボロのマントに身を包み、フードを目深に被って人相どころか性別すらもわからない。

そして、目の前に立ちふさがる雲に届かんばかりにそびえる山脈を見上げていたその参加者は、徐に右手をマントの下から突出し、水平に構えて……

## モンスターレース中盤（後書き）

はっしばが元の大きさに戻った方法は……食事中の方もいるかもと  
考慮して（いや、いないだろうけどw）詳しくは語りません。

## モンスターレース終盤

「すごい雨ですね……大丈夫、ピナ？」

シリカが目深に被ったフードの端からゴーグルを付けた顔を覗かせながら、手綱を握ったまま心配そうにピナの背中を撫でる。

「キュルルルウツ！」

その問いに「こんなのヘッチャラだよ！」的な鳴き声を主人に返すピナ。

キリトたちが山に入ってから約5分がたった頃、急に空模様が悪くなったと思ったら、ぼつぼつと水滴が顔に当たった。

そして二人がフードを被った直後、目の前が霞むほどの雨が降り出し、もうすでに10分ぐらいスコールのごとく降り続けている。

「まあ、山の天気は変わりやすいと言うからな」

キリトのマントの内側にスッポリ収まっているはっしばも答える。

「でも、ほんとこれ着てて助かったぜ……」

キリトもゴーグルについた水滴を意味が無いとわかっていながらも拭いながら呟く。

この防水機能をも備えたマントを着ていなかったら、HPは減らないまでも、精神的にきつかっただろう。

まさに、ガスパー様々だ。

「ん、やんできた……?」

そんなことを考えてるうちに、降り始めたのと同じくらい唐突に雨はやんでしまった。

いくら防水といっても、マント越しに感じる雨はジワジワと精神を削っていたので、やっと一息つける……と、キリトが気を少し抜いた次の瞬間、何か白くて冷たいものが頬に当たった。

「あれ、これってもしかして……雪?」

その言葉をシリカが言い終わるか終わらないかのうちに、こんどはぱらぱらと雪が降り始め、あっという間にブリザードになってしまい、わずか数十秒後には岩肌が覆われ、一面雪景色になっていた。

「やつ、山の天気が変わりやすいつて言っても、限度があるだろうが……!?!?ハア、ハアアックションツ!!」

フードを暴風に吹き飛ばされ顔が露わになってしまったキリトは、一瞬で凍るような寒風を顔面に受けてツンツン尖らせた髪が一瞬にしてツララのようになり、盛大なクシャミをしながら誰へすべきなかわからないツッコミをした。

そして、その叫びは虚しく山へとこだましていった……

さらにとどめと言わんばかりに、今度はどこからともなく飛行型 Mob の大群まで湧いてくる。



「くそつ、切りがないな……」

先ほどからキリトは迫りくるモンスター達にナイフや呪符を投げつけている。

しかし、倒しても倒しても湧いて出てくる上に、スコールによってびしょ濡れになった後に吹雪にあい耐水、寒性能のあるマントもさすがに凍りかけて効果が薄れ、寒さがジワジワと体を侵している。ゲーム内だから歯をがちがちいわせる程度ですんでるが、現実だったら凍死確定だろう。

それでも、かじかんだ体は動かしにくくなって、いつもの威力と命中率の半分も出せない上に、吹雪による視界の悪さと暴風による音で聴覚もほとんど役に立っておらず、キリト達はかなりの苦戦を強いられていた。

「キリトさん！あと少しで頂上です！！でも、予想以上に時間が掛っちゃったから……」

そう、この図ったかのような悪天候のせいでピナは思うようにスピードが出せず、そろそろ巨大化していられる制限時間になってしまふ。

そしてキリトが次善の策を頭から捻り出そうとしている間にも、どんどん頂上に着くまでのタイムリミットが近づいていき……

.....

「さあて、次は何が起きるかな！」

高度数千メートル上空、ザワン・シンの背中の上ではガビがふんふんっ と鼻歌を歌いながらダーツを持ってルーレットが回っているのを見ている。そのルーレットが止まっていれば、そこにモンスターの大群出現！や、猛吹雪、大雨、噴火、落雷などが書いてあることがわかつたろう。

つまり、先ほどからの悪天候とモンスターの大量は、ガビがダーツを投げて当たったことにより引き起こされていたのだ。

「さて、今どんどん追いついてきていたキリトペアとシリカペアだが、ここにきてどうやらあの竜の巨大化が解けたようだ。このままだと……」

「モンスターの餌食ですね」

オーヴァンが淡々と解説をしていると、カメラを持った櫛が口を挟んだ。

「櫛、お前は確かキリトと一緒にパーティを組んだんだろ。少しは心配しないのか？」

オーヴァンがあきれ半分どうでもよさそうな感じ半分で聞くと、櫛はニコニコ笑って答えた。

「心配なんてしてませんよ。まだ短い付き合いですが、キリトさんは……」

櫛は言いながらカメラをオーヴァンから遙か下のキリト達の方に向けた。

「これくらいでどうにかなる玉じゃないですからね」

.....

「もう、ダメみたいです!?!」

ピナが頂上に差し掛かったと同時にシリカが叫び声をあげた。それからすぐにぼんっ!という音と共にピナは元の姿に戻ってしまう。

頂上に差ししてある第二チェックポイントの旗の近くの地面に着地した後、キリトはゴーグルに付いた雪を拭き取って視界を確保し、メニユーウィンドウを操作してアイテムポーチから例の小瓶を取り出した。そして一瞬、麓に降りてから使う予定の巨大化エキスをピナはつしばに飲ませようと迷う。

しかし、そうしたらこの場はやり過ぎせるだろうが、確実に優勝争いから脱落してしまう……

そう悩んでいる間にも、背後からモンスター達が迫ってきているのが聞こえてくる。

「うわっ!あぶね!?!」

寒さでかじかんだ手を滑らせて、キリトは危うく小瓶を地面に落としてしまいそうになった。

(まあ下は雪が積もっているから、落しても大丈夫だろうけど……。ん?滑る……。雪……。積もる……)

それらの言葉が頭に浮かんで一つに繋がった瞬間、キリトはあることを閃いた。

「うおおおおおー！ー！ー！ー！」

キリトは気合いの叫び声をあげながら、はっしばとピナを肩の上に乗せ、シリカを抱きかかえながら猛スピードで雪の積もった斜面を下っていた。モンスターの大群は今もまだ近くを追走しているが、ピナに乗って飛んでいた時とほぼ変わらない距離を保っている。

「少し飛ぶから、しっかり掴まってる！」

キリトは少し出っ張っている所をジャンプ台にして飛び上がり、さらにスピードを速めた。

「キツ、キリトさん！大丈夫ですかこれ！？」

乱暴に着地した後、絶叫系の苦手なシリカが自分の腕の中で丸くなりながら寒さと緊張と恐怖のためか顔を真っ赤にしてぶるぶる震えているのをキリトはちらりと見る。

「キリト、もう少し安全走行で頼む。ただでさえ即席のスノーボードなんだからな」

「キュルルルッ！ー！」

「大丈夫！それに、これくらい速くしないと追いつかれる！ー！」

肩の上に乗ったはっしばとピナにたしなめられながら、キリトはスノーボードを操り、さらにスピードを上げていった。

そう、キリトが思いついたのはスノボーを作ることだった。

材料は一昨日のグランホエル修繕作業中に持ち運びが大変な板やらなんやらをアイテムポーチに入れておいたのをそのままにしていたのを使用。

それらを使い即席のスノボーを作り、運よく先ほどから吹きつけていたブリザードも風向きが変わり今は追い風なった助けも借りて、スピードをどんどん上げて2人+2匹で猛スピードで下山している。

「おつ、上から敵が来てるな……後のも結構近いし……」

だんだん迫ってきた敵に対して少し悩んだ後、キリトはシリカにある考えを伝えた。

シリカはびっくりした表情をしたが、すぐに黙って頷く。

「よしっ、じゃあ3数えたらやる！3、2、1、今だっ！」

掛け声とともにキリトはシリカを思いっきり空高く放り投げ、それと同時にスノボーを操り後ろを向いた。

火炎独楽！

シリカが上空で炎を纏いながらの回転攻撃で敵を蹴散らすのを見界の隅で見ながら、キリトは手持ちの残り全部を使う勢いで、ナイフと呪符を投げまくる。

ズドオオオオオンッ！

ピナも援護で火炎弾を放ちまくってくれたことも加わって、あたりは吹きつける雪を吹き飛ばすくらいの大爆発が起こり、ほとんど

のモンスター達を倒すもしくはは行動不能にすることができた。

上空のモンスターを蹴散らした後、重力の法則に従いかなりのスピードで落ちてきたシリカを見事にキャッチして、キリトはまた勢いをつけようと体を傾けた。

しかしその直後、吹雪が吹き付ける音とは別な地鳴りのような音が辺りに響いてることに気付いた。

そして、シリカが後ろを直視したまま硬直してるのを見て、キリトも恐る恐る振り返ってみると……

.....

「クソッ！ いったいこの天気はどうなってんだい!？」

ボルドーが滅茶苦茶に変わる天候に悪態をついていると、斜め後ろで追走しているねぎ丸が傷だらけでボロボロになった状態で答えた。

「このレースはいつもこんな感じですが。それよりボルドーさん、いくら作戦とは言ってももう限界なんです……」

そう、ネギ丸は先ほどまで追ってきていたモンスターからボルドーを守る盾として応戦していたのだ。

「なにいつてんだ、なさけない！ グリンも応戦してたけど、何ともないじゃないかい!！」

ネギ丸の隣を走っているグリーンも少しは傷を負っているものの、ネギ丸よりはずっと軽傷でいつも通りの無愛想な表情でピンピンしている。

「そりゃあ、グリーンがさりげなく俺の方にモンスターを誘導しているからで……って、知らん顔するなよ、グリーン!？」

ネギ丸につっこまれたグリーンは横を向いてしらを切る。

「まあそんなこたアどうでもいい。それより、あんたにはいい加減あたしの視界から消えて貰いたいんだがねえ」

ここでボルドーは少し離れたところにいる司とホタルを睨みつけると同時に、また新たな呪符を投げつけた。

「はあ……だから、無駄だってば。というか、もうそのセリフは聞き飽きたよ」

呪符から出てきた炎の塊が周りの雪を融かしながら司とホタルの方に向かっていったが、二人は杖を一振りして水系呪文を使い、簡単に消してしまった。

「もう呪符のストックも残り少ないみたいデスシ、ソチラがここらへんで諦めてくれるとアリガタイのデスガ」

凶星を突かれたボルドーは、悔しそうにじたばたしそうになったが、ぐつとこらえてさらに呪符を投げつけようとしたが……

「うわぁー！ーん！逃げてくださぁー！ーい！ー!」

後ろからもの凄い絶叫と共に、昨日会った新参者の黒服の男と獣使いの女が後ろから滑り降りてくるのが見えた。

しかし二人が追いついたということより、もっと問題なものを引き連れていた。

「……………なつ、雪崩え!?!」「……………」

その場にいた5人(グリーンまでも)が、迫りくる大津波のような雪崩に驚きの声をあげ、あぜんとしてしまった。

10分後……

「すごいな……………」

勢いを失ったスノボーから降りたキリトが後ろを振り返ると、そこにはすべてを呑み込む勢いだった雪崩が、巨大な氷の壁により見事にせき止められていた。さらに驚嘆すべきは、雪崩すべてを防ぎきるといふ無理はせず、氷の壁を何枚も重ね合わせながら微妙に斜めにするにより、上手い具合に俺たちがいるところだけ雪崩がよけるようにしたらしいことだ。

(そんな精密な作業をあの短い間にするなんて……………)

「あ、あの、キリトさん……………」

「あ、わるい、シリカ」

しばらく感心していたキリトだったが、腕の中で縮こまっていたシリカの声で我に返り、シリカとピナ、そしてはっしばを下す。

さっきの雪崩で近くにいたモンスター達は散り散りになっていて



とりあえずは安全そうなので、眼下に見える麓に立つ第3チェックポイントのフラッグに近づく前に、はっしばに小瓶の中のエキスを飲ませることにした。

少しすると後ろから司がやってきたが、いつものポーカーフェイスを取り繕っているものの、その表情からは隠せないほどの疲労が見えている。

「ふう、これじゃレース続行は無理かな……」

そう言ってメニューを操作してリタイヤしようとしていると、遅れてやってきたボルドー達がキリト達の方に向かってくる。

そしてボルドーがクソロッカーから降りて司の方に歩み寄り、いきなり胸倉を掴んだ。

「てめえ！一体どうつもりだ！！あんたらは十分逃げ切れたのに、なんで雪崩を防いだ！まさか、恩に着せようとかじゃないよな！？」

そう、あの巨大な氷の壁を作ったのは司だった。

キリトたちと司、そして空を飛んでいたホタルは雪崩から十分逃げ切れる位置にいたが、ボルドー達は少し遅れており、あのままいつていたら麓につく前に確実に呑みこまれていた。しかし麓付近で急に司が180転回し、SP回復アイテムを湯水のように使いながら氷系呪紋を雪崩に向かって連続詠唱したのだ。

「別に。ただ単に、僕のプチグソが無理してたから安全策を取って防いだけだよ。だから感謝する必要もないから安心しなよ」

そう言って司が肩をすくめると、ボルドーは地団駄踏んで頭をがしがしかいた後、メニューを開きアイテムをいくつか取り出して司

に向かって投げつけた。

「……何のつもり？」

受け取ったアイテムをしげしげと眺めながら、司は無愛想な表情の中に少し意地悪成分を含ませながらわざとわかりきったことを尋ねた。

「どんな理由があろうと、結果的には助けられちゃった。このままだと借りっぱなしになっちゃうだろ。これで貸し借り無しだ！……ってそんな顔で見るな、お前ら！」

キリトたちや上空から降りてきて一息ついていたホタルが生暖かい目で見ているのに気付いたのか、ボルドーは顔を真っ赤にしてそれを誤魔化すかのようにクソロッカーに飛び乗り、後ろで控えていたねぎ丸とグリーンを引き連れて駆け出す。

「ふう、素直じゃないんだから……」

「マツタクデス」

司がそう呟きながらアイテムを使い、さっとプチグソに乗るとボルドー達の後を追う。

ホタルもやれやれとジェスチャーをした後、ロングホーンの背中に上り空高く飛び立った。

「準備ができた。私たちも行くぞ」

巨大化したはっしばがむくつと起き上がったので、俺ははっしばに乗った後シリカを引き上げて後ろに乗せた。

「じゃあ今度はシリカがしっかり掴まってくれよ。全速力で行くから！」

「はっ、はい！」

「きゅるるっ！！」

「おっ、ピナも援護頼むな。よしっ、それじゃはっしば頼む！」

「ふんっ！振り落とされるなよ！！」

そう言って、はっしばは嘶きと共に駆けだした。

のだが……

「なんだ、地震……？」

最初は微かに、そして次第に大きく、鳴動するかのようには地面から揺れと共に音が響いてくる。

そして、その音がキリト達の下を通り過ぎ……

ズドドオオオオオオンッ！！

「あっ！？」

「いいっ！？」

「うっ！？」

「えっ！？」

「オオッ！？」

すでにフラッグまで残り少しかった司、ホタルとボルドー達の前に爆音と共に土が舞い上がり、一瞬にして土煙が立ち込める。

そして、その煙が晴れたとき、そこにいたのは……

## モンスターレース決着

「さあ！ついにレースも大詰めだあ！！第3チェックポイントを通り過ぎれば、あとはこの会場まで続くトラップなしのストレートコースを走り抜けるだけ。果たして優勝するのはだーれだあ！」

ニュークが実況席のテーブルに足をかけながら、派手なマイクパフォーマンスをして会場のボルテージはどんどん上がってきている。

「おっと、ここで中継のオーヴァンがまた何か伝えたいみたいなんです、モニターに映しますう」

レイチェルがそう言ってメニューを操作すると、会場の巨大モニターにオーヴァンの顔のアップが映し出された。

「こらっ、櫂、近づけすぎだ！何、もう映っている？」

オーヴァンは少しあわてた様子を見せたが、すぐにいつもの無然とした態度に戻った。

「こちら中継のオーヴァンだ。今第3チェックポイントに選手たちが肉薄しているのだが、ちょっとしたトラブルが起こった」

会場がざわめく中、櫂はカメラをオーヴァンから遙か下の地上に向けた。

地雷でも踏んだかのように突如起こった土煙が晴れると、そこは

まるで掘られたばかりかのような巨大な穴と、ボロボロのマントに身を包み、クソキゾクに跨った小柄な参加者らしい人影が立っていた。

（まさか、この山を掘ってきたのか？）

いや、ありえないだろ……と、キリトは思いながら目の前の状況を頭の中で整理する。

何が起こったかわからないにしろ、キリト達より先に参加者がいるのは別に不自然ではない。

ただ1点、その参加者の手に、フラッグが握られていることを除いて。

「ナ、ナンデスカ、アナタハ!？」

ホタルが上空から叫ぶと同時に、近づこうとしたが、それはあえなく断念させられた。

なんとその人物が右手を突出し、幾何学模様の帯を纏った黒い球体を発射したからだ。

「あれはデータドレイン……ってことはまさか……」

そのあとの言葉をキリトが紡ぐ前に、フラッグも持つ参加者は目深に被ったフードを払う。

そして、その下にいたのは……

「やあ、みんな。ごきげんよう」

「カッ、カイト!？」

「こっ、これは大変なことになったー！なんと、あの悪名高いウ  
イルス浸蝕値100%のカイトー（以下腹黒カイト）が、姿を隠し  
てレースに参加して、フラッグを持ち去ってしまったー！！」  
「って、そなアホな！？あのフラッグはちょっとやそつとの力じゃ  
抜けないはずでしょ！？」

レイチエルが手元のメニューを忙しく操作しながらツツコンだ。

「いや、だからちょっとやそつと以上の力だったんだろ……ってい  
うか、たぶんデータドレインで根元をぶち壊したんじゃない？」

ニユークが素に戻って冷静に解説すると、レイチエルがいつの間  
に取り出したのかハリセンで頭をスパコーンツ！と小気味良い音を  
たてて叩いた。

「あんたはなんでそこで素に戻るんや！常時漫才の心掛けを忘れた  
んかあ！？」

きつちりツツコミ終えた後、レイチエルはメニュー画面からル  
ルブックを表示し、会場のモニターに映し出した。

「えー、大会の規約によりますと、フラッグの半径10m以内を通  
過しないとだめらしいです。今回みたいなことは想定しとらんから  
とりあえずカイトの持つフラッグの半径10m以内に入ってください  
い」

-----

- - -

「そんなムチャナ!?」

レイチエルの説明を聞いたホタルがロングホーンの上で悲鳴に似た叫び声をあげた。レイチエルのムチャぶりにツツコミながらも、ホタルは先ほどから休む暇がないほど撃たれているデータドレインを避けて避けて避けまくっている。

「こんな状況でどうやって近づけと言うんデスカ!」

一方地上では……

「なっ、なんか色んなプチグソがいるな……」

何とかカイトに追いつこうとしていたキリト達だったが、ノラリクラリと逃げられた拳句、カイトはアイテムポーチから取り出した何かを口につけ、『ピーーッ!』と軽く吹き鳴らした。

そして、それに呼応するかのようになり、『ドドドドッ!』と先ほどではないにしろ大地が若干揺れ、彼方からプチグソ族の大群が押し寄せてキリト達を完全に包囲して追い詰められてしまう。

司やボルドーたちも遠くのほうで囲まれて、完全な絶対包囲網を作っている。

「クソキゾク、クソアイアン、ポイズングソ、クソザボーン、スネーグソ、クソザアクア、ミルキーグソ、クソロッカー、クソザウツド……どうやらプチグソ勢揃いみたいだね……」

司が自分の周りを見渡しながら呟いた。

「そりゃあもちろん、僕は主人公だからすべての種類を集めてなきやおかしいでしょ？それに1匹1匹パラメーターが違うから、最強探して集めてたらこんなに大所帯になっちゃったんだよねw」

そう言っただけで笑いながらもカイトは上空から近づこうとするホタルにハエを追い払うかのようにデータドレインを撃ち続けている。

「とういかなんであんたがここにいるんだ？確か、ブラッククローズに閉じ込められてたはずじゃ？」

プチグソ族の圧倒的物量に若干気圧されながらも、一昨日のブラッククローズがした嚴重なロックを見ていたキリトが問いかけると、カイトはニコニコした表情で返答した。

「まあやろうと思えばデータドレインであるロックを全部ぶち抜くこともできたんだけど、ウイルス浸食値が余計に消費されちゃうからブラッククローズに出してもらおうことにしたよ」

「いや、素直に言っても出してくれないだろ？とういなか、出しちゃダメだろ……」

キリトがげんなりしていると、カイトが説明を続けた。

「ただ単に防御システムの内通信妨害だけ壊して、そのあとTHE WORLD中にブラッククローズのあんなことやそんなことを嘘と本当を交えながら面白おかしく語っていたら、すんなり開けてくれたよ？」

そのあと起こったであろう腹黒カイトと怒れるブラッククローズの追走劇が目につかぶようだ……と、キリトは思いながらも、カイト



が気になることを言っていたのに気づいたが、何も言わずに話しを続けた。

「それよりカイト、なんで俺たちの邪魔をするんだ？賞品がほしいとか？でも勝ちたいんだっいたらこんなところで油売ってないでゴールに向かうはずだよな」

キリトのもっともな問いに、カイトはあっけらかんと答えた。

「そんなの、君たちをおちよくって楽しみたいからに決まってるじゃないかwそれに、キリトたちの場合時間制限がある上に、優勝できないとリコリス達からの罰ゲームがあるんでしょ？あの二人はなかなかわかってる人達だからねえ。きつと面白いことになるだろうし」

カイトは本当にいい顔で楽しそうに話し終えた後、急にむっ、とした表情をした。

「というか、そろそろ諦めてよホタル。いい加減鬱陶しいんだけど……」

先ほどからデータドレインの射程圏内を行ったり来たりしているホタルをさすがに煩わしく思ったのかカイトが文句を言った。

時を同じくして、ショートメッセージが送られてきたことを示す音がキリトの耳元で響く。キリトはカイトに気づかれないようにこっそりメニューを開いてメッセージを確認すると、差出人はホタルで、そこには『後3発』とだけ書かれていた。

キリトは同様にメッセージを受け取ったのかこっそりメニューを見ている司のほうを見ると、視線に気づいたららしい司はこちらを見

て無言でうなずいた。

「ところでさあ、カイト」

「ん、なんだい、キリト？」

データドレインを撃ちながら答えたカイトは、少し苛立っていた。

「いや、カイトは優勝賞品の中で何が欲しいのかわかって」

キリトはメニューウィンドウをこっそり手元で操作し、シリカにこれから起こるであろうことを伝える。

「何？もしかして勝つのは諦めるから賞品のうち欲しいものを譲ってくれってこと？」

華麗にデータドレインを避けたホタルに追い撃ちでもう一発放つが、それもぎりぎりですわりと躲される。

「勿論条件次第で譲らないこともないけど、でもね、キリト……」

ここで右手と視線を常にホタルのほうに向けていたカイトがこちらを向いた。そして、なんと左手に持っていたフラッグを地面に突き刺した！

「僕は優勝する気ないから。あ、それとウイルス浸食値のことなら、確かにあとデータドレイン一発で打ち止めだよ」

いきなり言われて一瞬反応できなかったが、すぐにカイトは自分たちが浸食値が0になるのを待っていたことに初めから気づいていたことをキリトは悟った。

「まあ一応僕が眠っている間のことも臆げに思い出せるし、キリトたちがどんな罰ゲームを受けるか楽しみにしてるよw」

そう言っつてカイトは右手をキリト達に向けてデータドレインを放った。

.....

「ふむ、どうやらカイトのウイルス浸食値は0になったようだな」

先ほどからデータドレインの流れ弾に当たらないように急旋回を繰り返していたザワン・シンの上に乗っていたオーヴァンたちは、少しよれよれとした格好になっていた。

「カイトのやつ、イタチの最後っ屁よろしくあいつらにデータドレインを撃つていったぞ！その相手を定めたらどこまでも付け狙う根性、なかなかだー！」

ガビは鬣が乱れながらも、いつものごとくがはははっ！と笑っている。

「しかしこれでキリト達の状況は絶望的だな。データドレインはそれなのか狙ったのか分からないが、キリト達の足元に当たったことにより、巨大な穴ができ、そこに落ちてしまった。飛べない彼らは脱落。これで先頭争いはボルドー一味、ホタル、そして司に絞られたわけだ」

「.....」

いつもここで何か言うはずの櫂は黙したままいたので、ザワン・シンはゴールを目指している選手たちをまた追走し始めた。

.....

「何か最近よく落ちるなあ……」

キリトが体を逆さまにしながらしみじみとしながら言うと、横でピナをしっかりと抱えたまま同様に落ちているシリカがじたばたした。

「ってそんな悠長な！それよりどうするんですか！？ってか、深すぎー！」

キリトは何か言おうと思ったが、その前に下のほうでぼんっ！という音がしたかと思うと何かが浮かんできたー（というより落ちるスピードが減速し、キリトたちのほうが追いついた）

「ああ、やっぱり時間切れか」

「そのようだな……どうやらあのカイトとかいう男、初めから計算づくだったらしい」

まあ今更その話をしても仕方ないし、それよりこれからどうするかだ。

「とりあえずシリカ、俺につかまってくれ」

キリトは近くを落ちているはっしばを引き寄せて肩につかまらせ

た。

シリカも掴まったのを確認した後、キリトはエフェクトとともに剣を取出し、穴の側面に思いっきり突き刺した！

ガガガガガガガガガガッ！

激しいエフェクト共にものすごい衝撃がキリトの両手を襲うが、何とか数秒間こらえて、少し経つと減速、そして完全に止まった。キリトは二本の剣がちゃんと刺さっていることを確認した後、刃を寝かしてその上に乗った。

「ふう、これで何とか一息つける」

「あ、ありがとうございます。でも、かなり落ちちゃいましたね…

…」

まだぎりぎり上のほうには明かりが見えているが、それももう少し落ちたら消えてしまうほどのか細いものだった。

「うーん、一つだけ方法があると言えばあるんだけど……タイミンがなあ………」

キリトが呟くと、シリカが喰いついてきた。

「何かあるんですか？それなら、やってみましょう！」

そのやる気っぷりにキリトは少し驚かされる。

「いや、なんかすごいやる気だな。どうしても欲しいものがあるのか？」

そう聞くと、シリカは頬を少し赤らめて何かごによごによ  
が、そのあと逆に質問してきた。

「そ、それじゃあキリトさんはなんでこの大会に出たんですか？」  
「ああ、俺はAIの病気に効果抜群の秘薬が賞品の中にあるって書  
いてあったから、ユイの為に手に入れようと思ってな。まあなんか  
胡散臭いけど」

そう笑って言うと、シリカは少し考え込んだ様子になった。  
しかしすぐに顔をあげて元気に言い放つ。

「じゃあがんばらないと！！それで、キリトさんの秘策とやらを教  
えてください」

「いや、秘策ってほどでもないけど、この前たまたま疑問に思った  
ことを櫻に聞いただけで……」

そう言ってキリトは説明し始めた。

.....

「もう少しデスヨ！頑張つてクダサイ、プチグソサンー！！」

ホタルは下から止めどなく放たれてくる呪符による攻撃を連続無  
詠唱でさばきながら叫んだ。

ゴールである会場が視界に入ってくるまで、かなりの無茶をして  
先頭を保っているホタルだが、ボルドーたちの攻撃は苛烈さを増す  
ばかりで、終わる気配がない。

さすがに完全に防ぎきるのも限界で、ロングホーンはところどころ

る傷を負ってしまったている。

一方、司のほうはというと……

「これでアイテム切れ……」

今のSP回復で、先ほどボルドーから受け取ったアイテムは使い切り、あとは手持ちの呪符と残りのSPを使っていくしかない。しかしボルドー達ももうそれほどのストックがあるわけでもないらしく、今最後の猛攻に出ているらしい。

(これを防ぎできれば、あとは純粋なスピード勝負。とはいえまずはここを耐えきる必要があるけど……)

そんなことを思いながらも、疲労でふらふらしていたねぎ丸に火炎系呪紋を放ち、丸焦げにしてやった。

「ねぎ丸の野郎、へましやがって!!」

防戦一方だった司の不意の反撃により、ねぎ丸はこんがりいい色に焼かれていた(それでも辛うじてクソロッカーの上から落ちなかつたのは、やられなれているからだろう……)

少し後方を追走しているグリーンは、絶えずホタルのほうに呪符を投げ続けている。

相手はかなりぼろぼろだが、こちらもすでに呪符は底を尽きかけている。

このままでは誰が勝つかわからないな……

そんなことを考えながらも、近づいてきたゴールを視界の端でと

らえ、最後の攻撃に移った。

.....

「さあ、ついにレースも大詰めえ！どうですか、オーヴァンさん。このレース誰がものにするでしょうか？」

ニュークが会場の上空に待機しているザワン・シンの上に乗っているオーヴァンに尋ねた。

「どつやら全員のアイテムとSPも底を尽きかけてるみたいだ。ここまでくればあとはスピード勝負だが、それも全員ほぼ互角。これは誰が先頭になるかはわからないな……」

隣に立っているガビも、がははははっ！と笑いながら続けた。

「おっっ！本当に見ものなレースだ！！」

と、ここで、会場が沸き立った。

とつとつ選手たちの姿が朧げながらも見えてきたのだ。

「ついに来たーーーーー！さあ、このレースを勝つのはいったい誰なんやーーーーー!？」

レイチエルがマイクを持ちながら興奮して顔を真っ赤にしながら叫んでいる。

そして会場のボルテージがMaxになったと思われたとき、櫂が



自分のほうにカメラを向けた。モニターにドアップで映し出された  
櫻はのんびりと言う。

「あっ、やっと彼らが来たみたいですね」

.....

「ちっ、これで最後か！」

ボルドーは最後の呪符を司に投げつけた後、体勢を攻撃しやすい  
ものから速く走らせやすいものに変えた。それを見た司やホタルも、  
最後のラストスパートをかけてきた。あと数kmで勝負がつく！そ  
う心の中で叫んだあと、全神経を前に集中した。

ビーツビーツビーツ！

しかし、そんな姿勢もいきなり鳴りだしたアラームにより途切ら  
された。それは後ろから誰かが急接近しているときに鳴るようあら  
かじめ設定しておいた音なのだが、今レースに残っているものは上  
空にいるホタルと横に並んでいる司だけ。

仲間であるねぎ丸とグリーンには反応しないはずだし、それじゃい  
つたい誰が……？いや、今追いついてこれるとしたら……  
そう思いながら急いで振り返ると、そこにはやはりあいつらがい  
た。

「やっぱりあんたたちか！……っつて、なんで空飛んでるんだ！？」

そう、それは猛スピードで飛んでいるキリト達だった。

「で、お前は知ってたわけか。キリト達が飛べることを知っていることを」

ザワン・シンの上に立つオーヴァンが、呆れながらもやっと納得いったという表情をしている。

「どおりでお前がキリト達の肩を持つわけだ。この世界でも飛べるということをお前だろ、櫛？」

オーヴァンの問いに櫛はニコニコ笑いながら答えた。

「まあそういうわけです。もちろんこの世界で飛ぶにはデメリットもあるということをお前が伝えたから、このタイミングで使うこともわかっていましたし」

そう、この世界、The Worldでも翼をもつバラムンクなどの一部のキャラクターは飛ぶことができるのだ。なのでALOから来たキリト達も、当然飛ぶことができる。

しかしそれにはいくつか制約がある。

まず最初にSPをものすごく消費すること。だいたい5分くらい飛んでいたら、高レベルプレイヤーでもSPはつきてしまう。もちろんジョブにより違いがあるが、それでもSPが一番ある最高レベルの呪紋使いでも10分ぐらいが限界だろう。

次に行動の制限がいくつかある。

飛べるのは開けたフィールドのみでダンジョン内は不可、さらに飛行中は攻撃はおるかアイテムさえ使うことはできない。

なので、飛んでいる間は完全に無防備になってしまう。

これらのことにより、飛空スキルは敵のいないフィールドの移動くらいにしか使うことのできない（しかもSPを消費しまくる）かなり扱いづらいものなのだ。

しかし、上手く使えば有効なものでもある。

「なるほど、だから選手達の呪符やSPの尽きる終盤まで使わなかったわけか……しかし、キリトのSPではあそこにたどり着く前に、尽きているはずだが？」

「それはこうしてるみたいですよ」

そして櫛はカメラをズームしてキリト達の姿をモニターに映し出した。

.....

「シリカ、また回復頼む！」

キリトは神経を羽に集中させて、猛スピードを出していた。

「はい、キリトさん！これがラストですー！！」

腕の中にあるシリカがSPをアイテムを使いMaxまで回復する。

しかし、所詮焼け石に水、回復した端からどんどん削られていく。

「くそ、燃費悪すぎだな！」

抱えているシリカに無くなりそうになるたびに回復して貰っているのでまだ何とか飛べていたキリトだったが、ここまで来るのに手持ちのSP回復アイテムは全て使ってしまった。それでも、あの差を縮めてゴールの手前で追いつけたのは奇跡に近い。

「それじゃそろそろ準備よろしく、シリカ！それにピナ！」

「はいっ！」

「きゅるるるるっ！」

そしてゴール前でキリトのSPが切れかけた瞬間、

「いっけーーーーー！！！」

キリトは全力でシリカを放り投げた！

.....

「おーーーーーっ！キリト選手、シリカ選手を放り投げたー！  
！！」

ニユークが興奮のあまり放送席を飛び出してゴールの前までマイクを持って出てきた。

モニターでは、シリカを放り投げた後、地面に何とか着地したものの、衝撃で足が痺れたのかジタバタしているキリトと、放り投げ

られた勢いを利用して飛ぶことにより、どんどんスピードを上げているシリカが映し出されていた。

「そして、そしてついに、追いついたーーーーー!!」

レイチエルもテーブルをひとつ飛びで越えて、ニュークの隣に立った。

もう選手たちは肉眼でとらえられるくらい近くまで来ている。

「後1km!」

そしてどんどんその姿は大きくなっていく。

「後500m!」

もうはっきりとその姿が見えた。

「後100m!全員横一列に並んでいる!!」

いつの間にも移動したのか、横に並んで飛んでいる櫂のカメラの映像からでも差がわからない。

「後50m、そしてつ、ゴーーーーー!」

ほぼ全員同時にゴールを通った。

ゴールに設置されたカメラの写真判定を待ち静まり返る会場。

そして……

「さあ、結果が出ました!ではモニターをどうぞ!!」

全員の注目がモニターに集まった。

そこには……

全員ほとんど並んでいるが、シリカが小さいピナを両手で前方に突き出して、他の選手たちより先にゴールを割っている映像だった。

「ということとは、優勝は……」

「今回が初参戦、シリカ選手に決定……！！」

わーわーっ、という声と紙吹雪が会場を埋め尽くした。

まあ良く見れば、その紙吹雪はこのレースのトトカルチョの券だったりするわけだが……

「は、はずしてもうたorzうちの、うちの今月の食費があ……」

レイチエルががつくりとうな垂れているのをニユークが慰めている。

どうやら大半の人が新人で大穴のシリカが勝つとは思っていないかったらしく、会場は純粹な歓声と欲望に敗れた絶望の叫びが混ざり合って混沌としている。しかしそんな状況も、いち早く立ち直ったレイチエルがニユークと共に静めて、最後の表彰式に移ることになった。

.....

「ということでは、今回の優勝は、シリカさんでした……！！」

表彰台に乗っているのは、真ん中がシリカ、1段下がって右に司、左にポルドーだった。

ポルドーは心底悔しそうな顔、司はまあこんなもんかともいうような表情をしている。

そして他の途中で脱落した選手と共に会場の真ん中で拍手を送っていたキリトは、シリカが満面の笑みを浮かべて喜んでいるのを見て、充足感に満たされていた。

キリトの足元にいるはっしばも、満足そうにヒヒンツ！と嘶いている。

「それじゃ、表彰状と賞品の授与に移らせてもらっぜ。バルムンク、よろしく！」

ニユークが道を開けると、白銀の鎧に翼を付けた男、バルムンクが前に進み出た。そして、シリカたちの前に立って、いざしゃべりだそうとした瞬間、闖入者が現れた。

そう、それは……

「その表彰式、待ってもらおうか」

それはザワン・シンに乗ったオーヴァンたちだった。

会場がざわめく中、せっかくの見せ場を邪魔されたバルムンクが、不機嫌さをちらりとも見せず突然乱入してきたオーヴァンに尋ねた。

「どうした、オーヴァン。何か問題でもあるのか？」

その簡潔な問いにオーヴァンはサングラスをきらりと光らせながら、にやりと笑って答えた。

「なに、本当に彼らが勝者なのか今一度映像を見せてもらいたいと思っただけ」

そうやって手元のメニューを操作すると、モニターに先ほどのゴールする瞬間をとらえた映像が映し出された。

「何もおかしいところはないと思うが？」

バルムンクの言う通り、確かにピナが他の誰よりも早くゴールラインを割っている。

「よく見てみる。奥のほうに何か映ってないか？」

？と会場全体が疑問符で埋め尽くされながら、オーヴァンは画面をズームしていった。

そしてそこに映っていたのは……

「これは、ザワン・シンの尻尾？それがどうし……ハッ、まさか！？」

そうやってバルムンクが急いで手元にメニューを開き、忙しく操作した。

「なるほど……これはまた、してやられたな……」

バルムンクが呆れたような感心したような表情をして溜息をついた。



そしてメニュー画面から顔をあげると、とんでもないことを言い出した。

「えー、大変申し訳ないが、勝者が変わった。優勝者はオーヴァン、2位がガビ、3位は櫛だ！」

バルムンクがそう言ってプチグソやらモンスターやらを象ったトロフィーと、賞品の入った宝箱をオーヴァンのほうに放り投げた。まったく事態についていけず呆然としている会場にいる観衆と選手達の中、一番最初に我に返ったのはボルドーだった。

「ふっ、ふざけんじゃないよ！こんなバカげた話があつてたまるか！！大体あんた等とガビ様は主催者側だろ！？」

ボルドーのもつともな言い分に周りからの賛同の声が徐々に上がってきた。

しかしその波はバルムンクの言葉で打ち消された。

「いや、彼らはボランティアで中継係をしてくれただけで、別に主催者側じゃない。匿名でエントリーされているが、これも別にルール違反ではない……それに選手がレースの状況を撮ってはいけないという決まりもない、というか普通そんな余裕はこのレースにはないはずだった……」

最初から変ではあつたんだ、オーヴァンたちが無償であんなことをするなんてな」

一気にまくしたてた後、バルムンクは一息ついてまた話し出した。

「一つ確実に言えることは、大会の規定と照らし合わせても、完全に彼らは選手だ。そして写真にザワン・シンの尻尾が移っていると

いうことは、シリカ達より前に彼らは通過してたということ。つまり優勝はオーヴァン！以上！！」

バルムンクはいうだけ言ってさっと翼を翻すと、すたすたと壇上を去ってしまった。そしてその後、モニターに映った櫂の顔がここにこ笑いながら告げた。

「それではみなさん、また次回のレースも楽しみにしててくださいね」

大会の閉めの言葉を言うと、ザワン・シンは空高く飛び立ていった。

その数秒後、我に返った選手や観客の怒声と、シリカに賭けたトカルチヨの券やらなんやらが飛び交って会場を埋め尽くしたが、すでにオーヴァンたちの姿はなかった……

## モンスターレース決着（後書き）

補足です。

腹黒カイトが使っているデータドレインは本作オリジナルで、体に溜まっているウイルスを放出しているものなので、ウイルス値を消費して0になると元に戻ってしまいます。

普通のデータドレインには対象のデータを書き換える能力ですが、腹黒カイトの使うものはウイルスを相手に付与するものというわけです。

## レースが終わって

「それで、結局賞品は櫛さん達に全部持って行かれちゃったわけだ」  
アスナがオレンジジュースを飲み終えたコップをテーブルに置いた後、からかうようにキリトに訊ねた。

「もう完全にしてやられたよ。なんかこっちに来てから振り回されっぱなしだ……」

キリトが苦笑いしながら言うと、隣に座っていたシリカがため息をつく。

「おかげで骨折り損のくたびれもうけでした。でも、ユイちゃんが元気になってよかったです」

ここでパフェを無心に食べていたユイは、自分の名前を呼ばれたので忙しく動かしていたスプーンを止めて、しゃべりだした。

「はい！自分でチェックしても原因はまったくわからなかったんですが、櫛さんがくれたアイテムを使ったら一発でよくなりました！」

そう、結局入賞と賞品を全部オーヴァンたちに搔っ攫われたキリトたちは負け犬のごとくグランホエルに帰還したのだが、病室に行くときユイはすでに元気全開な状態だった。

アスナから話を聞くと、ふらりとやってきた櫛が使ったアイテムですぐにユイは目をさまし、こうして元気に動けるようになったそうだ。

ちなみに櫛からの伝言があり、内容は「腕輪探索時の報酬はこれ

でキャラということだ」だそうだ。

「まったく、憎いことしてくれるよ。これじゃ次会ったとき怒れないな……」

その後少し雑談していたが、シリカがメニューを開いてメッサージが来たので失礼しますと言って行ってしまった。

そしてキリトがアスナとユイにレースの内容についてさらに詳しく話していると、カフェテリアの外から激しい音がしたが、もう日常茶飯事なので放っておくことにした。

遡ること10分……

「アイナ、いるかい？」

オーヴァンはグランホエールの居住区画の一室の前に立っていた。

「あ、兄さん？開いてるから入っていいよ」

オーヴァンは自動で開いた扉を通って部屋の中に入ると、ちょうどアイナは何か読んでいたのか本を広げた机の前に座っていた。

「何、兄さん？」

「今日はお前にプレゼントがあるんだ」

アイナが小さく首をかしげると、オーヴァンはメニューを操作して中くらいの小包を取り出す。

それを受け取ったアイナが丁寧に包みを開けると、中からは綺麗

なドレスが出てきた。

「わあ、かわいい。兄さん、これどうしたの？」

「いや、今日出たレースで勝ったら賞品がこれだったから、アイナにちょうどいいかなと思ってな」

珍しく少し照れくさそうにするオーヴァンに、アイナは満面の笑みで答えた。

「ありがとう、兄さん！さっそく着てクーン達に見せに行くわ」

「クーン……ン？」

オーヴァンの表情がぴきつとこわばり、サングラスにひびが入ったのにアイナは気付かず、鼻歌を歌いながら着替えようとした。

とりあえず外に出たオーヴァンは、少しの間呆然とした後、メニューを操作して転送していった。

その後、サーシャヤルー、ユリエールと雑談しているところを怒れるオーヴァン（AIDA解放ver.）に見つかったクーンは、身に覚えがないのにオーヴァンにグランホエール中を追い回されることになる。

そして、それによりせつかく直したグランホエールの内部がまたぼろぼろになったのはまた別のお話し……

.....

一方、リコリス&ゼフィプレゼンツの罰ゲームはというと……

レースのあった日の夜、リコリスたちの部屋。

リコリスたちの部屋は彼女らの外見から察せるように、男が踏み入るのにはかなり勇気があるかわいいもの一色の部屋だ。

しかし彼女らの趣味がいいのか、こういう部屋によくあるギトギト感や圧迫感はなく、少し留まっていると意外と居心地良さを感じられるくらいの落ち着きがあり、この部屋唯一の男であるキリトにとってその点だけは救いだった。

「お待ちせしました、お嬢様」

そこでキリトは執事服に身を包み、完璧な作法でお茶を淹れていた。

「うむ、御苦労」

「ありがとう」

「いただきます」

「へえ、上手ね」

「本格的です」

お茶菓子やティーセットが置かれた丸テーブルの周りにはリコリス、ゼファイ、そして彼女らの妹のモルティに加えて、招待されたアスナとユイが座っている。

「ケーキのおかわりはいかがですか？」

「クッキーもアリマスヨ」

プレートの上に山積みになっているケーキをバランスよく持っているのは、メイド服を着たシリカだ。肩にはひらひらフリルがたく

さんついているゴシック風の服を着せられたピナが止まっている。  
その隣には、クッキーなどの焼き菓子が乗ったプレートを持つシリカと同じようにメイド服姿のホタルと、足元に燕尾服を着せられた彼女のプチグソが『ブヒブヒッ!』と鳴きながら従っている。

「よし、いただきます」

「ワタシも」

「ホタルちゃん、こっちもお願い」

ゼファイ達が頼んだ菓子をシリカとホタルは手際よくお皿に乗せていった。

「あの、お嬢様、ひとつ質問してもよろしいでしょうか？」

キリトが頭を低くしながら（強制的に）ゼファイに尋ねる。

「ん？なんだ、言ってみろ？」

ゼファイはそんなキリトの問いに偉そうに答える。

「なぜ罰ゲームが執事とメイドで御奉仕なんですか？それと、さっきから動きと言葉使いが妙に強制されているのですが……」

そう、なぜだか自分でも知らない作法やら言葉づかいが自然に出てきてしまうのだ。

「その服すごく似合ってるよ、キリトくん」

アスナが口元を隠して笑いをこらえながら言った。



「シリカさんとホタルさんもとっても似合ってますよ。ピナとプチグソさんも、すごくおしゃれです」

ユイがシリカ達をべた褒めしているが、メイド服姿を褒められてもうれしいもんならうか？いや、まあ確かに似合ってるけど…  
…なんてことをキリトが思っていると、ゼフィの声がその悶々とした考えを遮る。

「こら、執事キリト、質問が2つだぞ！……まあしかし私は寛大だ。いいだろう、答えてやる」

「それはですね、そのキリトさん達が着ている服にアシスト機能が付いているからですよ」

絶賛尊大に振る舞い中のゼフィに代わり、リコリスが答えた。

「その服を着ている限り、初心者だらうがどんなに才能の欠片もなかるうが、その服を着るに相応しくなれるんですよ。便利でしょ？」  
(や、まあ確かにいきなり何の準備もなしに執事になれとムチャぶりされるよりはましだけど……)

「あとなぜ執事とメイドかという点、これで決めたからです」

そう言ってモルティがメニューを開いて操作すると、テーブルのわきに一昔前にテレビ番組でよく見られていたルーレットが出てきた。

「最近The Worldではこれにダーツを投げて物事を決める遊びが流行っているんですよ」

そのルーレットをよく見ると、コシユタバウア戦場跡で宝探し！、アルケケルン大瀑布にダイビング！や死世所エルディルで肝試し

&冥界の王と対決！など、少し面白そうなものから物騒なものまで多種多様な事柄が書かれていた。

「これらのことをあのレースが終わったその日の内に、私たちにやらせようとしておられたのですか？」

（どう考えても精神的にも体力的にも無理……）

「あたりまえじゃないか。そうでなければ罰ゲームの意味がない。それよりおかわりだ。というか言う前に気づけ」

ゼフィはこれまた偉そうに言うのだが、その言葉になぜかすぐに体が反応して謝りながらお茶を入れてしまうキリト。

「まあ今回の罰ゲームは軽いほうですよ。以前ホタルさんが例の料理を頼まれたとき、クエストに失敗して行われたあの壮絶な罰ゲームに比べたら……」

こうして夜のお茶会は夜明けがくるまで、結構楽しくにぎやかに行われた。

## レースが終わって（後書き）

今回のオーヴァンネタは、G・U・TRILOGYのおまけが元ネタです。

それと次回新しい話を1本書いた後、そろそろクライマックスに行こうかと思えますので、最後までお付き合いのほどよろしくお願ひします。

まあ最終章書いた後、他のSAOキャラがThe Worldで体験した話などを書いていくつもりなので、当分終わりそうにありませんが……

## 囚われの姫を救え？

A・M 8:00 グランホエール居住区画・キリトの部屋

「ふう〜、さっぱりしたあ。やっぱり、朝風呂もいいな……」

部屋に直接転送して帰ってきたキリトは浴衣姿で頭から湯気を立ち昇らせながら、ベットのの上にぼすんと腰かける。

先ほど番台のNPC店員から買ったばかりの良く冷えたレトロな瓶入りコーヒー牛乳の蓋をきゅぽんっ！という小気味良い音を立てながら開け、腰に手を当てて伝統的なスタイルをとりながら早速風呂上がりの一杯を飲み始めた。

キリトはSAO時代では液体の再現度が低く、ついでに（というより、こつちが本命なのだ）臭いや汚れが体に残ることがないので、シャワーを浴びたり風呂に入る習慣は特になかった（まあ、アスナと暮らしていた間はさすがに毎日浴びてたけど……）

しかし、ここThe Worldでは驚くほど感覚がクリアで現実の温泉と遜色無い上に、ヘルバ達が趣味で作った色んな効能やおもしろ機能、ランダムでステータスポーナスが付いたり全ての温泉に入ると賞品も貰えたりするものから、男性限定の覗きクエと女性限定の撃退クエなどマンガとかだと定番だけど普通クエにするか？というものまであるので、結構な頻度でキリトは温泉を利用していた。

ちなみに、覗きクエに挑戦したクラインと有志数名は……いや、思い出すのはやめておこう（絶対思い出し笑いが止まらなくなるし）

代わりに、今日入った明け方にしか出現しないという薄明の湯の露天風呂から見た見事な朝日を思い出しながら、キリトは右手を振って薄青色に輝くメニユーウィンドウを開いた。

-----

キリト達がThe Worldに来てから、すでに2週間が経過していた。

ネットの中に長期間滞在経験があるSAO帰還組はすぐにこの生活に慣れ、他のみんなも数日経つと適応していった。そしてこの2週間で多数のクエストをこなし、モルガナがばら撒いてしまった力もすでに7割方回収されている。

なので最近はかなりのんびりムードで……

「えーっと、アスナとユイはブラックローズ達と買い物で、クラインは……砂嵐三十郎達と秘刀と名酒探索の旅。ユージーンは揺光達宮皇への挑戦権獲得の為にアリーナでバトル中つと……」

キリトは半透明のウィンドウに表示されているメンバーアドレスを交換しているみんなの状態をチェックしながら（メンバーアドレスを交換したものはALOのフレンドのようにお互いに簡単な位置や状況を知ることができる。もちろん隠すことも可能）今日はどうするかを考えていた。

カナードでのバイトも入ってないし、誰かとクエストを受ける約

束もしていない。よくよく考えてみると、ここに来てから久しぶりの一人でいられる時間だった。

（こんな時は晴れの草原フィールドにある湖で、釣りでもしてのんびりするのもいいかな）

少しの間湯上り後の心地よい余韻に浸りながら悩んでいたキリトだったが……

「まあ、とりあえず依頼板見とくか」

キリトは飲み終えたコーヒー牛乳の瓶をメニュー画面で削除して、ついでに浴衣からいつもの服に装備を変え、依頼板がある中央ホールへと転送していった。

-----

中央ホールは閑散としていた。

大規模戦闘やお祭り騒ぎの下準備時などの全員が集まる時と比べるとかなり物悲しい感じもするが、まあいつもあんな調子だったらそれはそれで疲れちゃうよな……

そんなことを考えながら、キリトは目的の依頼板の前にたどり着いた。

「さてと……やっぱりクエストの更新は無しか」

こちらに来てから重要そうなクエストや面白そうなものは更新されるたびにやってたから、どうやらネタ切れのようだ。

(まあ、今日はのんびりするかな……)

キリトがそう決めて踵を返そうと掲示板に背を向けるのと同時に、その方針を180度変えさせる人物達が歩いてきていた。

「それで、まだそのクエストのことは誰にも言っていないんだな？」

「まあ、何回も聞きすぎ！わたしって、そんなに信用ない？」

「それは自分の胸に聞いたらどうだ？」

「やだあ、胸だなんて。アルのエッチ！」

そんな会話をこつちに歩きながらしていたのは、こちらに来てからキリトがよく世話になっているアルビレオとほくとだった。

アルビレオは浅黒い肌にウルフカット、特徴的なオッドアイをした軽装のフリーランス風の槍使い(パルチザン)

ほくとはまさに魔女っ娘といったようなきわどい服装をしたスタイル抜群のウォーロックだ。また、ほくとは別にW・Bイエーツとしての姿も持っており、ほくとの方はちょっとおつむが足りない感じで、W・Bイエーツの姿ではここThe Worldの有名な詩人として名を馳せている。まだW・Bイエーツの姿ではあったことはないが、カイト達のフィアナの末裔の名も彼女が冠したものだそう。

ちなみに他にも元になったリアルが同じPCが何人かいるそうだが、ほくととW・Bイエーツと同様に同じAIだったり、まったくの別のAIだったりケースバイケースらしい。

「おっ、キリトじゃない。おはよ〜！」

キリトに気付いて手をぶんぶん振るほくとに対し、アルビレオはその子供っぽい行動をやや呆れた表情で見たあと、小さく苦笑してキリトの方へと顔を向ける。

「やあ、キリト。今日は一人なのか？」

「はい。そっちはいつも一緒ですね」

キリトがからかい半分に言うと、ほくとがそうだよ〜と言ってアルビレオの腕に抱きつく。アルビレオはそんなほくとを引き剥がそうとするが、すぐに諦めて溜息をつく。

ちなみにこの二人は、キリトがレースの時に関わったりリコリスの親代わりだ。なので、ユイのことを知ると、その道の先輩として色々キリトとアスナに教えたり相談にのったりして、その為親しい仲間になっていた。

（そういえば、リコリスの明るいながらも裏のある性格は母親代わりのほくとの影響を色濃く受けてるって、アルビレオが酒の席で嘆いてたっけ……）

キリトは酒で少し饒舌になったアルビレオのいつもと違う少し情けない姿を思い出して笑いそうになったが、すんでのところで押し止めた。

「それで、今話してたクエストってなんですか？」

キリトが問うと、アルビレオは少し迷った表情を見せたが、すぐに心を決めたのか話しを切り出した。



「まあキリトなら信用できるし、手伝わてもらおうのもいいか……実はほくどが神槍ヴォータンに関するクエストの情報を一般に流れる前に入手してくれたんだ」

神槍ヴォータンはモルガナがばら撒いた力の内の一つで、なんでもあの有名なオーデーインの槍を元にしたもので、強力な力を秘めたレア武器らしい。

「あの槍は古い神の作りしものだ。本来なら処分すべきだったんだが……」

その槍とアルビレオとほくとの間に何があったかキリトは詳しくは知らなかったが、何か悲しいことがあったことだけは二人の雰囲気から察せられた。

「それで、手伝ってくれるの、キリト？」

ほくどが絶対何か含みがある猫なで声で訊ねてきた。

「いや、まあ今日は暇ですし、二人には世話になってますからもちろん手伝いますよ」

キリトがとりあえず即答すると、アルビレオをぱつと解放したほくどが今度はキリトに抱きついてきた。というより首を極められた。

「ありがと〜！やっぱり持つべきものは素直な後輩だね〜」

キリトは首を見事にホールドされわしゃわしゃと髪を滅茶苦茶にされながら、側等部に当たっているものの感触と首を絞められての呼吸困難で顔を真っ赤にしながらじたばたする。

しかしほくとはウォーロックとは思えないほど強い力で完璧にがっちり掴んでいたため、アルビレオがさすがに見かねて止めるまでそのままの状態が続いた。

「はぁっ、はぁっ……こ、殺す気ですか？」

(HPバーは減らないけど、今は精神的に死ねる勢이었다ぞ……)

キリトが息を切らせながら問うと、ほくとはけろっとした顔で

「じゅんW」

ものすごく軽く返してきた……。まあこんなことは出会ってからよくあることだけど……と、キリトは諦めの境地でとりあえず追求せず本題に戻ることにした。

「それで、そのクエストがこれから依頼板に更新されるんですか？」

「ああ、ほくとの情報通りだったらな……」

「あー、やっぱり信用してないの？」

ほくとがぶんすかぶんすかと口で言っただけで怒ってますとアピールしている、目の前の依頼板がぴろりりんっ！と言っ音を立てた。

「更新を知らせる音だ。」

キリトが急いで依頼板にアクセスすると、そこには

クエスト：囚われの姫を救出せよ！

依頼者： 碧衣の騎士団 団長・神威、 紅衣の騎士団 団長・

昴

大盗賊H&Rが某国の姫を拉致した。至急救出に向かわれたし。  
なお、この盗賊は各地から盗んだ様々な財宝を所持しており、彼らを倒した者にはそれら全てを譲渡する。

場所： 隠されし 財宝の 行方

クエスト条件：パーティーは5人まで。

姫を救出すればクリアされてしまうので、財宝を手に入れたい者は先に盗賊団一味を倒すこと。

注意：盗賊団は凄腕の傭兵を雇ったそうだ。十分気を付けてくれたまえ。

「へえ、3大騎士団の内の二つの連名か……。で、この財宝の内の一つが、神槍ヴォータンってことですか？」

キリトが呟くと、アルビレオは情報通りならと、ほくとの顔を見る。

「ゼツツツタイ、あるって！しんじなさい！」

ほくとが胸を張って満面の笑みをたたえながら自信満々に宣言する。

その、見方によっては悪戯好きな子供が策を仕掛けた時の笑みとも取れるほくとの表情を何かを探るようにじっと見つめたアルビレオは、しかしすぐに諦めたのか小さいため息をついた。

「このクエストは早い者勝ちだ。急いで行動を起こそう」

そう言いながらアルビレオはメニューウィンドウを操作し、キリトとほくとにパーティー参加招待をして、二人が参加したのを確認した後、パーティー転送で 遺跡都市リア・ファイル へと転送していった。

囚われの姫を救え？（後書き）

ご指摘があったので、ほくとのアルビレオの呼び方をアルに訂正しました。

月影さん、ありがとうございました。

大迷路を突破せよ！ - 01 -

隠されし 財宝の 行方

そこは青空の下をグラウンドキャニオンのような峡谷が延々と広がっているフィールド。切り立った絶壁同士を頼りなく風に揺れる吊り橋がところどころ繋げ道を作っている。

普段ならそこは砂煙が舞い、風の音だけがこだまする静かなところなのだそうだが……

「で、なんでこんなことになってるんだ……？」

アルビレオが額に手をやりがっくりとしている。その隣ではほととがあらら〜という表情を浮かべながら、あたりを見回している。

「らっしや〜い、らっしや〜い！安いよ美味しいよ〜！」

「へい、そこにおふたりさん、焼きトウモロコシ食べてかないかい〜！」

香ばしい醤油のいい匂いにつられたのか、カップルが焼きトウモロコシ屋の前で立ち止まっている。そう、そこは出店や人でごった返しになっていたのだ。さらに奥の方には巨大なモニターとたくさんの観客席まで用意されている。

「……これって、今回のクエストの野次馬ってことですよね……」

キリトが啞然としていると、アルビレオが認めたくない様子なが

らも頷いた。

「しかし、なぜだ……？さっき更新されたばかりのクエストの情報がこんなに早く出回るなんて……」

確かに耳の早いクエスト挑戦者が何人かいるならまだわかるが、出店やら野次馬が来るのはいくらお祭り騒ぎができる機会を虎視眈々と狙っているこの世界の住人でも、少し考えられない早さだ……

「おい、キリトー！ほんとにアルビレオー！」

と、ここで聞きなれた声が転送ポイントからしてきた。

「あつ、トキオだ！チェロもいる〜！」

そこには見慣れた学生服姿のトキオと、確か薄明の騎士団と同盟関係にあるギルドシックザールのメンバーのチェロがいた。

「トキオも今回のクエストを攻略しにきたのか？」

キリトは右手を上げ、トキオと挨拶代わりのハイタッチをかわした。

「それがさ、今回のクエストのさらわれた姫が実はAIKAちゃんなんだよ……いつものごとくふわふわとあちこち散策してる内に捕まってみたんだ」

トキオが頭をかきながら苦笑いする。

「というわけで、ちょうどグランホールにおつかいに来てたチェ

口を誘って、A I K Aちゃん救出作戦つてわけ。あ、キリトはチェロに会うの初めてだっけ？」

たしかに、グランホエールで見かけたことはあるが、キリトがチェロと面と向かって話すのはこれが初めてだった。

サーカス団員のような服装を主に行っているシックザールのメンバーであるチェロも、動きやすそうな軽装で、長いボリュームのある青い髪を大きなリボンで束ねている。手にはかわいい人形を持っている。

「初めまして。俺はキリト、よろしく」

キリトが手を差し出すと、チェロは慎重な顔になって、キリトの顔をじつと見た後ふむふむと頷いた。

「アナタが噂のキリト……とりあえず、あいさつはしっかりできるみたいネ。はじめまして、アタシはチェロ、よろしくヨ」

そう言ってキリトの手を小さな手で握ってきた。

キリトは自分のどんな噂が耳に入っているのか少し気になったが、藪蛇になりそうなのでとりあえずやめておく。

「それにしても、凄い人だからだよな……」

キリトが同意を求めるもなしに呟くと、トキオが意外そうな顔をした。

「そりゃ、W・Bイエーツが紡ぐ伝説を生で見れるんだから、みんな来るでしょ？」

トキオがW・Bイエーツの名を出した瞬間、ほくととアルビレオは別々の反応を出した。

ほくとは冷や汗をたらーんと流してコソコソと立ち去ろうとし、アルビレオはこめかみにピキッと怒りのマークを浮かべ、逃げようとするほくととの服の襟を後ろからむんずと掴んだ。

「ほくと、もう一度確認するが、このクエストのことは誰にも話してないんだよな……」

猫を捕まえるようにほくとを掴みながら、口調は静かでゆっくりながらも凄みのある声で聞いてきたアルビレオに対し、ほくとは慌てて頷く。

「や、やだな、アル！わたしは誰にもしゃべってないよ！」

しかしここでほくとは慌てた様子から一転おどけた感じにころっと変わって続けた。

「ただ、W・Bイエーツとして掲示板にちよこつと書き込みしたけど、別に話してはいないよ」

ほくとの子供のような屁理屈を聞いた瞬間、アルビレオはブチッ！と言う音が聞こえてきそうなくらいの表情になりかけながら途中で何とかその怒りを押し込め、ほくとを解放して全てを諦めた顔をした。

「それで、どんなふうに書いてあったんだ？」

ほくとの行動はまだ短い付き合いながらももう慣れっこだったキリトは、それよりもリアルタイムで初めて見る噂のW・Bイエーツ



の詩の方が気になっていた。

「えーっと、ちょっと待って。……あつ、これこれ！」

メニューを操作していたトキオは掲示板の書き込みを全員が見えるようにモニターに映し出す。

そこには……

謎多き盗人、大峡谷にあり。

連星の瞳の重槍使い、彼の伴侶と異邦の剣士とともに敵場を疾駆し、古き神が作りし槍を指す。

W・Bイエーツ

へえ、これがそうか……とキリトが思っていたら、下にさらに続きがあった。

……っというわけで、  
隠されし 財宝の 行方 でクエスト  
があるから、みんなわたしとアルと、ついでにキリトの活躍を見に来てね〜w

ほくと

「って、誰が伴侶だ誰が！」

ぺちんっ！

ここでいつのまに取りだしたのか、アルビレオはハリセンでほと頭の音を立てて叩いた。

「あいたっ！？も～なにをするの、アル！ていうか、なんでそんなもの持ってるの〜？」

ほくとはそれほど強く叩かれた感じではないのに、うるうる涙目になりながら酷いツ！つと大げさに言い、泣きまねをする。

「いや、俺がほくとのことでよく頭痛薬と胃薬に世話になってるとニユークに話したら、ほくとは何かやらかしたらこのハリセンでツッコんでストレス発散するようにとアドバイスをもらったんでな…」

「えっ、アル、わたしのせいで薬なんか飲んでるの………？」

ほくとは呆れを通り越して感心するぐらい素早く泣きまねを終え、ちよつと心配そうな顔をした。

「いや、薬の下りは冗談だが………」

「って、ウソなの！？も～、真顔で冗談言わないでよ！」

ほくとは本気でツッコミの声を上げる。

アルビレオの冗談にとれない冗談にキリトもツッコミそうになったが、余計場が混沌としそうなので苦笑を浮かべるだけに収めた。

「それじゃあさ、そっちはA I K Aちゃんの救出、こっちはヴォータンの回収が目的だし、トキオ、一緒にパーティ組まない？」



「地上からじゃ外観が掴めないな……キリト、ちょっと飛んで上から見てきてくれないか？」

「いいですよ。んじゃ、ちょっと行ってきます」

アルビレオに頼まれ、キリトは翼を展開して、勢いを付けて飛び立つ。

緑に茂った生垣で作られたその迷路は見渡しただけでも端が霞んで見えないくらい巨大さだった。

「キリト、ちょっと迷宮に上空から入れるかどうか試してみよう！」

「了解！」

ほととのリクエストに答えて、キリトは迷路を作っている生垣を越えようとしたが……

バリバリバリッ！

「あががががつ！？」

何かバリアのようなものに引っ掛かったらしく、キリトは丸焦げ状態になった上に体がスタン状態かのように痺れて、そのまま真っ逆さまに落ちてしまった。

「たぶんバリアか何かが張ってあって無理だと思うけど……って、遅かった？」

「遅かったです……」

「まあHPは回復してあげるから、もう一度お願いね」

ほくとが無詠唱でキリトに ウリプス をかけ、四分の一ほど減ったHPバーが見る見るうちに回復していく。

ほくとは全く悪びれない態度に、キリトはいつたいてどこで選択を間違えてこんなパワーバランスになったんだっけ……？と、思いながらも、ため息を一つつき、煤を払ってまた飛び立った。

-----

数分間観察しているとやっかいなことに迷宮がその中身の形を変えることがわかった。この迷路はどうやらアインクラッドの迷いの森と同じようなものらしく、数分ごとにブロックがランダムにシャッフルされるらしい。

ちなみに、The Worldでは妖精のオーブを使えば一発でダンジョンのマップが表示されるし、使わなくても一度通った道は自動的にマッピングされるのだが、この迷宮では例外らしくメニュー画面に表示されたマップは真つ白のままだ。

唯一のヒントは最初に入ったところにあつた立て看板で、それによるとこの迷宮を突破するには迷宮を操作している敵を見つけて、設置されている装置を壊さなければならぬらしい。

出発当初、いつものごとくトラップやモンスターだらけであろうダンジョンの攻略は骨が折れると思われたのだが……

「いくヨッ！グリちゃん〜！」

どか〜ん！

ずど〜ん……！

ぐもぐつとそのファンシーな外見に似合わないもの凄い雄叫びをあげながら、巨大化したチエロの<sup>グリちゃん</sup>人形がチエロを乗せて迷宮に張り巡らされたトラップエリアを鷲進している。

通常なら数十分は突破するのにかかるはずの多数の罫を正面突破でわざとかかりながら、どんどん進んでいる。

「何か、今回のクエストの仕掛け人に同情したくなる光景だな……」（確かに楽だけど、これはチートと言われても文句を言えないような……）

キリトはグリちゃんが均した後を悠々と進みながらも、若干後ろめたそうに呟く。

「まあこのまま上手く行けばいいけど、今回のクエストの依頼人はあの2大騎士団なわけだし、まだ油断はしちゃだめなんだよな、これが……」

The Worldの勇者&ツッコミ担当のトキオが、長年の経験から来るであろう苦勞が滲み出ている言葉を返してきた。

「さあ、グリちゃん、次いくヨッ！」

この迷宮に入ってから数回目のシャッフルが実行されていたが、チエロとグリちゃんのおかげで順調に進めていた。

「よし、ここら辺でいいか……」

ブロックの中央ら辺に着くと、アルビレオがマーカーを打ち込む。打ち込んだところが一瞬赤い丸を描いた後、溶け込むように消えていった。

このマーカーは本来モンスターなどに付けて追跡するためのものだが、こうして地面に打ち込めばマップに赤い点として表示される。これを通ったブロックごとに打ち込んで行けば、マップが赤い点滅で埋まっていき例えシャッフルされたとしてもどこが通っていないところか瞬時に分かるというわけだ。

このマーカー事態はこのゲーム内ではポピュラーな物だが、こういう使い方を思いつくのはさすがアルビレオだ。

「なに、マップピング不可のダンジョンは前にも何回かチャレンジしたことがあるから、その時に思いついたことだ。年の功と思っただらいい」

アルビレオがクールに謙遜している中、代わりにその横でほくどが鼻高々としている。

「ね、アルはすごいでしょ！やっぱ困った時のアルだね。さすがわたしのカレシ！」

カレシ発言を否定するアルビレオとほくどとのいつもの痴話喧嘩をキリトたちは苦笑いしながらスルーしていたのだが……

ブワッ!!

急に全身の毛が逆立つような殺気を感じ、キリトとトキオ、そしてほくどにかまっていたアルビレオがエフェクトと共に得物を素早く取り出し構える。

パンツ！

そして一発の銃声が鳴り響いた。そして、その後に続く静寂……

「誰か撃たれた……わけではないか」

アルビレオは構えを解き、落ち着いた様子で全員に聞く。

「今撃った奴は確かにこつちに殺気を放ってたけど、撃った方向は違ったみたいだ。何かの合図……？」

トキオが誰に言うわけでもなく呟く。

「待つて。何か音がしない……？」

ここでさっきまでふざけていたほくどが真剣な様子で耳に手を当てている。キリト達もそれにならって周囲の音に集中すると……。

シュツシュ、ポツポ、シュツシュ、ポツポ……

「蒸気の声？」

この独特の音は遙か昔に船や機関車に使われていた蒸気機関の音だ。この世界ではチムチムのエネルギーを使った蒸気機関の乗り物が発達している設定なので、よく耳にする音でもある。

「蒸気機関……乗り物……はっ、しまった！チエロ、早くグリちゃんをもどし……！？」

トキオが慌ててチエロのいた方を振り返ったが、そのときすでに



チェロはそこにいなかった。少し遠くで、猛ダツシユするグリちゃんに必死に振り落とされないようにしているチェロが見えた。

そして、グリちゃんの様子はどう見ても暴走しているものだった。

「なっ!?! いったいどうしたんだ、あれ!?!」

キリトが驚いていると、トキオが急いで走りだしながら説明する。

「グリちゃんは乗り物と尖ったものが大好きで、音を聞いたり見たりしただけでそっちの方にいつちゃうんだ! たぶん敵はそのことを知っていて、チェロを孤立させようとしているんだと思う!」

なるほど、とキリトはこの妙な設定にも直ぐに納得してしまった後で、今までの慣れのせいで感覚がおかしくなってるな、と胸の内です苦笑した。

「チツ、まずいな……!」

視界の右上を見ながら、珍しく焦った表情を見せるアルビレオ。

そして、彼の表情通り、隣のブロックへとチェロ達が駆け込んだ瞬間、フィールドのシャッフルが行われてしまった。

大迷路を突破せよ！ - 01 - (後書き)

トキオともう一人、チエロとクラリネットのどちらを出すか悩みましたが、結局チエロにしました。

「さうって、どこに連れて行くとうとしてるE……？」

チエロはグリちゃんに必死にしがみついているようなふりをしながら呟いた。

そう、チエロがグリちゃんに引つ張りまわされているのは全て演技だったのだ。もちろん、グリちゃんが暴走しているのは本当なのだが、チエロにはちゃんと止める術がある。

それなのになぜ敵の罠に嵌った振りをしているかというと……

「まあこれで敵の位置も特定できるだろうし、それにキリトの能力と本質を見極めるにはいい機会を作れそうだからネ……」

そう呟きながら、チエロは数日前の団長との会話を思い出していた。

.....

「ほら、ちゃっっちゃと仕事をかたづけろヨッ！」

事務所の中をチエロが独楽鼠のように動いて掃除しながら、一番奥にあるデスクにべたべたとやる気なさそうに座っている男に言った。

「あゝ、もちろんやるよ。このアメちゃんなめ終わったらねえ…」

その男、片目にモノクルをしたシツクザールの団長フリーゲルはけだるそうにしながらやる気ゼロの生返事を返した。

「そんなこと言って、なめ終わったら今度は別のことを言い訳に使う気でしょ！まったく、ちよつとはシャキツとしなさいヨ！」

「ケケケケケツw団長はお疲れなんですよお。カレラのこと  
でここ数週間徹夜しっぱなしでしたからねえ」

ここで事務所のスペースと繋がっているバーから、団長をフォロ  
ーする言葉が飛び出す。

ソファに座りメニューウィンドウからよびだした雑誌を読みなが  
ら、サーカスの道化師姿ヒエロの男、ポザネオが甲高い声で笑っていた。

「ったくよ、あいつらのせいで俺たちは大忙しだぜ！いつそのこと  
全員ぶつ壊しちまうか？」

ポザネオと反対側のソファに寝ころんでいる男オルゲルが目を鋭  
く尖らせ、少しいライラしたように危なっかしい発言をする。

「僕達シツクザールと彼らの全面戦争か…それはそれでおもしろ  
そうだねw」

仮面をつけて顔半分が隠れている奇術師ガイストが、ビリヤード  
をしている手を止めて楽しそうに言う。

「Yeaaaaah!ウォーかあ。確かにベリーたのしそうD A Z E  
」!

バーの一角に場違いに設置された（まあそれを言えば事務所とバーが隣り合わせなのも変だが）トレーニング用の器材が置いてあるスペースで、これ以上筋肉をつけてどうするんだよと突っ込みたくなる体をしたアメコミヒーロー風の男トロンメルが持ち上げていたダンベルを下ろし、いつもの英語を交えた妙なしゃべり方で話に入ってきた。

「まったく、君たちは馬鹿な会話しかできないんですか？今彼らと事を構えると騎士団まで敵に回すことになりますよ。この世界でAIである僕たちが活動するには彼らの協力が不可欠です」

ちようど部屋に転送してきたナイフ使いのメトロノームがため息交じりに団員たちの考えなしの発言を諷めた。

「しかし、茅場晶彦の行動には気になる点がいくつかあります。やはりこの世界を安定させ解放したのには彼なりの意図があったみたいです。そして今回初めてリアルの人間をこの世界に呼び入れたことも……」

そう言いながら、メトロノームはフリーユージェルの目の前に大量の資料をどすんっ！と置いた。

「あー……もしかしてこれ、今すぐ片付けないとダメ……？」

びっしりと文字が詰め込まれた紙束の1枚をペラッとめくりながら、フリーユージェルがめんどくさくという顔をしながらメトロノームに尋ねた。

「事態は急を要するんです。今すぐお願いします。それに団長、ま

さか現実の僕たちがなぜこの世界にリアルの分身たるシックザールPCをAIにして残していったか、忘れたわけじゃありませんよね？」

メトロノームの鋭い言葉に、フリーゲルの顔つきが少し引き締まった。

「愚問だな。それをわかっているから、こうやって俺は滅私奉公しようとしてるんじゃないか」

「それなら早く片付けちゃってください」

「そうヨ。早くやっちゃヨ！」

フリーゲルの引き締まってやる気になった顔つきに容赦なく鞭を打ち付けるいつもの2人。

その言葉にまたやる気を無くしたのか、ふにやりとだらしない表情になったフリーゲルは何かエクスキューズはないかと思考をめぐらす。

「あくでも、ちょうどアメちゃん切れちゃったし……」

「買ってきました」

席を立ちあがろうとしたフリーゲルより早くメトロノームが大量のアメが入った袋をアイテムポーチから取り出し机に置く。

「じゃあ気分転換に事務所の掃除でも……」

「今終わったヨ」

チェロが掃除道具をロッカーにしまいながら逃げ道をふさいだ。

「あー……っあ、そうだ、チェロ、今度機会があったらキリトのこ

とを調べといてくれないか？」

「なんでヨ？」

チエロの不思議そうな顔に対し、フリーユージェルはまた少し真面目な顔になって答えた。

「あいつは今回きた連中の中で一番電腦世界に対する素養がありそうなのも理由の一つなんだが、他にもちよつと気になる点があったな……とう言っわけだから、あとはよろしくな」

そう言ってエフェクトと共に時計をあしらったハンドガンを取り出した。

「あつ、団長、それはずる……」

メトロノームが急いで駆け寄り止めようとしたが……

パンツッ！

一発の銃声が鳴り響き、まるで石になったかのように固まるシックザールの面々。いや、メトロノームが慌てて駆け寄ろうとしたので机から落ちかけた資料の束も、まるでその場面で一時停止したかのようになっている。

これは……

その異常な状態の中で、唯一動いている団長のフリーユージェルは、頭を掻きながら大欠伸を一つする。

「さーってと、そんじゃ、俺は俺で動くとしますか……」

だらけた様子から一変、キリツと何かを決意したかのように精悍な表情になったフリーユージェル……だったのだが、

「まあでも、その前にちょっとどっかでのんびりしてからにしよう……」

空気が抜けた風船のように緊張感の無くなったフリーユージェルはそう呟いていくつも青い輪に包まれて転送していった。

-----

そんなわけで、チエロは団長の最後の言葉に従ってキリトと行動を共にできる機会を窺っていたわけだ。そしてそれらのことを頭の中で回想しているうちに、グリちゃん引き寄せられているものを目視することができた。

「アレは……チムチム列車？」

普通のフィールドでもチムチム達がよく自分のエネルギーを利用して移動手段に使っているのを見かける。

ただし今目になっているのはチムチム達が縛り付けられ、さらに列車がチューンナップされているのか、レールが円を形作っているの。でその場をもの凄い速さで無意味にグルグル回っている。

「ということは、ここが終着点ってことネ……」

チエロは言いながら、彼女の手のひらほどの大きさの小さい笛を





「……………」

「ねえ、アル」

「……………」

「テンテンテンじゃないでしょっ！て、ツッコンでほしいの？」

無表情、というより、仏頂面のアルビレオに対して、いつものマイペースなほくと。

今、キリト達はマップの探索を続けながら、チエロの行方を捜していた。

パーティーメンバーは通常、お互いの位置をダンジョン内でも特定できるのだが、この迷宮の仕様でその機能は封じられていた。

まあ、例えば位置がわかってても、如何せんグリちゃんの移動速度が速すぎるのと、フィールドシャッフルのせいで先回りしようとしてもなかなかタイミングが合わせられないだろうが……

「ま、まあチエロなら一人でも大丈夫だろうし、クエを進めてれば途中で合流できるだろ」

トキオがほととのアルビレオいじりがそろそろまずいところまでいきそうになっていたのを遮るかのように話す。

そして、それを待っていたかのようにほくとが最後の一押しとなる爆弾発言をした。

「あと2ブロック進めば、グリちゃんの進み具合から見たら合流できると思っけど？あっ！でも今シャッフルされちゃったから、また遠くになっちゃった……………」

その発言に、キリト、トキオ、そしてアルビレオの3人が硬直する。

「いや、ほくと、今、何て……?」

トキオが唾然とした様子で尋ねると、ほくとはポリリウム満天の胸をえっへん!とそらして語りだす。

「いや、こんなこともあるうかと、みんなに内緒でグリちゃんにマーカー付けといたのよね。ほら、これこれえ」

そう言つて、ほくとはメニューウィンドウから呼び出したマップを表示して、アルビレオが打ったその場を動かない赤いマーカーの中で、一つ青いマーカーが現在位置からかなり離れた区画を物凄いスピードで移動しているのが表示されていた。

「ねえ、わたし、えらい、エライ、偉い?……つて、なんでまたハリセン構えてるの、アル?」

ほくとの悪ガキがイタズラを成功させたかのような笑顔をしながらの問いに対して、無表情の上無言でハリセンを構えたアルビレオだったが、その状態のまま何か逡巡すること数秒、大きな、深いため息を一つついて、ゆっくりと手を下した。

「確かに、お手柄だ……」

(ここでツッコまず堪えられるのは年の功ってやつか。いや、もう慣れてるんだらうな……)

キリトは今までのアルの苦勞が見えるようで同情したい気持ちになったが、そんなクエスト中に考えることとしてはあまりにもノンビリとした思考は、次の瞬間すぐに打ち消された。

ザッ！ザッ！ザッ！ザッ！ザッ！ザッ！ザッ！

鍛え抜かれた規律正しい軍隊を思わせる足音に、キリトとトキオは反射的に剣の柄に手をかけて身構える。

しかし、アルビレオとほくとはその足音の主達を知っているのか、特に表情を変えずに足音のするほうを見る。

そして、向こうのブロックからやってきたのは……

「全員、止まれ！」

キリト達の目の前まで行進してきた騎士鎧と思しきプレートメイ  
ルに身を包んだ彼らは、先頭の女性の掛け声ひとつで、ビシッ！と、  
一糸乱れぬ動きをしてその場に直立不動する。

SAO時代に遭遇した軍の部隊は勿論のこと、ALOにある領主  
直属の部隊とも比較にならないほどの練度と統率感を醸し出しなが  
ら、冷徹さを感じさせる冷ややかな風貌に、アルビレオと同じオツ  
ドアイが特徴的な女性騎士が一步前に進み出た。

「お久しぶりです、団長……」

「元、だろ。今、碧衣の騎士団を率いているのはお前だ、神威」

アルビレオに慇懃な挨拶をした女性騎士、神威に対して苦笑しな  
がら言葉を返したアルビレオ。

しかし、その後の言葉が続かず、緊迫した雰囲気場を包みだし  
た、のだが……

「カムちゃ〜ん、おっ、ひっ、さあ〜！」

そんな空気を欠片も読まないほくとは、誰も止める暇もなくアルビレオの後ろから飛び出し、両手を広げて神威をハグをしようと突貫した。

ヒュッ！

しかし、神威は素早い身のこなしでほくとの両手から楽々と逃れるが……

「あまいよ〜」

それを先読みしていたのかフェイントを仕掛けて、神威の首に腕を巻きつきかけるほくと。

だが、今度は神威がその伸ばされた腕を掴んで関節技を決めようとして……

しかし、その技を見切ったほくとはスルツと神威の手から逃れて再度抱き着こうとし……

それを神威がさせじと避けてほくとから距離を取ろうとし……

そんな手に汗握る攻防に目を奪われて（というより、どうリアクションをとっていいのか分からず）動けずにいたキリト、トキオと碧衣の騎士団の面々。

しかし、約1分、実際はカップメンも作れない短い時間だが、その場にいるといつまで続くか分からないように感じられたほくと

神威の、お互い譲れないものを賭けているかのような勝負は、唐突に終わりを告げた。

「いいかげんにしておけ」

再び距離を取った神威に対し、ほくとが挫けず再度アタックしようとしたのを、いつのまにかほくとの後ろにいたアルビレオがハリセンでスパーンツ！といい音を立てて、頭を叩いた。

「イッターイッ！なにするの、アルツ！？」

「自業自得だ。神威も、すまなかたったな」

「い、いえっ……」

顔に若干安堵の表情を浮かばせた神威は、しかし後ろに自分の部下がいるのを思い出したのか、すぐにキリッ！とした表情に戻った。「で、碧衣の騎士団がここにいるってことは、やっぱり自分たちでもクエストを進行してるってこと？」

トキオが話を本題に戻した。

ちなみに、クエストには依頼者自身も参加するパターンがあり、協力が、もしくはお互い競い合うふたつの場合がある。

そして、今回の場合は……

「このクエストは早い者勝ちだ。故に、私達は敵同士、ということだ」

神威達碧衣の騎士団と逆の方向から新たに大勢の足音がして……

「あ、銀漢に、紅衣の騎士団じゃん」

そこに現れたのは、真紅のマントに銀色の騎士鎧、その下に赤い服を着て、顔をすっぽり覆っている兜に二本の角が生えているのが特徴的な 紅衣の騎士団 副団長の銀漢が、角とマントが付いていないだけで後は同じ格好の部下達を従えていた。

碧依の騎士団が規律を重んじる軍隊然としてるのに比べ、紅衣の騎士団は有志の自警団らしくどこか情熱と使命感めいた雰囲気を持っている。

そして図らずも、紅衣、碧衣、そして薄明の騎士団が一堂に会し、場に新たな緊張感がもたらされたのだが……

「あれ、なんか、聞こえない？」

また空気を読まずに発言したほくとを咎めるように銀漢と神威はギロリと睨んだが、アルビレオだけはほくとの声色に何か別の意味を見出したのか、黙って耳を澄ませる。

それにならって、キリトとトキオも聴覚に神経を集中させると……

……………トトトトトトトトトトツッ！

最初は小さく、しかし段々と耳を澄ませる必要がないほどにそのトククラスのトラックが大量に近寄ってくるような音が、銀漢達紅衣の騎士団がやってきたブロックからしてきて……

「あっ、チエロだ！おゝい！」

ほくどが元気よくブンブン手を振った先には、先ほどはぐれてしまった絶賛爆走中のグリちゃん、その背中に乗ったチエロだった。まあそれだけ見れば（暴走しているのを除いて）再び合流できたのは僥倖と言えるただろう。

もし、その後ろに夥しい数のMobの大群をトレインしていなければ……

「えええええ……何だ、あの数……？」

トキオがキリトの隣で顎がはずれんばかりに口をあぐりと開けた。

チエロが引き連れるMobの数は少なくとも百を軽く超えていて、この迷宮に存在するMob全部をその場に集めたかのようなその圧倒的数に、その場にいた誰もが一瞬呆然としてしまう。

しかし、そうこうしている間にもグリちゃんはもの凄いスピードでこちらへと近づき……

「どくヨオオオオオツ！」

ズドオオオオオン！

「ウギヤアアアア！？」

瞬く間に紅衣の騎士団の面々を吹き飛ばし、駆け抜ける。

そして、誰もが先頭に立っている銀漢が彼の部下と同じ末路をたどるかと思っていたが……



「ふんっ！」  
「なっ!?!」

何と銀漢はグリちゃんが自分のところに来るのを待たず、気合いの声を一つ上げグリちゃんへと立ち向かい、体を張って組み付き、かなりの距離を足を踏ん張り地面に深い跡を残して下がりながらも受け止めたのだ。

(銀漢、ボケ担当じゃなかったのか……)

キリトは失礼なことを思いながらも、彼が今は薄明の騎士団に所属している昴に代わり、紅衣の騎士団を預かっている理由の一端を垣間見た気がした。

「紅衣の騎士団 団長代理、銀漢の名に賭けて、仲間を傷つけさせん!」

そのいつもは熱さが空振ってマヌケっぽくなっているのに、いざとなるとカツコよく決める様は、某怪盗アニメの敵役の刑事を彷彿させる。

しかし、そのカツコよさは同時に長続きしないのが定番で……

「グオオオオオ!」「」

「ぬうッ、ぬあああああっ!?!」

グリちゃんを何とか止めていた銀漢は、しかし後ろから追いついた大量のMobに呑み込まれる……

(って、やばい!?)

そして、銀漢が吹っ飛ばされ星になるのに一瞬気を取られたキリトだったが、すぐに彼に降りかかったことが自分の身にも起こりうるのを感じて若干慌てることになった。

「なんとか、逃げ切れたか」

「ふうっ、危なかったねえ……」

立ち止まったアルビレオの横で息を切らせながらもほっと一息つくほくと。

「でも、やっぱりそのまま放っておいたのは、ちょっとまずかったかもな……」

殿を務めていたトキオが、頭を掻きながら複雑な表情を浮かべる。

「まあ、あれは不可抗力だろ」

若干削られたHPを 治療の水 を使って回復しながら、キリトも言っていることは逆に、罪悪感が胸の内を占めていた。

グリちゃんは銀漢を吹き飛ばした後、トキオ達の制止の声も聴かずに碧衣の騎士団を蹴散らしながらまたどこかへと行ってしまった。

トレインしていた大量のMobをその場に置いて……

その後、ギャグ漫画並みのスピードで復活した銀漢と紅衣の騎士団、そして若干グリちゃんに陣形を崩されながらもすぐに立ち直った碧衣の騎士団の面々は、なし崩し的にその場に擦り付けられた大量のMobを相手にすることになった。

しかし、原因を作ったチェロのパーティーリーダーであるアルビレオが下した決断は……

「ここは、チェロを追おう」

意外なことに、2大騎士団にその場を任せて自分たちは先に行くという、最悪マナー極まりない方針だった。

「ここにいるMobはそこまで強力ではないし、今はチェロとの合流と敵の発見が最優先だ。神威達には悪いが、今度何か償いをするさ」

それを聞くだけでも、このクエストにかけるアルビレオの想いがヒシヒシと伝わってくる。

キリト達は心の中で詫びながらも、銀漢と神威一行を残してこっそりその場を立ち去ったのだった。

.....

かくして、キリト達はチェロを探しながら迷宮の探索を再開した。チェロのチート気味なタンクがいなくても、実力者であるアルビレオ達にとって攻略はそれほど難しいことではなく、30分も経たな

いうちにマップの4分の3以上を光点で埋めることができた。

そして、ついに目的地へとたどり着いた。

そこは今までのブロックと違い、生け垣による仕切りが全くない  
だだっ広い空間で、真ん中にぽつんと10階建てのビルぐらいの高  
さの櫓が立っている。

そして、その櫓の天辺にはごく丁寧にデカデカと 迷宮操作装置  
と書かれている旗がはためいている。

アルビレオ達が慎重に警戒しながらブロックへと足を踏み入れる  
と、櫓の天辺付近に設けられた物見台に灰色の襦袢マントで全身を  
覆っている小柄な人物が姿を現し、その場で大声で演説をしだした。

「えーっと……わ、わたしはこの櫓を守るために雇われた傭兵だー  
！……この櫓に設置された装置を壊したければ、わたしの百発百中  
の弾丸の嵐を見事駆け抜けるがいい！」

(……ん？この声って……？)

アルビレオの後ろに控えていたキリトは、そのはずかしそうにセ  
リフを大声で棒読みしている声に、んっ？という表情になる。

「もしかして、シノンか……？」

半信半疑でキリトは『シノンッ！』と声を張り上げて名前を呼ん  
でみた。

「ちよっ、なんで私の名前を知ってるの？まだ言っていないのに……  
って、ウソ、もしかして、キリト……？」

フードを取った下から出てきた顔はまさしくシノンだった。よく見ると、肩には遠目でも分かるくらい巨大な彼女の身の丈ほどある愛銃へカート？がかけられている。

「やっぱりシノンか……ってかなんでここにいるんだ？」

キリトがもつともな疑問を口にすると、シノンはあたふたしながら説明し始めた。

「わたしはバ、バイトなんだけど……」

その後のシノンの話によると、どうやらガンゲイルオンラインの運営の方からシノンに特殊クエストの敵役になってくれるよう頼まれたらしい。シノンほどのプレイヤーになると、ネームバリューも大きくイベントなどにでるようオフアールが時々来るといふ。

いつもはほとんど断っているそうだが、今回はバイト料として結構な額を貰えるということで受けたそうだ。

(そっぴや、アスナがシノンはバイトで遅れるって言ってたっけ……)

「でもキリト、あんたのその姿ってALLOのアバターよね？なんでGGOでその姿なの？」

どうやらシノンは未だにここがGGOの中だと思っているらしい。

(まあでも確かに他の誰とも会っていない状態で、ここが新しく追加されたフィールドって言われれば、俺も納得するかもしれない)

しかしキリトが胸の内でも一人納得している間にも、事態は進む。

「あ、あんたが相手でも容赦しないわよ！こっちは長く守れば守るほど報酬が上がるし、それに負けたら……とっ、とにかくここは通せない！」

なぜか顔を真っ赤にしながらそう言っつて、シノンメニューウインドウを開いた。

「キリト、彼女はキミの知り合いなのか？」

アルビレオが興味深げにキリトに尋ねる。

「そうですねですけど……なんか現状をちゃんと把握できてないみたいです。ここがTHE WORLDとも認識してないみたいだし……」

キリトが茅場の妙なサプライズに気を取られている間も、シノンは行動を起こしていた。

彼女が何やら手元のメニューウインドウを操作すると、ただの櫓に見えた建物から、おびただしい砲門が現れたのだ。

「えええええ……な、なんだそりゃ……！？」

隊列の最後尾にいるトキオが啞然としながらハリネズミのような姿になった皆を見ると、それらを全てオートにしたのかシノンはメニューウインドウを閉じて床に寝そべり、ライフルをこちらに向かつて構えた。

「さあ、いくわよー！」

シノンのやけくそ気味にも取れる叫びと共に、全ての砲門が一斉

に火を噴いた。と、同時に……

「逃煙球っ！」

ほくどがいつの間にか手にしていた逃走用アイテム逃煙玉を使い、辺り一面白い煙で埋め尽くされる。

「みんな、こっちこっち！」

一番後ろに陣取っていたトキオの声を頼りに、白煙の中キリト達は隣のブロックまで一時撤退した。

.....

「さて、あれをどうするか……」

アルビレオがあれと差した方向には大量の砲門でハリネズミのようになっている櫓がある。

「早く決めないと、あと数分でまたブロックシャッフルされちゃうよ〜」

「そ、そうだよな。早く作戦を練らないと！」

ほくどは切羽詰ったセリフの内容とは真逆のマイペースな感じに、トキオは逆にアワアワしながら答える。

「落ち着け、トキオ。それとまずキリト、君にひとつ確認しておきたいことがある。彼女は本当に君の知り合いなんだな？」



その質問に、キリトはやはりアルビレオも気づいていたか、と思  
いながらも頷く。

「ということは……」

「やっぱ、アルビレオもそう思いますか」

「えっ、ナニナニ？二人ともなに話してるの？」

ほくどが顔を思いつきり近づけながらの問いに対し、キリトは体  
を硬直させながら若干後ずさり、アルビレオは特に気にすることな  
く無視して話を続ける。

「じゃあ、その件はいいとして……あとは、彼女の獲物はスナイパ  
ーライフル、それも大口径のアンチ・マテリアルライフルだな？」  
「あ、はい、一発喰らえばほぼ即死間違いなしと考えたほうがいい  
と思います」

あの遠目でそこまでわかるのか、とキリトが感心している横で、  
トキオがゲゲゲッ！？と、顔を青ざめさせる。

「後2分」

無視された腹いせか、今度はブロックシャッフルまでの時間を間  
延びした声でカウントし始めるほくと。

それに対し、アルビレオは特に反応せず、淡々と作戦を立案して  
いった。

-----

――

ピーッ、ピーッ、ピーッ！

自動で櫓にセットされている警報が耳元で鳴り響く。

「来た……」

シノンが櫓の柱に寄りかかりながら静かに呟き、閉じていた目を開いてメニュー画面を操作し、このブロックに入れる唯一の入口の映像を見る。人影は3人……確かキリトを入れて4人いた。どうやら残りの1人はバックアップで、アタッカーがああ3人らしい。

しかし、いくら援護があるとはいえ、たった3人でこの火力を突破できると本当に思っているのだろうか？

「いや、キリトならやりかねない……」

初めて会った時からキリトには驚かされっぱなしだった。不可能を可能にし、踏みとどまりそうになった時背中を押してくれ、わたしのトラウマを克服するのにも手を貸してもらい、最後には命まで救ってもらった。

そう、キリトはシノンにとっても朝田詩乃にとってもかけがえのない大切な人だ。

(だからこそ……)

「ここだけは絶対に墮とさせない……！」

そう言いながら顔がちょっと赤くなるのを感じたシノンはぶんぶ

んつと頭を振り、両手で頬を叩いて気合いを入れると、床に寝そべりへカートを構えて、スコープを覗きながら意識を研ぎ澄まし始めた。

.....

キリト達のフォーメーションはいたって単純な縦列形態を取っている。

先頭の人間が正面からの攻撃を全て受け流し、HPが半分を切ったら最後尾に下がり回復するというものだ。これを3人でローテーションしながら進んで行ければ、いつかは必ず櫓までたどり着ける。

……  
そう、相手の攻撃がしのぎ切れる程度のものだったらの話したが

「ほっ！、やあっ！、とおうっ！、ふっ！、どりゃあー！」

何回目かのローテーションを経て、先頭のトキオは歩くような速さで進みながらも、様々な気合の入った声を上げて砲弾や色とりどりの紋章弾など飛んでくるものを片っ端から弾いている。

ダダダンッ！、キインッ！、ドドンッ！、ボンッ！、ガガガガッ！

放たれてくる弾が多種多様なので、弾く音が多彩なメロディーを奏でてまるでトキオの剣が楽器になったかのようだ。

それはトキオも実感しているのか、先ほどから剣を振るう型がまるで練武を舞っているかのようにリズムに乗ったものになっている。

しかしだからこそ、その動きは僅かに読みやすくなってしまっていた。

バアンツ！

ギインツ！

動きが微妙に単調になりがちだったトキオの隙を突き、狙撃手として最高クラスのシノンのライフルの一撃がトキオの剣に向かって放たれる。

シノンの放った弾丸は狙い変わらず剣の刀身に鈍い音を立てて当たった。

刀身が砕けることはなかったが、さすがの威力でガードを弾き飛ばされた状態で硬直を強いられるトキオ。

「あつ、やべ……」

片手を振り上げたさせられた状態で衝撃に痺れて完全に無防備になったトキオに、ここぞとばかりに砲撃が集中する。

「スイツチ！」

トキオの後ろにいたキリトは叫ぶと同時にトキオの首根っこをひつつかんで無理やり後方に放り投げ、代わりに前に出て放たれた銃弾全てをいなし弾き返す。

「サ、サンキュー、キリト。助かった……」

トキオが少し情けない声を出しながら、すぐさま回復アイテムを使いHPを全開まで回復させたあと、深く息を吸い乱れた呼吸を整

え始める。

「これ以上進むのは少しきついか……？ほくと、またでかい呪紋まじないを頼む！」

2番手になったアルビレオは呪符や無詠唱でキリトを援護しながら、後ろで忙しく指示を出している。

常時表示されるよう設定してある小型モニターに映ったほくとは、アルビレオのオーダーにムリムリと首をブンブン振る。

「もう援護だけで手一杯だよ〜！」

序盤こそほくとは大呪紋で櫓からの攻撃を防いだり攪乱していたが、中盤になるにつれて切れたバフや回復呪紋をかけるのに手いっぱいになってしまっていた。

「もう少しだ……もう少しでリロードするはずだ！そこまで持たせる！」

そう、櫓の圧倒的な物量にも弾切れか、もしくは砲身の冷却期間等のボス戦によくある隙（弱点）が存在するらしく、櫓と入口の間地点にくるまでにすでに2回ほど数秒の空白があった。

その期に乗じて大幅に歩を進めて、中間地点までこれた。たぶん、あと2回繰り返し返せば、櫓までたどり着けるだろう。

（まあ、その前に……）

キリトが剣を休む暇もなく振る手に神経を集中させながらも脳内である思考を巡らせていたが、弾幕の嵐が突如止んだことにより一旦途切れる。

「よしっ、行くぞ！」

射撃が連射の利かないシノンのスナイパーライフル（それでも、十分脅威なのだが）だけなので、シノンの放った一撃を大きく回避した後、キリトは一気に距離を詰めようと駆け出したが……

「キリトッ！」

「ばびゅんっ！」

アルビレオの声と共に、妙な叫び声がキリトの足元から上がり……

キインッ！

金属と金属のぶつかり合う音がその場に響く。

「ハラハラしたなあ……」

トキオがキリトの後ろで剣を構えて緊張を継続させながらも、ふうっ……と、一息つきながら呟く。

「あつれえ〜、なんで、ボクチンの奇襲がばれちゃったのかな？」

地面の下から仕掛けた暗殺者の様な風貌をした男、楚良が、先ほどまでキリトが立っていたところに現れた剣により完璧に奇襲を防がれたことに何の動揺も見せず、不敵な笑みを浮かべる。

それに対し、その場でジャンプして剣を地面に振りおろし、楚良

の双剣と鏢迫り合いをしているキリトは剣を押し反動を利用して飛び下がり、地面に着地して、にやりと笑って答える。

「最初におかしいと思ったのは、シノンが俺のいることを知らなかったことだ」

そう、もしシノンがああ銃声が出た時キリト達に向けて殺気を放っていたのなら、櫓で会った時にあれほど驚いていなかっただろう。最初は演技かとも思ったが、あの慌てぶりはフリとは思えなかった。

それに……

「あれほどわかりやすく目標を晒してるんだから、どこかに伏兵を忍ばせとくのは定石だ」

キリトの言葉を引き継いで話しながらも、アルビレオはキリトの前に出て槍を構え、楚良と櫓の線上に隊列を入れるようにしながら間合いを図る。

「さっすが、元騎士様は違うねえ。その黒んぼも、なかなか鋭いみたいだし。でも……」

俺は？&わたしは？とアピールしているトキオ&ほくとを無視して一旦言葉を切った楚良は、マフラーの上からわずかに覗く口に浮かぶにやにや笑いを獰猛な捕食獣のような笑みに変え、両腕に括り付けられた双剣を構え、手には鋭く光るナイフを持つ。

「だからって、簡単に勝てるとは思わないほうがいいよ？」





リゴンの欠片に所々浸食されている。

「なっ、なに、あれ……?」

事情をまつたく知らないシノンは、慌てて櫓の武装を起動し、その不気味なボスMobに一斉射撃を喰らわせた。

図体がでかく、そのうえ動きがノロい下級クエスト用のボスMobである ガンジャイアント は、瞬く間に砲弾の嵐を受け、爆炎の中に沈んでいく。

「やった?」

シノンが櫓の攻撃を中断させ、ふう……、つと、安堵のため息をつく。

だが……

「えっ……?」

燃え上がり巻き上がる煙を払うかのように、ガンジャイアントは無傷でその場に再び姿を現した。

「ウン……?」

シノンは呆然としながらも、攻撃を再開するも、ただの足止め程度にしかなっていない。

そして、お返しとばかりに ガンジャイアント は3発のポリゴン塗れの弾丸を放つ。

櫓から放たれる弾丸や砲弾をいとも容易く弾き、禍々しく発光し

ながら櫓へと向かう凶弾。

「くっ!?!」

シノンの正確な射撃により、かろうじて2発の弾丸の軌道を変え  
ることに成功するも、残り一つが櫓へと迫り……

ズウウウウーーン!

「シノンッ!?!」

シノンのいる物見台の下付近に直撃した弾丸が爆発を生み、一瞬  
にして煙が立ち込める。

煙が晴れた向こうに現れた櫓の姿は見るも無惨なものだった。主  
砲である中型呪紋砲は直撃を喰らい大破。その誘爆に巻き込まれて  
周りの砲門もほぼ沈黙。

これでは上にいたシノンも無事では済まないと思われたが……

「けほっ、けほっ……し、死ぬかと思った……」

顔は煤けているものの、羽織った灰色のマントには傷一つ付いて  
いなかった。しかし、それ以外のところは……

「シ、シノン……」

キリトは戦闘中の上、ウィルスバグ発生という非常事態というこ  
とも忘れてシノンのことをじっと見つめてしまった。

その視線に気付いたのかシノンはキリトを見て、その真剣な眼差  
しに顔を赤らめてあたふたした。

「ちよっ、なんでそんな風に見てるのよ!? なにか変なものでもついている……?」

「……シ、シノン……その髪……」

キリトはとつとつ我慢できず吹き出してしまった。

「えっ、髪……? って、ええええー!?」

そう、シノンの動きやすいように短く切りそろえられた水色の髪が爆発でアフロと化しているのだ。

(元の髪の量から考えられないほどのアフロっぷりはゲームの仕様か?)

「……つぶw」

「…………」

「……くくくっw」

トキオと、アルビレオやシノンの味方のはずの楚良までもが口を押さえて笑いをこらえている。

「くら〜! 女の子のことを髪形で笑っちゃだめなんだよ〜」

と言いつつも、遙か後方でスクシヨをパシャパシャ撮りまくっているほくと。

ツッコミ役のアルが傍にいないくて、やりたい放題だ。

だが、そんな空気も再び ガンジャイアント が動き出したことにより、一瞬で吹き飛ぶ。

「やはり、あれしかないか……」

何とかポーカーフェイスをキープしたアルビレオは、珍しく逡巡して悔しさを表情に滲ませたが、すぐに切り替えてキリトとトキオを振り返る。

「キリト、トキオ、緊急事態だ。Xtthフォームを使う!」

「えええええっ!?!」

「このクエスト、諦める気ですか、アルビレオ?」

トキオの驚きの声と、キリトの意思を確かめる間に、アルビレオは決意の眼差しで頷く。

「30秒以内に終わらせればまだ可能性はある。が、キリト、もし俺たちが復帰できなかつたら、あとは頼む」

「……わかりました、まかされます! ついでに、クエストもしっかりクリアしますよ」

キリトは胸をドンと叩いて応じる。

「よし、行くぞ!」

アルビレオの号令と共に、キリトたちはあるコマンドを一齐に叫んだ!

「リンクゲージ解放! フォームXtth!」

言葉と共に、キリト達は光に包まれた。

.....

「何……あれ……？」

ここにきて、シノンはさすがにこのイベントがおかしいことに気付いてきた。

キリトのアバターのこともそうだけど、他にも一緒にいた人達の服装や装備は明らかにGGOのものではない。

ここがどこで何が起こってるのかわからない今、なし崩し的にこの櫓を守ることに従事しているのは仕方のないことだったし、もしここが墜ちた時におこることがまだ有効なら、絶対に阻止しなければならぬ。

なので、不意打ちのように現れた得体のしれないボスMobも全力で潰しにかかっていたのだけど……

「変身した……？」

そう、急にあの3人が光り出して、エフェクトが消えて次に姿が見えた時にはキリト以外の二人の姿が変わっていたのだ。

キリトと同じ二刀流の少年は学生服にゴーグルというゲーム内では妙な恰好から、明るいグレーと白を基調にした剣士が着るような服に一本の角が尖っている額当てを付けた姿になっている。

もう一人の浅黒い肌をした軽装の青年はその身を騎士鎧に包み、フリーランスから正式な騎士になったような鎧姿に変わっていた。

そして変わったのは姿だけではないと、数多の強敵と対峙してきたシノンの直感が告げていた。その感通り、彼らは各々の獲物を構

えると、一気に謎のボスクラスと思しきMobへと突撃していった。

- - - - -

Xthフォームは 薄明の腕輪 や <sup>アバター</sup>憑神 等のウィルスバグに対抗できる力の内の一つだ。

これはプレイヤーとゲーム世界がリンクしているからこそできる独特のシステムで、パーティメンバーの感情が昂るテンションことにリンクゲージのメモリ増えていき、このゲージが一定以上溜まると、Xthフォームを使うことができる。

しかしXthフォームになるには隠しステータスの一種であるメンバー間の絆という不確定で測りづらいものが高くないとできず、できるかどうかわからない非常に信用のおけない技なのだ。

さらに、これはリアルプレイヤーとAIの間でしかできないという制約まである。

これらの条件付けと対ウィルスバグや憑神クラスの敵専用のシステム故にほとんど使う機会がないが、なればもの凄く強力なのは言うまでもない。

「Xthフォームにチェンジ完了っ！久しぶりだな〜」

感慨深げに己の剣士姿を見るトキオ。

「無駄にする時間はない。一気に決めるぞ！」

アルビレオがそう言うなり手にしたハルバート 真槍ヴォータン

を構え、颯爽と駆けだす。

「対象 ガンジャイアント をウイルスバグと断定！The Worldの秩序を守るため、これより駆逐する！トキオ、キリト、ついてこい！」

「オウツ！」

気合いを入れながら走っていくアルビレオに続くキリトとトキオ。

「誤アアアアアアアア！！」

ガンジャイアント が機関を唸らせ、先ほどまでとは打って変わった素早い動きでアルビレオ達を蹂躪するべく後塵を巻き上げながら突進する。

「させるか！」

アルビレオの前に出たトキオが、両手の剣を振りかぶり、勢いを付けて振り下ろす。

ギヤリリリリリリッ！！

「愚オオツ！？」

トキオの手にする二振りの剣に付いている飾りに見える巨大な歯<sup>キ</sup>車が光り輝くチェーンと共に飛び出し、突進してくる ガンジャイアント に直撃、押し止めるに留まらず、逆に数メートル吹き飛ばす。

「まだまだ！」

いつのまに移動したのか、ガンジャイアント が吹っ飛ぶ先に待機していたアルビレオがジャンプする。

「ハアッ！」

ちょうどバレーのトスを上げるかのように下段に構えた長槍 真槍ヴォータン を下から挟るように切り上げ、ボスMobの巨体を空高く打ち上げる。

そして ガンジャイアント の進む方向、遙か上空には、本来なら迷宮内では飛べるはずのないキリトが、虹色に輝く翼を展開しながら剣を上段に構えていた。

「これで、終わりだ！」

気合いの掛け声と共に、上へと向かって打ち上げられている ガンジャイアント に重力の力も借りながら一直線に矢の如く斬り込むキリト。

そして……

シュパアアアアンツ！

ポリゴンが碎ける軽快な音と舞い散る欠片の中をキリトは突き抜け、そのまま地面に着地する。

それと同時に背中の中翼が掻き消え、トキオとアルビレオも光に包まれてポリゴンの欠片が爆散した中から元の姿で現れた。

「ふう……」



「なんとか」  
「なつたみたいだな」

3人で言葉を繋いだ直後、キリトの前と後ろでドサリツ……！という音が二つした。

そこには、トキオとアルビレオがその場に倒れ伏してしまっていた。

「やっぱり、20秒でも倒れるくらい持ってかれちゃったみたいだね」

後方から推移を見守っていたほくとがトキオのそばまで歩み寄り、ひょいっ！と肩に担ぎ上げる。

「で、楚良はどうするの？まだやるつもり？」

ほくとがそのままアルビレオの方へと向かいながら、ほくとと同じように黙ってキリト達の戦闘を見ていた楚良に含みを込めた声で問う。

キリトは未だに構えを解かず、楚良の返答を待っている……

「……うん、ボクチン、イチ抜けたア！」

その能天気な声に一瞬ズッコケそうになるキリトだったが、近寄ってきた楚良に再び警戒する。

しかし、次にもたらされたのは、耳に響くメッセージ着信音だった。

訝しむキリトは片手でメニューウィンドウをサッと操りメッセー

ジ画面を呼び出すと、そこには『楚良からメンバーアドレス交換の申請が来ました。受理しますか?』という、システムメッセージだった。

「なんか、キリトという方がオモシロそうだし、メンバーアドレス、交換しよ?」

そのあっけらかんとした中にも何か含みがありそうな言いように、キリトは一瞬逡巡したが、すぐに受諾を選択する。

楚良は一瞬驚いた表情をしたが、すぐになんとも言い難いにやりとした笑みを浮かべた。

「んじゃ、なんかオモシロそうなことをするときには呼んでね。シュバツ!」

そう言い残し、楚良は忍者のようにその場から消え去った。

「あんまり女の子を待たせるのは感心しないなあ。早く行ってあげないと。じゃあ、後はよろしくね、キリト」

アルビレオも回収したほくどが、キリトににんまり笑いながら後方へと下がっていく。

その言葉に、キリトは内心げんなりしながら、先延ばしにしてきた問題、櫓にいるシノンに向かって声をかけた。

「シノン、あのさ……」

「いや、いいわ、キリト……みなまで言わないで」

しかし、絶賛アフロ中のシノンは、何かを悟ったような顔をして、キリトの言葉を遮る。



て……

「逃げるヨ……!!」

「チエロツ!？」

ガンジャイアント が生垣に開けた穴から現れたのは、暴走しているグリちゃんに乗ったチエロだった。

そして、グリちゃんは明らかに櫓へと向かって一直線に爆走している。

(な、なんでだ……？はっ、まさか!?)

そう、トキオが言っていたグリちゃんの2つの習性『乗り物と、尖ったものに惹かれる』

そして、櫓の天辺には遠くからでも見える旗と、尖ったポールが付いている。

「ま、まずい、シノン!そこから逃げる!」

「えっ?」

とっさのことで、一瞬判断が遅れたシノン。

しかし、その僅かな間に、グリちゃんはすでに櫓のすぐ傍まで駆け寄り……

「グモオオオオオツ!」

「と、飛んだあ!？」

あの巨体からは考えられないほどの身のこなしで大ジャンプして、一気に櫓の天辺に前世紀の某映画のゴリラのように取り付いた。

そして、当然のごとく、グリちゃんの重さに耐えきれなくなった  
櫓が、傾き始める……

「あつ………?」

それらの出来事が一瞬で起こり、シノンが対処する暇もなく櫓は  
次の瞬間、倒壊した。

(やばい、かも……)

シノンは遠距離から狙い撃つスナイパーのため、接近戦、特に体  
術や軽業<sup>アクロバット</sup>関連は皆無に等しい。

よって、高さ数十メートルから落下すれば、ひとたまりもない。

シノンは覚悟を決め、なんとか衝撃を最小限に食い止めようと、  
へカート?を抱き込み、身を丸くした。

「ひノンッ!」

「えっ?」

が、次の瞬間、腰に何かが巻きつき、そのまま落下感が若干収ま  
る。

シノンが驚いて顔を上げると、そこには口に小さい人形を啜え、  
シノンを抱えるのとは別の手に気絶した小柄な女の子を掴んだ少年  
キリトの姿があった。

「キリ、ト?」

キリトはその問いとも言えないシノンの呟きに答えることなく  
というより、口に人形を啜えて喋れない(崩れ落ちる櫓の残骸を  
足場にして着実に勢いを殺しながら地上へと近づき、そして……

ザシュッ！

勢いを殺したといつても、2人分（＋ヘカート？&メツチャ重い人形）の重さを抱えたキリトは着地した後、一瞬硬直したが、すぐに上から降ってくる瓦礫を避けるためにスタコラサツサとその場から退避した。

「ふう、何とかなつたな……」

足の痺れから、安全な場所まで退避した後、チエロとシノンを下してキリトは大の字になってその場にばったりと倒れた。

「あ、ありがとう……」

仏頂面で礼を言うシノンに対し、キリトはにやりと笑って答える。

「おやおや、なんか素直ですな、シノンさん？」

「べ、別に、そんなんじゃないわよ！……それじゃ、なにがどうなってるか説明してもらおうかしら……、っと思っただけど、その前に……」

そう言いながら立ち上がったシノンは腰に差してあったMP7短機関銃を取りだし構える。

「ちょっと顔面破壊させてもらっね」

キリトは一瞬『はっ?』という間の抜けた表情をした後、アハハハツと笑ってみた。

しかしシノンの表情がマジなのに気付き、一応聞いてみる。

「えーっと、シノンさん、一体何をおっしゃられてるのです?」

キリトが馬鹿丁寧に訊ねると、シノンは少し顔を赤らめながら答えた。

「ちょ、ちょっとこれからあることが起こるから、それを見て欲しくないの。だから顔面、というより、目を見えなくさせてもらおうってわけ」

確かにGGOには部位破壊があり、フィールドにいる間は被ダメージが一定量に達すると欠損して、街に戻るまで元には戻らない。ここThe Worldにも似たような部位麻痺というものがある。腕が吹き飛ぶとかエグイ描写は無く、ただその部分が灰色になり、麻痺するというものだ。

そして、勿論顔にダメージが加われば同じような効果はあるけど……でも別にそんな過激なことしなくても、というか、顔面に弾丸喰らったら麻痺どころか気絶しちゃうような……ホント、何を言っちゃってるんだろうかこの子は……?なんて思考をキリトがぐるぐる頭の中で駆け巡らせていると……

ダダダダダダッ!

キリトは反射的に横に転がる。

フルオートではら撒かれた弾丸は先ほどまでキリトの顔があった地面を八チの巣にしていた……

「……ちよつ、本当にシャレにならないよ、シノン!?」

キリトが悲鳴さながらの声を上げたが、シノンはゆらりとキリトに銃口を向け、再度撃とうとしたその瞬間!

バサッ!!

シノンが羽織っていた爆発でも傷一つ付かなかった灰色のマントが跡形もなく弾け飛んだ。

そしてその下には……

「みい、見るなああああ——!!」

シノンの絶叫と共にフルオートで乱射された弾丸が、今度こそ自分の顔に目掛けて飛んでくるのを認識した直後、キリトの意識は吹っ飛んだ……



最初にキリトが感じたのは後頭部に当る柔らかい感触だった。

意識がはつきりしないまどろみの中、キリトはその感触を一番よく感じられる場所を探そうと頭の位置を微妙に調整してみた。

「ちょ、くすぐったいっ！……こいつ、もう起きてるんじゃないですか？」

「ん、まだみただけど、そろそろ出発しないと晩ご飯にやるつもりだったクエスト達成パーティーできなくなっちゃいそうだから、強制的に起こしちゃうおっか？」

その言葉が聞こえたと同時に、キリトの後頭部から心地よい感触が消え、何か硬いものに頭をこつんと軽く打ち付けた。

「むう……」

「あつ、起きちゃった……」

キリトが目を開けて初めに見たものは、ほくとが俺を見下ろす格好でバケツを持っている姿だった。中には水がたっぷり入っているらしく、たぶんだぶんっと言う音が聞こえてくる。

「あ、おはよう、キリト！」

「ほくとさん、そのたっぷり水が入ったバケツで何をしようとしてたんですか？」

キリトが馬鹿丁寧に尋ねると、ほくとはあたふたとしだした。

「えーっと、んーっと……花火をする時はバケツをちゃんと用意し

よう……みたいな？」

ほくとがてへっwと笑った後、そんなことはどうでもいいという  
感じに話しを切り替えた。

「あ、そうだ、そんなことよりシノンちゃんのことなんだけど、キ  
リトが気絶させられている間にこっちでできるだけ事情は説明して  
おいたよ」

今一はつきりせず朦朧としていた意識がいつぺんに覚醒する。

(そうだ、唐突過ぎてあときは考える余裕がなかったけど、シノ  
ンには色々聞きたいことがあったんだ)

キリトは辺りをキョロキョロ見回すと、お目当てのシノンがさっ  
きからほくとの後ろに隠れていたことに気づいた。

「ん、なんでそんなところに隠れてるんだ、シノン？もしかして、  
まだアフロとか？」

キリトが冗談半分に尋ねた後、ふと思い出してそう言えばと続け  
た。

「確かシノンに気絶させられる前に何か灰色のマントが消えたよう  
な……」

と、キリトが何か思い出しかけた瞬間、

ダダダダダッ！

キリトの座っているとこの周りに銃痕でできた線がきれいに引かれた。

「思い出したら、今度はちゃんと忘れるほどショックを受けるまで撃ち続けるけど？」

GGOで着ていたいつもの軽装（いや、少しばかりこのゲームの様式や紋様が入っているからたぶん現地調達したものか？）を着たシノンが今までに見た中で一番怖い鬼の形相で静かに宣告する。

「と、思ったけど、気のせいだったみたいです……」

キリトは自分の自我の喪失の危機を察知し、素早く答える。

（だけど、あのシノンをここまでうるたえさせる格好っていったいどんなのだ……？）

キリトは少し気になったが、好奇心は猫を殺すともいうし、ここは命あつてのもの種だと思つことにした。

「で、シノンにはどこまで説明してくれたんですか、ほくと？」

ほくとがシノンに教えたことはこの世界が彼女のいたゲーム、GガンゲイルオンラインGOではなくThe Worldであるということ、キリト以外にもALOからフェアリーダンスのメンバー+その他数名が来ているということだった。

「GGOからの依頼は正式なものだったのか？」

キリトの質問に、シノンはちょっと自信なさそうに答えた。

「いつも通り運営のアドレスからだったし、報酬がちょっと高めだったのが気になったけど、あの事件以来結構優遇されてたから、こんなもんなのかなと思って……」

ちなみにあの事件、前回大会の前後に起こった連続殺人が解決した後、GGOの運営が事件の被害者であるシノンに1年間料金無料他優待遇を申し出てきた。

もちろんシノンは最初断ったが、キリトの「もらえるもんはもらっとけば？」という助言を与えたのもあり、最終的には受け取っていた。

「まあ茅場なら運営になりすましてメールを送ることぐらいしかねないからな……あ、それと、シノンは何月何日の何時くらいにダイブした？」

「日時？8月×日の、んー……だいたい09：30くらいかな？」

キリトたちがこのゲームに飛ばされたのが8月×日の9：00頃だ。つまり、茅場の言っていた1ヶ月で1時間というのは本当らしい。

「それじゃ最後の質問だけど、俺たちが始めてキスしたのはいつどこだったっけ？」

「……………は？」

シノンはたつぷり数秒思考停止した後、見る見るうちに顔を真っ赤にして反論する。

「ちよっ、なに言っ……!? あ、あんたとキスしたことなんてないでしょう!？」

「わー、キリト、アスナという人がありながら……二股だ〜」

「調査結果を改めるネ。キリトは人格最低ヨ……」

いつのまにいたのか、チエロまでキリトのことを言いたい放題に言っている。

キリトは恥ずかしさで顔を真っ赤にしそうになりながらも、ポーカーフェイスでさらに続けた。

「俺がバイクで学校まで迎えに行ったことあつたる?」

「あ、あの時は普通に送ってくれただけじゃない! もう、一体なに言ってるの!？」

ここでキリトはシノンの表情をじっと見て、少し黙考したあと結論を出した。

「ふう……やっぱり本人か、やあ、よかったよかった」

キリトが一人で納得していると、わけがわからない様子のシノンが慌てて聞いてきた。

「ちよ、何一人で自己完結しちゃってるの!? 説明しなさいよ!」

「あ、ああわるいわるい。いや、シノンが本物かどうかわからなかったから、ちよっとカマかけさせてもらったんだ。茅場なら偽者くらい用意しそっだしな……」

キリトがうんうんと頷いていると、シノンがゆらりとMP7短機関銃を構えた。

「あ、あれ、シノンさん、もしかして怒ってらっしゃる……?」

キリトが恐る恐る尋ねると、シノンはにこっと笑った後、一瞬にして氷のような冷たい表情に変わった。

「当たり前でしょーがー!」

こうして乙女心を全く分かっていないキリトは、シノンの放つ銃弾をまた避けまくるはめになった……

「なんかシノン、トリガーハッピーに目覚めてないか……?」

キリトが尋ねるといっわけでもなく呟くと、シノンは猛然と反論してきた。

「あ、あんたがへんなことばかり言うから……っもう!あんたといるとやっぱり調子狂っわ」

シノンがさらにキリトに何か言おうとしたが、

「もうっ、さっきから二人だけでもりあがっちゃって〜!」

背中にほくとが飛びついてきたことにより中断させられた。

「わっ、ほくとさん!?!」

シノンが慌ててほくとを振り払おうとするが、ほくとの関節技の

ごとく決まっているべったり張り付きはちょっとやそつとじゃ解けないことを身をもって知っているキリトは、新たに生まれた犠牲者にただ黙祷した。

「ちよつ、キリト、見てないでなんとかしてよ！」

「まあいいじゃない、女の子同士なんだからさ」

ほくとが猫なで声を出しながらふつ、とシノンの耳に息を吹きかけてひゃっ！？と言わせて見たりして遊んでいるのをキリトは内心眼福と思しながら、火の粉が飛び掛らないよう距離を置いている。

「中身はすでに女の子というには年を食いすぎていると思うが？」

覇気ゼロの声がほくとの後ろから聞こえたかと思うと、アルビレオがほくとをシノンから引っぺがしていつものごとく猫を持つようにする。

「あ、あら〜アル……もう起きてても大丈夫なの〜？」

鬼のいぬまになんとやらだった状態からいっぺん、ほくとはいたずらを見つけた子供のように首をすくめた。

「っていうかアル、私がなんだってえ！」

「元になったリアルのことを言及した件なら、本当のことだろう？」

アルビレオの有無を言わさぬ物言いに、ほくとはぐうの音もでないように、静かになった。

「ところで、トキオはまだ反動で？」

「ああ、Xethフォームは普段テンションが高い奴ほど反動がきつ

いからな……」

アルビレオが近くで巨大化しているグリちゃんの上に乗つけられてぐったりしているトキオを指差した。いや、あれはぐったりしているというよりは元気が無いと言ったほうがいいのかもしれない。

先ほど櫓攻略戦で使用したリンクゲージは勇気、元気、士気、敵意などの感情の昂ぶりそのものを消費する。なので、Xethフォーラムになってから戻るとそれらが全て無い状態に戻り、今のトキオみたいに腑抜け状態になってしまう。

トキオは結構熱い方なので終わった後の落差は激しいが、その分リンクゲージが溜まりやすい。逆にアルビレオみたいにクールなタイプはわざと強気な発言をしたり感情を高めないと中々溜まらないが、元のテンションが低い分すぐに戦闘に復帰できるだけの状態に戻りやすいと、一概にどちらがいいとも言えない。

「まあ歩いているうちにトキオも回復するだろう……シノンさんのことはこのクエストが終わってから考えるということでもいいか？」

アルビレオがシノンに尋ねると、シノンは助けて貰った恩人であるアルビレオに感謝の念を込めながらこくりと頷いた。

「よし、それじゃラストスパート、張り切っていこうか〜！」

櫓の迷宮操作装置を破壊したために出来た盗賊のアジトまでの一本道を例によってほくどが先導して出発した。

-----



「これは……」

一本道を真っ直ぐ進んで行くと盗賊団アジトと書かれた看板が立っている洞窟までたどり着いた。

いよいよ盗賊団と対決かと各々の武器を取り出し、臨戦態勢で突入したのだが……

「ようやく来たか！」

洞窟に入ると、そこにはいかにも盗賊という風な服装をしたリョースとヘルバがいた。

そして……

「むしゃむしゃむしゃ……ぱくぱくぱく……ごくんごくんごくんごくん……ぷはぁー、おいしいです」

囚われの姫役のAIKAが巨大なテーブルについて料理を食べていた。しかし驚いたのは虜囚の身であるはずのAIKAが繋がれもせずにいることではなく、その食事の量だ。

ヘルバが部屋の奥の方にある調理場で鍋やフライパンをふるって料理を作り、リョースがそれをどんどんテーブルに運び、そしてテーブルの上に次々に並ぶ大量の料理たちはまるでマジックのように見る見るうちにAIKAの口の中に消えていく。

「おまえら、AIKAを救出にきたんだろっ？早くこいつを連れてつてくれ！もうこのアジトの食料は尽きそうなんだ！」

リョースが演技とは思えないほど切実な声で訴えかけてきた。

「えー、もう帰るんですか。まだお腹いっぱいじゃないのに……」

空になった大量の皿の前で心底残念そうにしているAIKA。

「AIKAって、食いしん坊キャラだったっけ……?」

「いや、まあカナードのどんぐりバーガーを好きになって一杯食べた時からよく食べるな」とは思ってたけど、まさかここまでとは……」

どうやらトキオも知らなかった新事実らしい。

(まあこれで労なくしてクエストクリアか……んっ、ちよつとまてよ……?)

「いや、あんた達を倒さないと神槍ヴォータンを手に入れられない」

アルビレオが前に出て槍を構える。そう、クエストの報酬アイテム入手条件はAIKAを助ける前に盗賊を倒すということだった。

「ああ、あれか……それなら傭兵としてやとつたその娘を倒したから、槍だけを持っていくならいいぞ。宝物庫はその扉だ」

「……わかった、こちらは神槍ヴォータン入手が目的だからな」

アルビレオはあっさり了承した。

(何か呆気ないほど簡単に終わったな……まあでも櫓を攻略するのは結構大変だったし、そこそこ充実したクエだったかな。)

「んじゃあ遠慮なく……」

キリトがそう言つてリョースが指差した扉に手をかけて開いた。

「おおっ!?!」

そこはまさに盗賊の宝物庫らしく、金銀財宝やらレアアイテムが所狭しと無造作に置かれていた。

エクスキャリバー戦の時見たあの宝の山々ほどではないにしろ、小部屋一杯のそれらは見るものを圧倒し、引き付ける。

しかし、キリトの移りゆく視線はとある箇所固定される。

それは、ボロボロの長槍、ハルバートだった。

だが、キリトはその周りにある他のすべての財宝が霞むように視界から消え去り、まるで自分の体が、いや、アバターの中にある桐ヶ谷和人の意志の深いところが引き寄せられるかのような不可思議な感覚を得た。

そして、誘われるかのようにその槍へと手を伸ばし……

「待て、キリトッ!」

アルビレオの制止の声がまるで遙か彼方から木霊で聞こえるかのように感じながら、キリトは槍を手にした。

後ろにいたみんなが何かを言っているのをまるで消音されて気配だけ僅かにわかるかのように感じながら、キリトが手にした槍は不思議な光、データドレインが放たれる時のような虹色の輝きを発し

……

そしてキリトの意識は暗闇へと引きずり込まれていった……

.....

「色々経験して、みんな成長していくんだから！」

ユイと容姿は違っても、どこことなく雰囲気似ている少女の夕暮れ竜に対する切実な思いを含んだ声。

「俺の、せいなのか……？」

アルビレオの悔やむ声。

「ボク、ログアウトできないんだ……」

司の不安そうな声。

「アウラ………なんで？」

アウラの行動に対するカイトの戸惑いの声。

「うおおおお！」

バルムンクに挑む勇者の卵シューゴの全身全霊をかけた声。

「君たちが覚えていてくれれば、僕は本当の意味で消えることはないのかな……？」

クビアの少しさびしそうなながらも満足した声。



そして、世界はどこかに放り込まれた……

.....

「キ……！、……ト！、キリ……！、しっかりして、キリト！」

キリトは頭の中を「ちゃ「ちゃにかき混ぜられたような痛みを感じながらも、なんとか目の前で自分を揺すっているのがシノンだと認識できた。

「あれ……、シノン、何で俺の部屋に……？」

「って寝ぼけてる！？」

シノンの後ろに立っているほくとがズッコケながらツツコム。

「もう、心配したヨ！」

人形のグリちゃんに乗ったチェロはやれやれとポーズをとっている。

「で、大丈夫なのか？」

一番最後にアルビレオがいつものポーカーフェイスながらも少し心配そうに訊ねる。

言われてキリトは少し体を動かしてみたが、特に問題はなかった。

しかし、キリトは自分の調子よりも気になることがあった。

アルビレオは先ほどキリトが手にした槍を持っている。

意識が暗闇に引き込まれた後に断片的に見たもの……布で嚴重に巻かれて外見を把握しづらいが、キリトが触れたあの槍はもしかして……

「アルビレオ、一つ聞きたいことがあるんですけど……」  
「ん、なんだ？」

キリトが神妙な面持ちで聞いてきたのに対し、アルビレオは軽く答えた。

「アルビレオは以前神槍ヴォータンでリコリスを……」

キリトの質問にアルビレオの顔色がサツと変わったと同時に……

「あーっ、キリト、何か頭にタンコブができてるよ〜」

キリトが言い終わる前にほくとが割り込んできてキリトの頭を両手でがしつと掴んでぐいっつと引き寄せた。

「あいたたたたたっ！？何するんですか！」

少しは意識が明瞭になっていたものの、未だに酷い頭痛がする頭を掴まれてキリトもさすがに本気で抵抗しようとした。

しかし……

「帰ったらわたしの部屋に来て」

と、小声で耳打ちされると同時に、呆気ないくらいあっさりときリトは解放される。

「ごめんごめん。ついついつもの調子でやっちゃったwまあ、お目当ての槍も手に入ったし、AIKAちゃんも救出できたってことで、さっさと帰ろ〜！」

ほくとの押しにうやむやにされた状態ながらも、疲労困憊だったキリトたちは同意して、シノンにやり方を説明した後全員青いリングに包まれて転送していった。



## 真実の歴史

「グランホエール居住区画」

「ここ、だったよな……」

グランホエールに帰ってきた後、体調も良くなっていたのでキリトはクエスト達成の打ち上げに参加した。そしてかなり遅くまで続いた宴会が終わった後、今はほくとの部屋の前に来ている。

ほくとは何を話す気なのか……キリトは逸る心を落ち着かせ、ドアをノックした。

コンコンコンッ！

「どござ」

中からほくとの子供っぽいものとは違う落ち着いた女性の声がして一瞬躊躇ったが、ここで立っていても仕方ないので、キリトは中に入った。

「おじやましま……っえ!？」

キリトは入った瞬間自分の入った場所の光景に目を見張った。以前アスナとユイと一緒にほくとの部屋を訪ねたことがあったが、そのときはピンクで統一された何とも言い難いファンシーな部屋だった。

しかし今いる部屋はそれとまったく真逆だ。

四畳半くらいのスペースに散らかったゴミ、机の上には2台のアンティークと言っても過言ではない古いパソコンが置かれ、その横の本棚には大量の本や雑誌、辞書が詰め込まれている。

(なんだかまるで一昔前の現実の部屋みたいだな……)

キリトがそんなことを考えていると、机の前のオフィスチェアにこちらに背を向けて座っていた女性がぐるりと回転してこちらを向いた。詩人風の装束に身を包んだ落ち着いた感じの大人の女性タイプのアバターだ。

「この姿でははじめましてね。私はW・Bイエーツ、このゲームでは吟遊詩人みたいなことをやってるわ」

自己紹介をしながらメニューウィンドウを操作してゴミを片付け、真ん中にテーブルとティーセットを出した。

「ここは私の元になったリアルの女性が使ってた部屋を再現してるの。ちよっと散らかってるけど、まあ座って」

キリトは勧められるがままに安っぽい木製の椅子に座ったが、ほくとは中身が同じと言ってもイエーツは言葉や仕草がまったく違い、緊張を誘う……

「別に取って食おうってわけじゃないんだから、そんなに緊張しないで。それで、あなたは神槍ウータンと接触して何を見たの？」

少し深呼吸をして、キリトはあの時見た過去にこのゲームで起こ

った出来事らしい映像のことを話した。説明している間、イエーツはゆったりと椅子に座って興味深げに聞いていた。

そしてキリトが話し終わると、彼女は徐にメニューウィンドウを開き、近くに中型のモニターを出した。

「後半の方は私も知らないことだけど、それらの出来事は私の記憶とこの記録が正しければ実際に起きたことだわ」

モニターに映し出されたのは簡素なゴシック体の文字の羅列『Chronicle of Aura』というタイトルだった。

「ここにアウラと関わって戦ったもの達、hackersの歴史が記されている」

「hackers……」

キリトはこの世界に来てから何度か耳にした名前を呟き、モニターに映し出される情報に引き込まれていった。

.....

「これが……これが本当に現実で起こったこと……？」

現実の歴史をひっくり返すような驚愕の事実には体の震えが止まらない。

「主観的なものや根拠の薄いものも含まれてるけど、概ね事実よ」

イエーツがティーカップから口を話して、静かに肯定する。

「あの学校のテキストにも載ってる一連のネットワーククライシスのほぼ全てがこのゲーム、The Worldが原因……？」  
（ありえない……あの<sup>サイバークライシス</sup>大災害は世界規模のものだ。その原因がたかがゲーム……？）

しかし、脳裏にたかがゲームという言葉が浮かんだとき、一人だけ、以前ゲームを遊びでなくした男がいたのを思い出し、思考が硬直する。

「そう、普通はそのたかがゲームにそんな危険が備わっているはずがない。でも彼には作れてしまった」

イエーツがメニューを操作して先ほどの説明にも出てきたある人物を映し出す。

「ハロルド・ヒューイック。天才と謳われたコンピューター関連の研究者。人間とコンピューターのあるべき未来を語り、究極AIを生みだそうとしていた……」

「きゅっ、究極AI！？ちょ、ちょっとまってくれ！」

キリトは混乱しすぎて地の言葉遣いが出かかっていたが、そんなことを気にしていられるほどの余裕はすでになかった。

「それじゃあ、アウラが大聖堂で見せたPVが本当にあったってことか……？そんなの、信じられるかよ！」

キリトの混乱する思考を落ち着かせ、まとめるため、イエーツは一つ一つ今キリトが知った事実を簡潔にまとめて言葉に出した。

「ハロルドが究極AIを作るためにThe Worldとモルガナを作ったけど、母体であるモルガナは自分が消滅することに対抗してアウラを生むことを阻止しようといういろいろと妨害工作をし、その影響であの大惨事が起きていたのをカイト達が解決したのが第一章。その後数年たつて消えたアウラをCC社が蘇らせようとして、AID Aという別のネット生命体を変異させてしまい、それにハセヲ達 が巻き込まれた事件が第二章。

そして第三章、全人類をリアルデジタルライズでネットの世界に誘おうとした計画、イモータルダスクを阻止したのがトキオと今この世界にいる私達というわけ」

「言われたことは頭に入った。でも……」

知識としては頭に入ったキリトだったが、理解が追いつかない。

（そもそも生身の体を電子情報に変換してネットの中に入るリアルデジタルライズなんて非科学的なものが本当に存在するのか……？）

「まあリアルデジタルライズについては実践方法が先に進んじやってその理論や仕組みはまだ遅れてる部分があるし、危険な研究ということでは禁止にもなつて詳しいことは何とも言えないわ。でも、ソウルデジタルライズはあなた達がネットに来るために使っているナーヴギアやアミュスフィアにも技術が使われてるのよ」

確かにソウルデジタルライズの話しを聞いた時にはナーヴギアやアミュスフィアとの関係に思い至っていた。

「だけど、それじゃあそのハロルドって学者は何十年以上も前にすでにフルダイブシステムの理論を作つて実践してたつてことですか……？」

（ということは茅場はどこかでその情報を得てソウルデジタルライズを応用してナーヴギアを作っただけ？）

その考えはキリトの顔に出ていたらしく、イエーツが自分の見解を語りだす。

「茅場がハロルドやこの世界についてどれだけ情報を持ってたかは知らない。だけど、さっきの説明の中に出てきた番匠屋ファイルにあった通り、ハロルドが作ったブラックボックスは当時世界トップレベルの巨大企業だったCC社きっての天才コンビと言われていた番匠屋淳と天城丈太郎ですら開くことができなかった。だから誰もアウラを複製することはおろかコントロールすることすらできなかった。

でも、茅場晶彦はそのブラックボックスを開くことができ、この世界にアクセスすることができた。

まあつまり、君の尊敬している彼は盗人ではなく、本物の天才というわけ」

完全に胸の内を見透かされていたことに少し顔を赤らめたキリトを見て笑ったイエーツはその後直ぐに顔をしかめた。

「まあだからこそ厄介なのよね……」

「そういえば、さっきの説明にカイト似の少女達のことが出てこなかったんですけど……？」

先ほどキリトが見た記録にはトキオのことまでしか載っていなかった。

その質問に、イエーツは溜息をつき肩をすくめる。

「それが、私がアクセスできる情報はここまでなのよ。まあ後は自分で調べなさい」

「いや、調べろったって……」

（まあでも、これだけの情報―（事実かどうかはともかく）を入手できたのは大きいか……）

「それよりも問題なのはキリト、なんであなたが神槍ヴォータンに惹かれたかということ」

確かに、キリトがここへ来た一番の目的はそれだった。

「これは言うか言わないかどうしようかと考えてたんだけど……」

初めて歯切れの悪くなったイエーツだったが、すぐに心を決めたのか語りだす。

「当時のモルガナはアウラを究極AIにしないようにするために歪んで生ませようとしていた。だから、モルガナの力の断片である神槍ヴォータンにもある特性があるの」

ここでイエーツは一旦間を置いて、その後重々しく口を開いた。

「それは心の闇、っていうと中二くさいけど……まあそんな感じのものが深いと反応するようになってるの。これはさっきの説明で見たとように、司が彼女の現実での状況から心に大きな傷を負っていて、その闇をモルガナが利用していた所からもわかるでしょ？」

確かに詳しくはプライバシーの為か言及されてはいなかったが、リアルで過酷な境遇にあった司はアウラの誕生を歪めるためにモルガナに利用されていたと言っていた。

「つまり神槍ヴォータンが君に反応したということとは君が何かとても大きなものを抱えているからだと思う。それも、すでに化石となり果ててほとんど力を失いかけているはずの槍が当時のように力を

発揮するくらい……」

イエーツはそう言って口をつぐんだ。

そんなイエーツに対し、キリトは苦勞しながらも何とかいつもの人を食ったような苦笑を作る。

「確かに今まで生きてきた中で色々あったし、俺の心にそういう負の部分があってもおかしいとは思いませんね。まあでももうそんな年じゃないし、闇に飲み込まれてバーサークとかいう展開は勘弁して欲しいな」

キリトがわざとおどけた感じで言うと、イエーツは少し微笑んだ。

「まあ君に限ってそれはないと思いたいけどね。さあ、今日は疲れでしょう、もう部屋に戻って休むといいわ」

「夜分遅くまでありがとうございました。いつも世話になってばかりで」

キリトが仰々しく礼を言うと、イエーツの微笑みが苦笑いに変わった。

「それは私がほくとの時の意趣返しかな？」

「それもあるけど、本当に感謝してますよ。それじゃ、お邪魔しました」

キリトが横開きの自動ドアを通って部屋を出たと同時に、イエーツが何か思いついたのか引きとめてきた。

「ああそうだ、キリト、ここに行ってみるといいかもしれない」



そう言っつてイエーツは手に持ったカードを投げてよこした。  
キリトがメニューで読み取って見ると、そこには痛み森という  
場所に行くためのエリアワードが書かれていた。

「痛み森は一人限定のフィールドだ。もし自分の何が槍を引きつ  
けたのかを知りたかつたら行っつてみるといい。ただし……」

イエーツは不敵な笑みを浮かべながら続ける。

「覚悟はしておいた方がいいわね……」

扉がしまつた後もしばし廊下に佇んでいたキリトは、鉛のように  
重くなつてゐる体を動かして自分の部屋に向かつて歩き出した。

## 幕間

そこは真つ黒な空間だ。ただ黒く塗りたくられた視界は長時間そこにいれば精神に異常をきたしてしまうだろう。

そしてその空間にいる唯一人の男、茅場晶彦は黒に身を委ねてゆらゆらと漂っていた。

「イエーツがキリトと認知外空間に入ったということは、隠された歴史の一端を話したか」

特に感情を含まず呟かれたその言葉は底なしの闇へと呑みこまれていく。

「しかしそれもまた、物語の流れなら必然か……」

ここでポツと茅場の顔の前に光と共にウィンドウが現れた。闇の中の唯一の光源であるそのウィンドウの光はすがりたくなるように温かく輝いているが、茅場はまったく表情を変えず、いや、むしろ思考を邪魔されたことから苛立ちすら見せながら訪問者に対応した。

「プロテクトを破ってまで何の用だ、イエーツ？」

ウィンドウ越しに映っているイエーツは、椅子に腰かけ手に持ったペンをくるくると回しながら微笑んでいる。

「一応報告しとくのが義理かと思って。キリト君にこのThe Worldの歴史を語ったけど……まああなたのことだからすでに予測はついてたでしょう？」

「ならわざわざ報告する必要もあるまい」

茅場は少し鬱陶しげそうにウィンドウを閉じようとした。しかしその行動をイエーツはすんでのところまで止めた。

「あなたの考察の時間を邪魔したのは悪かったわ。でも、これだけは言わせてもらおう。キリト達とは短い付き合いだけど、みんなイイ子達よ。もしあなたが彼らに危害を加えようとするなら……」

イエーツは微笑みを険しく鋭いものに変えて言い放った。

「私達The Worldの住人はキリト達を全力で手助けする」  
「守る、ではなくてか？」

茅場はどうでもいように尋ねる。

「あの子たちはそこまで弱くない。だから手を貸すだけで充分。それに、あなたが何を考えてるかわからないけど、一応この世界の恩人だし、敵対はしたくないのよね」

険しい表情を和らげて苦笑したイエーツに対し、茅場は珍しく感慨深げに答えた。

「ここThe Worldは全てを受け入れる。そして全ての者たちにそれぞれのストーリーを紡がせる」

茅場は歌うように言葉を紡ぎ、その目にはいつもの無機質なものでなくどこか子供っぽい感情が込められていた。

「この世界に来た者達がどのような物語を紡ぎ終えるかは私にもわからない。唯願わくば、それがそのものにとって大切なものになる

ことだな……」

その答えにイエーツは微笑み、そしてウィンドウを閉じた。再び場が漆黒の闇に包まれる。

そして茅場はまた作業に戻った。自分の望むものに近づくために

……

.....

ボコツ、ボコボコツ……

電燈が全て消され、薄暗い闇の中大量のカプセルが並べられている。中にいるものが息をしているからか、時折気泡が一つ二つ浮き出では消えていく。

その中にいる者たちは男や女であり、背が高いものや小柄なもの、耳が長いものや手足が尋常のものではないなど様々なものがある。

カプセルの外にいるものは皆無で、動いているものはいない。この施設は自らがすべきことを無人で淡々と実行している。創造主の願いを成就させる一端を担うために……

.....

・グランホエール居住区画キリトの部屋・

「ふう……」

キリトはほくと、いや、イエーツと話し終わって部屋に戻った後、メニューウィンドウを操作して装備を外し、ベットへ向かいバサッと倒れこんだ。

「どうするかな……」

(心の闇……なんて本気で考えるのも恥ずかしいようなことで悩むことになるなんて……)

そう思いながらもメニューを開いてイエーツが教えてくれたエリア、痛みの森を調べてみる。

ざつと見たところ、痛みの森はパーティープレイ推奨のThe Worldでは珍しいソロ専用のフィールドで、100層ものダンジョンを攻略していく結構ハードなものだ。しかし10層ごとに回復、25層ごとに休憩ポイント(回復+アイテム屋)があり、時間をかければクリアできる可能性は十分ある。

「ま、アウラからの依頼が終わったら行ってみるか」

キリトはそのまま寝てしまおうと目を瞑りかけて……

トントントントンッー

「んっ」

ベッドから気だるげに起き上がったキリトは、メンドクサそうにドアまで歩き、開ける。

そつて、そいつらのね……

## 幕間（後書き）

キリトについて、原作ではまだ詳しく書かれていないエピソードがあります。

最終章ではそこに焦点を置いて書いていくつもりです。

そしてもう一つ重要なのが茅場がなぜThe Worldにいるのかと、その関係。

これは・hackノノとのクロスオーバーにすると考えた時に真っ先に思いついたことなので、やっと書けて嬉しいです。

痛みの森 - 01 -

- 痛みの森、第23ブロッカー 昼頃

パーティープレイ推奨のThe Worldでは珍しいソロ専用のフィールド 痛みの森

3大騎士団が直接管理して立ち入るのを厳しく制限している為普段人の出入りはほとんど皆無で、故に通常は太古の昔栄華を誇った残滓が漂うだけの静かな遺跡型ダンジョンだ。

しかし、今そこを黒い人影が疾駆していた。

「ハアッ！」

袈裟がけに振り下ろした剣が ゴブジェネラル の胴体に吸い込まれていく。刀身がゴブリンの体を通過すると同時に敵のHPがごっそり削れ、それを見た後方で控えている2匹の ゴブリンセージ がすかさず回復呪紋を唱えようとする。

「させるかつ！」

キリトは間髪いれず、黒いマントの下から左手を出し、手にした呪符を2枚投げつける。

ボワッ！！

それぞれの呪符から火球が撃ち出され、敵の詠唱を中断させる。



その隙にブラインドタッチでメニューウィンドウを操作し左手に剣を装備しながら、右手の剣で目の前の瀕死のゴブジェネラルを叩き伏せ、剣の装備が完了すると同時に碎け散るポリゴンの中を構わず突っ切って後方にいるゴブリンセージに一気に接近する。

「ゴブゴブツ!?」

慌てたゴブリン達は逃げようとするが、すでにキリトのスキル射程圏内に入っていた。

ツイン・バクリボルバー ！！

炎を纏ったスキルがクリーンヒットで決まり、2匹のゴブリンセージは粉々に碎け散る。

その時ちようど吹いた一陣の風がポリゴンの欠片を空高く運んでいくのを見ながら、キリトは今の戦闘で少し目減りしたSPをアイテムで回復し、メニューウィンドウのアイテム欄からアイテムポーチに戦闘用アイテムを補充しながら息を整え始めた。

「ふう……」

久しぶりのソロプレイに感じていたわずかな違和感も今は消え去り、研ぎ澄まされた感覚がキリトの体に戻りつつあった。防具に付与できる素材は全て対ステータス異常にまわしている為、SAOのソロプレイ時のように麻痺などで動けず死ぬことはないが、その分純粋な力量による一回のみの命をかけての戦闘をこのダンジョンに入ってから何度も繰り返し返している。

もちろん、ここでの死が本物の死ではない。

それでも……

「ここは一回もやり直しをするのはだめだ……」

キリトは決意の意思を込めた言葉を呟いてメニューウィンドウを閉じ、首に巻いた黒いマフラーを靡かせながら次のブロックに続く石畳の道を疾走し始めた。

-----

同日朝ーグランホール中央ホールー

「おっしやぁ！全クエストクリアだ！」

キリト達と多数の騎士団員が集まった中央ホールに徹夜でクエストを攻略していたクラインパーティーの凱旋の掛け声が響いた。

「やったじゃん、クライン！」

「大活躍だったな、ホタル！」

「お疲れ、三十郎！」

「徹夜で大変だったね、お兄ちゃん」

皆それぞれ最後のクエストを達成したパーティーのメンバーに労いの言葉をかけている。そしてそのざわめきは壇上にカイトが上がってマイクを手にしたことにより収まった。

「それじゃあ、これからクエスト達成組以外の人でアウラからの全

依頼達成打ち上げの準備をします。打ち上げは今夜だから、みんな張り切ってやってください！」

その宣言にみんな歓声で答え、各々割り振られた作業の為散り散りになっていった。そして中央ホールに残ったのはキリトとカイトだけになった。

カイトは壇上から降り、キリトに静かに話しかける。

「それで、本当に行くんだね……？」

「ああ、わるいな、俺だけ準備に参加できなくて」

いや、別にそれはいいんだけど、と苦笑いするカイト。

「僕は痛みの森には行ったことはないけど、あそこは相当きついらしいよ。肉体面でも、精神面でも……って、まあここはキリト達にとっては仮想世界なわけだから、肉体面って言うのは変か」

「いや、ここは俺にとってもう一つの現実だから、この体も本物だ」

たとえデータでできたポリゴンの集まりといっても、この体にはアバター自分の意識が宿っている。なら現実のたんぱく質の塊である体と同じようなもんだろ。

キリトのその答えにカイトはまた苦笑する。

「そうだね、その答えを持っているからこそ、僕たちは君たちと友達であり仲間になり得たんだと思う。だからキリト……」

カイトは表情を一瞬曇らせたが、すぐに笑顔と共にキリトに手を差し出す。

「絶対夜のパーティーまでには帰ってきてよ」  
「もちろんだ」

キリトはカイトの手を堅く握った。

「で、キリトくんはどこに行こうとしてるの？サボリ？」

転送ゲート前まで来たキリトはぱったりとアスナとユイに出会った……と、いうより、待ち伏していたようだ。

「ど、どこって……まあちょっと野暮用で……」

慌ててごまかそうとするキリトをアスナはじとーとした目で睨んだ後、大きく溜息をついて諦めたように話した。

「まあ言いたくないならいいけど、でもちゃんと夜の打ち上げまでは帰ってくるんだよ」

「そうですね、ちゃんと帰ってこないダメですからね、パパ！」

「なんか、飲んでよく帰りが遅くなる夫と父親に言うセリフみたいだな、それ……」

キリトが照れ隠しに頭をかきながら苦笑いすると、アスナもちょっと頬を赤く染めながらも言いきった。

「そうよ、キリトくんはいつもフラフラしてるから、ちゃんと帰っておかないと」

「パパ、絶対に帰ってこないダメですよ」

最近のキリトの雰囲気から何か察していたらしいユイがいつものように振る舞いながらも、最後まで心から心配してくれていることをにじませた言葉を呟いた。

「大丈夫、なんだよね……？」

アスナも少し心配そうに尋ねる。不安げに揺れる瞳をしたアスナに、キリトが返せる答えは唯一つ……

「もちろん！今日の打ち上げ楽しみにしてるし、できるだけ早く帰るよ」

その答えにアスナとユイはもう何も言うまいと頷いた。

「それじゃ、ちょっと行ってくる」

「いつてらっしゃい」

「がんばってください、パパ！」

キリトはアスナとユイに見送られながら、青いリングに包まれてルートタウンへと転送していった。

.....

## ― 痛みの森、第50ブロッカー

痛みの森は遺跡を模したダンジョンだ。遙か太古の昔、人に墮ちる前の妖精達<sup>エルフ</sup>が築き上げた文明。謎の物質で造られた壁や緻密な装

飾からエルフ達がいかに栄えたかを物語っている。

しかし今では栄華の残り香のように苔やツタに覆われた廃墟が広がるのみだ。

その場所を妖精の国から来たキリトが訪れるのは偶然か、はたまた何かの因果か……

そんなことを頭の片隅で考えながらも、キリトはこの100ブロックという苦行のような迷宮区を、残り半分のところまで踏破していた。

「それにしても、意外と普通だな……？」

精神面できついとイエーツやカイトから脅されていたので、いったいどんなことが起こるか緊張半分興味半分だったキリトだったが、今のところ通常より2、3割くらい強いモンスターが出てきたくらいだ。休憩所やアイテム屋もあり、アイテムやSPが無くなつてギリ貧になることもない。これでは普通のクエストだ。

そんなことをキリトが考えているうちに、そのブロックの出口までたどり着いていた。痛みの森ではブロックごとに中ボスの存在があり、それを倒さないと次のブロックに進むことはできない。

立ちはだかるボス達はそのこ強かったが、キリトが今まで戦ったことのある敵ばかりで傾向は掴んでおり、対策はきっちり立てられてはつきり言って苦にはならなかった。

しかし、ここ50ブロック目は今までとは少しばかり様子が違った。

「だれか、もう戦ってる？」

そう、すでに青い筒状のバトルフィールドが展開され、中から戦闘音が微かに聞こえてくる。青い筒に触れれば戦闘に乱入することができる。

(ここは様子を見るべきか……?)

一瞬迷ったが、とりあえず中の様子だけでも見てみるか……と、キリトはギャラリーモードでモニターから中を覗いてみた。すると、そこにはあり得ない姿があった。

「……サ、チ……?」

そう、そこにはSAOで月夜の黒猫団にいたサチの姿があった。さらに戦っている相手は……

「他の黒猫団のメンバー……?」

そしてサチが槍の一撃を派手に喰らいHPを半減させたのを見た瞬間、キリトはこの状況が何を意味するかを考える間もなく乱入していた。

「サチッ!」

キリトはバトルフィールド内に入ると同時に味方するパーティーをサチに選択、アイテムを使いサチのHPを回復すると同時に黒猫団のメンバーとサチの間に陣取り、剣を構える。

「……キ、キリト……?キリトなの!」

サチは驚きと安堵を滲ませた声を上げると同時に、泣きそうな顔になる。

「キリト……キリトお……」

「サチ、いったい何がどうなってるんだ!？」

キリトはその場にへたり込んでしまったサチに背を向けながら、この状況が何なのかを慌ただしく尋ねる。

「わかんない、わかんないよ……きづいたらここにいて、それでもなく歩いてたら……みんなが……」

そう言っただけで涙ぐむ。

「みんな、俺たちのことがわかんないのかよ……?」

キリトが相手に尋ねるでもなく呟くが、全く通じた様子がない。団長以下メンバー全員が白目を剥き、口をだらんと開けて涎をたらし、見た目だけでも到底まともな状態には見えない。

「まあ、それを言ったらこの状況もありえないっちゃあありえないけどさあ……」

しかし、そんな風に悠長に考えている間にも、敵はじりじりとキリトとサチに近づく。

（敵？俺はまたみんなを殺すのか……?しかも、今度は直接この手で……?）



その考えがキリトの思考と体を一瞬停止させ、そしてその致命的な隙を相手は見逃さなかった。

「ガアアアアアアッ！」

口から涎をまき散らしながら全員が一斉にキリトへと飛び掛る。見た目のバーサーク状態に反して、そのフォーメーションは生前の彼らとは比べ物にならないほど精密で避けようが防ごうが絶対に数人の攻撃をまともに喰らうようになっていた。

キリトは一瞬の判断で剣を変え、捨て身の覚悟で攻撃をくらいなんとかカウンターで新しく装備した剣に付与された睡眠効果で眠らせようとした……が……

「な……！？」

（体が、動かない……！？いや、装備は変えられたんだから、麻痺じゃない……なら、なんで？）

キリトは自問自答しながらも意識の隅ではなんとなく答えは出ていた。それは、目の前に自分のせいで死んだみんなを目にした時からなんとなく感じていた。

（ああ、そうか……俺は、ここで、殺されたいのか……）

一度死なせてしまった仲間をまた殺すことは、例えこれが幻想だとしても自分にはできない……それを悟った瞬間、キリトの手から剣が滑り落ち、石畳の地面にからんっ……という寂しい音を立てた。

そして黒猫団のみんなの武器がキリトの目の前まで迫ったその瞬間！

グサグサグサッ！

キリトの目に映ったのは、自分を庇って両手を広げ全ての攻撃を受けたサチの姿だった。

「キリト……」

サチのHPゲージが一気にイエローゾーンからレッドゾーン、そしてHPバーが弾け飛ぶ。何か言いたげな瞳をしたサチが次の言葉を発する暇もなく、彼女の体はポリゴンの欠片となって砕け散った。

「……………」

団長達はサチが消えたのに、なんの感情も現さずかさずキリトの方に武器を向ける。キリトはその動きをスローモーションのように見ながら、やけに頭がクリアになっていくのと同時に思考が閉じていくという不可思議な感覚に囚われて……

そして、次にキリトの意識が明瞭になった時、目の前に黒猫団のメンバーのアバターが倒れ伏し、ポリゴンの欠片になって霧散している最中だった。

「……………え？」

キリトはわけがわからずみんなのところへ駆け寄ろうとするが、仰向けに倒れていた団長の自分を見る目と発した言葉に動けなくなった。

「このビーターが……」

そのかつてと同じように呟かれた言葉を最後に、団長達は完全に砕け散る。

そして、その場には初めから何もなかったかのように、時折頬に当たる暖かい風と、揺れた木の葉と鳶の擦れる音のみが響く静寂が訪れた……

「痛みの森、第75ブロック」

スドーオン……

ボスMobが倒れ、最後の休憩所（アイテム屋と回復ポイント）がアクティブになる。

キリトは機械的に剣を背中の鞘にしまい、休憩所でレッドゾーンまで削れているHPとSPを回復し、少なくなっていたアイテムを上限まで補充した後、近くにあった壁に寄りかかり、座り込みそうになったが何とかこらえた。

（今座つたら、絶対もう立ちあがれない……）

「はあ、はあ……」

HPとSPバーはフルになったが、それでも息が切れ、体中から嫌な汗が流れては消えていく。

50ブロックから10ブロックごとに敵……というよりキリトの思い出したくない記憶から作りだされたらしい人物が立ちふさがってきた。

第60ブロックではキリトが初めて自分の意志で殺した血盟騎士団に所属していたクラディール、第70ブロックでは自分が討伐戦で恐怖に駆られて殺したラフ・コフのメンバー。

「やっぱダメだな、俺……」

壁に寄りかかりながら、シノンに以前いった言葉がキリトの脳裏

に蘇る。

『俺は俺が殺したあいつらのことから目を背けたり忘れてたりしちゃいけない。向き合って背負って行かなくちゃいけないんだ……』

（何が向き合うだ……何が背負うだ……！）

言葉では、気持ちでは決意していたはずだった。しかし、例えそれが幻か、あるいは非科学的だが幽霊だとしても、相手と実際に対峙したら自分はただ恐怖し、思考をふさぎ、倒すことしかできなかった……。

シノンは銃への恐怖をなんとかするためにGGOをプレイして、見事克服することができた。アスナも長年険悪だった母親との関係をALIOを切っ掛けとして改善することができた。

（俺は……俺はどうすればいいんだ……？）

その誰も答えてくれない問が頭の中でグルグル渦巻き消えない中、キリトは鉛のように重く感じる体を動かして次のブロックへと向かった。

## ―第80ブロック―

遺跡の中を爽やかな風が吹き抜けていく。上からは多い茂る木の枝の隙間から木漏れ日が差し込み、暖かな雰囲気とその場に作り出している。たぶん通常だったらそういう感覚が頭へと流し込まれ、ほっとした気持ちのいい気分になるんだろう。

しかし今、キリトはそのすべてがまったく感じられない。彼の目の前に、ある人物が立ちふさがっているから……

その人は、白髪交じりの黒髪に背は中肉中背、年はかなりの高齢だ。にもかかわらず、姿勢はしっかりして剣道着に身を包んだその体からは厳格で真っ直ぐな雰囲気キリトを圧迫する。

「じいちゃん……」

キリトはその人、自分の祖父を昔呼んでいたように呟いた。

.....

「きゃっ!?!」

和人は小さな体を道場の冷たい床にしたたかに打ち付け、痛みとともに涙がこみ上げてきそうになる。

「女みたいな声を出すな、この馬鹿者!」

竹刀を持ってキリトを見下している人、和人の祖父は厳しく一括して、早く立つように怒鳴りつける。

和人はふらふらしながらもなんとか立ち上がり、また竹刀を正面に構えた。

「よしつ、もう一度だ！」

祖父が和人の前に立ち、竹刀を丁度俺が打てる位置に構えた。その竹刀に向かって和人はまた竹刀を打ち付ける。かれこれこの練習をインターバルを挟ん1時間は続けている。10歳の体ではかなり厳しい。

そう、この光景はキリト、桐ヶ谷和人が10歳の時のものだ。和人はまだこのときは剣道が続けていた。仲が悪いわけではないがどこことなく自分を避けてる節がある祖父と唯一接点を持てるのが剣道だった。

なので、あまり好きではなかったが、キリトはこうしてよく祖父に稽古をつけてもらっていた。

「ああ、だめだだめだ……もういい、今日はここまでだ……」

祖父は竹刀を下し、ため息を一つついた。そして、その後の和人の運命を決定づける一言を呟いた。

「やはり、あやつの子だからか……」

和人が疲れた顔にきよとんつとした表情を浮かべると、祖父ははつとした表情になり、さつさとシャワーを浴びて着替えるようにと言い残して道場に一礼して去って行ってしまった。

和人がこの違和感を初めて持ったのはいつだったか彼自身はつきりとはわかっていない。物心ついた時からかもしれないし、もう少し後かもしれない。

しかし、確かに言えるのは前々から持っていたものであること。

母と仕事でよく出張に行っている父、そして妹の直葉と祖父……この家族の中で自分だけが異物である感覚。

祖父のあの言葉がきっかけでこの感覚が疑念から確信に変わった。祖父は家族のことをあやつなんて呼び方をしたことはなかった。そのことから、和人は前々から考えていたことを試してみることにした。

和人は小さい頃から母の影響でパソコンに興味を持ち、性に合っていたのかすぐに自分でパソコンを組み上げられるまでに精通するようになった。そして、ある時ネットの情報から住基ネットで自分の戸籍を調べる方法を知った。

本当はもつと前に調べることはできたが、彼はなんとなく躊躇っていた。今のキリトにはその理由がわかる。そう、恐れていたのだ。本当のことを知るのを……。

しかし、祖父の言葉をきっかけに調べてみた。この時点で和人は半分軽い気持ちだった。疑念はあったものの、まさかそれが本当だとはあまり考えられなかったから……。

そして実際調べてみると、そこには書き換えられたような不自然な点があった。

その後の展開はあまり多く語ることはない。和人が両親……義父と義母にかまをかけてみると、見事に引っ掛かった。二人とも和人が自力で調べてことに最初は驚いていたが、観念したのかすぐに説明をした。

和人の父と母は大学院時代に知り合い、在学中に母さんが彼を身籠ったことで結婚しようとするが祖父が猛烈に反対。それを押し切



って駆け落ち同然で家を出て、自分が生まれた。しかし和人が1歳の時に交通事故で二人とも死に、赤ん坊だった和人は母の妹である今の両親に引き取られた。

和人はその説明を淡々と聞きながら、特に何の感慨も浮かばず、ただ事実を受け入れた。

真実を知った後、祖父とも剣道をやめることで完璧に疎遠になった和人は、結局祖父が亡くなるまでまともに話しをできなかった。

- - - - -

そして、その祖父が……キリトにとって恐怖と自分が家族にとって異物であることを認識させられた存在である祖父が、目の前に立ちふさがるのは当然なのかもしれない。

たぶん、キリトにとってのトラウマ……心の傷ということ言えば二番目に古く深いものだ。

だが、今回現れた祖父には不可解な点があった。今まで現れた相手は自分の意識が戦う前と最中はなく、倒した後には彼らが実際に死んだ時と同じようにキリトを憎み呪うセリフを吐いて消えていった。

しかし、今キリトの目の前にいる彼の祖父にはきちんと意思が宿っているように見える。そしてその考えは祖父が彼に話しかけてきたことで証明された。

祖父は手に持っていた竹刀を地面に突き刺し、にやりと……そう、キリトがほとんど見たことのない笑顔で語りかけてきた。

「ひさしぶりだな、和人……いや、この世界ではキリトか？」

まるで生前の祖父が目の前にいるみたいだと、キリトが錯覚するほどに、精巧なまがい物……そのはずだった。

しかし、キリトの知っている祖父と少し様子が違った。彼の祖父は、キリト、いや、和人に微笑みけることなどほとんどなかった。

「まあお前と直葉すくはの記憶、それと様々な電子記録に残っているわしの事柄を参考に作りだしたそうだから、これくらいの再現度は当然じゃろう」

(俺の考えが読まれた……?)

キリトは警戒心を露わにする。

「お前は昔から読みやすい顔をしとるからな。それより和人、わたしはお前に言いたいことがあって化けて出てきた」

彼の祖父が皺だらけの顔に苦笑いを浮かべる。これも、キリトが今まで見たことのない表情だ。

「お、驚いてるか？まあ、お前の前ではあまり笑わなかったからな……つと、そんなことはどうでもいい」

老人は道着の袂から封筒を取り出す。

「今のわしは本物のわしではない。しかし、この手紙は生前のわしがしたためたものだ。ここに、わしがお前が大きくなった時に生きていなかっただら伝えたいことが書かれている。ちなみになぜそれがここにあるかは企業秘密だ」

好々爺といった感じになっているキリトの祖父は、悪戯っぽくウインクすると、また手紙を袂にしまった。

「まあ、本当はこの手紙を渡してわしは消えようかと思っておったんだが……」

祖父は地面に突き刺してあった竹刀を掴み構えた。

「ここでは相当な剣士として名を馳せとるんだろ、和人？わしに一撃でも喰らわすことができたなら、この手紙を読ませてやるう」

(な、ちよっ、何がどうなって……?)

キリトがこの予想外の話しにどう反応していいかわからず混乱している、祖父は不敵に笑って言い放った。

「キリトッ！お前の進んだ道の成果をわしに見せてみる！」

キリトの祖父と名乗る男はサツと左手を振り、メニューウィンドウを展開して操作する。

その直後、キリトの耳に電子音が響き、目の前に『一撃決着デュエルを申し込まれてます。受けますか？』というシステムメッセージが展開された。

ドンと構えて、来いという仕草をする祖父に、キリトは痛みの森に来てから最大の疑問符を頭の中で渦巻かせながら、反射的に受諾し、昔のように言われるがまま剣を構えて駆け出していた。

-----

「メエーーーーンッ！」

祖父の上段からの一撃が稲妻のように鋭く素早く振り下ろされる。キリトはそれを左手に持った剣で受け流そうとして……完全に力負けしそうな右手に持った剣を加えることで、なんとか弾き返すことができた。

(強い……！)

フルダイブ下の世界では脳の反応速度に加え、想像力が問われる。例えば、剣を振るにしてもどのように振れば効果的であるかを知っているのといかないのでは、イメージを作りこの世界でその動きを再現しようとするときの威力と完成度は段違いだ。さらに、それが現実で身に沁みこんでいるものならなおさらいい。剣道が続けている直葉がどスキル重視のALLOで上位プレイヤーの一角を成しているのがいい例だ。

さらに、この世界では現実の肉体と関係なしに力をふるうことができる。今再現されているキリトの祖父の姿は往年の年をとっているものだが、身体能力はThe Worldに合わされている。

そして、祖父の何十年もの研鑽された技術がそれを存分に使うことができる肉体と合わさると……

「反則だろ……これは!？」

キリトは何とか息を整えようと後ろに飛び下がって距離を取ろうとするのだが……

「ふんっ！あまいわあ！」

剣道のすり足でまさに滑るように間合いを瞬時に詰め、また剣戟の嵐が降り注ぐ。

（まずい……これじゃ、ジリ貧だ……！）

キリトは何とか防ぎながらも反撃の糸口を探そうと必死に相手の攻撃に集中する。どんどん意識が研ぎ澄まされ、広がっていく感覚。数々の茅場などの強敵、最近では最新型の 第四世代型実験機 を使用した時に現れたあの白銀の鴉と刃を交えた時に得られた至福の一時。

しかし、今得られている感情は今までの強敵と相對する喜びだけではない。

キリトが小さい頃練習をつけて貰っていた時の祖父はいつもどこかつらそうで、悲しそうで、怒っているわけではないけど少し苛立っている感じしかなかった。

しかし今、キリトは祖父と全力で戦っている。そして祖父の顔はどこか嬉しげで、満ち足りた表情だ。

そんなことを感じ考えながらも、キリトの戦闘に向いている部分の意識が何度も切り結ぶ中、祖父の微かな癖を見つけ出す。

剣道では珍しい二刀流を相手にしていることに起因するのかもしれないが、キリトが左手の剣を袈裟がけに振り下ろすと、ほぼ必ず少し後ろに下がって紙一重で避け、その後の右手の剣の一撃を竹刀で弾きとばし、無防備になった腹に蹴りや肘鉄などを喰らわせてくる。

キリトはさりげなくそのような状況になるようにして何回か確かめ、それが正しいと確信を得た。

(よし……次で決める！)

キリトは大きく後ろに飛び退り、そして今までと同じようにこちらに向かってくる祖父に対して今度は逆に一気に踏み込んで距離を詰める。

「むっ!?!」

祖父は一瞬キリトの行動をいぶかしむが、すぐに不敵な笑みお浮かべ、かかってこいという表情をする。

キリトは左手の剣を振りかぶり……そして祖父の道着を浅く切り裂いた。

「ほお……」

完璧に紙一重で見切っていたはずの剣先を見誤ったことに一瞬驚いた表情を見せた祖父だったが、すぐにキリトの剣の持ち方に気付いた。

そう、キリトは柄のぎりぎり先端部分を持ってリーチを少し長くしたので。

「しかし、今のふ抜けたのは一撃とは認められんぞ！」

祖父は言いながらキリトの第二撃である右手の剣が振り下ろされたのを余裕で弾こうとして……そしてその瞬間、その目は切り上げられている左手の剣に気付き驚愕に大きく開かれた。

「なっ! 蹴りあげたど!?!」

そう、キリトは振り下ろした左手に持った剣を思いつきり蹴り上げ、上下からの攻撃を繰り出したのだ。もしも全力で振り下ろされた剣なら、例えば仮想世界のアバターといえども蹴りあげ切る前にキリトの足は持たなかっただろう。

だが、柄の先を持って振り下ろした為にスピードはあるものの力がほとんど籠っていない。その力の籠っていない剣を怪しまれないようにするためにリーチを長くすることを目的としたように見せたのだ。

そしてその二筋の剣筋が祖父の体に吸い込まれていき……

「みごとだ……」

クリティカルヒットのエフェクトが祖父を包んだ。

-----

「それじゃあ、わしはそろそろ行くとするかの。直葉……いや、この世界ではリーファか、リーファによるしくの」

キリトの一撃が決まった後、手紙を渡した祖父は体からポリゴンの欠片を煌めかせながら消えかけていた。しかしその消えかけの体で立っている祖父はいつも見ていた厳格な雰囲気の中に、優しさが混じっているようにキリトは感じた。

「お、その前に……和人、お前は这个世界で色々あったみたいじゃが……」

その世界というのがここThe Worldだけではなく、SAOとALO、GGOも含んだ意味だというのがキリトは察する。

「まあ、なんだ……わしは偽物なわけだが……とにかく、本物のわしでも思っただろうことを言っておく」

その表情、少し照れたような顔も、キリトがこの世界で初めて見たものだった。

「わしはいつでもお前の味方だ……」

そう言い残し、キリトの祖父は完全に消えた。



痛みの森 - 02 - (後書き)

キリトの祖父のことはすべて自分の想像上のもので、原作には剣道をやめて疎遠になったとしか書かれていません。

ですが、キリトが剣道をやめた時期と桐ヶ谷夫妻が本当の親ではないことを知った時期が10歳で一致してるのと、ユウキが最後にアスナに伝えた言葉、キリトのある一面についての件から、いつかキリトの過去編が出てくるかなと思いい、先んじて妄想してみました。

ボーナスステージ - 実験場 -

- 認知外空間某所 -

「さて、これからどのような行動をとるかな……」

真っ白な空間の中、ぼつんと置かれているオフィスチェアに座る茅場は、目の前に展開されている多数のモニターの内の一つを見て呟いた。その画面の中央にはキリトの姿が映し出されている。

「このまま祖父からの手紙を読んで号泣、その後痛みを森を最後まで突破してクリア、仲間のところに戻ってめでたく現実に帰還というのが王道かな……？」

エンドロールに『主演：桐ヶ谷和人、監督：茅場明彦』とでもつけるか……などと考えながら、誰に言うでもない茅場の言葉が紡がれては何もない空間に吸い込まれていく。しかし、その特に何の感情も含まない声に次の瞬間いぶかしむような響きが含まれた。

「少し様子がおかしいな……？」

モニターにアップで映し出されているキリトは封筒を持ったままピクリとも動かない。先ほどまで祖父との再会を喜んでいたのは観測していたデータ上でも確認されている。

しかし、今のキリトからは何も読みとれない……どころか、ふと顔を上げたかと思うと、見えるはず……いや、存在すらしないが、もしカメラあるとしたらある場所、つまり、茅場の方を睨んだ。

そしてキリトは封筒を投げ捨てると、徐にメニューウィンドウを開き、何やら操作し、左目々にモノクル、右手に一本のナイフを取り出す。

「あれは、フリーゲルのモノクロにメトロノームのナイフか……？なるほどな……シックザールも中々面白い伏線を作ってくれる」

茅場が呟いている間にも、キリトはもしカメラが実在するならば、だるう場所に向かってナイフを投げつけた。

そしてナイフが空中で何かに当たり弾き飛ばされると同時に、大人一人が通れるくらいの真っ黒な穴がぽっかりと空く。

同時に茅場の脇に同じような穴が現れ始める。

「ふむ……別に痛みの森を飛ばしてここに来るのもそれはそれでありだが……。まあ、王道のつまらない展開に仕上がった礼は用意しなければな……」

茅場はそう呟くと、メニューウィンドウが目の前に自動的に現れ、何かのプログラムが打ち込む。すると、茅場の横に現れかけていた穴が瞬く間に消えていった。

「1名様ボーナスステージにご招待だ」

言葉づかいは裏腹にいつもの淡々とした調子で呟いた茅場は、モニターとメニューウィンドウを閉じ、またキリトの行動を観察し始めた。

- ??? -

「……………」

メトロノームのナイフが作った転送ポイントを通過してキリトが出たところは大規模な研究施設のような場所だった。無人なのか人の気配はせず、機械が出すブーンツという低い音だけがわずかに響いている。灯りがないため暗くてよく見えないが、いくつもの中身が曇っていて見えない大きなカプセルが標本のようにずらりと並べられているのがわかる。

少し歩くと、キリトは近くに端末があるのを見つけ、それを起動させた。

「一体、ここはなんなんだ……？」

端末のモニターが放つ明かりでぼんやりと顔を照らされながら、目の前に展開されたウィンド上の多数の項目に目を走らせる。とりあえずその中の、カテゴリーというところを選択する。

「SAO……これは名簿……？」

SAOと言う項目に目を引かれ開いたキリトがそれをさらに選択すると、一覧が現れそこには以下のような名前が書かれていた。

最終生存者数：XXXXXX

75層攻略パーティ：ヒースクリフ、キリト、アスナ、エギル、

クライン……

生存者リスト……サーシャ……シリカ、シンカー……リズベツト……

死亡者リスト……クラディール……ケイタ……サチ……

「これは……SAOのログ？」

試しに自分の名前を選択してみると……

「俺だ……」

目の前の大きなカプセルの内の一つが急にクリアになり、そしてその中にはSAO時代のキリトが、いや、正確には和人のアバターが浮かんでいた。

「……ん、これは……？」

さらにそのページを見てみると、ある項目が点滅しているのが目に入り、試しに開けてみる。

「Experience - 2011114514141991125  
1521115205919514 (Case - Kirito) ……  
…実験？一体何の……？」

キリトは数える気さえ起きないほどずらりと並んだ一覧の中の一つを試しに開いてみた。

すると……

「な、なんだ……って、わぁー！ー！？」

キリトは瞬く間にウィンドウの中に引きずり込まれ、そして後にはずらりと並ぶカプセルと無人の端末だけが残された。

・アンダーワールド・人界・

ゴブリン達等五氏族が住む暗黒界に囲まれるように存在する人間が住む人界、そこは以前は人間と五氏族間で絶え間ない争いが続いていたが、ある青年とその仲間たちの活躍により、長きに渡った戦争は終結。今では暗黒界とも和平を結んでおり、比較的平和な日々が続いている……

「ぱりぱり、ぱりぱり……じくじく……」

そんな映画のようなナレーションの文を目の前に広がる世界の光景と一緒に見ながら、キリトはリクライニングシートに座ってくつろいでいた。

・ 隠されし 禁断の 意馬心猿 糖蜜の館シフ・ベルグ ・

ロストグラウンドの内のひとつ、糖蜜の館シフ・ベルグには膨大な量の書物が収められている。そしてそこには劇場も併設されている。この劇場も例に漏れず、普通の劇場や映画館と同じように中は

明かりが消えて薄暗くなっている。

キリトはその中世のオペラ劇場のような様式をした建物の中、まったくその場の雰囲気と合っていないコーラを片手にポップコーンを食いながらリクライニングシートに座って眼下で繰り広げられている戦闘を見物していた。

いや、させられていた……？

疑問符がつくのは、キリトがいつ、どのように、そしていつたいなぜ自分がこうしているのか全くもって見当がつかないからだっただけ。しかも、このような不可解な状況に叩き込まれながらも、キリトの無意識のところでは状況を受け入れていた。意識的には違和感があるのに、無意識では受け入れていて、頭の中で歯車が噛み合っていない状態。

しかし、そこはキリト。思考がこんがりながらも、持ち前の妙な楽天さでそこそこリラックスして座っていたのだが……

「隣、いい？」

一応警戒していたのに全く気配のしななかった方から急に話しかけられたキリトは、少し驚いて横を向くと、短い黒枝のようなものを持った小柄な猫型PCがちょこんと立っていた。

「ん、まあ別にいいけど」

キリトは驚いたことなどなかったように、そして今置かれている状況に困惑しているのを悟られないようにポーカーフェイスで、どうぞご自由にといい風な身振りをすると、そのネコ型PCはキリト

の隣の椅子にひょいっと飛び乗って座った。

「キャラメル味だけど、食べる？」

「おっ、サンキュ。じゃあ、こっちの塩味もどうぞ」

眼下に広がる世界の光景を見ながらお互いにポップコーンを交換してポリポリと食べ続けること数十秒、キリトは痺れを切らして尋ねた。

「で、キミは誰なわけ？」

キリトがいつでも動けるように、しかしあまり相手を威圧しないように軽い感じで聞く。

「ボク？ボクはハーミット。職業は……カヤバの助手かな。認知外空間にあるカヤバの実験場の手伝いをしてるよ。キミはキリトでいいんだよね？」

「ああ、そうだけど……キミは、ハーミットは茅場の助手ってことは俺に何か伝えに来たんじゃないのか？」

言葉を慎重に選びながら尋ねようと思ってもつい本題に一直線に行ってしまうそうになるのを抑えながら、キリトは苦笑と共に尋ねた。

「まあそうなんだけど……それより今ボクかなり暇だし、おしゃべりに付き合っつてよ。ついでにこの世界の情報も教えるからさ。とりあえず、ボクのことについてかな……」

キリトが肯定する間もなくさっさとメニューウィンドウを開いて眼下に映し出されていた世界の情景を消す。天井の暖色系の明かり



がついてあたりを照らすと、タロットカードの隠者の名を持つハーミットの毛並みがミアのように紫色なのがわかった。

「それじゃ、始まるよ」

その言葉と同時にまたあたりがまた暗くなり、キリトの眼下に、新たにどこかの現実の世界の風景が現れた。

- 30分後 -

「なるほど、ソウルジェイルに囚えている囚人の脳を利用した量子型コンピューターの作成か……やっぱりぶつとんでるな、このゲーム……」

キリトが驚きを通り越して呆れていると、ハーミットも同意して頷いた。

「このゲームはゲームであってゲームでないを地でいってるし……まあそのおかげで現実のボクは蘇生できたみたいだけど」

そう、今キリトが見てきたシーンの中でハーミットの元になった少年がサクヤという少女から無事移植してもらい、さらに冷凍睡眠ワールドスリーフ時に起こる記憶障害もThe Worldに保存しておいたハーミットの記憶で補填することにより何とか回復していた。

回想の中にはサクヤのリアルリアルの少女とハーミットのリアルリアルの少年が病院で抱き合って喜んでいるシーンもあった。そのとき、自分の

隣に座っていたハーミットの表情は嬉しそうで、でも寂しそうな  
んとも言えない複雑な表情をしていたのをキリトは見ていた。

「でも、なんでChronicle of Auraでハーミット  
達のことを書かれていなかったんだ？アウラはこの世界の神なわけ  
だから、すべてを知ってなくちゃおかしいだろ？」

キリトがもつともな疑問を口にした。

「トキオ達がアウラを救ったとき、彼女は記憶と力を失っちゃった  
んだ。アカシャ盤は残ったからそれ以前のデータはあるけど、その  
後の記憶や記録は外部からのものしかなくて、サクヤ達の記録もま  
だりカバリー中で補填できてないんだ」

（だから、別のカイト似の少女のことも出てこなかったってことが  
……）

どうやらカイト似の少女が活躍したのはハーミット達の事件以降  
のことらしいので、大聖堂で見たものと同様に映画のように編集さ  
れた（BGMやSEまで派手についていた）今回の回想にも出てこ  
なかった。

「で、ここはいったい何なんだ？実験場とか呼んでたけど？」

「文字どおりだよ。この世界にはたくさん実験場があつてここはそ  
の内の一つ。で、ここでは主に様々なシュミレーションをやってる  
んだ」

「シュミレーション？」

「そう。例えば、もしあの物語の登場人物が別の物語の登場人物と  
戦ったらどうなるとか、別の時代を生きたスポーツ選手が競ったら  
どうなるとかそんなことをね。キリトが見てたのは……君を主役に  
したとある世界の話しだね。まあ、ここには様々なプレイヤー達の

情報がザ・シードに組み込まれたカーディナルから送られてくるから、そういうデータを運用した実験も結構あるよ」

ログを見ながらハーミットはTVのリモコンのようなものをアイテムポーチから取り出した。

そして、ハーミットがリモコンを操作すると、目の前の劇場に広がる光景が次々に変わっていく。

髪を真紅に輝かせる少女と黒色の炎を身に宿した鎧姿の少年の戦い。

バーテンドー服姿でサングラスをかけた男の、人とは思えないような力を振るう強烈な光景。

現実ではまず見られないような制服を着た少年が銃型の何かを持ち、圧倒的な力を振るう場面。

三人の少年がお互いの守りたい人や世界を守るために必然のように偶然出会った瞬間。

青年の神と呼ばれ、崇められ、縛られていた少女に対する彼らしい決意の言葉。

不死者もそうでないものもいつしよくたになって行われるバカ騒ぎ。

金獅子の外装に身を包まれた男と、青と白で彩られた鎧を身に纏う男の激しいぶつかり合い等々……

それらが無秩序に流される中、キリトは最後の質問をした。

「じゃあ、最後に茅場の居場所を教えてください」

その質問に対してハーミットが腕を組んで顔をうつむかせてうんんと唸っているのをキリトが神妙な面持ちで待っていると、ハーミットはいきなり顔をバツと上げ、あっさり

「いいよ」

という言葉と共に劇場にあった光景を消し去り、キリトに手のひらかららのサイズのカードを手渡す。

「それをメニューウィンドウを開く要領で横にさっと撫でれば、茅場のところに転送されるよ」

「そっか、ありがとな」

キリトが短く礼を言うと、ハーミットは別に……と、咳きながら椅子から飛び降りた。

「それじゃ、またどこかであえたら」

キリトがその言葉に答える暇もなく、ハーミットは青いリングに包まれて転送していつてしまった。

「……………」

キリトはその後肘を膝の上に乗せ、手を顎に持っていき考える人のようなポーズを少しばかりとっていたが、意を決して立ち上がり、カードを横にすつと撫でた。

ブーン

キリトの体の周りに青いリングが現れ、瞬時に転送されていった。

ボーナスステージ - 実験場 - (後書き)

キリトがシフ・ベルグで見ていた世界は川原礫先生が運営されているサイト、WordGear掲載されている外伝、『月の揺りかご』(未完)のものです。

この外伝を読んだ時、いくつかの状況が頭の中に浮かびましたが、今作ではキリトを模倣したAIを主人公とした実験世界という設定にしています。

視界から転送中に流れる幾何学模様の渦が消えると、キリトの目の前には真っ白な、見渡す限りどこまでも真っ白い空間が広がっていた。

ところどころに意味があるようではなさそうな、ガラクタのようで大切そうなものが疎らに置かれていなければどこが地面なのか、上か下なのか分からなくなりそうな場所。

そして、キリトが静かに歩きながら周りをぐるりと見渡していると、ふと古ぼけたアンティークの姿見が目に入り、そこに映っていた姿に息を止める。

「俺………?」

そこに映っているのはまぎれもなくキリトだ。

しかし、それはALOの勝気な少年姿ではなく、線が細く、少女にも見えるナイーブな感じの少年、SAO時代のキリトのアバターが映し出されていたのだ。

そこで初めて、キリトは自分の背にかつてアインクラッドと共に駆け抜けた漆黒の剣、エリシユデータと白銀に輝く、ダークリパルサーがあることに気付いた。

(だけど、何か違う………?)

最初は完全にSAO時代のキリトの姿に見えたが、よくよく見ると、細部が若干ALOやGGO、そして成長した現実の姿の面影を取り込んでいる。

そのことに、キリトは一瞬思案げな顔をしたが、すぐに振りきる

よつにさらに前に進む。

すると、少し行ったところで話し声が聞こえてきた。

「……何、もうキリトは転送済み？もう少し待たせておけと言っただろうが！まだ準備は終わっていないというのに……」

これまた価値の高そうなアンティークの西洋人形がその道の人が見たらたぶん卒倒するだろうように無造作に杜撰に積まれた先に、茅場がモニター越しのハーミットと話しているのが見えた。

キリトが話しかけるべきかどうか少し迷っていると、キリトの姿に気づいたハーミットがモニターの中で悪戯っぽく笑っているのに気が付いた茅場が椅子を回転させて体ごと後ろを振り返り……先ほど自分の容姿の変化で驚いた以上に予想外の光景に、キリトの口は顎が外れんばかりにあんぐりと開いた。

「久しぶりだな、キリト君。ようこそ、世界の狭間に」

先ほどまでの慌てようが嘘のようになりを潜めていつもの無機質な表情で淡々と歓迎の言葉を口にした茅場……まあそれは別におかしくない。

ただ……

「かつ、茅場！？何だ、その恰好……？」

そう、茅場の恰好がなんとというか昭和の悪役のような頭に巨大な角付の兜、髑髏を象った禍々しい造形をした鎧、その上から漆黒のマントをはおい、そして膝の上には丸々太った猫を乗せているとい

ういでたちだったのだ。

「っと、これではなかった……」

茅場は少し慌てたようにそそくさとメニューウィンドウを開きさつと操作すると、旧アインクラッド崩壊間際に見せたリアル白衣姿になった。

「これでよし……それでは改めて、ようこそ、世界の狭間に！」

仕切り直しとばかりに、珍しく少し語彙を強め、両手を広げて高らかに言った。

「……とりあえずいろいろ聞きたいことがあったわけだけど、まずさっきの服装がなんなのか教えてくれ……」

キリトがどつと疲れが出たような顔をしながら尋ねると、茅場はしれっとそれに答える。

「あれは100層まで昇り詰めたプレイヤーと対峙する時着ようと思っていた服の案のうちの一つだ。他にも大魔王風、策士風など色々取り揃えていたのだが……まあ君のおかげで日の目を見ることはなかったがな」

最後のほうだけ若干皮肉を込めて話し終えた茅場は、そんなことはどうでもいいというように手を振ると、椅子から立ち上がりキリトをじつと見る。

「それよりこちらからも聞きたいことがある。まず最初に、この件にシックザールがどの程度からんでいるのかと、君がどの程度の情



報を知らされているかだ」

茅場の全てを見透かしているような物言いに、キリトは少し考えを巡らせ、そして数少ない持ち札を晒すことにした。

アイテムポーチから、ここに来るまで使ったメトロノームのナイフやフリーゲルから借りていたモノクルを取り出す。

「フリーゲルからは 神槍ヴォータン 回収の後に訪ねてきて、あんたの狙いを探るよう依頼された。その代りに色々アイテムやプロテクトを融通してもらっただけだ。もっとも、あいつらのことだから俺のことをトレースしてるだろうし、この場所が特定されるのも時間の問題だと思うけどな……」

「なるほど……彼らも舞台に立つ役者として場を大いに盛り上げてくれているようだ。ところで、懐かしの面々との再会はどうだったかな？」

世間話でもするかのような軽さで尋ねてきた茅場に、キリトは今までの腹の探り合いで冷静にしようと努めていた頭に一気に湧き上がってきた煮えくりかえるような怒りをなんとか内に閉じ込め、溜息を一つ付いて短く答える。

「偽物にしては、中々よくできてたと思うぜ」

(これ以上言葉を続けると、罵詈雑言が溢れ出てくる……)

短く言い捨てたキリトに対し、茅場は特に表情を変えず話し続ける。

「……偽物か。確かに彼らはこの世界で生まれたAIだ。しかし、それでも彼らの……特に君の祖父の想いは本物だ」

茅場はそう言ながら手を横に振ると、虚空から白い封筒を取り出した。そう、それは……

「じゃあ、それも本物だつていうのか……？ 祖父はパソコンなんかほとんど使えなかったから、メールとかではないはずだけど？」

キリトは感情を律するのがそろそろ限界に近づくのを感じながら、それでも平静を装って尋ねた。

「そうだ。これは生前君の祖父が現実でしたためのものを再現したものだ」

「そんなこと、できるわけないだろ。それより、本題に入らせてもらうぜ」

キリトはこれ以上の問答に耐えきれず強引に話しの主導権を奪い取り、そして焦る表情を何とか隠そうとポーカーフェイスで尋ねた。

「俺がここに来た理由はわかってるんだろ……？」

「理由か。検討はついているが……しかしそれならなぜ最後まで痛みをクリアしなかった？ 君の知りたいことは……」

茅場は言いながらさつと手を振り、傍らに巨大なモニターを出した。そしてそこに映っていたのは……

「なぜ君の両親が死んだかだろう？」

そこにはキリト、桐ヶ谷和人の両親が、彼が写真でしか見たことのない本当の両親が、血まみれになって道に倒れている姿が映し出されていた。

「君の両親の死の理由は車の運転ミスによる事故死とされているが、確かに妙な点が多い。明らかに事件の情報を意図的にもみ消そうとしているな」

キリトには淡々と一定のスピードで話す茅場の声が遙か遠くからしゃべっているように聞こえた。モニターに両親の姿が、血まみれでどこどころ体の部位がおかしな方向に曲がっている姿が映った瞬間、キリトは叫びだしたい衝動にかられたが、喉まで出かかったところでなんとか気力を絞り出してねじ伏せ、俯いて少し呼吸を整えた後茅場の方に顔を向けた。

「そつだ、俺の両親は事故死ってことになってる。でも、事件のことを調べようとすると妙に情報が消されていたりしているから個人では調べられなかった。だけどここならどの機密情報だろうがお構いなしに調べられるはずだ」

「おいおい、ここはThe World、ただのゲームの世界……」

茅場が呆れているようで、しかし少し期待を含ませた表情で話したそうとしたのをキリトは遮り話し続けた。

「違う、ここって意味はThe Worldのことじゃない。今The Worldがある場所のことだ……」

キリトは深く一呼吸して、ここに来た目的のうちの一つである質問をした。

「茅場、ここはいつたいたいどこなんだ？」

「どこ、という意味は？」

茅場がまるで正誤を表情から出さないためかのようにまた無機質な表情に戻って、質問に質問で返す。

「さっきの実験場ってのを見た時点で確信した。ここは明らかにおかしい」

「おかしいというのはこのゲームにとっては常套句なのだがな」

フツとため息をつきながら微妙に苦笑いのような表情をした茅場に向かってキリトは自分の考えを話し続ける。

「このゲームがじゃない、このゲームを支えている環境がだ。このゲームの規模、数多くのユイクラスの……いや、それ以上に精巧なAI達、そしてさっきの実験場にあったSAOのバックアップデータに加えて、一人一人の正確なデータ、さらには大規模なシミュレーションが数えられないほど同時進行できるようなキャパシティがあるものなんて並大抵じゃない」

そう、通常のVRMMOでさえある程度の容量のあるサーバーを必要とする（それでも、ザ・シードのおかげで以前よりは断然ましになったが）それがこんな人間と同じくらい……いや、もしかしたらそれ以上の性能のAIだらけの世界を維持するにはどれだけのものが必要なのか、見当がつかない。

ただし……

「もしさっきのハーミットが見せてくれた人間の脳を大量に使った量子コンピュータを使えば維持できるかもしれない」



キリトは自分が笑われたことより茅場が大声を上げて笑っていることのほうに少し驚きながら、何が起こっても対処可能なように身構える。

「いやあ、すまない。今の答えはだいたい60点といったところだが、数少ないヒントを辿って予想通り中々いい線をいっていきたくれて嬉しかったのと、その自分の目的のためなら何でもするという真っ直ぐに研ぎ澄まされた決意が昔の自分を見ているようでな……」

その目的というのがSAOのことなのかキリトにはわからなかったが、茅場がどこか懐かしそうな顔をして目の前の俺を通り越してどこか遠くの、もう届くことはないところに思いを馳せている表情を一瞬浮かべるのを見て取った。

その後打って変わって気軽そうな表情になった茅場は、顎をなでながらキリトに尋ねる。

「まあつまり、君は私のことが信用できないし、自分の問題に上からゼウス・エクス・マキナ気取りで回答を与えられるのは気に食わないから、戦って勝ち取りたいということでもいいのかな？」

「まあそんなところだ」

キリトは答えながら、剣を握っている両手にに力を込める。

「なら……そうだな、私に一太刀入れることに質問に一つ答えることにしよう。それなら勝ち取ったことになるだろ？」

茅場は言いながらメニューウィンドウを操作し、茅場の体を光が包み、消えるとそこにはSAOでキリトと最後の死闘を演じた血盟騎士団のヒースクリフが自然体で立っていた。

目を開いたヒースクリフは左手に装備した巨大な純白の十字の盾から剣を引き抜き、構える。

「ずいぶん気前がいいじゃないか。で、俺が勝つたらどうしてくれるんだ？」

「その時はすべてに答えよう。ここも好きにするといい」

そう言いながら、茅場はメニューウィンドウに手を滑らせる。

「さらに私のステータスを君の総合値と同等にした。これで、条件は完全にイーブンだ。戦績は今のところ1勝1敗……これでどちらが上か決まる」

普段ほとんど感情を見せなかった茅場は今明らかに楽しそうにしている。

そしてかくいうキリトも、自分の知りたい情報を得るためという理由付けはあるにしても、やはり茅場との決着ははつきりつけたかったという気持ちも大きかった（1勝したといっても、アスナに助けられたものだし……）

構えてから睨み合いが続くこと数秒、その数秒が何時間、何日も感じられ、いつまでも無限に続くように思われた。しかし、近くにうず高く積み重ねていた本が何かの拍子で崩れ落ちた瞬間、緊張をはらんだ静寂は、交差する剣が紡ぎだした金属と金属がぶつかり合う鈍い音で破られた。

-----

.....

(スゴイ……)

キリトは戸惑いを感じるほど良く動く体を駆って茅場と刃を交えていた。

今まで、どれほどの加速感、世界を置き去りにするかのようない絶対的な速さを感じても、それに自分がVRワールド内で己の体として操るアバターが完全についてくることはなかった。

そう、例えばどれだけ思考や反応速度が早かろうと、自分の脳とアバターの間に ナーブギア や アミュスファイア 等のインターフェイスがある限り、100%追従されることはない。

しかし……

(これは、いったい……?)

そう、今キリトは、かつてアインクラッドで魂を預けた体をありえないほど思うがままに操っていた。それはまるで、アバターと魂の境界線がなくなり、己の魂がアバターの形をとり、剣を振るっているかのような感覚……

かつて、自分が見てきた領域が、今では色褪せて見える。

普通なら、ここでキリトは一つの巨大な壁が崩れ、新たに目の前に広がる光景に歓喜を覚えるはずだった。

だが……



「くっ！」

キリトは後ろに下がりながら無詠唱で炎の塊を茅場に叩きつける。しかし、茅場はまるで蠅でも払うかのように剣で火球をかき消す。

「ふうーっ……」

それでも、わずかにできた間を呼吸を整えるのに使うことができたキリトは、文字通り最後の特攻をしかける。

「はあああっ！」

キリトは茅場に向かって正面から突っ込むように見せかけて、上空へ大ジャンプする。

「またそれか……」

茅場はキリトを仰ぎ見ながら、諦めたような表情をしている。競い合うどころか、この勝負をこれ以上楽しむことすら……！

（ふざけるなよ！）

キリトは心の中で雄叫びをあげ、SAOのアバターには無いはずの翼を展開する。

ちなみに、通常飛んでいる時は2種類の力を使うことでSPを消費する。上空に留まるうとする力と、上下左右へ移動する力だ。この両方を使っていると、あっという間にSPは無くなってしまふ。しかし、例えば落下している最中に一瞬、軌道を変えたりスピード

を上げたりする分には1試合分の間くらいは何回か使える。

キリトはA.L.Oで培った空中戦闘エアレイドの経験をフルに動員して、小刻みに軌道を変えながら重力の力も借り、ほぼ真つ直ぐ茅場に向かって切り込んでいく。

「ラアアアアアッ！」

キリトは幾度かの方向転換の末に、やや右上から突っ込んでいたが、最後の最後でさらに角度を深く変え、一度茅場の少し上を通り過ぎる形になる。予想より鋭い角度でキリトに通過された茅場は迎撃に向かっていた盾の軌道を変えねばならず、ほんの少し無理な体勢になり僅かに勢いが鈍った盾をキリトは紙一重のところ躲す。

(いける！)

キリトは最後に残ったSPを使い空中で急停止、そして体を擦じるように回転させ、茅場のガラ空きのわき腹に渾身の一撃を叩き込んだ！……がつ！？

「なっ！？」

キリトの剣は茅場の剣で完璧に弾かれていた。

(バカなっ！あの体勢で剣が振れるはず……まさか……？)

そう、キリトの予測では、盾の一撃は自分を僅かだがかすめていたはずなのだ。それを紙一重とはいえ完全に回避できたということ  
は……

(わざと外すことで俺の一撃を迎撃できる体勢にもちこんだ……？  
だけど、そんなことが……？それに、そもそもあの体勢で反撃でき  
るなんて……)

キリトの頭は混乱して疑問符で一杯になりながらも、体の方は地  
面に足をつくと同時に反射的にもう半回転し、こんどはさらに勢い  
のついたもう片方の剣で二撃目を喰らわせようとしたが……

「がはっ!？」

剣が振りきられる前に、キリトは茅場の強烈な蹴りを喰らい、地  
面に転がされた。

「はあ、はあ、はあ……」

なんとか立ち上がったキリトだったが、次の瞬間がくんと膝が  
自分の意志とは無関係に折れ、地面に片膝を突く形になり、そのま  
ま倒れこみそうになるのを何とか剣を地面に突き立てて防ぐ。

「化け物……があ……!」

「どうした、もう終わりかね？」

キリトの目の前に悠然と立っている茅場はつまらなそうに呟く。

「ふざ……けるなっ!」

キリトは渾身の力で立ち上がり、しかしその後の行動に移ろうと  
しても体に力が入らず、その場に立っているのがやっとだった。

「ふむ……やはり今の私とキリト君では実力が違いすぎるか……仕

方ない」

言いたい放題の茅場に何か言い返してやりたいキリトだったが、実際に手も足も出ない状態なので沈黙を貫くしかなかった。

そう、戦いの火蓋が切られてから約5分、キリトの攻撃が茅場をとらえたのはわずか2回、それもキリトが必死に伏線やフェイク、攻撃を積み重ねて作ったどうしても避け切れない状況でのもので、それでもわずかに掠めただけで茅場のHPバーは数ドットしか削れていない。

逆にキリトの方はというと、茅場の以前戦ったときとは比べ物にならないほどの本当の意味での神業の大盤振る舞いにより、残りHPが半分を切ってオレンジゾーンに入っている。

さらに驚くべきことに、茅場はシステムアシスト、闘技場で初めて戦ったときに使ったシステムの介入による通常ではありえない動き、を一度も使っていない。つまり、純粋な実力で圧倒されているということだ。

まるで、数百年の隔壁があるかのような……？

ここで、キリトはある絶望的な可能性を思い当たった。

「まさか……？」

「気づいたかね？そう、私が新たに作り出した現実の時間を何倍にも引き伸ばすことができる世界、仮に加速世界<sup>アクセルワールド</sup>とでも名づけるか……。それができてから、私は果てしないほどの時間を使って修業し、今の境地に至った」

そう言いながら、戦いの最中だというのにメニューウィンドウを

開いた茅場は、頭上に多数のモニターを展開する。

そこには、多種多様、現実空想問わない戦士達と戦っているヒー  
スクリフの姿があった。

(ありえない、だろ……)

よく、経験だけでは覆せない壁というものがあると言われるが、  
それは100年ほどしか生きられない現実でのことだ。もし、数千  
年分の研鑽を、老いることも死ぬこともない最高の体<sup>アバター</sup>でしていたら  
……

元々紙一重だった茅場とキリトの実力は、たった数年の月日で、  
まさに天と地ほど離れてしまっていた。

「しかしこのままではつまらない……というか当初の目的を達成で  
きない。というわけで、今のところキリト君が私に当てることで  
きた回数は2回、ここでひとつ、君の力を引き出すであろう情報を  
2つ教えてやるう」

「だれがそんな情けを……っぐ!？」

「人が話をしているときは静かにするものだ」

茅場が手をスツと横に振ると同時に、何もないとところから鎖が伸  
び、キリトの体を数本は貫き縫いとめ、また何本かは手足を絡め捕  
り拘束した。初めは襲い掛かってくるであろう激しい痛みを覚悟し  
たキリトだったが、その鎖はどうやら拘束目的のものらしくまった  
く痛みを感じない。

さらに注意して見てみると、鎖にはskewithやInnisの文  
字が刻まれており、鎖の合計数は8本だった。

「モルガナが幼き頃のアウラを縛っていた鎖だ。この世界では何者

も破ることはできない」

茅場は言いながら頭上のモニターに別の、一人の少年の姿を映し出した。その少年は背格好から中学生ぐらいに見える。そして彼は姿や雰囲気から察して、どうやら茅場の若いころの姿のようだ。

「旧アインクラッドが消えるとき、君はなぜ私がSAOをデスゲームにしたか聞いたな……？私はそれに対して、空に浮かぶ城に行ってみたかったと、確か答えたな？」

モニターがさらに切り替わり、そこには先ほどの茅場の姿と、そして現実ではありえない光景、蒼空に逆さまに浮かぶ城（いや都市といったほうがいいのかもしいれない）が目の前にあった。

「あれは……逆城都市……？」

（たしかChronicle of Auraに出てきた司達がKey of the Twilightを求めて行ったところだ。でもなんで……？）

「なんでリアルのアンタがあそこに……はっ、まさか……！？」

ここまでの道中で何度も驚かされたキリトだったが、この事実が最大級のものだった。

「そう、私は子供のころ、リアルデジタルライズした……。と、いうより、イモータルダスクに巻き込まれたことがある」

茅場は十字架のような盾に剣を収め、そして自らの過去を語りだした。

「私の両親は私が幼い頃死んだが、幸い多額の遺産と保険金を残してしてくれたので、十分生活でき、祖父母が亡くなるまで私の面倒を見てくれた」

自分の両親のことをまるで他人事のように淡々と話している茅場の目はいつもの感情を含まない無機質なものであった。

「まあとくに不自由なく暮らしていた私は、主に理系が得意でパソコンやネット、その他色々調べて精通していたわけだが、それでもその頃はごく普通の理系オタク程度だったと言えるだろう。しかし……」

茅場はここで一旦言葉を切り、モニターを見る。

「私はある時、たまたまサイバーコネクCC社、The Worldを運営していた企業だが、その前を通ったとき、イモータルダスクに巻き込まれてしまった」

次々と切り替わるモニターに、CC社と書かれた巨大なビルや、当時の監視カメラの映像なのか人が消えて行く姿が映し出されている。普通に見せられれば映画の1シーンぐらいにしか思えないだろうが（というか事実を知っていても未だに信じがたい……）これは紛れもなく現実に起こったことなのだろう。

「そこで体験したことは、はっきり言って圧倒的だった。五感のすべてが……いや、未知の第6感を含めて全ての感覚がまるで今まで使われていなかったかのような新鮮さだった。しかしその感覚もわずかな時間だけで終わり、すぐに現実に戻されてしまったがね……」

キリトは茅場の長話のおかげで幾分体力と精神力が回復しているのを感じながら、今は茅場の話の行く末に集中することにした。

「その後はあの世界にもう一度近づくため、色々調べ、学び、研究していき……最終的に今のThe Worldに至るにはある環境と条件、つまりSAOとデスゲームが必要だということになったというわけだ」

「最後の方はデカくはしよったな」

キリトがなんとか苦笑を浮かべて言うと、茅場は簡潔に答えてきた。

「最後のほうを詳しく話すと、知りたいことの2つ目を話してしまうことになるからな」

「じゃあ2つ目は何を教えてくれるんだ？」

キリトが軽い調子で聞きながら、息が整ってきてかなりましな状態に戻ってきているのを感じ、鎖をなんとかできないかと思案する。

「君の両親の死の理由だ」

「……………それは、俺が自分で……………」

拘束のことを一瞬忘れ、キリトが反論しようとするのを茅場は遮る。

「今の君にはこの事実しか発火剤になりえない。自分で調べたいなら私を倒してから改めて確認の為に調べればいいだろう？」

キリトが沈黙を保っていると、それを了承と取ったらしい茅場が



話を続ける。

「さて、なぜ私がわざわざ私の過去の話をしたかということ、それが君の両親の死の真相にも繋がるからだ」

「繋がる……？……まさか!？」

キリトはモニターに映っているイモータルダスクによる惨状を愕然としながら見つめる。

「そう、君と君の両親はCC社が行った最後のイモータルダスクに巻き込まれ、一時的にThe Worldの中に飛ばされ、そして戻ってきた時に運悪く交通事故にあった」

モニターが切り替わり、監視カメラが何かの映像なのか、赤ん坊の和人と両親が突然虚空から現れ、走っている車にぶつかりそうになった瞬間、父さんが母さんを突き飛ばし、車に跳ね飛ばされるシーンが少し荒れた画像のムービーで流される。突き飛ばされた母さんも車に掠ってかなりの距離を吹き飛ばされ、頭から血がどくどくと流れているが見える。

そしてその血が瀕死の状態になってもしつかりと抱きかかえている赤ん坊の和人の頭にどろどろと垂れてきて……

視界が赤く……いや、黒く染まっていった……

「ぐっ……!？」

その映像を見た瞬間、まるでそれを今じかに体験しているような感覚にキリトは襲われた。そしてその直後、頭と胸がどくどくと脈打つかのように激しく痛みだし、体中から力が抜けていき、逆に何かが体の内を駆け巡る感覚に襲われる。

剣が手から離れ真つ白な地面にからんっ……と物悲しい音をたてるのを遠くのことのように聞きながら、前のめりに倒れ伏しそうになったキリトだったが、体を拘束している鎖により操り人形のように体がだらんと支えられる。

「君は黒に固執しているようだが……それは多分、この時の血の色を心の奥底で覚えているからだろうな」

茅場の声がまるで遙か天上から話しかけられているようにキリトの耳にわずかに響く。

「君の心の傷は、この時のものが一番深いはずだ。そしてその傷は、この世界では大きな力となりうる」

茅場の言葉に『力』という単語が入ったのを耳にした瞬間、なぜかその言葉だけが頭の中を駆け巡った。まるで、無秩序に体の中を巡っていた黒いものが、一つの方向性を得たかのように。

キリトは暴れるそれを押さえつけるように短く呼吸をしながら、何とか言葉を絞り出す。

「で、それが何だっというんだ……？」

キリトの無理やり作ったポーカーフェイスに対し、茅場は少し思案気な表情をする。

「ふう、君の精神力には驚嘆させられる。まあ、それでこそ選んだのだが……。できれば、この手はあまり使いたくなかったんだが……」

そう言って、茅場はメニューウィンドウを操作すると、辺りの白い空間がブレ、一瞬にして鬱そうとした暗い森に変わった。

『君は、自分がどれほど弱いか自覚しているか？』

目の前から姿を消した茅場の声が耳に響き、キリトは顔をしかめるも、鎖で雁字搦めにされて動けない今、辺りの様子を伺っている  
と……

「……って……」

キリトの記憶に焼き付けられた風景、そう、その場所は旧アインクラッド第1層の森 だった。

そして、霞んでいたはずの目がクリアになっていることを自覚しないまま、キリトは目の前の光景に釘付けになっていた。

「俺………？」

そう、そこには初期装備に毛が生えた程度のキリトが、大量に発生しているMobの大群相手にバーサーカーのように孤軍奮闘していたのだ。

『もし、君に少し運が足りなかったら、こうなっていた』

茅場の声が響くと同時に、キリトの振るった剣が耐久値を超えたのか、砕け散る。

そして、次の瞬間無手になったキリトのアバターは、あつという間に触手に貫かれ、呆気なく爆散してしまった。

(……………)

キリトはこの風景を呆然としながら見ていた。例えこれが幻想だとしても、まるで目の前で起こったことが本当だったかのように一瞬錯覚させられる。

『そして、君がいなくなった後の世界がこれだ』

キリトが返事をする暇もなく、どんどん景色が変わっていく。

ラフコフ討伐戦で奇襲にあい、POHの包丁の一撃を受け、その身を散らすクライン

ピナを失い、そのまま ドランクエイプ に鬨り殺しにされるシリカ

キリトとアスナに救われることなく、自我を崩壊させ、ただの屑データとして負の感情を生み出し続けるプレイヤー達の拷問のようなモニターを強いられるユイ

第80層で無理を押しボスMobと対峙し、叩き潰されてポリゴンの欠片に爆散するエギル

リアルでの衰弱死によりディスクコネクトするリズベット

守りたいものを護れず、絶望のうちに碎け散る拳

ともに戦場を駆け抜けた友を助けられず、折れた信念と槍消え去り、積まれることのない夥しい数の屍

そして……

第99層、残り僅かとなった攻略組が、最後の力を振り絞り、ボスMobと対峙している。

そこにはキリトではない二刀使いのほかに、彼の最愛の人、アスナもいたが、その姿を見た瞬間、キリトは拘束されているのにも関わらず思わずもがき、駆け寄ろうとしてしまう。

そこにいるアスナは見るに堪えないほど擦り切れていて、今にも消えてしまいそうな儚さと、狂気に満ちた目をしていた。

敵のHPが残り数ドットになったとき、残っていたのはアスナとキリトの代わりと思しき二刀使いの男だけだ。

そして、その二刀使いが、キリトがもどかしくなるほど自分より劣った動きのせいで敵の刃に貫かれようとしたとき……

「……………!!」

アスナが、身を挺して、その男を庇う。

アスナは貫かれ、涙を流す暇もなく、一瞬にしてアバターを碎け散らせ、そしてその愚鈍な二刀使いはその後を追うように、ボスMobに吹き飛ばされ、同様に消え去り……

「……………!!」

キリトは、声にならない絶叫を上げる。

これが、Eifの話であることも、なかった未来であることも関係



今、茅場の前に立っているキリトは全く別物の姿をしていた。

余分なものを一切そぎ落とした金属的な流麗なフォームに、両手のあるべき部位には二振りの刀身。無機質なヘルメットには飾りは何もなく、まるでアバターを装飾する前の状態のようだ。

しかし、そのボディの色である黒が、何もかも吸い込みそうで、逆にすべてを拒絶しているかのような、矛盾を孕んだ漆黒がそのアバターの飾り気のなさを補って余りあるほどの存在感を与えている。

「やはりキリト君ぐらい電脳世界に耐性がないとここまでのものでできないだろうな……。いや、素質以上に幼少時にリアルデジタルイズされた影響や、心傷殻の大きさや深さも関係あるか……？」

次々と表示されていくモニターに目を走らせながら、茅場は一人考えに耽っていた……。がつ！？

「おっと、危ない危ない……」

八相の鎖で繋がれていたはずのキリトはいつのまにか拘束を逃れ……。いや、鎖を自身の体内に取り込み、迷わず腕についた剣を茅場目掛けて振り下ろした。振り下ろされた剣の太刀筋を完璧に読み取った茅場はギリギリで見切った、はずだったのだが……

「よもやここまでとはな……」

完璧に見切っていたはずの太刀筋は、躲す寸前に黒く輝く光により伸びた刀身で、茅場の体を見事に抉っていた。

「まさかあの姿になって、すぐに心意を使えるとはな……」

心意……。アスナが麻痺で動けるはずのない状態でキリトを庇うた

めに動き、キリトがSAOで最後に茅場と戦ったときにHPが0の状態で剣を茅場に突き刺し、そしてALOでは覚醒状態になかった茅場を目覚めさせた、世界の法則を心の力イメージでねじ伏せ、上書きする力。

「制作者が作ったルールを無視する力、しかし世界に受け入れられる力……」

茅場は呟きながらも、十字の盾から剣を引き抜き、目の前に複数のモニターを展開させながら応戦する。

剣と剣がぶつかり合い、その接点では火花の代わりに空間が弾けるような輝きを発し、世界が軋むような音を立てて二人の世界の事象を改変するほどの圧倒的な力のぶつかり合いに悲鳴を上げる。

「ふむ、これ以上やるとこの空間自体が壊れるか。しかし、もう少しデータを取りたいんだがな……」

茅場が少し迷うような表情をしながら呟くと……

パァンッ！

「その前にキリトが壊れるだろうが」

一発の銃声が鳴り響き、キリトがまるで時間が止まったかのように動かなくなつた。いや、実際に時が止まっている。

「フリーゲルか。早い登場だな……」

茅場が振り返ると、そこには黒いコートに身を包み、右目にモノクルをつけた男、フリーゲルがいつものダルそうな目を今は険し



くして立っている。

「あのキリトの姿はXethフォームか……？いや、それよりも、スケイスに取り憑かれてた楚良や、ビーストフォームのハセヲに似てるか……茅場、あんた、キリトに何しやがった？」

フリーユージェルがキリトの異形の姿に目を細めながら尋ねる。

「いい目の付けどころだが、少し違うな。それより、君のことだから面倒ごとは敬遠すると思っただがな？」

「いや、俺としてはできればこのまま出番なしで、エンディングにのんびりしてる姿をちょこつと映してもらっただけでよかつたんだけどよ」

「ならそうするといい。別に君を呼んだ覚えはないしな」

茅場が淡々と言うのに対し、フリーユージェルは苦笑いをした。

「そりやできればそうしたいんだけどな……だが、若いのががんばってて苦境に立たされてたら、年上のお兄さんとしてはやっぱり助太刀の一つや二つしとかないとあれだしな。それに……」

「それに……？」

茅場が特に興味はなさそうに、ただ相槌を打っただけのような声で聞くと、フリーユージェルは肩をすくめながらため息をついた。

「茅場、あんたのその被験者がどうなるうと関係ない、っていうのは同じ研究者としてゆる……って、ぐええええー！？」

茅場の視界から突如として消えたフリーユージェル。その原因はフリーユージェルが立っていた場所にふわりと舞い降りたキリトの姿によっ

て示された。

「まさかフリーゲルのブリーラー・レッスルをあの短時間で解除した上に、こちらの視認できる速さの限界を軽々超えるとはな……さすがはキリト君、と言ったところか」

モニターに逐一表示される情報を目ではなく頭で直接受け取りながら、情報を咀嚼していく茅場。

「わざわざ口に出して解説してくれてるのは俺のためってか……？ お気遣いありがと……な！」

キリトに遙か蹴り飛ばされ地面に埋まっていたフリーゲルがやとこさ抜け出て口に入った土をぺっ、ぺっ、と吐き出したあと、口直しに棒付き飴を咥えながら呟いた。

しかし次の瞬間、フリーゲルはたった今咥えたばかりの飴を口からポロリと落としてしまいそうになった。

「な、なんだ、ありゃ？」

目の前に立っていたキリトが、ふわりと宙に浮かんだかと思うと、ブウンツ！という音と共に2体に分裂したのだ。

「増殖……メイガスの力か。どうやら、先ほど取り込んだ八相の鎖に宿っていた力を吸収したようだな。これはまた興味深い……」

感心しながらモニターを眺める茅場の横で、フリーゲルがげんなりとした表情をした。

「で、あれをどうにかする策はあるのか？」

フリーゲルがめんどくさそうに聞いたのに対し、茅場は淡々と、

「策はない」

「って、ねえのかよ!？」

「というわけでもない」

「どっちだよ!？」

茅場はいつもの無機質な表情で続ける。

「キリト君のあの状態は、私が考案した人の人格からAIを作り出し、それを外装として纏うもので、あの状態なら上手くいけばこの世界の外にアクセスすることもできるといっく画期的なものだ。しかしいかんせんキリト君の適応率と心傷殻の深さが規格外で、現状この世界でいちAIでしかない私の使うプログラムは良くて拮抗、最悪ほとんどが上書きされるだろう」

「ってことは、まさか打つ手なしでこの状況に持ってきたってことか？」

フリーゲルが呆れを通り越して心底面倒くさそうな顔を見ると、茅場は少しだけ、期待を瞳に宿して答えた。

「いや、キリト君には神槍ヴォータンが暴走したさいに一つ仕掛けをしておいた」

「仕掛け？」

「私の期待通りの成果を携えて、尚且つ戻ってこれるかどうかは彼しただが……なぜだかな、私は彼を信じている」

「って、勝手に信じられてるキリトもいい迷惑だな……。んじゃあ、ようするにあいつが戻ってくるまで抑えてればいいってことか？」

「手伝ってくれるのか？」

茅場が意外そうな声を上げると、フリーゲルは面倒くさそうに手を振った。

「あんたにはこの世界を救ってくれた恩もあるし、ここでキリトを見捨てる、ここに来るまでにサポートしてくれたうちの連中が煩そうだし……。ま、あいつらも後から来るし、何とかなるだろ……」

フリーゲルが舐め終わった棒付きキャンディーの棒を吐き捨て、二丁拳銃を構える。

「で、この戦闘が終わったらあんたのやろつとしていることを洗いざらい吐いてもらっ」

「無事だったらな……」

茅場も剣と十字盾を構え、そして二人は駆け出した。

.....

黒い世界。暗くもなく、闇でもなく、ただ黒い世界。もしここが本当にそれ以外何も無いところだったら、常人では数分と経たず精神に異常をきたすだろう。

「なんか……綺麗だな……」

しかし、そこには在った。いくつもの、いや、幾億もの光が。小さいながらも、互いが輝きあって、全体で巨大な光を作り出し、ま

るで星が輝きあつて作り出す天の川……いや、銀河をこの何も無い世界に存在させている。そして、その中心には他のものとは比べ物にならないくらい大きく、存在感を放っている光があった。

その光を抱きかかえるように存在するのは……

「これが、本当のアウラの姿なのか……？」

キリトが初めてアウラとグリーマ・レーヴ大聖堂で会った時抱いた印象、かわいらしいけど、気高そうだけど、それ以外はいたって普通の女の子。彼女が自称The Worldの女神と聞いた時には失笑しそうになった。

しかし……

「確かに、これは神……いや、女神だな……」

その神々しさもさることながら、到底人が辿り着くことの不可能なほどの慈愛と献身の境地。そんな見るものを圧倒させ、畏怖を抱かせるのと同時に、親しみを覚えてしまう姿。

(これは、帰ったら謝らないとな……)

キリトはそんなことを考えながらも、なぜか体が震えているのに気づき、そしてそれが自分の無意識が何かに恐怖していたのだと、すぐ近くで起こった光景により悟った。

「なっ、光が……!？」

そう、アウラの抱える光を囲むように展開していた無数の星のよ

うな小さな光たち。そのうちの幾つかが、唐突に黒色に染められ、一瞬にして存在を消されたのだ。

「いったい、なにがどうなって……?」

キリトが消えた光を探そうと動いたその時、偶々近くに浮いていた別の光に指先が触れて……

「うっ!？」

次の瞬間、キリトの頭の中をどこかの世界の戦いと平穩、出会いと別れ、生と死、友情と裏切り……それらの情景が無規則に駆け巡る。その圧倒的な情報量に頭がおかしくなりそうになりながらも、キリトは無意識に指を数ミリ動かし、光から離れた。

その瞬間、ピタリと情報の流入は収まる。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ……」

キリトが荒い息を何とか整えながら、この光たちが何なのかを理解した。

「これが、この小さな光一つ一つが、全部世界なのか……?」

『そう。そして、これらの全てはあなたが蒔いた種が芽吹き、広がってきたもの……』

「なっ!？」

唐突に頭に響いてきた声にキリトが驚き、警戒心を露わにしていると、キリトの目の前に人影がふわりと舞い降りてきた。

少年とも少女とも見える中性的な容姿全身を淡く輝く白い光に覆

ったその子供は、感情を一切排した表情でキリトに慇懃に一礼した。

「おまえは……？」

『私はオリジナルカーディナル、この世界達を見守るものです』

その姿を見たキリトは、どことなくアウラから受ける感じと似ているのに気付いた。

「オリジナルカーディナル……？って、カーディナルはシステムの名前？それに、この感じ……まさか、あんたは、というよりカーディナルは茅場が作り出したアウラのコピーってことか？」

キリトの脳裏に以前したイエーツとの会話が過る。

『お察しの通り、私カーディナルはマスター茅場によって作り出された疑似アウラです。ちなみに私のさらにコピーであるマスターがあなたに託したThe Seedに組み込まれたカーディナル達は、表向きはサーバーの管理等を職務としてますが、本当の存在理由は別のところにあります』

（別にある？）

キリトはその言葉を聞いた瞬間、ある考えが思い浮かぶ。そして、その可能性が起点となり次々に点と点だった事柄が結ばれていく。

「もしかして、茅場は世界中に大量のカーディナルのコピーをばら撒き、何かに利用するためにThe Seedを俺に託したのか……？」

The Seedの凡庸性は、例え作っただのが稀代の大量殺戮者茅場明彦でも、見逃しがたいものがある。それは、今現在も広まり続

けていることからわかる。

( だけど、いったい茅場はカーディナに何をさせようか……？ )

そこで、キリトは目の前にいる子供が自分のことを？オリジナル？と名乗ったことに気付いたと同時に、新たな疑問が湧いてきた。

「あなたがオリジナルのカーディナルなのはいいとして、なんでこんなところにいるんだ？というより、ここはいったいどこなんだ？」

キリトのもつともな疑問に、カーディナルは表情を全く変えず、ただ淡々と答える。

『ここがどこかという問いには、残念ながら私には回答権が与えられておりません。ただ、私がここにいる理由は先ほどお教えしたように、この世界達を見守るためです』

目の前の子どもが見守るといふ言葉を口に出したとき、初めてキリトはその子供に感情を見た気がした。悔しさや歯痒さといった、自分の無力を噛みしめているかのような焦燥感。

奇しくもそれはキリトがこの場所に来る前に茅場と戦っていた時に抱いた感情だったので、惹かれるかのようにキリトはたずねた。

「見守るだけじゃなくて、護りたいのか、この世界たちを？」

キリトの言葉は的を得ていたらしく、目の前の子ども、カーディナルはキリトを凝視し、そして小さく頷いた。

「で、俺は何をすればいいわけだ？」

『えっ？』



カーディナルは驚いたような表情を見せたが、キリトにとっては当然の問이었다。あの茅場が、ここに自分を送り込んだのには必ずわけがある。というより、そうでなければいったい何なのだと言いたい……。

キリトは茅場に言ってやりたいことが山ほどあったが、とりあえずはこの子の手助けをしてあげたいと、場当たりに思っていた。

カーディナルはじつとキリトのことを見た後、徐に口を開く。

『今、この世界たちとThe Worldは消滅の危機に瀕しています』  
「は………?」

その予想の範疇を軽く超える大事のカミングアウトに、キリトは一瞬言葉を無くす。

『先ほど見られたように、この空間は異物が存在することを許しません。元々ここに単独で放り込まれたThe Worldは、マスターが辿り着いたときには風前の灯でした』

キリトは口にしようとしたが、それを遮りカーディナルは話し続ける。

『マスターはこの空間に現実世界のネットで使用されているThe Seedのカーディナル達が集めた彼らの管理する世界の情報を元に、幾千もの世界を作り出し、The Worldに対する浸食を抑えにかかりました。しかし、それも所詮場つなぎにすぎません。本当に必要なのは、この空間にこの子（世界）達の存在を認めさせる鍵、The World的に言うと、キーオブザトワイライトが必要なんです』

キーオブザトワイライト…… The World に語り継がれる幻のアイテム。それはある時は万能の願望機と言われ、またある時は少年が手にした腕輪かもしれないと推論され、また別の時代には少年の成長した力そのものだとする男が言った。

『その形は時代ごとに姿を変えたが、定義は変わらない……それは、『希望』だということ。』

黄昏の世界を薄明よあけに変える力。なら、今この時点においてのキーオブザトワイライトとは……？

キリトは頭をフル回転させて考えたが……

「で、結局そのキーオブザトワイライトってのはなんなんだ？」

あっさり思考を放棄して、カーディナルに尋ねる。

『マスターは、キリトさんがあることを願えばそれは現れると言っていました』

「あること？」

キリトはヒントくらい貰えないかなくらいの気持ちで尋ねたのに、簡単に答えを貰えてしまい肩透かしを食らった気分になりながらも尋ねる。

『この空間から出たい、と思えばいいそうです』

「は……、それだけ？」

『それだけです』

なんだそりゃ、簡単すぎるだろ……？と、思いながらもキリトはとりあえずここから出たいと思おうとしたが……

(な、んだ、これ……?)

どれだけ出たいと念じようと、まったく気持ちが悪くてこない。まるでキーを回しているのにエンジンがかからないかのような……。

『この空間が異物を許さない……と言ったのは、語弊があったかもしれない』

カーディナルが、少し寂しそうな、諦めたような顔をして語る。

『この空間は、その性質上何もかも取り込んでしまうんです。だから、ここに来たものは出たくなくなる。そして、いつしかその存在を空間と同一化させてしまうんです』

(そんな、バカ、な……?)

しかし、カーディナルのいう通り、キリトの心はこの空間から出たいと思えば思うほど、どんどん逆へと向かっていく。そしてそれにつれてキリトの体が、和人の心が黒に取り込まれていく……

空間を満たしている黒は、粘ついてるわけでも、纏わりついてくるわけでもなく、かといって空虚さを感じさせるわけでもない、居心地がよくてそのまま溶けて同化したくなるよう誘惑する。

さらに、ここで同化すれば長年求めてきた、日常の中でどれだけ楽しいことや辛いこと、出会いや別れがあるうと忘れることのなかったもの。一度は障害の大きさに逃げ出し、しかしSAOに閉じ込められ死を間近に感じた時、ビーターと蔑まれ、一人戦い続けてでも生き残り知りたかったもの……自分の両親の死についての真実が全てわかるといふ確信をなぜかはわからないがキリトは持ててしまっていた。

(俺は、これから、どう、すべき、なん、だ、ろっ……?)

途切れ途切れになりながらも、最後の足掻きとも言える想いを頭の中に浮かべ……そしてキリトの思考は言葉として紡がれることは無かったが、しかしこの空間だからこそ想いが形になって現れる奇跡が、いや、茅場が 神槍ヴォータン に施したとあるキツカケにより、必然の事象が起こる。

キリトの目の前に、次々とリアルのことからSAO、ALO、GOやThe World等電腦世界での出来事とそこで出会った人達の姿や思い出が走馬灯のように現れては消えていく。

それをぼんやりと見ていた体をとどころ黒に同化しかけているキリトは、最後の幻が消えた後に残された淡い光、今を生きている人間にしか持てない未来あきのように暗く不確かで、でもだからこそ掴み取りたい希望を象徴するかのような光に、惹かれるようにゆっくりと、ぎこちなく右手を伸ばし、手に取る。

『し、信じられない……。いくらマスターの仕掛けが有ったとしても、本当にこの空間の誘惑を退けるなんて……』

傍にいて絶望に浸ろうとしていたカーディナルの驚きを余所に、光を手にしたキリトの体が燦然と輝きだし、体とどころ同化しかけていた黒はキリトの左手に移動し、手のひらへと集まる。

そして、右手の光と左手の黒はその持ち主にとって馴染みの二振りの剣を形どった。

『キー、オブザ……トワイライト……』

カーディナルが呟いた言葉が呼び水となり、空間に浮かぶ光達が輝きを増す。そして眩いばかりの光に包まれたキリトは、両手に持った朝日の如く輝く白い剣と、黄昏時のように優しく包み込むような光を放つ黒の剣を見て、奇しくもSAO時代に自分が最後に手にしていた漆黒の剣　ダークリパルサー　とアスナの純白の剣　ランベントライト　を思いだし、微笑む。

そして、光による白と、空間による黒がお互いの存在を認め合うかのように絶妙な均衡をとると、キリトの目の前に木製のアンティーク仕様の扉が現れる。

そして、その扉がギィイツと軋みを上げながらゆっくりと開くと……白衣姿の茅場が入ってきた。

「茅場……か……?」

『マスター……』

キリトとカーディナルが呟くと、その場に立ち止り、扉の前に佇む茅場は初めにキリトの方を向く。

「紙一重だったようだが、どうやら成功したらしいな」

キリトが手に握る白と黒の剣を見ながら、茅場は鉄仮面に一瞬安堵の表情を過らせた。

「これが、あんたが俺をさんざん挑発してまで作らせたものなのか？」

キリトが自分の持つ剣をしげしげと見る。細工や飾りを一切排した、しかしだからといって無骨というわけでもなく、素っ気なさを

感じさせるわけでもない、不思議な存在感を放つ剣。

そして、キリトはそれを数秒見つめた後、茅場に放り渡した。

「……いいのか？」

茅場の無表情に向かって、キリトは苦笑しながら答えた。

「そんな剣、俺が持つてても仕方ないしな。それに、別にあんたのためじゃないさ。そこにいるカーディナルのためだ」

僅かな時間しか共有していないカーディナルに対する過剰とも思えるキリトの感情移入は、この異様な空間に存在した自分以外の誰かというものもあつたが、それ以外にも長い間一人孤独に世界を守ることしかできなかつたということに、かつてのユイ姿を見たというのもあつた。

そんなキリトの胸中を察してか、茅場はそれ以上何も言わず、今度はカーディナルの方を振り返る。

「今までご苦労だった、カーディナル」

『はい……マスター』

茅場の言葉に、初めて微笑んだカーディナル。しかし、キリトはその中に違和感を見る。

(これは、何かの決意か……?)

そして、茅場がキリトから受け取った双振りの剣を中段に構えたのを見て、嫌な予感を察したキリトが慌てて駆け寄ろうとしたが…

…キリトが手を伸ばした時には、すでに茅場の振るった剣がカーデイナルの小さい体に突き刺さっていた。

「なっ!?!」

そしてキリトが驚く暇もなく、カーデイナルの体は接触した剣と化学反応でも起こしたかのように、眩い光を発し弾け、空間を埋め尽くし、キリトの意識を一瞬で刈り取った……。

-----

## 茅場ファイル

そこは壁に石や土が露出している、天然の洞窟。そしてその洞窟の中央には無数のコードに繋がれた、拳サイズの小さな球体状の石いや石のような何かが置かれていた。それをただ単に石と呼ぶには憚れるくらいの圧倒的な存在感を放っている。

そして、その石（便宜上Seedと呼称する）こそが、今現在The Worldが存在する空間の正体だ。

それがどこにあり、今どうなっているかはわからない。ただ、Seedは日本という国が誕生する前から同じところはずっとあるらしい。それは物理的にどのようなことをしようとも動かしたり傷つけることができず、また触れようとしたものは一様に廃人となった。故に、それは呪われてるとされ、厄介物扱いされながらも嚴重に保管されていた。

その評価が変わったのは20世紀末、パソコンやネットが普及してきた頃だった。たまたまそれを監視していたものが近くでノート

パソコンを起動させると、いきなり大量のデータがそのパソコンに注ぎ込まれ、そして次の瞬間壊れた。

そのことから研究チームが作られ、そして調査の結果、その石は電子的な情報を保存する機能があるらしいことがわかった。その記録範囲は、予測すると地球規模、いや、それ以上にこの太陽系全体に及ぶ可能性があること。また、記録するだけではなく逆にこちらから保存されているデータを取り出すことが可能にすることができるともという推論が出された。人が触ると廃人になるのは、接触したときに送られてくる無秩序で膨大な情報量に精神が耐え切れないと予測される。

早速極秘裏に研究が開始されたのだが、当時のコンピューターのパフォーマンスでは中々成果が出なかった。

そんな閉塞した状況に風穴を開けたのがCC社だった。パソコンやネット業界で頭角を現していたCC社はハロルドヒューイクがネットゲームThe Worldを母体に作り出そうとしている究極AIアウラを利用できないかと持ちかけてきたのだ。極秘だったSeedのことを知られていたのと、すでに手詰まり感があった政府はCC社と提携、Seedの持つ圧倒的な容量を提供して（この時すでにSeedの中の余って使われていない一部の領域を使うことはできるようにしていた）、アウラを完成させるのを手伝った。

その途中でSeed内の空間の断片が意思を持ちAIDAとしてネットワークに出現してしまったことや、当時CC社の上層部が持っていた人類休止計画や政府の思惑はここでは長くなるので省くが、この後司やカイトにハセヲ、そしてトキオにサクヤやソラ達の活躍によりアウラは成長し、一時期は力を失うも、最終的には究極AIと言って過言ではないほどの存在になった。



しかし、ここでCC社が人体実験に手を出していることが世間に  
ばれ、反対勢力の後押しもあり瞬く間に倒産に追い込まれてしまう。  
そしてその後、The Worldのデータは調査の名目で政府に  
回収される。

政府にとってCC社というパートナーを失ったのは痛かったが、  
実験は最終段階に入っていたので、アウラをThe Worldごと  
Seedの中に放り込んだ。目論見通りいけば、アウラはSeed  
の中で自分の領域を確保、その後Seed内に保管されて今直更新  
されている地球上のあらゆる時代の情報を引っ張り出すという世紀  
の、いや、人類史上最高の快挙を成し遂げるはずだった。

しかし、あまりにも強大な空間の浸食力に、アウラという一点の  
光は世界(The World)が消されないように維持するのが精  
一杯で、彼女はその神性をThe World維持の為に切り離れた。

そして……

「あんたが来たってわけか」

一人ぼつんと白い空間、The Worldとさっきまでいた空間  
の狭間にある緩衝材のような場所、認知外空間にいつのまにか佇ん  
でいたキリトは、どこかで見聞きしているであろう茅場に向かって  
独り言のように呟く。

そう、キリトは先ほどの爆発で気を失い、気づいた時にはこの場  
所、認知外空間に一人立っていたのだ。そして、キリトがはつきり  
と意識を取り戻すと、待っていたかのように目の前にモニターが展  
開され、茅場ファイルなるものが流された。

キリトはいつ、なぜ、どのように自分がここに来たのか劇場の時のようにさっぱりだったが、とりあえず目の前の言い訳のような情報を見終わるまで黙っていた。

『そう、そして、私は私の望みの為にキリト君、また君を利用することにした』

どこからともなく響いてきた返事に、キリトは淡々と質問を続ける。

「で、結局なんで俺が選ばれたんだ？それに、なんであの子は死ななきゃならなかったんだ？それと、さっきも言ってたけど、なんでThe Worldを救うためにSAOをデスゲームにしなければならなかったんだ？」

その短いながらも 茅場ファイル を見た後に残った最後の謎の核心を問われた茅場は、一息間を置き、徐に語りだす。

『今回の件でのキーオブザトワイライトは、今生きている人間があの空間で元の、外の世界に出たいと思うことで、空間を暫定的に束ねている意思に異物を観測したくなるよう興味を持たせる、つまり、異物の存在を許すように仕向けることだった。そして、あの世界に入り、尚且つ戻ってこられる可能性を持っていたのはSAOを救ったキリト君、君だけだったというわけだ』

茅場の声はここでいったん途切れ、また話し始める。

『カーディナルは、君ならすでに予想していると思うが、以前アウラがしたこと、アポトーシス（自己犠牲）をした。あの子は最初から君が成功すれば、自らを捧げて空間と世界達の橋渡しになるよう

に作ったAIにすぎない。だから、君が気に病む必要はまったくない』

茅場の事実を言ってるだけなのか慰めてるんだかわからない淡々とした言葉を聞きながら、キリトは自分がやったことに対して後悔するべきなのかさえ分からずにいた。

『そして、最後に私がSAOをデスゲームにした本当の理由。それは……いや、これはやめておこう。唯の言い訳に過ぎないからな。それに、結局私は自分の為にデスゲームを行ったのだからね』

その答えに対し、キリトは何も言えずにいたが、最後の質問をした。

「で、これからあなたはどつするんだ？」

『……そうだな。とりあえず、あの空間にある他の世界を回ってみるつもりだ』

「じゃあ……」

茅場が『んっ？』と言ったのをに対し、キリトは続ける。

「今度会った時にもう一度戦ってくれ」

『次会う時には勝てるんでも？』

茅場の挑発的な発言に、キリトは覇気を込めて答える。

「次に戦う時までには、必ずあなたの達した……いや、それ以上の高みに行つて見せる」

『……楽しみにしていよう。おっと、そろそろフリーユージェル達が来るな』

キリトが振り返ると、青いリングがいくつか現れ始めていた。

『それではキリト君、またどこかで会えたら会おう』

そして、茅場の気配は完全に消え去った。

かなりのとんでも設定になってしまいました。これはこの話しを思いついた時から考えていた設定なので、悔いはないです(笑)

もともと最初に茅場がThe Worldに来たことがあるのでは?と思っただのは、本文にも書いてありますが、天空に浮かぶ城に行ってみたくて言っていたセリフが始まりでした。

まあ、最初はラ○ユタを連想したんですが、その後ネットゲ繋がりでhack/を思い出し、何ともなしに書き始めてみましたが……どうなったかはここまでお付き合いいただければわかったと思います(笑)

Seedについては、hack/Link時に明かされたC社の親組織による 人類休止計画 や、SAOの後に続くと思われていた(実際はアクセルワールド10巻のあとがきで、時系列は同じではない並行世界のようなものと書かれていましたが……)アクセルワールドを読んでいる時にいつも感じていた、「どうやってこんな大容量確保してんだ(するつもりなんだ)?」という疑問に対する自分なりに考え付いた一つの回答として組み込みました。

こんなのありえないだろ……と思いつつも、科学が発展することと今まで無用だったものや害だったものが180°価値を変えるなんてざらにあることかなと書きました。

あと、キリトが過去の真実を知って発現させた形態は、アクセルワールドのデュエルアバターの原型みたいなものつもりで書きました。

デュエルアバターは原作を読んでも、ただの体というより持ち主の分身のようなものに思えたので、デュエルアバター自体に潜在

的に意思（AI）があり、お互いの想い（イメージ）を掛け合わせることで、強力な力（心意）などを発動しているという設定を妄想してみました。

・hackノにも、碑文使いとアバター（八相）やトキオと騎士団達AIによる連携などがありますし。

## 年代表

2006年：ララ・ヒューイックがリアルデジタルライズし、黄昏の碑文の世界を旅する

2007年：Fragment始動

2009年：The World本格始動。司がゲーム内に閉じ込められるが、仲間と協力しアウラを解放。（アニメ展開）

2010年：親友オルカを未帰還者にされたカイトがブラックロウズ達仲間と共にモルガナをあとい歩のところまで追い詰めるも、最後はアウラの自己犠牲でThe Worldは正常に戻る。（ゲーム展開）

2014年：シューゴとレナがキャンペーンでカイトとブラックロウズのボディをゲットして、仲間と共に放浪AIであるゼフィとアウラを探す。（マンガ展開）

The Worldに戻ってきたカイト達はシューゴ達と共に放浪AIモルティと、その反存在になることで存在を復活させた、かつてできそこないとしてハロルドに処分されたクビアがThe Worldを破壊しようとは策しているのを知り、対決。最後はモルティとクビアが消滅してエンド。（オリジナル展開）

2015年：RA計画始動。リバーズアウラチャップチョップ事件などで八相を回収。天城丈太郎と番匠屋淳の天才2人により計画は進められるが、失敗し火災が発生。The World消滅。

2016年：データ生命体AIDAの発生。碑文使い候補の一人オ

ーヴァンに取り憑き暴走、彼の妹アイナが未帰還者に。オーヴァンがキーオブザトワイライトを探す黄昏の旅団を結成するもオーヴァンが行方不明になったうえに志乃も未帰還者になり自然消滅。(アニメ展開)

2017年：ハセヲが碑文使いとして覚醒し、その力をキーにオーヴァンが再誕を発動、その後現れたクビアも無事撃破し、平穩が訪れた(ゲーム、小説、映画の内容Mix&オーヴァンは生きている)

2020年：リアルデジタライズできる特殊体質の少年トキオが石化された騎士団員を救い、アウラへの道を開くも天城丈太郎のバツクアップAIガイストにアウラを洗脳され、全人類をリアルデジタライズするイモータルダスクを発動しようとするが、敵対していたシクザールのメンバーとも協力し、なんとか被害を最小限に食い止めることに成功。(ゲーム展開)

2023年：サクヤ、トービアス、メアリがThe Worldに潜む闇を垣間見る。ソウルデジタライズされた少年ハーミットの起こしていた事件をシャムロック(PCパイのプレイヤー佐伯令子)と共に解決に導く。(OVA展開)

2024年：そらというカイトタイプの主人公が活躍する話という意外不明。トキオとも関係があるらしいが……？(???)

2030年：茅場がイモータルダスクに巻き込まれ、リアルデジタライズされる。(オリジナル)

2041年：キリトと両親がイモータルダスクにあり、その後事故で両親が死亡。(オリジナル)



2042年：The World崩壊。???に安置されたSeedの中に全データを放り込まれる。  
アウラ自らの神性を犠牲に世界をSeedの中に広がる闇の中から守る。（オリジナル）

2050年：茅場明彦アーガスに入社。アーガス急成長。ナーヴギア開発。（小説&年度オリジナル）

2055年：SAO発売。キリト達2万人のプレイヤーが虜囚となる。（小説&年度オリジナル）

2057年：SAOクリア。フェアリーダンス編（小説&年度オリジナル）

2058年：マザーロザリオ編（小説&年度オリジナル）

2059年：現在

店番 ・カナードにて ・ 01 (前書き)

エピソードに行く前に短編を書いていこうと思います。  
今回はモンスターレースが終わった直後のお話です。

「……………」

「……………」

(き、気まずい……………)

キリトは店の前の広場に溢れる雑踏を遙か彼方からするかのよう  
に錯覚しながら、隣で不機嫌そうに立っている人物が放っている無  
言のプレッシャーでさつきから冷や汗をたらたらと背中をつたわせ  
ている。

(はぁ……………なんでこんなことに)

心の中で溜息を一つつき、今いる状況に俺を叩き込んだ人の良さ  
そうな顔をして腹の中は真っ黒なあいつのことを思い出した。

そう、あれはモンスターレースが終わった次の日のことだった……………

……………

「やあ、キリトくん、おはよう」

夜通し行われたお茶会で罰ゲームとして一晩中こき使われた執事  
キリトは、欠伸を連発しながら自分の部屋に戻ってこれからひと眠  
りしようと思いつながら歩いていたら、ばったりシラバスとガスパー  
に出会った。

「ああ、シラバスにガスパーか。おはよ、……っといつても、俺はこれからオヤスミだけだな」

「隈ができてるぞ。徹夜でもしてたのか？」

欠伸を噛み殺しながら挨拶したキリトに対して、ガスパーがのんびりとした調子で尋ねる。

「ああ。リコリス達のお茶会に付き合わされてな。もっとも、後半はゲーム大会と化してたけど……」

お茶会の後に行われたゲームに負けてやらされた罰ゲームは、昔流行った某サウンドノベルの主人公達が部活でやっていた罰ゲーム並みに過酷なものだった……。

まさに見ている側と受ける側では天国と地獄だったあの光景を一瞬脳裏に浮かべたキリトは、思い出し笑いをしていいのか、逆に恐怖に震えればいいのかわからなくなった。

そんなことを眠気に侵された頭でぼーっと考えていたキリトだったが、シラバスの次の発言で一気に現実に戻された。

「ところでキリトくん、君、たしかカナードでツケで買い物したよね？」

「あつ……」

確かにあの時持ち金が無かったキリトは、後で櫛からクエストの報酬を貰おうと思っていたのだが……。

「悪い、もうちょっと待つてくれないか？あてがはずれちゃってさ」

そう、櫛は眠り続けていたユイにレースの賞品である薬を『報酬

の代わり』にと使ってくれた。まあ櫻が勝手にしたことなのだが、一度納得した手前、後から金もよこせというのはさすがに気が引ける。

「んー、困ったな。明日決算だから、できれば今日中に返してもらいたかったんだけど……」

「そ、そうなのか……どうすっかな」

キリトは頭を掻きながら言葉を濁したが、無い袖は振れないってやつだ。

「あれ、シラバ……アイテツ！？い、いたいぞ〜！」

ガスパーが何か言いかけたが、突然ピョンツ！と跳ねて足を抱えて痛みがります。

「だ、大丈夫、ガスパー？」

心配そうに話しかけるシラバスだが、さっき一瞬シラバスの足がガスパーの足をふんづけたように見えたのは気のせいか……？

キリトが自分の見た気がしたものと今の状況を照らし合わせて、いや、無いか……と一人勝手に納得していると、やっと痛みが引き始めたらしいガスパーをなだめていたシラバスが話しを切り出した。

「あ、じゃあキリト。今日カナードで店番してくれない？」

「店番？って、つまりバイトってことか？」

「そうなんだ。今日の午後、僕とガスパーは用があつて出かけなくちゃいけないんだけど、バイトで入って貰う人が一人しかいないから、ちよつと心配だったんだ。もし今日バイトに入ってくれたら、ツケはチャラにするよ」

バイトか……接客はやったことないけど（というより、俺ってクリスハイトから時々来る依頼とか以外、まともなバイトってやったことないな……）午後からなら午前中は寝れるし、これでツケをチャラにできるんだったら……。

8 割方早く寝たいという願望に押されて、キリトは頷く。

「わかった。じゃあ午後からカナードでバイトに入る。でも、俺接客なんてやったことないぜ。それでも大丈夫か？」

「大丈夫大丈夫。同じバイトの人がちゃんと教えてくれると思うよ」

シラバスが自信満々に話している横で、落ち着いたガスパーはちよこんと首を傾げて「大丈夫かな」と呟いていたが、すぐに笑顔になっつて「よろしくたのむぞ〜！」と言ってきた。

もしもこの時キリトが眠気に侵されておらずまともな頭が働いていたら、節々に見えた不自然な点を見逃さなかったろうが、この時は無理な話だった……。

店番 ・カナードにて ・ 02 (前書き)

お久しぶりです。

週1で書くとか言っときながら、すでに10月末……。

更新するする詐欺になってしまい、申し訳ありませんでした。

「いらっしやいませ〜！」

カナードの店の前まで来ていたキリトは、その予想外の姿に立ち止まってしまっていた。

午前中爆睡したキリトは、アラームによって強制的に叩き起こされた眠い目を擦りながら軽くシャワーを浴び身支度を整え、マク・アヌに転移してマーケットがある広場の一角にあるカナードに着いたのだが……。

「癒しの水ですね。初心者の方ですと、異常ステータス回復アイテムとセットでお安くなりますが？あ、はい。ではセットでお買い上げですね。ありがとうございます！」

その人物は、愛想良くテキパキとした感じで初心者らしき装備が貧弱なPCに対応していた。

一瞬近づくかどうか迷ったが、意を決して店に歩み寄る。

「あつ、いらっしや……あん？てめえは確か……キリトって言ったか？なんかようか？」

カナード印のエプロンをしてキリトを睨んだ人物は、漆黒の禍々しい外装に銀髪、目つきの鋭さが見るものを威圧し、俺に関わるなオーラ全開の少年……そう、ハセヲだった。

「いや、シラバスに言われて臨時のバイトに来ただけ……」

聞いてないか？と続けようとしたキリトだったが、ハセヲの『チ



ッ!』という舌打ちにより遮られた。

「あの野郎、何考えてやがる……?」

どうやらキリトが来ると聞かされていなかったらしいハセヲはイライラした様子。

「もしかして、俺、お邪魔かな……?」

キリトが控えめに尋ねると、ハセヲは一瞬顔をしかめて……面倒くさそうな表情をする。

「ま、シラバスの野郎にはあとで文句言うとして、あんたも仕事で来たんだったら、やるしかねえだろ」

と、ハセヲは言って屋台に入ってくるよう身振り以示す。

キリトはしばし逡巡した後、屋台に入ると、ハセヲがメニューウインドウから一着のエプロンを取り出し、キリトに放り渡す。

「で、あんた、接客経験は?」

「いや、全く無しだ。シラバスは同じバイトの人に教えて貰えって言われたけど……」

キリトがどうする?と言った感じで聞くと、ハセヲはまた不機嫌そうに眉をひそめる。

「あっ!?!それでいきなりバイトかよ……?クソめんどくせえ……」

しかし、最終的に乗りかかった船……的な境地に至ったらしいハセヲは、結構頻繁に現れる客の対応をしながらキリトに仕事を教授

する。

「いらつしゃいませえ！……キリト、そっちのアイテムの整理頼む」  
「お客様の装備ですと、こちらの剣なんかが適正レベルですし、少しレベルが上がっても十分使えるのでお勧めですよ。……おい、キリト、それ間違ってるんだろ。その客は初心者だから、そのアイテムは3割引きだったろうが！」

「お客様が今狙ってるクエストですと、水属性付与、火属性耐性と毒耐性が必須なので、こちらの素材を装備につけるといいかと。……ってキリト、そっちはバラ売り不可だろ！」

そんなこんなで店を回すこと2時間、昼時に広場に集まっていた人ごみが薄れ、客足がやつと途絶えた時には、キリトは店の裏でへたり込んでいた。

(ま、まさか、店を回すのがこんなに大変だなんて……)

勿論簡単な説明しか事前に無い状態のぶっつけ本番だったので元々ムチャな話だったが、それを差し引いても初めての接客業は思っていたよりもきつかった。

SAO時代や、今現在ALOとリアルでも店を持っているエギルのことをキリトはなんとなくすごいとは思っていたものの、今回それを身をもって実感していた。

「ふう、これで一息つけるか……。ま、あんたもそこそ役立っただと思っぜ」

レジの前にいたハセヲが裏にやってきて、意外なことにキリトに  
「労いの言葉をかける。」

「いや、むしろ邪魔しちゃったろ？わるいな」

少し自嘲気味に笑うキリトに対し、ハセヲは頭を掻きながらキリトから目をそらして話す。

「まあ、はじめての店な上に接客業未経験なわけだしよ……もう少しやったら慣れてくると思うぜ」

何とも微妙な空気がキリトとハセヲの間に流れる。そして、どちらも居心地悪そうにしていると、二人にとって幸いなことに訪問者が現れた。

「ま\*@お!」

そこに立っていたのは……

「葬炎……?」

そう、そこにいたのはグリーマ・レーヴ大聖堂でキリトが戦った3葬騎士の内の一人、葬炎の騎士だった。ただし、今の彼は町の定食屋がしているような前かけを腰につけ、手にはおかもちを持っていた。

「お、待ってたぜ。今回は美味しく出来たか？」

「自¥&あ%」

おかもちの中からラーメン2つと餃子の乗った皿を2つを取り出し、その場にあった段ボールの上に置いた葬炎は、キリトの方に小さく会釈し、ハセヲに「#想を%た頼¥」と一言いうと、転移してしまった。

「あー、ハセヲ、いつたい今のは……?」

キリトが?マークを頭の上に浮かべながら聞くと、ハセヲは少々言いにくさそうに話します。

「いや、あいつには昔ちよつとばかり貸しがあつてよ。それで、今あいつら3人飯屋始めるらしいから、料理の試食頼まれてんだよ。んで、今日はあんたがいるから、2人前頼んだんだ。まだ、飯食つてねえだろ?」

そういえば、と、言われて初めて朝から何も食べていないことに気付いたキリトは、急に腹の虫が鳴りだした。

「じゃあ、お言葉に甘えてゴチになります」

「ま、あんま味の方は期待しない方がいいぜ」

ハセヲは言いながら、メニューウィンドウを操作して小さな椅子を2脚取り出す。

「あと30分くらいしたらまた客が増えるから、さっさと食つぞ」  
「了解」

キリトは空腹の為答えも短くいただきますというのもそこそこに、まずは餃子へと箸を伸ばし、醤油とラー油の入った小皿に付けて食べる。

「……なんだ、普通に美味いじゃん」

空腹というスパイスがあるにしても、ハセヲの言った味の保証は

しないという言葉は謙遜だったようだ。瞬く間に餃子を食べ終えたキリトは、今度はラーメンを食べた、が……

「……こ、これは……ラーメン、か……？」

これをラーメンと認めるのは全国のラーメン屋の方々に申し訳ないような味……まあ、ようするに美味くなかった。

「まあ、餃子はましになったけど、ラーメンは変わってねえ。葬天の奴もまだまだだな……」

早くも食べ終わったハセヲが、感想を呟きながら半透明のメニュー画面を操作している。どうやら、早速3人にメッセージを書いているらしい。

(ん？でも、これどっかで……？)

キリトの舌に今尚残っている味は、なぜだか昔どこかで良く食べていたことがあるような気がした。しかし、こんなラーメンを好き好んで食べるなんて、ありえないか……いや、そういえばSAOでアスナとヒースクリフ(茅場)を連れてったあの店のアルゲードそば、そうだ、あれにそっくりだ。

さらに、キリトの脳裏であの店のやる気のないボサボサ頭の店長の顔が三葬騎士の内の一人、葬天と重なり……。

(いや、関係ないだろ……)

まさか三葬騎士が旧アインクラッドに出稼ぎで定食屋をやっているはずないよな、あはははは……何て事を考えながら、とりあえずキリトは空腹の助けも借りて、ラーメンを食べることにした。

店番 - カナードにて - 02 (後書き)

茅場ことヒースクリフすら存在を知らなかったアルゲードそばの店、その正体は三葬騎士の葬天！という考えは原作を読んだ瞬間に浮かびました。

ボサボサ頭（髪の色は特に言っていなかったなので、銀髪と仮定）で接客が杜撰（いや、きつと話せないから）これはもう葬天さんしかないでしょ！（笑）

SAOやアクセルワールドって、結構hackノと繋がりそうなところあるんですね（例えば、セブンアークス最後の武器『揺光』を守っているのが8体の敵とか）

SAOとアクセルワールドアニメ化するんですし、公式でコラボやらないかなと密かに期待してます（笑）

次回更新は……たぶん今週中にはできると思います。

初めて店番をするキリトは、昼飯前の忙しさが一番キツイものと思っていたが、それが思い違いだとすぐに気付かされた。

(空気が、重い……)

そう、昼飯を食べ終えた後、店を開けたのはいいのだが、客足がパタッと止まっており、一通り店のシステムを理解したキリトは手持無沙汰な感じで店の中で立っていた。

もしキリトの隣に立っていたのが親しい誰かや話しやすい人、もしくはキリトにバイト経験がありこういう状況での身の振り方をしっていれば違っただろうが、残念なことにキリトは今日がバイト初体験&今隣にいるのは……

「……………」

もう一人のバイト店員、ハセヲはキリトなどいないかのように無言でメニュー画面を操作している。

(くう……、誰でもいい、この沈黙を何とかしてくれ)

キリトはすでに大群のMobを引き連れたマナー最悪のプレイヤードだろうが、タチの悪いPK集団でもなんでもきやがれ、というか来てくださいの心境だった。

そして、その願いは以外にも早く叶えられた。

「おおおおつ、どの面下げて店だしてんだあ、おめえら？」  
「ああ？」

軽薄なチンピラAの声に、ハセヲが鋭い目つきと共にドスの利いた声で唸る。

それを聞いたチンピラは一瞬怯んだ様だが、すぐに薄ら笑いを浮かべ直した。

「へっ、へんっ。今日はシラバスの野郎はいねえんだろ？調べはついてんだ。それに、あんたがいくら 死の恐怖 と呼ばれてても、たった一人でこの人数相手にはできねえだろ？」

そう言いながらチンピラAが手を上げると、路地裏やら店の陰からガラの悪い連中がわんさか湧いてくる。それを見た通行人は、その集団を避けたり、遠巻きに見守る。

集まったチンピラはざっと見たところ30人はいる。なんともまあベタな展開だ。

しかし、キリトの抱いた想いは違った。そしてキリトはハセヲをチラリと見た後、店の前に飛び出し、チンピラAの手を握った。

「なっ、なんだ、てめえ？……ん、どっかで見たような……？」

「あ、アニキ、そいつ昨日ボルドーさん達をレースで負かしたシリカって奴の相方ですよ」

「まじか！？こりゃあ飛んで火にいる夏の虫だなあ。死の恐怖に加



えてボルドーさんの敵を討ったとなりやあ、俺のケストレルでの株もうなぎ登りつてもんだぜ！」

（ボルドーのことを口に出すってことは、やっぱりこいつらケストレルか……）

ハセヲはカウンターの下でメニュー画面を忙しく操作しながら、なぜか目を輝かせているキリトのことを訝しむ様に見る。

「で、てめえはなんでこの俺様の手を握ってるんだよ？」

一時は手柄のでかさと、その後に待つであろう待遇に心を馳せていたチンピラAだったが、自分たちの襲撃をまるで喜ぶかのような顔をしているキリトが気持ち悪くなったのか手を振り払おうとしたが、全く動かない。

そして、キリトは唐突に語りだす。

「いやあ、あんたらが来てくれて助かったよ。今まで空気最悪だったし、もうほんと限界だったんだ」

ぼかんっ、としているチンピラをよそに、キリトは話し続ける。

「これ以上は持ちこたえられそうになかったけど、ほんと、ナイスタイミング」

そして、キリトが言い終わったと同時に、チンピラAの前にウィンドウが表示される。

それは……

『ハセヲから団体戦デュエルを申し込まれています。受けますか？』  
というものだった。

そして、キリトはそれがマナー違反だと知りつつも、相手もその気だったると言い訳しながらチンピラAの手を動かして『Yes』を押させる。

「なっ、てめえ!？」

青い光が辺りに降り注ぎ、バトルフィールドが固定されて慌てたチンピラAだったが、すぐに対戦者リストに自分の名前とその場にいたケストレルのメンバー全員VSキリト、ハセヲペアと書かれているのに気付いた。

一瞬安堵の笑みを浮かべたチンピラAだったが、彼の手を放してその場に余裕を醸し出しながら立っているキリトと、店からのんびりと出てきたハセヲを見て怒りに顔を赤く染める。

「て、てめえら……まさか、この人数に対して2人でやるうつつうわけじゃねえだろうな？」

「もともとそのつもりで来たんだろ？」

ハセヲが馬鹿にしたようにハナで笑うと、チンピラAは怒りに体を戦慄かせ、叫んだ。

「上等じゃねえか!おい、テメエら、こいつらをフクロにして一生日陰しかあるけねえようにしてやるぞ!！」

「「「おおッ!」「」」

こうしてケストレルのチンピラx30vsハセヲ、キリトペアの

対戦は、遠巻きにしているギャラリィに見守られながら幕を上げた。

「ぐはっ!?!」

「ぎゃあーっ!」

「このヤロツ!?!」

穏やかな街並みと活気あふれるマーケットが広がる サーバル  
ートタウン 水の都マク・アヌ

その一角、ギルドが運営するショップが集まっている場所で、今  
その雰囲気は全くそぐわない武器と武器がぶつかり合い、PCの上  
げる怒声と悲鳴が響いていた。

(バ、バケモンか、こいつら……?)

最初に突っかったチンピラA。彼は目の前で繰り広げられてい  
る光景に絶句していた。

黒んぼの剣士に主導権を取られ、標的のハセヲに余裕の態度を取  
られながらも、当初の目的であったPKKにして 死の恐怖 の二  
つ名を持つハセヲと、おまけにケストレルの看板に傷を付けたどこ  
ぞの馬の骨をいっぺんに鬺り殺すことができる。しかも、公然と大  
々的に。

30対2など、どんなにレベル差や技術差があろうと、覆せるも  
のではない。そう安心しきって後の方から悠々と戦いの推移を見て  
いたのだが……

「ウオラアッ! 環伐式閃 !!!」

ハセヲは手にした巨大な禍々しい形状の鎌を横に振り、詰め寄ってきた5人の敵を一気に薙ぎ払う。

「まだまだいるぜえ！」

しかし、その後ろに控えていたさらに3人のチンピラがスキル発動直後に起こる硬直を狙い殺到する。

「舐めんなア！」

ハセヲはスキルが出し終わる直前、脳裏で武器変更を選択する。

通常武器を変更するにはメニュー画面の装備画面からしか変更はできないが、マルチウエポン練装士のジョブだけは意識下で考えるだけで変更することが可能だ。

しかし、それは自分のアイテムポーチのどこに何が入っているか熟知していないと空振りに終わることがあり、下手をすると空手になる危険性が若干ある。

さらに、今回ハセヲがしている『スキルの終わりに割り込み武装変更』はその上位にあたるシステム外スキルで、スキルが終わるとシステムが感知する直前、武装を変えることによりスキル発動後に起こる硬直を無くすものだ。

この達人級のスキルがハセヲをソロプレイヤーでPKK 死の恐怖と謳われる一因になっているのは言うまでもない。

「アメエンだよ、テメエラはア！ 破裏剣舞 ー！！」

双剣に装備を変えたハセヲは、襲いかかってきた敵に逆に反撃のスキルを喰らわせた。

そして、奇しくも同じようなシステム外スキルを習得しているキリトも、ハセヲと同様一人敵に囲まれながらも奮闘、いや、異様な光景を作り出していた。

「うおらあああ、ケストレルを舐めんじゃねえぞ！」

「野郎ども、ツッコメ！」

「おおおおッ！！」

チンピラ共の勇ましい声が響き、その内の4人が猪突猛進にキリトへと突っ込んでいくが……

「ぐへっ！？」

「ぶひゃっ！？」

「ふげっ！？」

「ぐほっ！？」

あえなく吹っ飛ばされる。

「……こ、こんなの、反則だろっ！？」

自らを仲間の声とともに鼓舞することで何とかその場にいることに耐えていたチンピラの内の一人が、駄々をこねる子供のように喚く。

しかし、彼の言い分もある意味もつともなのである。なぜなら……

「…… 双刀鬼輪牙 …… 双刀夜叉車 …… 旋風滅双刀

！…… 閻魔双刀大車輪 …… ！！」

キリトは回転系のスキルをシステム外スキル スキルコネクトで繋ぎ、回り続ける独楽よろしく敵を追い回し、切り刻んでいた。

元々初めて実戦で使ってから約1年鍛えた後も成功率6割弱のスキルコネクト が何故こんなに乱発出来るのかといえ、それはここThe Worldのスキルが脳裏に浮かぶという補助システムのためだ。

元々他から来たプレイヤーの為にアシスト機能として作られたものだが、これがキリトの今までの自分の力(想像力)だけで無理やり行使していた スキルコネクト をシステムのアシストを流用してより確実にスキルを繋げることができるようになっていた。

その成功率は驚異の9割強。たぶん、他のみんなも練習すれば2、3回の スキルコネクト なら可能だろう。

残念ながらこちらにいられるのは1ヶ月間しかないのもので他の全員が完全に習得するのは無理だろうが、もしかするとキツカケを掴むことはできるかもしれない。

ALLOに帰ったみんなと スキルコネクト をパーティー全員で放ち、ボス相手に文字通り圧勝する様を思い浮かべたキリトは、浮かびそうになった苦笑を堪えてさらに敵を追い回すことにした。

.....

「ふう……やつと終わったか」

キリトはSPが切れるのと同時に回転を滑りながら止め、最後のスキルのモーションと共に剣を鞘に納める。

若干目が回りかけながら周りを見ると、そこにはチンピラ達の死

屍累々の光景があった。

「で、後はお前一人みたいだけど、まだやんのか？」

キリトが後ろを振り返ると、丁度ハセヲが双剣を手にしながら最後の一人と対峙しているところだった。

そのドスの利いた言葉にチンピラAは一瞬怯えたような眼をしたが、すぐにハセヲを嘲笑うかのような表情に変わる。

「何が可笑的いんだ、え？」

そしてハセヲが言いながら最後の一撃を相手に加えようと双剣を振りかぶって……

次の瞬間、水色の何かがハセヲに襲い掛かり、ハセヲの体を吹っ飛ばした！

「「なっ！？」」

吹き飛ばされながらも四つん這いになって獣のように踏ん張ったハセヲは勿論のこと、傍らで見ていたキリトもそろって驚きの声を上げる。

「もしかして、なつめか？」

そう、そこには深緑の髪に水色の軽装に身を包む双剣士、先日のスケイスとの対決時にキリトが出会った騎士団の一員、なつめが立っていた。

「カオティックPK、 エッジマニア のなつめ……」



ハセヲが忌々しそうに呟きながら起き上がって大剣をアイテムポーチから取り出して装備する。そう、ハセヲの手からはいつのまにか握っていた双剣が消えていた。

「えへへへ、さすがハセヲさん、いい双剣持ってますねえ」

そして、なんとなつめの手には先ほどまでハセヲが持っていた双剣が握られていた。なつめはそれを愛おしそうにとろんとした目で眺めながら、怖いくらい嬉しそうに微笑んでいる。

さらに、なつめはまるでその双剣が自分の物であるかのように構えた。

「じゃ、報酬の双剣強化アイテムはちゃんとくださいね」

「あ、ああ、モチロンだぜ……」

なつめの問いにへへっ、と薄ら笑いをしながら答えるチンピラA。どうやら彼は何かしらの賄賂でなつめをこの場に助っ人として呼んだらしい。

「にしても、一体何なんだ、あれ？」

いつもと180度違う雰囲気になつめにキリトが困惑していると、ハセヲが大剣を構えたまま語りだす。

「異常なPKに贈られるカオティックPKの称号と二つ名 エッジマニア を持つ史上最悪と言われているPK、それがあいつ、なつめの裏の姿だ。双剣好きが高じて双剣を持つてるやつを片っ端から襲うようになったことから来たらしいぜ。ま、本人に自覚はないら

しいけどな」

「2重人格ってことか？」

にしても、あれは異常だろ……と、思いながらも、キリトは剣を構えなおして……

「その剣、双剣にしては長すぎますねえ？」

いつのまにかゼロ距離まで間合いを詰められたキリトは驚いて反射的に飛び退いて距離を取ろうとしたが……

「あ、でも半分にすれば丁度どいいかも！」

地面に着地すると同時にキリトは啞然としてしまう。なんと、自分の手から剣が消えていた！？

パキーンッ！

そして、何か金属質のものが折られた音がしてキリトが顔を上げると、そこにはキリトがつい先ほどまで持っていた二振りの剣の内一本が刀身の半ばから折られている姿だった。

そして、もう一振りの方もまる煎餅でも割るかのようにペキーンッ！と同じように折られ、半分くらいの長さにされた。

「これで、丁度いい長さになりましたねえ」

なつめは嬉しそうに、そしてそれが当然かのように右手にハセヲの、左手にはたった今奪い取ったキリトの剣を持って構える。

「あ、相手の武器を自分のモノにする……？？」

半信半疑でキリトが呟くと、なつめの後ろに立っているチンピラAがしてやったりと笑いながら語りだす。

「ヒヤアアハハハハツ！どうだ、驚いただろ？これがなつめさんのPK時のエクストラ能力<sup>スキル</sup>、私の双剣はワタシのモノ、お前の双剣もワタシのモノ だあ！」

(……………は?)

キリトはその説明に啞然としながらも、しかし目の前のなつめが自分とハセヲの武器をまるで己のモノのように操っているのを見て、認めざる負えなかった。

「ま、武器は戦闘中しか奪えねえらしいし、こっちが勝った場合はちゃんともどつてくるぜ。勿論、負けた場合は盗られたまんまだけどな……………」

ハセヲがちらりと右上を確認したのを見た時、キリトはなぜどころかという短気なハセヲがこんな長話に付き合っているのかに気付いた。

そう、デュエルの制限時間がタイムアップまで迫っていたのだ。

ここThe Worldでのデュエルのルールは対戦形式や決着方法を数ある項目から選べる自由な仕様だ。

だが、基本的にはデスマッチとタイムアップが適用される。今回の対戦は30対2というかなり変則的なものだったが、それでも勝利条件はこの2つが適用されていた。

ちなみにタイムアップの時の判定だが、これはどちらがより多くのダメージを相手に与えたかによって判断される。

なので、このままいけば28人の相手をノックダウンしたハセヲ&キリトペアの勝利ということになる。

しかし、もちろんハセヲはタイムアップによる判定勝ちなど微塵も考えていない。相手は刃向かって来たら徹底的に叩き潰し、2度と自分と関わりたくないと思わせる……格付けを済ませておかないと、また懲りずにかかってくるからだ。

だが、ハセヲがそれでも一瞬残り時間を気にしたのは、それだけ目の前に立つなつめが脅威であるということであり……

「ぐはっ!？」

そして、ハセヲとキリトはハセヲの危惧通り、なつめに圧倒されていた。

(あ、ありえない、だろ……?)

地面に這い蹲りながら、キリトは首を掴まれて持ち上げられているハセヲを見て放心しかけていた。

なつめが現れてから1分も経たないうちに、ハセヲとキリトはまるで赤子の手を捻られるかのように手も足もだせない上に、キリトに至っては手にする剣を尽く奪われ、武器すら手にすることができずにいた。

「舐めてんじゃ……ねエ……ゾッ!」

それでも、ハセヲは新たに大剣、特重の剣を装備し、その重さを

利用して何とかなつめの手から逃れる。

そう、なつめの筋力値やその他ステータスは通常の上位の双剣士のもので、二人にとっては脅威というほどでもない。例のエクストラスキルも大剣や鎌にまでは使えないようで、キリトを囿にハセヲが攻めるといふ戦術で対抗できるはずだった。

しかし、なつめの異常なまでに上手い虚の付き方やまったく読めない行動、この対人戦における重要なポイントで完全に圧倒されているせいで、ハセヲとキリトはよく言って防戦一方、正直に言えば、敗戦の色が濃くなっていった。

「ひゃあははははははッ！こりゃあいいや、あの 死の恐怖がこのザマかあ。スクシヨでも撮ってやろうか？」

完全に勝利気分でご機嫌そうに下卑た高笑いをするチンピラA。  
だが、起き上がったキリトはそんなチンピラのことには眼中になかった。

なぜなら、ハセヲを追撃しようとしていたなつめが追撃の姿勢のまま顔だけを別方向に向けてその動きをピタリと止めていたからだ。

そして、その視線の先には……

「あつ、あ・れ・はあー！ー！ー！ー！ 双刃・八岐大蛇 だあああ  
あ！ー！」

なつめの挙げた奇声にビクツとなる中の3人と、なつめの視線の先にいるダルマのようなマルツとした姿の獣人の少年、ガスパー。

そして、彼は手にした釣竿と、なぜかその竿の糸の先にぶら下がっている1振りに付き4つの竜の首を模った刃を持つ双剣をこれ見よがしにブラブラと振っている。

「それ、クダサイイイイイ!!」

なつめは勢いよく駆け出し……そして、バトルフィールドの外へと飛び出していった。

「「「あつ……」」」

中の3人と周りのギャラリーの声が上がると同時に、キリトの右に表示されていた対戦者の欄からなつめの名前が消える。

そう、一度バトルフィールドから出てしまったプレイヤーは、試合放棄とみなしてリストから除外される。

そして、今フィールドに残っているのは……

「あ、あの、いや、その……」

「はぁ……ったくよう……」

高笑いの表情で長らく固まっていたチンピラAは、徐々に事態を理解していったらしく、うろたえ始める。

それに対し、ハセヲは何とも納得がいかない、苦虫を潰したような顔をして……

「とりあえず、テメエをブッコロしてからだな……」

そして、チンピラAの顔が恐怖に染まる前に、ハセヲは一瞬で決着の一撃を与えていた。

-----

「で、これはなんなのか説明してくれるんだろっなあ、ええ、シラバス？」

ハセヲはその場に正座していつもの爽やかなニコニコ顔で神妙に座っているシラバスと、その隣でおどおどしながら立っているガスパーを睨み付ける。

その後、キリトとハセヲはチンピラ達の始末を心底嫌な顔をしたリヨースに頼み、なつめが双剣を入手することで正気に戻って「ここはどこ？ワタシ、何してたんだっけ……？」と言いながら転送していったのを見送った後、絶妙な……というか、あからさまに狙ってたタイミングで現れた2人に事情聴取をしている。

ガスパーは蛇に睨まれた蛙よろしくビクツとなり、そしてシラバスは何事もなかったかのように話し出す。

「何って、僕たちが用事を終えて帰ってきたらハセヲとキリトくんがピンチっぽかったから、今日偶々手に入れた双剣を餌になつめさんをバトルフィールド外に誘い出したんだよ」

シラバスの当然といわんばかりの声に、ハセヲが怒りでワナワナ震えだす。

「じゃあなんだ？テメエは今日偶然大挙して押し寄せた奴らのことも、偶々俺たちが……若干押されてる時に帰ってきて、偶々今日手に入れた一品物の激レア双剣を餌にしたってことも全部偶然だったのか？」

「もちろん、それ以外に何があるのさ？」

人畜無害そうな笑顔のシラバスに、一瞬ハセヲが掴み掛ろうとしたが……数秒の間何かを堪えるかのようにしたハセヲは、その後深い、深ーーーーーついたため息を一つ付いた。

「今日はもう上がりでいいだろ？」

そしてハセヲはボソツと一言それだけ呟くと、シラバスの返事を待たずに転送していった。

そして、その場に取り残されたキリトも、今までの話しの推移からシラバスが何をしたのか察しが付いていたので、同じようにソクサと立ち去ろうとしたのだが……

「あ、そうそう、キリト君」

しかし、キリトが立ち去ろうとするのをまるで見計らっていたかのように、シラバスが声をかけてきた。

キリトが恐る恐る後ろを振り返ると、そこには今までで一番いい笑顔のシラバスがいた。

「今日、偶々キリ ランディと会ったんだけど、その時ちょうどキリト君に対する請求書を持ってたから、代わりに受取っというよ」

そう言いながら手元でメニューウィンドウを操作するシラバス。そして、間をおかずにキリトの耳にメッセージの着信を知らせる音が響き、恐る恐るメッセージボックスを開いてみると……

「何々……腕輪探索&レース時における装備、アイテム等の代金請求……あれ、これって、二桁ぐらい間違ってたね？」



ガクガク震えるキリトを余所に、シラバスはさらにキリトを追い詰める。

「ちなみに、その債権はさっき僕がキリ ランディから買い取ったから、これからはカナードでバイトして返してくれればいいよ。ついでに、さっきなつめに上げちゃった双剣の代金も、働いて返してくれればいいから」

「……………はっ？」

キリトは初めシラバスの言ったことを理解できなかったが、徐々に頭染み込んでいき…………

「それじゃあ、これからよろしく、キリト」

シラバスの上機嫌そうな声を聞き、キリトは自分が完全に蜘蛛の巣に捕まったことを自覚した。

店番 - カナードにて - 04 (後書き)

G・U・をプレイしていた時に自分が持ったシラバスに対する印象は、お人よしでUMA好きの、どちらかというと銀○の新○(中の人繋がり)的立ち位置でした。

が、漫画や外伝、そしてLinkで意外に腹黒と知り、今回の例えて言うなら某ファミレス漫画の相○さんみたいな感じにしてみました。

あと、なつめのエクストラスキルは、何かを突き詰めれば特殊なジョブやスキル、称号を手に入れられるんじゃないかと思いついてみました。

腕輪探索（シリカ&リス編） 01（前書き）

久しぶりに更新です。

今回の番外編は腕輪探索のシリカ&リス編です。

（シート）サーバ　高山都市ドウナ・ロリヤック

「わー、こりゃ高いねえ……」

リズベットことリズが、降り立った転送門　カオスゲート　の辺りに広がる光景に、目を丸くしながら見入る。

高山都市ドウナ・ロリヤックはその名が冠する通り、眼下に雲が見えるほど高い山脈の上に築かれた街だ。

この世界ゲームの中で属性を現す紋章を染め抜いた旗が高所特有の強風でバタバタとはためいている。

下を覗けば落ちるかもしれないという恐怖に襲われるが、嵐が来てもビクともしなさそうな頑丈な作りの橋で繋がれた自然と調和した街並みがそれを緩和する。

（それにしても、この人達、本当にみんなNPC……というより、AIなのかな……？）

端の方に移動しながらリズの隣を歩いているシリカはたくさんの方が行き来する光景を見ながらそんなことを思っていた。

同じくAIであるユイとよく一緒にいるので、AIというのがほとんど人間と変わらない感じと置いていたが、いざたくさん、ALOの街中の人ごみと変わらないほどのAI達が目の前を歩いているのを見ると、ちよつとだけ違和感を覚える。

まるで、最初の頃SAOで話しかけたNPC商人と会話した時味わった素っ気なさと逆の感覚。

まあ、それ以上に、異邦の地にいるということも不安を駆り立てる一つの要因になっているけど……

それは隣にいるリズムも同じらしく、好奇心に任せて辺りをキョロキョロ見渡しながらも、同時に微妙に居心地悪そうにしている。

「キュルルウ……?」

「あ、ピナ、大丈夫だよ」

主人の不安を察したピナが、肩の上で問うように首を傾げる。シリカはそれに対して心配ないというように、ピナを撫でる。

そして待つこと数分、カオスゲート前で騎士団の人達と集合するはずなのだが、中々現れない。

というより……

「シリカ、そういえば騎士団の人の顔わかる?」

「それ、あたしも今思っていました」

凰花さんとは グランホエール で会っていたが、それ以外の二人、メトロノームさんと月長石（げつちようせき?）さんは顔どころか、性別さえ知らない。

凰花さんは後から来ると言っていたが、先に顔を知らない二人が来てしまうと少し厄介かもしれない。

そんなことを考えていると、二つの足音がシリカ達の方へと近寄ってきた。

「君達、もしかして初心者さん？」

シリカとリズが振り返ると、そこには前髪が長い盗賊風の青年と、快活そうな少女が立っていた。

「え、えっと、はい」

シリカがおずおず答えると、快活そうな少女が親しさを込めた笑顔で顔を浮かべながら話します。

「おお、やはりそうでござったか。拙達、アスタとIyotenと申す。初心者さん達のお手伝いをよくしているのだが、どうでござろうか、よかつたら色々と案内するが？」

「やつぱり、ルーキーさんには親切にしないとな」

時代劇がかつた口調で話す少女アスタと前髪が長い青年Iyotenは頷き合いながらシリカ達に問いかける。

(えっと、こつという場合って……)

普通ならこれから騎士団の人達と合流するのだから、断るべきだろう。しかし、いつ来るかわからないしここはお言葉に甘えてレクチャーしてもらうべきだろうか……？

しかしシリカの迷いとは裏腹に、隣に立っているリズはある気配を嗅ぎ取っていた。

「折角ですけど、お断りします」

シリカが何を言おうか考えている間に、リズが素っ気ない感じで

答えを返してしまっ。

( リズさん、その言い方はちょっと…… )

リズの失礼ともとれる言い方にシリカは少し慌ててしまっ。

「 えー、そんなこと言わずにさ、せっかくこうして知り合えたんだしっ。」

「 そうでござるよ。そうだ、メンバーアドレスだけでも交換するのはどうでござるか？」

( あれ……？ )

ここで、シリカはアスタとEyotenの瞳の奥に潜む影に、デジャブを覚えた。

( これって、ロザリアさんと同じ……？ )

そう、かつてシリカがピナを失った時に プネウマの花 を横取りしようとした オレンジギルド の首領のロザリオと同じような暗い輝き、PKを生業にしているものが持つ相手を嵌めようとする満ちた悪意を上手に隠した瞳。

そして、シリカは遅まきながら、リズがそれに気付いてわざとこっういう態度をとっているのを理解した。

しかし、すでに事態は厄介な方向に向かっていた。

「 べつにいいじゃん？」

「 いいでござるっ？」

だんだん有無を言わさぬ感じになってきたアスタとEyoten

がジリジリとシリカとリズベツトを崖際へと追い込んでゆく。

崖から落ちたらどうなるのか、不可侵領域として落ちることは無いのか、それとも……？

外見は平静を保ちながらも、この世界に来たばかりで圧倒的に情報不足の二人の胸の内を恐怖が占め始める。

そして、二人がとうとう崖の淵まで追い詰められ、恐怖に屈しそうになったその時……

「あんた達、そのへんにしとけよ」

後ろからかけられた声にIyotenとアスタは振り返り、声の主を見ると忌々しそうな表情をする。

「ちっ、誰かと思つたら、NOVAじゃねえか」

「ちよつとお、ボクのこと無視しないでよねえ！」

NOVAと呼ばれた侍風の剣士の隣に立つスケイルメールを着ている小柄の少年が憤慨したようにプンプンしている。

「で、カナードのお二方が拙らになんのように御座るか？」

出会った時の親しげな雰囲気はどこへやら、隠すことをやめた悪意に満ちた剣呑な口調でNOVAに問うアスタ。

「もうその子達はあんたらが唯のお人よしじゃないって気付いたんだし、あんたらの何も知らない初心者をおだてて信頼させて、最後に狩るっていうのはできないだろ？」

「まあ、気付いてなかったとしても止めるけどねえ」



チムニの言葉に一触即発の雰囲気か4人の間に流れるが……

「あゝあ、今回は失敗でござるかあ……」

「ま、また次を探そうぜ」

そう言って、二人は何事もなかったかのようにその場を後にした。

腕輪探索（シリカ&リス編） 01（後書き）

一旦一覽から外して加筆&修正しましたが……やっぱり難しい。

r z

ダラダラ続く説明文の簡潔化や戦闘、人物、風景等の描写、そして展開の持つて行き方、どれも想像するのは容易く、しかし現実を書くとなると難しい……

でも、これからも改善できるところはしていきたいと思うので、生温かい目で読んでやってください（笑）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5378m/>

---

.hack// x SAO -繋がり、続く物語-

2011年12月25日03時00分発行